

宮古市埋蔵文化財調査報告書 16
Archaeological Researches in Miyako

千 鷄 遺 跡

—昭和62年度発掘調査報告書—

1989.3

岩手県宮古市教育委員会

The Board of Education Miyako, Iwate Pre.

序 文

岩手県宮古市は、陸中海岸国立公園のほぼ中央部に位置する風光明媚な地であります。青く澄んだ海、緑あふれる山々、そして悠久の流れを刻む川などの豊かな自然に恵まれ、大いなる恩恵を与えつづけています。

そして、このような豊かな自然の中に私たちの先人たちは、数多くの足跡を残し、守り受け継いできました。

平成の今に生きる私たちには、このような多くの遺跡を正しい理解のもとに保護し、後世の人々に伝えてゆく責務があると考えております。

本書は、宮古市立千鶏小学校の校庭拡張工事のために、消滅する千鶏遺跡の緊急発掘調査の成果をとりまとめたものであります。

調査の結果、本遺跡は、縄文時代前期初頭の人たちが営んだ集落跡であることが判明いたしました。そこに残されていた30数棟の竪穴住居跡や上川名Ⅱ式土器をはじめとする多量の遺物は、当時の人たちの生活の一端を知る上では、宮古地方はもとより県内においても非常に貴重な資料になるものと思われます。

最後に、調査にご協力をいただいた地権者各位、並びに地元関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成元年3月

宮古市教育委員会

教育長職務代理者

教育次長 鈴木哲夫

例 言

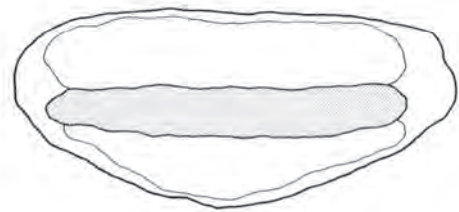
1. 本遺跡は、宮古市の遺跡コードLG75-0363 千鶴Ⅱ遺跡、岩手県のコードLG75-0373 千鶴Ⅲ遺跡として登録された周知の遺跡であるが、両者の遺跡名が異なり混乱をさけるため千鶴遺跡とした。
2. 本書は、昭和62年度に実施した千鶴遺跡の緊急発掘調査の報告書である。
3. 調査の主体は、宮古市教育委員会（教育長 小野寺聡）で、発掘調査は高橋・鎌田・盛合が担当し、本書の執筆は、高橋・鎌田が担当し、編集は鎌田が行なった。
4. 調査座標は、調査区にあわせ任意に設定したもので、磁北より約19度30分西傾する。
5. 高さは、標高値をそのまま使用した。
6. 遺物の表現については、繊維を含む土器、含まない土器及び敲打磨石類の磨面を次のように表示した。



① 繊維を含む土器



② 繊維を含まない土器



敲打磨石類の磨面

7. 調査及び遺物の整理、報告書の執筆に際しては、次の方々からご教示、ご指導をいただいた。記して謝意を申し上げます。（敬称略）

林 謙作（北海道大学）	八木 光則（盛岡市教育委員会）
相原 康二（岩手県立図書館）	桐生 正一（滝沢村教育委員会）
高橋 信雄（岩手県教育委員会文化課）	高橋亜貴子（ ” ）
佐々木 勝（ ” ）	武田 将男（宮古市教育委員会）
熊谷 常正（岩手県立博物館）	
名久井文明（ ” ）	
小田野哲憲（岩手県立埋蔵文化財センター）	
斎藤 邦雄（ ” ）	

8. 本文中の引用文献の略称は次のとおりとした。（いずれも宮古市教育委員会発行）

1979 『宮古市大付遺跡』 小田野哲憲 熊谷 常正 → 『大付報文79』
1983～86 『宮古市遺跡分布調査報告書1～4』 武田将男 → 『分布調査1～4』
1986 『宮古市遺跡分布図 昭和60年度版』 武田将男 → 『分布図86』
1987 『崎山遺跡群Ⅰ 昭和60年度版』 高橋憲太郎 → 『崎山遺跡群Ⅰ』
1988 『崎山遺跡群Ⅱ 昭和62年度版』 高橋憲太郎 → 『崎山遺跡群Ⅱ』
1988 『青猿Ⅰ遺跡・下在家Ⅱ遺跡・千徳城遺跡群（堀合館）』 高橋憲太郎・鎌田祐二
→ 『青猿Ⅰ遺跡 下在家Ⅱ遺跡 堀合館』

目 次

序 文	
例 言	
目 次	
I 調査経過	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査要旨	1
3. 調査体制	1・2
II 遺跡をとりまく環境	3
1. 位置と周辺の遺跡	3
2. 地形・地質と遺跡の立地	7
III 調査内容	10
1. 層序	10
2. 遺構・遺物の検出状況	10・14
3. 検出された遺構・遺物	15
IV 調査のまとめ	133
あとがき	141
SUMMARY	142
参考 参考文献	143

図版目次

- 第1図版 遺跡全景（航空写真）
- 第2図版 遺跡景観、調査区近景
- 第3図版 試掘トレンチ、検出遺構
- 第4図版 第1号竪穴住居跡完掘状況、堆積状況
- 第5図版 第2号竪穴住居跡完掘状況、堆積状況
- 第6図版 第5号竪穴住居跡完掘状況、堆積状況
- 第7図版 第7号竪穴住居跡・第1号・2号・3号土壇跡完掘状況、遺物出土状況
- 第8図版 第7号竪穴住居跡堆積状況①、②
- 第9図版 第8号竪穴住居跡完掘状況、堆積状況
- 第10図版 第8号竪穴住居跡周溝、第9号竪穴住居跡完掘状況
- 第11図版 第9号竪穴住居跡周溝、焼土の堆積状況
- 第12図版 第9号竪穴住居跡焼土完掘状況、第11号竪穴住居跡堆積状況
- 第13図版 第10号～15号竪穴住居跡完掘状況①、②
- 第14図版 第13号～15号竪穴住居跡堆積状況、第16号竪穴住居跡完掘状況
- 第15図版 第16号竪穴住居跡堆積状況、第16号竪穴住居跡床面
- 第16図版 第17号竪穴住居跡検出状況（礫層）、完掘状況①
- 第17図版 第17号竪穴住居跡完掘状況②、周溝
- 第18図版 第17号竪穴住居跡堆積状況、遺物出土状況
- 第19図版 第17号竪穴住居跡堆積状況①、第17号竪穴住居跡堆積状況②
- 第20図版 第17号竪穴住居跡焼土堆積状況、第18号竪穴住居跡堆積状況
- 第21図版 第18号、19号竪穴住居跡完掘状況、第18号竪穴住居跡堆積状況
- 第22図版 第18号竪穴住居跡焼土堆積状況、第23号竪穴住居跡完掘状況
- 第23図版 第23号竪穴住居跡堆積状況、第22号竪穴住居跡堆積状況
- 第24図版 第26号竪穴住居跡完掘状況、遺物出土状況
- 第25図版 第26号竪穴住居跡堆積状況①、②
- 第26図版 第27号竪穴住居跡床面、完掘状況
- 第27図版 第27号竪穴住居跡遺物出土状況①、②
- 第28図版 第27号竪穴住居跡堆積状況、第30号竪穴住居跡完掘状況
- 第29図版 第28号、29号竪穴住居跡完掘状況、第31号、33号竪穴住居跡堆積状況
- 第30図版 第31号～第33号竪穴住居跡完掘状況、小ピット群、第31号竪穴住居跡堆積状況
- 第31図版 第32号竪穴住居跡堆積状況
- 第32図版 第1号竪穴住居跡出土遺物、第3号竪穴住居跡出土遺物
- 第33図版 第4号竪穴住居跡出土遺物、第4号竪穴住居跡出土遺物
- 第34図版 第5号竪穴住居跡出土遺物、第5号竪穴住居跡出土遺物
- 第35図版 第5号竪穴住居跡出土遺物、第6号竪穴住居跡出土遺物

- 第36图版 第7号竖穴住居跡出土遺物、第7号竖穴住居跡出土遺物
- 第37图版 第8号竖穴住居跡出土遺物、第15号竖穴住居跡出土遺物
- 第38图版 第13号竖穴住居跡出土遺物、第14号竖穴住居跡出土遺物
- 第39图版 第14号竖穴住居跡出土遺物、第9号竖穴住居跡出土遺物
- 第40图版 第16号竖穴住居跡出土遺物、第16号竖穴住居跡出土遺物
- 第41图版 第17号竖穴住居跡出土遺物①
- 第42图版 第17号竖穴住居跡出土遺物②、③
- 第43图版 第17号竖穴住居跡出土遺物④、⑤
- 第44图版 第17号竖穴住居跡出土遺物⑥、⑦
- 第45图版 第18号竖穴住居跡出土遺物①、②
- 第46图版 第18号竖穴住居跡出土遺物③、第19号竖穴住居跡出土遺物
- 第47图版 第18号竖穴住居跡出土遺物、第20号、21号竖穴住居跡出土遺物
- 第48图版 第22号竖穴住居跡出土遺物①、②
- 第49图版 第24号竖穴住居跡出土遺物、第5号、7号土坑跡出土遺物
- 第50图版 第26号竖穴住居跡出土遺物①、②
- 第51图版 第26号竖穴住居跡出土遺物③、④
- 第52图版 第26号竖穴住居跡出土遺物 第27号竖穴住居跡出土遺物
- 第53图版 第27号竖穴住居跡出土遺物
- 第54图版 第27号竖穴住居跡出土遺物、第31号、32号竖穴住居跡出土遺物
- 第55图版 第31号、32号竖穴住居跡出土石器
- 第56图版 遺構外出土土器①、②
- 第57图版 遺構外出土土器③、④
- 第58图版 遺構外出土土器⑤、⑥
- 第59图版 遺構外出土土器⑦、⑧
- 第60图版 遺構外出土土器⑨、⑩
- 第61图版 遺構外出土土器⑪、遺構外出土石器

插图目次

第1图	位置图	4
第2图	千鷲遺跡と周辺の遺跡	5
第3图	千鷲遺跡周辺地形图	6
第4图	地形分類图	8
第5图	調査区全体图	11・12
第6图	調査区断面(1)	13
第7图	調査区断面(2)	14
第8图	第1号竪穴住居跡	16
第9图	第1号竪穴住居跡出土遺物	17
第10图	第2号竪穴住居跡	18
第11图	第3号竪穴住居跡	19
第12图	第3号竪穴住居跡出土遺物	20
第13图	第4号竪穴住居跡、第8号、9号土壇跡	22
第14图	第4号竪穴住居跡出土遺物	23
第15图	第5号竪穴住居跡	25
第16图	第5号竪穴住居跡出土遺物①	26
第17图	第5号竪穴住居跡出土遺物②	27
第18图	第6号竪穴住居跡	28
第19图	第6号竪穴住居跡出土遺物	29
第20图	第7号竪穴住居跡、第1号、2号、3号土壇跡	30
第21图	第7号竪穴住居跡出土遺物①	32
第22图	第7号竪穴住居跡出土遺物②	33
第23图	第7号竪穴住居跡出土遺物③	34
第24图	第7号竪穴住居跡出土遺物④	35
第25图	第8号竪穴住居跡	36
第26图	第8号竪穴住居跡出土遺物	37
第27图	第9号竪穴住居跡	39
第28图	第9号竪穴住居跡炉跡	40
第29图	第9号竪穴住居跡出土遺物①	41
第30图	第9号竪穴住居跡出土遺物②	42
第31图	第10号、12号、13号、14号、15号竪穴住居跡	43・44
第32图	第10号、12号、13号、14号、15号竪穴住居跡断面图	45
第33图	第13号竪穴住居跡出土遺物	49
第34图	第14号竪穴住居跡出土遺物①	50
第35图	第14号竪穴住居跡出土遺物②	51
第36图	第15号竪穴住居跡出土遺物	52

第37图	第11号竖穴住居跡	53
第38图	第11号竖穴住居跡出土遺物	54
第39图	第16号竖穴住居跡	56
第40图	第16号竖穴住居跡炉跡	57
第41图	第16号竖穴住居跡出土遺物①	58
第42图	第16号竖穴住居跡出土遺物②	59
第43图	第16号竖穴住居跡出土遺物③	60
第44图	第17号竖穴住居跡、第5号土坛跡	61 • 62
第45图	第17号竖穴住居跡、第5号土坛跡断面图	63
第46图	第17号竖穴住居跡炉跡	64
第47图	第17号竖穴住居跡出土遺物①	66
第48图	第17号竖穴住居跡出土遺物②	67
第49图	第17号竖穴住居跡出土遺物③	68
第50图	第17号竖穴住居跡出土遺物④	69
第51图	第17号竖穴住居跡出土遺物⑤	71
第52图	第17号竖穴住居跡出土遺物⑥	72
第53图	第17号竖穴住居跡出土遺物⑦、第5号土坛跡出土遺物	73
第54图	第18号、19号竖穴住居跡	75
第55图	第18号、19号竖穴住居跡断面图	76
第56图	第18号、19号竖穴住居跡炉跡	77
第57图	第18号竖穴住居跡出土遺物①	78
第58图	第18号竖穴住居跡出土遺物②	79
第59图	第18号竖穴住居跡出土遺物③	80
第60图	第19号竖穴住居跡出土遺物	81
第61图	第20号、21号竖穴住居跡、第6号土坛跡	83
第62图	第20号、21号竖穴住居跡出土遺物	84
第63图	第22号竖穴住居跡	86
第64图	第22号竖穴住居跡出土遺物①	87
第65图	第22号竖穴住居跡出土遺物②	88
第66图	第23号竖穴住居跡	89
第67图	第23号竖穴住居跡出土遺物	90
第68图	第24号竖穴住居跡	91
第69图	第24号竖穴住居跡出土遺物	91
第70图	第25号竖穴住居跡、第7号土坛跡	93
第71图	第7号土坛跡出土遺物	94
第72图	第26号竖穴住居跡	95 • 96
第73图	第26号竖穴住居跡断面图	97
第74图	第26号竖穴住居跡出土遺物①	99

第75図	第26号竪穴住居跡出土遺物②	100
第76図	第26号竪穴住居跡出土遺物③	101
第77図	第26号竪穴住居跡出土遺物④	102
第78図	第27号竪穴住居跡	103
第79図	第27号竪穴住居跡出土遺物①	104
第80図	第27号竪穴住居跡出土遺物②	105
第81図	第27号竪穴住居跡出土遺物③	106
第82図	第27号竪穴住居跡出土遺物④	107
第83図	第27号竪穴住居跡出土遺物⑤	108
第84図	第28号、29号竪穴住居跡	109
第85図	第30号竪穴住居跡	110
第86図	第31号竪穴住居跡	112
第87図	第31号竪穴住居跡出土遺物	113
第88図	第32号竪穴住居跡	114
第89図	第32号竪穴住居跡出土遺物	115
第90図	第33号竪穴住居跡	116
第91図	第34号竪穴住居跡	117
第92図	小ピット群	119
第93図	遺構外出土土器①	121
第94図	遺構外出土土器②	123
第95図	遺構外出土土器③	124
第96図	遺構外出土土器④	126
第97図	遺構外出土土器⑤	127
第98図	遺構外出土石器	129
第99図	縄文時代早期後半～前期前半の遺跡分布図	134
第100図	竪穴住居跡出土土器別分布図	135

I 調査経過

1. 調査に至る経過

宮古市では、昭和57年度から4ヶ年にわたり、市内の遺跡詳細分布調査を実施した。その結果、約400ヶ所もの遺跡が確認され、『分布調査 1～4』及び、遺跡台帳として『分布図 86』が刊行された。

市内遺跡詳細
分布調査

それらによれば、千鷲遺跡の所在する宮古市重茂の千鷲・石浜地区には、9ヶ所の遺跡が確認されており、縄文時代早期～晩期の土器片、土師器片などが表採されている。各遺跡の現状も、一部学校敷地や宅地などを除けば、畑地・原野などとなり保存状況は比較的良好である。

発掘調査は、宮古市立千鷲小学校の校庭拡張による造成工事に先だち実施した、緊急発掘調査である。発掘調査は、廃土置場確保の関係上、試掘トレンチを設定し遺構密度の低い所から順次調査を進行した。

千鷲小学校

2. 調査要旨

例言1で既に記述した通り、本遺跡名を千鷲遺跡とした。なお、他の千鷲地区の遺跡名については、第2図に示した。

発掘調査期間 昭和62年9月8日～同年12月18日 面積 1500㎡

期間・面積

整理作業 昭和62年12月20日～昭和63年3月31日

昭和63年8月1日～平成元年3月31日

調査対象区は、遺跡のほぼ中央部北東寄り部分に位置するが、調査の結果から、遺構は、現小学校敷地内及び、調査区の北側の傾斜面部分にも広がっているものと考えられる。

検出遺構 縄文時代前期初頭の堅穴住居跡34棟、土坑跡9基、小ピット群

遺構・遺物

検出遺物 大半が繊維を含む縄文時代前期初頭の土器だが、それらよりも新しい時期の繊維を含まない土器片も若干出土している。石器類は、石鏃・石匙を中心とした剥片石器、片面に自然面を残す打製石斧を中心とした打製石器などが出土している。

3. 調査体制

発掘調査の体制は次のとおりである。

体制

〈昭和62年度〉

調査総括	北山 浩	宮古市教育委員会社会教育課長
事務担当	佐々木孝夫	宮古市教育委員会社会教育係長
〃	石原 邦雄	宮古市教育委員会施設係長
調査員	高橋憲太郎	宮古市教育委員会社会教育係主事
〃	盛合 義信	宮古市教育委員会社会教育係主事
〃	鎌田 祐二	宮古市教育委員会埋蔵文化財調査員（臨時職員）

調査の実施にあたり、次の各位から多大なるご協力をいただいた。(敬称略)

<地権者> 上野 等、岡村勝雄、木村忠平、木村安五郎、木村ヨシ

<地元関係> 千鷲小学校教職員一同(校長 菊池順雄)

千鷲小学校PTA会長 馬場利雄

<発掘調査> 成ヶ澤英一郎、阿部 豊、佐々木 茂、古館友三、木村 博、永井義雄、刈屋昭三、竹田未人、前川友宏、北村忠治、田崎昭吾、吉田 昭、山本 寛、佐伯裕則、上野 等、上野 勲、馬場 清、木村貞一、木村 栄

<整理作業> 勝倉恭子、佐々木幸子(旧姓宇都宮)

<<昭和63年度>>

昭和63年度は、整理作業のみを行った。

調査総括	吉田 昌義	宮古市教育委員会社会教育課長
事務総括	小本 哲	宮古市教育委員会社会教育係長
事務担当	佐藤 広昭	宮古市教育委員会社会教育係主事
”	盛合 義信	宮古市教育委員会社会教育係主事
調査員	高橋憲太郎	宮古市教育委員会社会教育係主事
”	鎌田 祐二	宮古市教育委員会社会教育係主事
整理作業	山野目崇子、菊池昌子(期限付臨時職員)	

なお、整理作業に際しては、林 謙作(北海道大学)、熊谷常正、名久井文明(ともに岩手県立博物館)、桐生正一、高橋亜貴子(ともに滝沢村教育委員会)、桜井芳彦(紫波町教育委員会)の方々には、直接、出土遺物を見ていただき、数多くのご教授を賜わった。特に、熊谷、高橋両氏には、類似資料や参考文献など細部にわたりご指導をいただき、感謝申し上げる次第である。

II 遺跡をとりまく環境

1. 位置と周辺の遺跡（第1～4図）

宮古市は、岩手県沿岸部のほぼ中央に位置し、北緯39°29'49"～39°43'23"、東経141°45'20"～142°04'44"までを市域とし、総面積338.38km²をはかる。市内重茂半島の鮎ヶ崎は本州最東端にあたる。

千鷲遺跡は、岩手県宮古市重茂第11地割千鷲上野地内に所在し、山田湾に面する重茂半島の南部に位置する。

千鷲遺跡

さて、岩手県沿岸部は、リアス式海岸といわれ起伏にとみ出入りの激しく複雑に入り組んだ海岸線を呈し、数多くの遺跡が知られている。最近では、沿岸部各地においても各種の開発事業が相次ぎ緊急発掘調査の件数が増加し、次々と貴重な発見がなされ、縄文時代のみならず弥生・古代・中世城館跡などの多岐にわたる情報が蓄積されてきている。

三陸地方の遺跡調査は、自然遺物や骨角器類を大量に含む貝塚遺跡調査の歴史でもあった。特に、県南部の広田湾、大船渡湾沿いの気仙地方、宮古湾沿いの貝塚など早くから調査されていた。ここ2、3年では、陸前高田市の中沢浜貝塚、大船渡市の清水貝塚、野田村の根井貝塚などの発掘調査が実施されている。宮古市においても昭和61年度からの継続事業として、市内北効の崎山地区に所在する崎山貝塚を第1期5ヶ年計画で範囲確認調査を実施し、多大な成果をあげている。

崎山貝塚

次に、『分布調査1～4』『分布図 86』などから、重茂半島における遺跡の分布状況をみていく。

重茂半島は、ほぼ北方向に突き出たような不斉四角形状を呈す半島で、そのほとんどが山地帯だが、わずかに形成されている平坦地～緩斜面上を中心に遺跡が分布している。半島に分布する遺跡は、大きくみると幾つかのまとまりがみられる。

重茂半島

1つは、赤前～堀内～白浜にかけての半島西側地区で宮古湾頭部にあたる。ここには、昭和54年、57年の発掘調査により平安時代の堅穴住居跡が5棟確認された赤前遺跡群や奈良時代の土師器が出土した小堀内I遺跡など、他の地区とは趣を異にし、古代の遺跡も分布する。これは、宮古湾～津軽石地区の一連と考えられる。

宮古湾頭部

次は、仲組～笹沢～大程にかけての半島先端部地区。大半は縄文時代の遺跡だが、昭和61年に赤なしが沢遺跡からは、畑地を削平した際に多量の繊維を含まない前期後半～中期の土器が出土しており、更に、ホオジロザメの歯製の穿孔した垂飾品が発見され、これ以外にも自然遺物の出土する可能性があり注目される遺跡である。

半島先端部

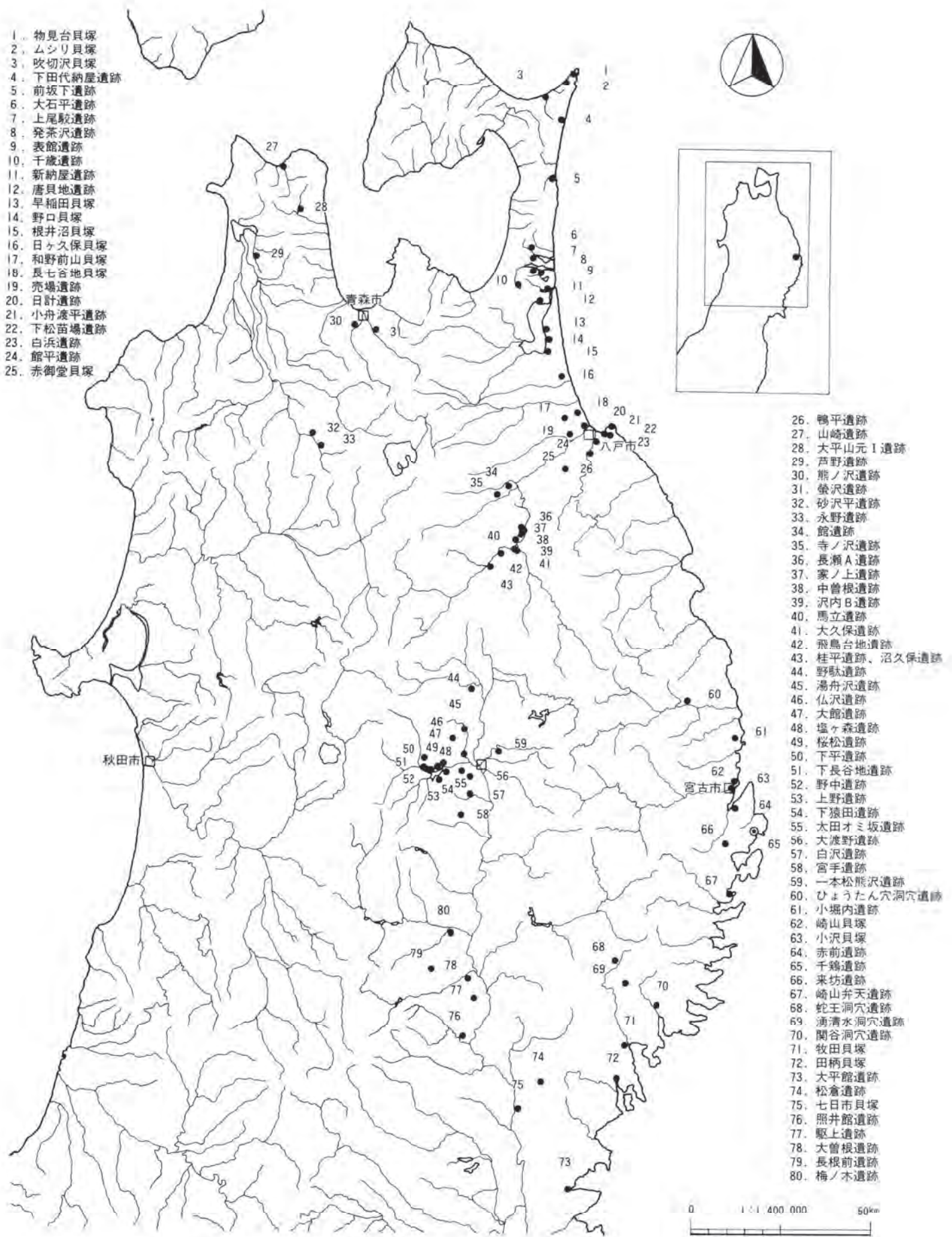
3つ目は、麦生野～館にかけての半島中央部地区。ここには、15世紀末頃の城館跡と考えられる重茂館跡が存在するが、中心は縄文時代の遺跡である。半島内でも比較的開けた所で、連続的に遺跡が集中し遺跡群を形成している。

半島中央部

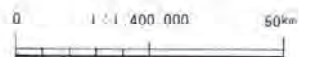
最後は、本遺跡を含む千鷲～石浜～川代にかけての半島東南部地区。いずれも、縄文時代の遺跡だが、千鷲IV遺跡からは土師器片が少量ながら表採されている。表採資料からみると千鷲

半島東南部

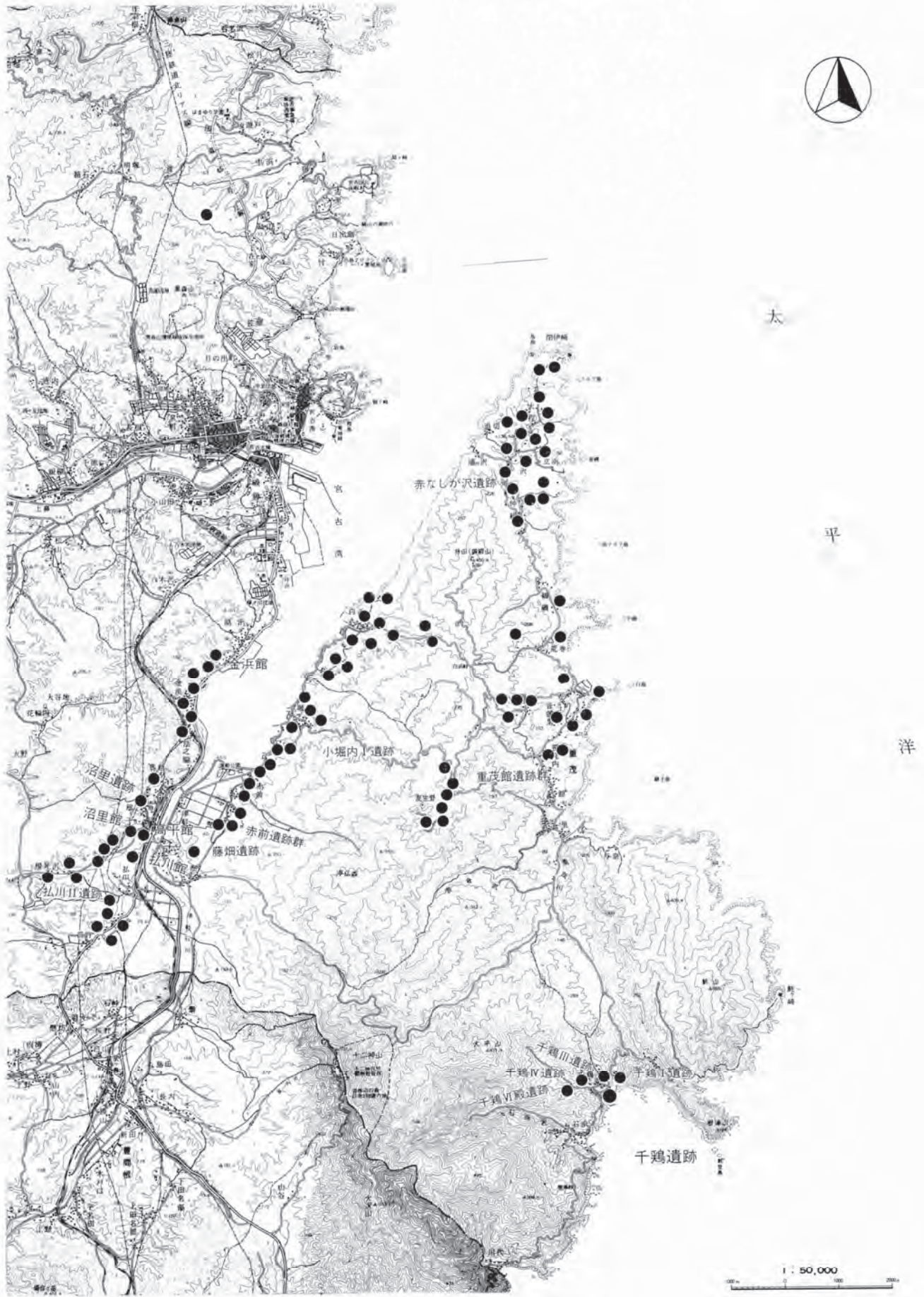
1. 物見台貝塚
2. ムシリ貝塚
3. 吹切沢貝塚
4. 下田代納屋遺跡
5. 前坂下遺跡
6. 大石平遺跡
7. 上尾駱遺跡
8. 発茶沢遺跡
9. 表館遺跡
10. 千歳遺跡
11. 新納屋遺跡
12. 唐貝地遺跡
13. 早稲田貝塚
14. 野口貝塚
15. 根井沼貝塚
16. 日ヶ久保貝塚
17. 和野前山貝塚
18. 長七谷地貝塚
19. 売場遺跡
20. 日計遺跡
21. 小舟渡平遺跡
22. 下松苗場遺跡
23. 白浜遺跡
24. 館平遺跡
25. 赤御堂貝塚



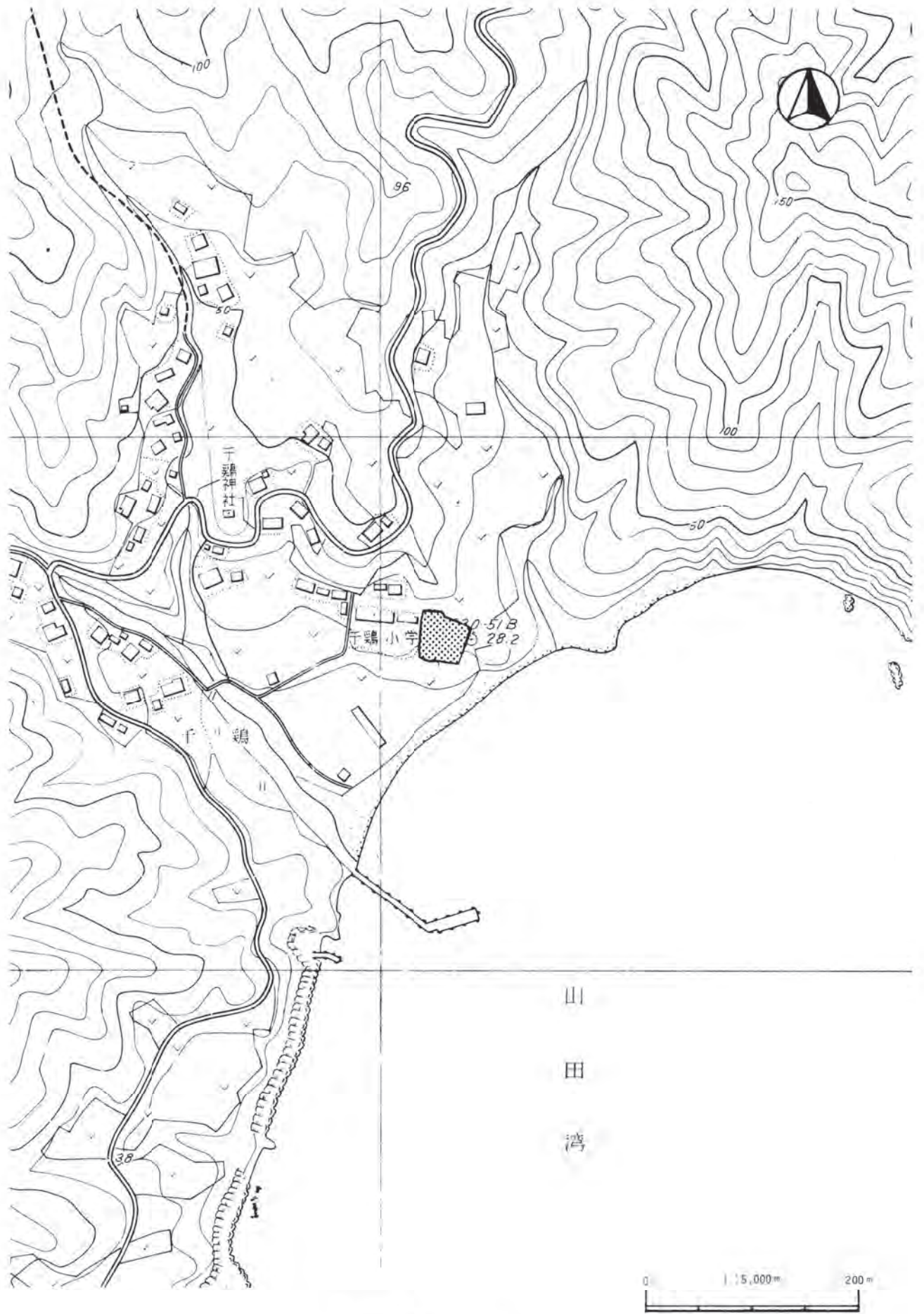
26. 鴨平遺跡
27. 山崎遺跡
28. 大平山元 I 遺跡
29. 芦野遺跡
30. 熊ノ沢遺跡
31. 榮沢遺跡
32. 砂沢平遺跡
33. 永野遺跡
34. 館遺跡
35. 寺ノ沢遺跡
36. 長瀬 A 遺跡
37. 家ノ上遺跡
38. 中曾根遺跡
39. 沢内 B 遺跡
40. 馬立遺跡
41. 大久保遺跡
42. 飛鳥台地遺跡
43. 桂平遺跡、沼久保遺跡
44. 野駄遺跡
45. 湯舟沢遺跡
46. 仏沢遺跡
47. 大館遺跡
48. 塩ヶ森遺跡
49. 桜松遺跡
50. 下平遺跡
51. 下長谷地遺跡
52. 野中遺跡
53. 上野遺跡
54. 下猿田遺跡
55. 太田オミ坂遺跡
56. 大渡野遺跡
57. 白沢遺跡
58. 宮手遺跡
59. 一本松熊沢遺跡
60. ひょうたん穴遺跡
61. 小堀内遺跡
62. 崎山貝塚
63. 小沢貝塚
64. 赤前遺跡
65. 千鷲遺跡
66. 来坊遺跡
67. 崎山弁天遺跡
68. 蛇王洞穴遺跡
69. 湧清水洞穴遺跡
70. 関谷洞穴遺跡
71. 牧田貝塚
72. 田柄貝塚
73. 大平館遺跡
74. 松倉遺跡
75. 七日市貝塚
76. 照井館遺跡
77. 駆上遺跡
78. 大曾根遺跡
79. 長根前遺跡
80. 梅ノ木遺跡



第1図 位置図



第2図 千鷲遺跡と周辺の遺跡



第3図 千鷲遺跡周辺地形図

I遺跡は、縄文時代早期、今回調査した千鶏遺跡は前期初頭～前半、千鶏Ⅲ遺跡は中期、千鶏Ⅴ殿畑遺跡は中期～後期にかけての土器片が主体になっており、ひとつのまとまった地域における集落の移り変わりを考えるうえには非常に興味深いものと考えられる。

2. 地形・地質と遺跡の立地

宮古市は、岩手県沿岸部のほぼ中央部に所在し、当市を境に北部と南部ではその海岸線の様相を異にし、北部海岸線は断崖絶壁をなし海へ落ち込むのに対し南部は、典型的なリアス式海岸の複雑に入り組んだ海岸線を形成している。地形的にも地質的にも、北と南の境をなす地域となっている。

市域を地形的にみれば、宮古湾最深部に河口をもつ津軽石川より宮古湾の西縁沿いを北北東から南南西にのびる津軽石断層帯を境に、西部の北上山地から続く中・小起伏の山地帯及び、その縁辺部に形成された丘陵帯と東部の重茂半島部と大きく2分され、更に、西から東へ流れる閉伊川、津軽石川及びその各支流域に形成された平坦部に分けられる。

重茂半島は、海岸沿いの平坦地に小さな漁村集落が点在するだけで、そのほとんどは山地帯である。半島は、南部のつけ根、山田町との境にある十二神山（海拔731m）を最高点に中央部を標高200m以上の十二神山山地帯が貫抜き、そのまま半島北部で断崖をなし海へ落ち込み、半島を西部・東部に2分している。その十二神山山地帯の両側に丘陵帯が存在し、大部分の遺跡がこの上に立地する。

西部宮古湾沿いは、湾頭部をU字状に囲む豊間根丘陵及び、山地帯から続く傾斜面上に多くの遺跡が立地する。豊間根丘陵は、津軽石川によって2分されており、更に小河川によって開折され樹枝状に切断される。この上に立地する遺跡は縄文時代の遺跡も多いが、奈良時代の土師器を出土する小堀内I遺跡、堅穴住居跡のカマド跡から一括出土した沼里遺跡や弘川I、II遺跡、藤畑遺跡、赤前遺跡群、荷竹日影V遺跡など平安時代の土師器が出土する古代の遺跡や金浜館、沼里館、高平館、弘川館、赤前館などの城館跡、製鉄遺構が確認された根井沢I遺跡や、鉄滓が分布する遺跡など縄文時代から古代、中近世にわたるまでの各時代にわたる多様な遺跡が立地している。

十二神山山地帯東部の海岸線に沿うように存在する丘陵は、鮎ヶ崎丘陵と呼ばれるが、平坦部の形成状況は著しく悪く、わずかに小河川に沿って形成された狭い段丘や谷底平野が散在的に見られるだけである。この丘陵も、鮎ヶ崎付近で海へ落ち込み山田湾に面する半島南部にまではのびない。

半島南部は、十二神山山地帯に続く小起伏山地がそのまま断崖となり海へ落ち込んでおり、遺跡は千鶏川、石浜沢などの小河川により開折された段丘上や崖錐性扇状地上に立地している。

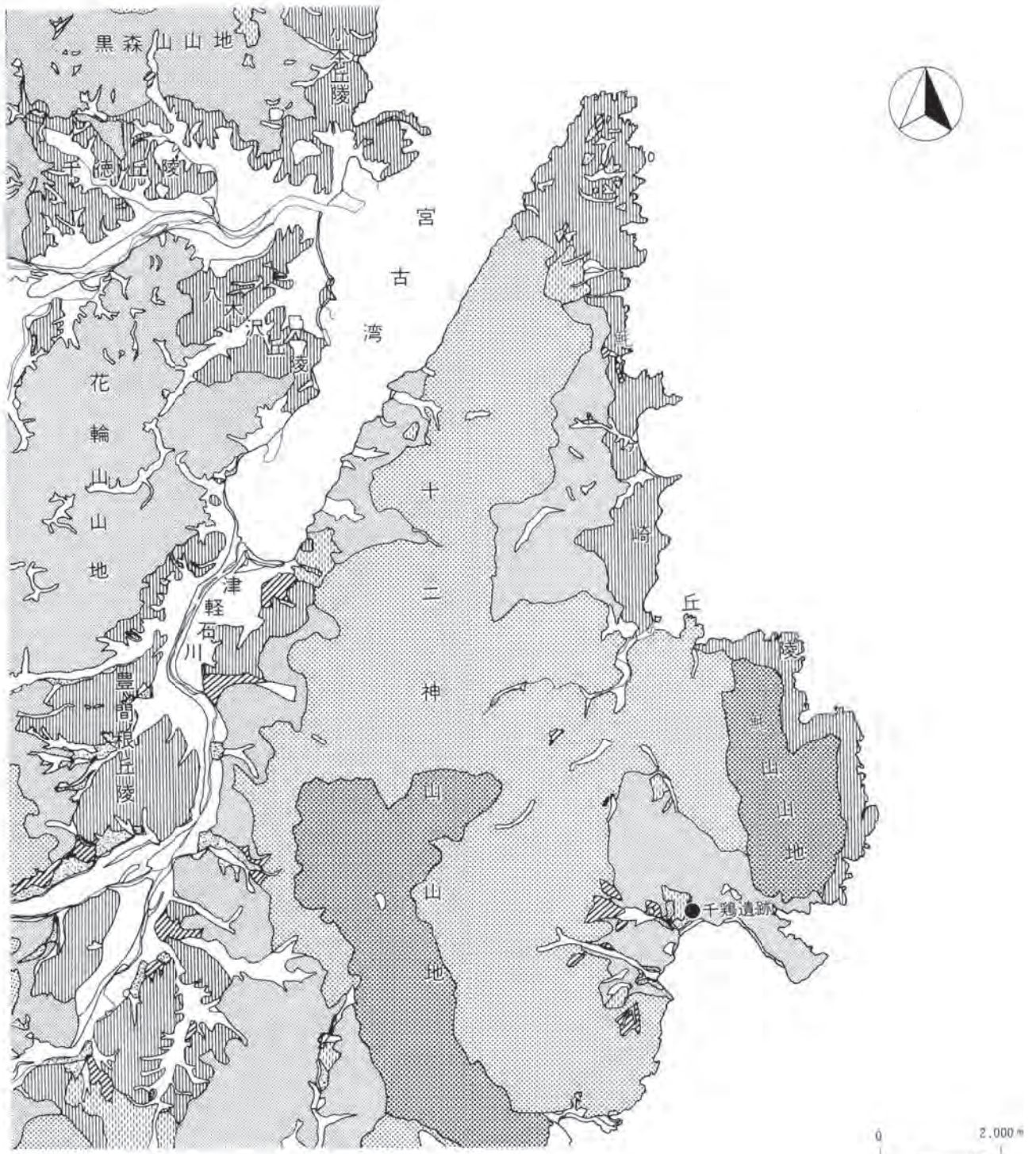
千鶏遺跡は、南側を流れる千鶏川と北側の沢によって区画された段丘及び、小起伏山地から続く山麓の緩斜面上の先端部に立地し、突端部は約25mの落差をもち急崖をなしてそのまま海を臨む。現在は漁港整備工事により様相は一変してしまっただが、以前は第3図の通り千鶏川によって運搬されて来た土砂などにより砂浜が形成されていた。








次に地質的にみれば、十二神山山地を構成する重茂半島中央部、その両側の東・西部・そして半島先端部に大きく区分される。

津軽石断層帯

豊間根丘陵

鮎ヶ崎丘陵



- | | | |
|---|---|--|
|  大起伏山地 |  山麓及び他の緩斜面 |  崖錐性扇状地 |
|  中起伏山地 |  丘陵地 | P 谷底平野及び氾濫平野 |
|  小起伏山地 |  砂礫段丘 | D 人工改変地 |

第4図 地形分類図

半島中央部は、現在の宮古市内に大きく分布し、その基盤をなしている花崗閃緑岩（宮古花崗岩体）進入後に貫入した花崗斑岩で構成されている。これらは、中生代の下部白亜紀に進入したもので、半島の東・西部にみられる原地山層及び重茂噴出岩類が堆積した後に進入したものである。

半島東・西部には、中生代白亜紀に形成された安山岩質岩石の原地山層及び重茂噴出岩類が分布する。

半島先端部は、宮古花崗岩体進入後に形成された宮古層群によって形成されているといわれている。閉伊崎付近は、北西―南東方向に走向する断層線によって区分されており、宮古層群中の礫岩層がみられ、この断層線に沿って海蝕現象が形成されている。

千鷲遺跡の所在する千鷲地区は、半島中央部を貫く花崗斑岩を基盤とする花崗岩質岩石で硬質な部分もあるが、道路法面などに露出した部分は風化作用を受けもろく崩壊しやすくマサ土化している。

Ⅲ 調査内容

1. 層序 (第6、7図)

千鷲遺跡の立地する緩斜面上の範囲内の西側は、すでに小学校敷地で校舎及び校庭などになっている。今回の調査区は、その小学校敷地に隣接する東側部分である。元々の地形は、北から南の海に向かって傾斜する緩斜面であったものと考えられるが、現在は第5図の標高約21m付近を境にした上・下2段の階段状の畑地に人工的に改変されている。

層序

調査区の層序は、北側の高所から低所に設定した土層観察用の大ベルトの観察結果 (第6図) に基づくものである。大きくⅠ～Ⅴ層に大別されⅤ層の下は、いわゆる地山面 (黄褐色～褐色) で、この面を以って大部分の遺構を検出した。

Ⅰ層は、表土層で暗褐色のしまりのない現耕作土層である。下位の畑地の方は、この表土層を除去するだけですぐ地山面に至る。

Ⅱ～Ⅴ層は、一部調査区西南部分に堆積するものを除けば上の畑地にのみ堆積する層である。

Ⅱ層は、黒褐色～暗褐色を呈す非常にやわらかくしまりのない土層で大～小の自然礫が混在する。この層自体は、上と下の畑地の境付近で層厚約0.3mと最も厚くなることから、畑地にする際に削平などの影響を強く受け動かされた土と考えられる。含まれている遺物をも、今回の調査では少量ながらも出土している繊維を含まない新しい時期 (大木1式以降と考えられるもの) の土器片は、大部分はこの層中から出土したものである。

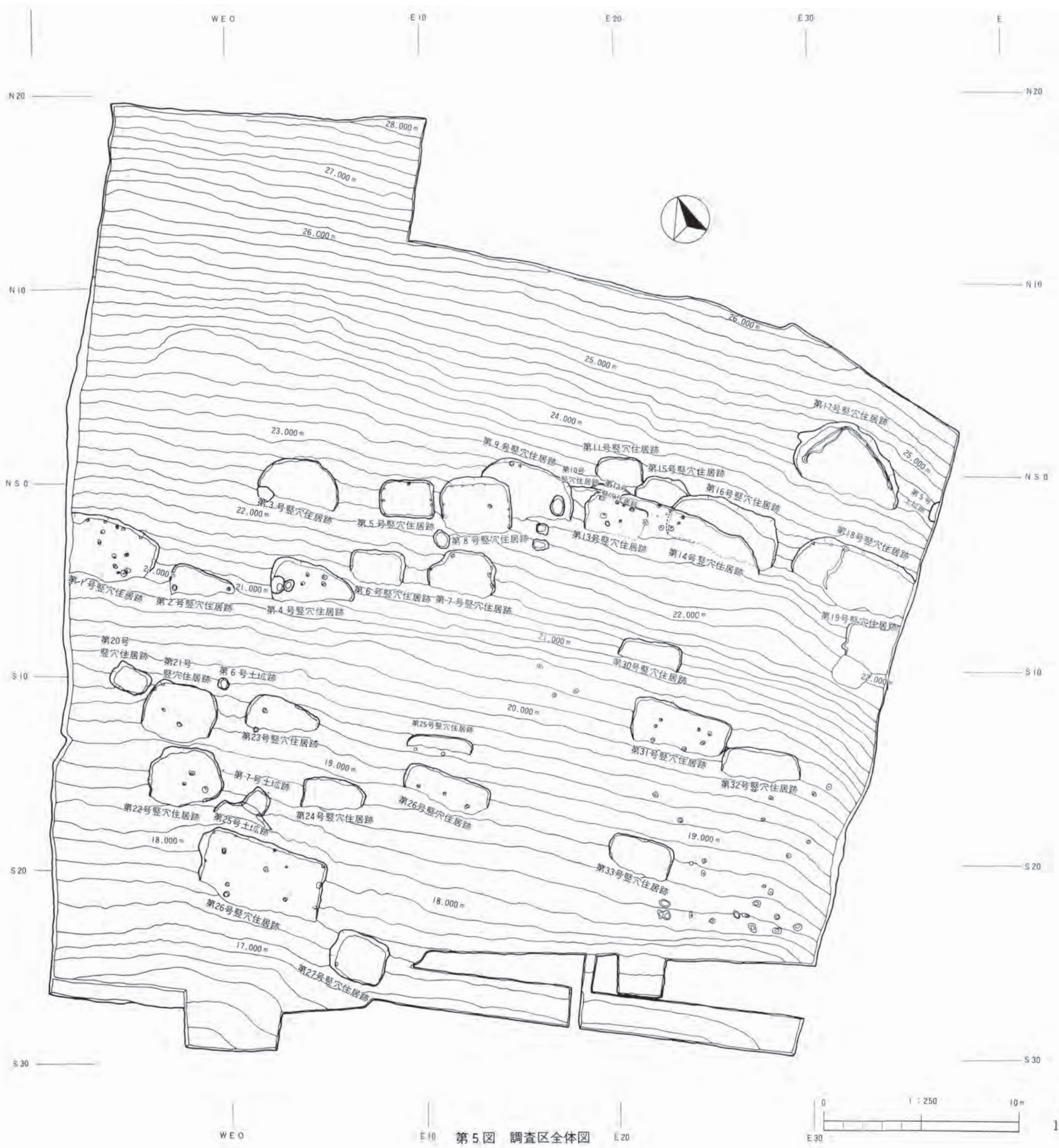
Ⅲ層は、黒色～黒褐色のやわらかい土層。上の畑地部分の他に、調査区の西南部にも一部堆積が認められることから、元々は下の畑地の方にも堆積していたものと考えられる。焼土や炭化物が比較的目につき土器・石器などの遺物を多く含んでおり、第92～97図の遺構外出土遺物のほとんどは、この層から出土したものである。

Ⅳ、Ⅴ層は、上の畑地の中レベル付近に認められたもので、暗褐色～褐色を呈する土層である。遺物の含み方も散発的であり多くない。

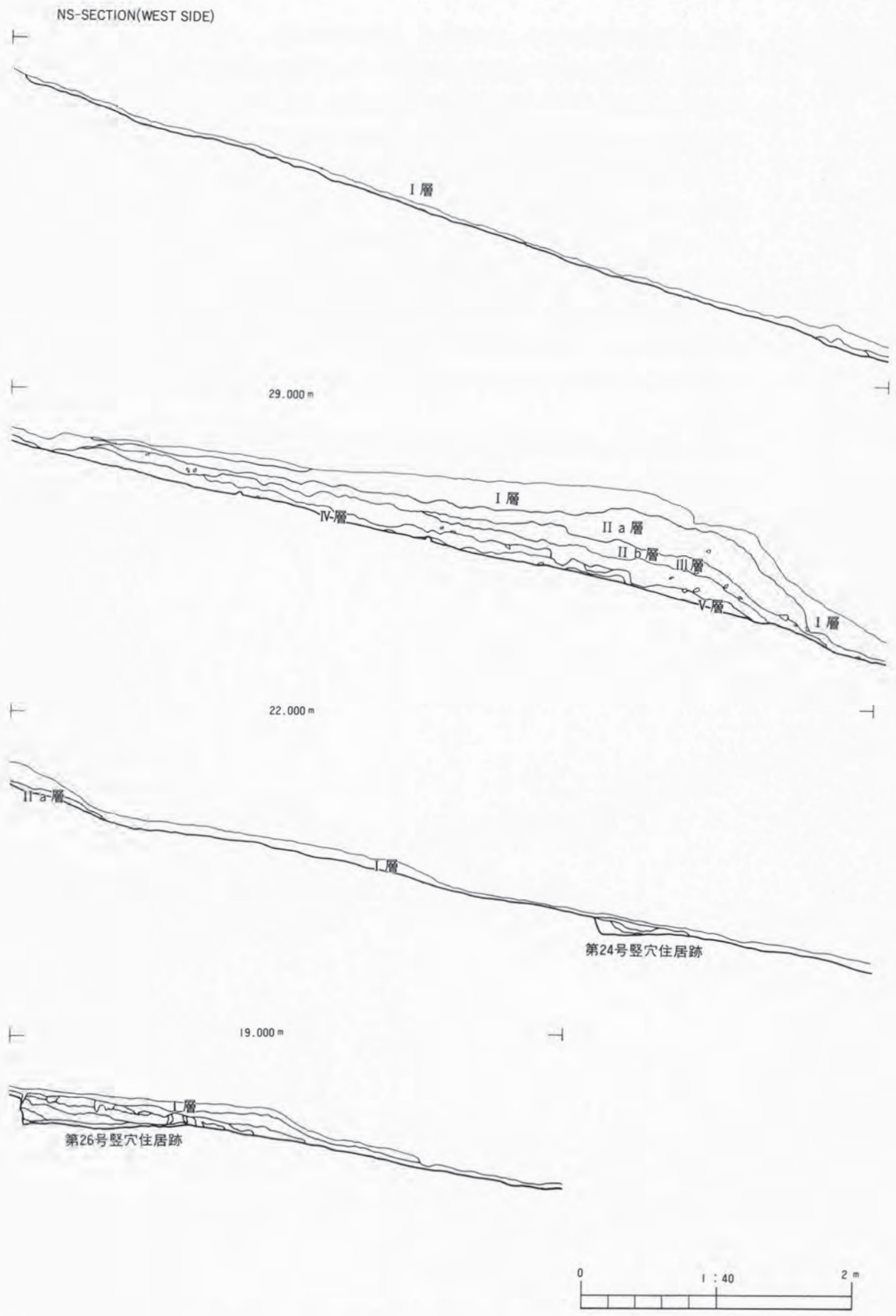
2. 遺構・遺物の検出状況 (第5図)

千鷲遺跡からは、昭和57年から4ヶ年にわたり宮古市教育委員会で実施した市内遺跡詳細分布調査時には、縄文時代前期から中期・後期の土器片や石器を表採している。それらの中には、施文要素1と7を施文した繊維を含む土器も含まれており、調査当初から縄文時代前期の遺構・遺物の存在は想定していた。

調査は、限られた調査区内であり廃土置場確保の関係上、下の畑地部分から実施した。まずはじめに下の畑地部分に、幅3mの試掘トレンチを東西南北に各々設定し遺構・遺物の有無を確認した。その結果、地山面上に数ヶ所の黒褐色土の拡がり (堅穴住居跡) と少量の土器片を検出したため、下の畑地を全面調査し13棟の堅穴住居跡と土坑跡2基及び小ピット群を検出した。次に、下の畑地の一部分を廃土置場とし、上の畑地部分の全面調査を実施し、堅穴住居跡



第5图 調査区全体图



第6図 調査区断面(1)

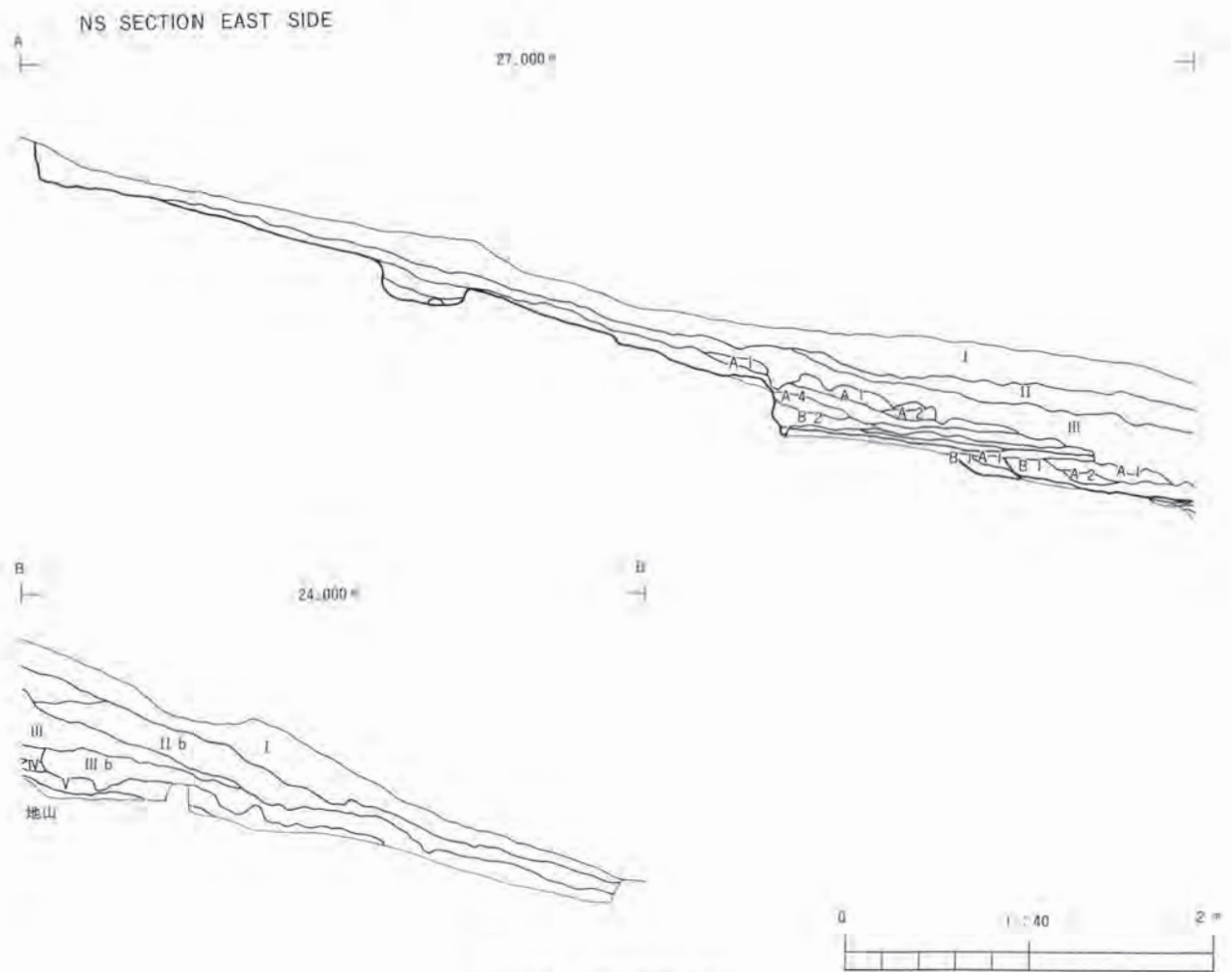
堅穴住居跡
土壇跡

21棟、土壇跡9基を検出した。最終的には、34棟の堅穴住居跡、土壇跡9基、小ピット群を精査したが、調査終了後を見れば緩斜面の中腹から下の方に等高線に沿うように帯状に検出した。調査区外にも当然、同様な遺構は存在するものである。また、堅穴住居跡は斜面上に構築しているためか、その多くが斜面下方部の壁を確認することが出来なかった。

遺物の出土状況は、削平や耕作の影響をあまり受けていないと考えられる上と下の畑地の境界部分の標高21m~24m付近からの出土が多い。かなりの削平を受けたと思われる調査区の南東部分は、ほとんど遺物が検出されない。堅穴住居跡内においても、ほとんど遺物の出土しないものもあれば逆に、第17号、26号、27号堅穴住居跡のように比較的多く出土するものもある。石器類は、剥片石器では、石鏃、石匙類が多く、石鏃は平基のもの、石匙は縦形のものである。打製石器類では、片面に自然面を残す打製石斧がかなり目につく、また、石器として認められなかったが、角の丸くなった石が多量に持ち込まれており、堅穴住居跡の埋土からも相当数検出された。

調査区南東隅の小ピット群は、その性格などは不明だが調査区の南側はかなり削平されていることから、これらは堅穴住居跡に伴ったものの可能性もある。

なお、堅穴住居跡の遺構番号は整理作業の段階ですべてつけ直したものである。



第7図 調査区断面(2)

3. 検出された遺構・遺物

第1号竪穴住居跡（第8・9図、図版4・32）

調査区の西端に位置する。検出時には単独に存在するものと考え精査に入ったが、精査の段階で新旧2時期重複するものであることが判明した。古い時期のものは、大半の部分が調査区外に存在するため詳細は不明である。なお、新旧関係は土層観察の結果判明したため、掘りすぎてしまい西壁部分が不明瞭なものとなってしまった。

平面形は、残存する北東、北西隅から推定すればほぼ方形～長方形を呈するものと考えられる。

平面形

規模は、残存部分において長軸4.35m、短軸3.24m以上をはかる。壁は、ややゆるやかに立ちあがり北壁で壁高0.57mを残す。

規模

埋土は、A層（A₁、A₂）、B層（B₁、B₂）に大別される。A層は、黒褐色土～暗褐色土を基本とする。B層は、黒褐色土を基本とする層で床面のほぼ全域を覆う。多量の炭化物粒子を含むほか、焼土塊が混入する。遺物は、A層よりもB層の中からの出土が幾分多い。

埋土

床面は、地山面をそのまま利用し比較的平坦で固くしまっている。なお、当住居跡内には、炉などの施設は存在しない。

床面

柱穴は、床面にP₁～P₁₁を検出したがP₁は古い時期の竪穴に伴うものと考えられる。柱アタリ痕を確認できたのは、P₄、P₅、P₆、P₇である。北壁沿いにはP₁₀～P₁₁と、小杭を打ち込んだ跡のような小ピットが並ぶ。

遺物は、各層から出土しているが、B層からの出土が若干多い。土器は、すべて繊維を含むものである。繊維の含み方は、多いものから少ないものと比較的差がある。第9図1～14は施文技法2、3により、羽状縄文を施文するもの（註）。これらは、3、4、6、7の施文技法3aの整然とした結束しない羽状縄文と2、5、8、10、14の施文技法2による結束した羽状縄文を施文するものの2種類に分けられる。後者の方は、短い原体を使い結束部が目立つ感じである。胎土中にはどちらも混入物が多く含まれ、特に砕け散ったように細くなった白色鉱物や、石英砂などが多く目につく。また、施文技法2のみられる方には、粒～粉状の黒っぽい鉱物が観察できる。

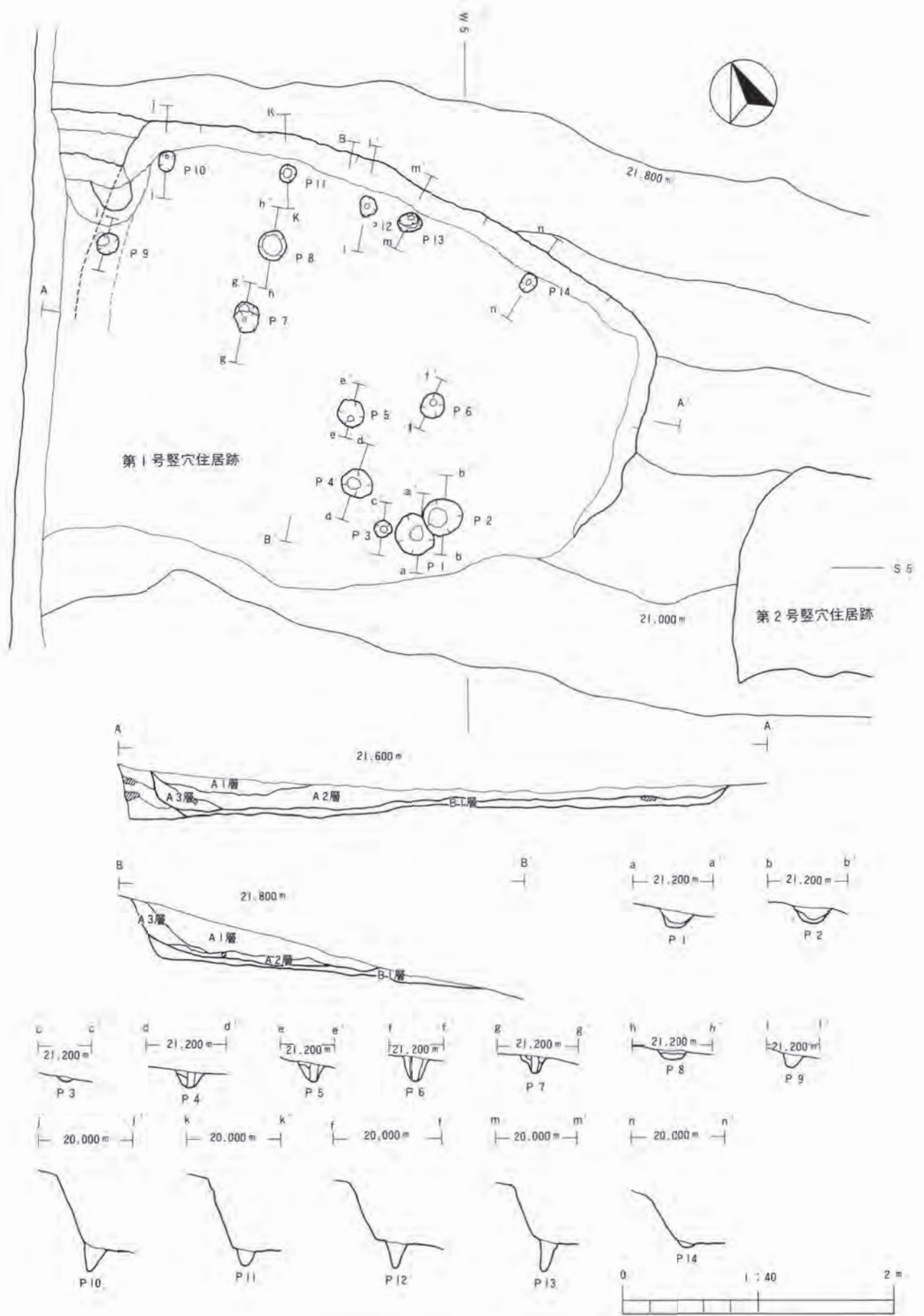
土器

15～27は施文技法6による斜縄文を地文にもつもの。15、27は口縁部片で、15は口唇部を平坦に整形しており口縁部上端に粘土がひさし状に盛りあがっている。27も平坦な口唇部となるもので、外面にはタール状の炭化物が付着する。

28～31は施文技法8による撚糸文を施文し、器厚が0.7～1.1cmと比較的厚手のものである。28～30は原体の太さ、撚りや胎土、色調などが類似しており、同一個体もしくは同系統のものと考えられる。31は28～30とは異なり、細い原体を使っており撚りも弱い。

第9図の32～36は、剥片石器。32は石鏃。無茎鏃で基部が平基となり、二等辺三角形の形態となるが左右非対称である。第1次剥離面を残し、特に背面は基部～側縁部にかけて大きく残す。基部幅は1.3cmをはかる。33、34は床直上から出土した縦形石匙。33は先端部を欠くが、側縁部～先端部が直線的な長方形の形態となるものと推定される。34は一方の側縁～先端部にかけてが湾曲し、先端部が尖がる形態となるもの。どちらも背面に大きく第1次剥離面を残

石器



第8图 第1号竖穴住居跡



第9図 第1号竖穴住居跡出土遺物

す。35、36は剥片の側縁部に細かい剥離を施し刃部としているもので、削器、搔器類の機能が考えられる。

(註) 施文技法の種類については、遺構出土土器の項(124ページ)に記述している。

第2号竖穴住居跡(第10図、図版5)

調査区の西側、第1号竖穴住居跡の東隣に位置する。

平面形
規模

平面形は、残存する北東・北西隅の状態から隅丸の方形～長方形状を呈するものと考えられる。規模は、残存部分において長軸3.31m、短軸1.98m以上をはかる。壁はほぼ直に立ちあがり北壁で壁高0.44mを残す。

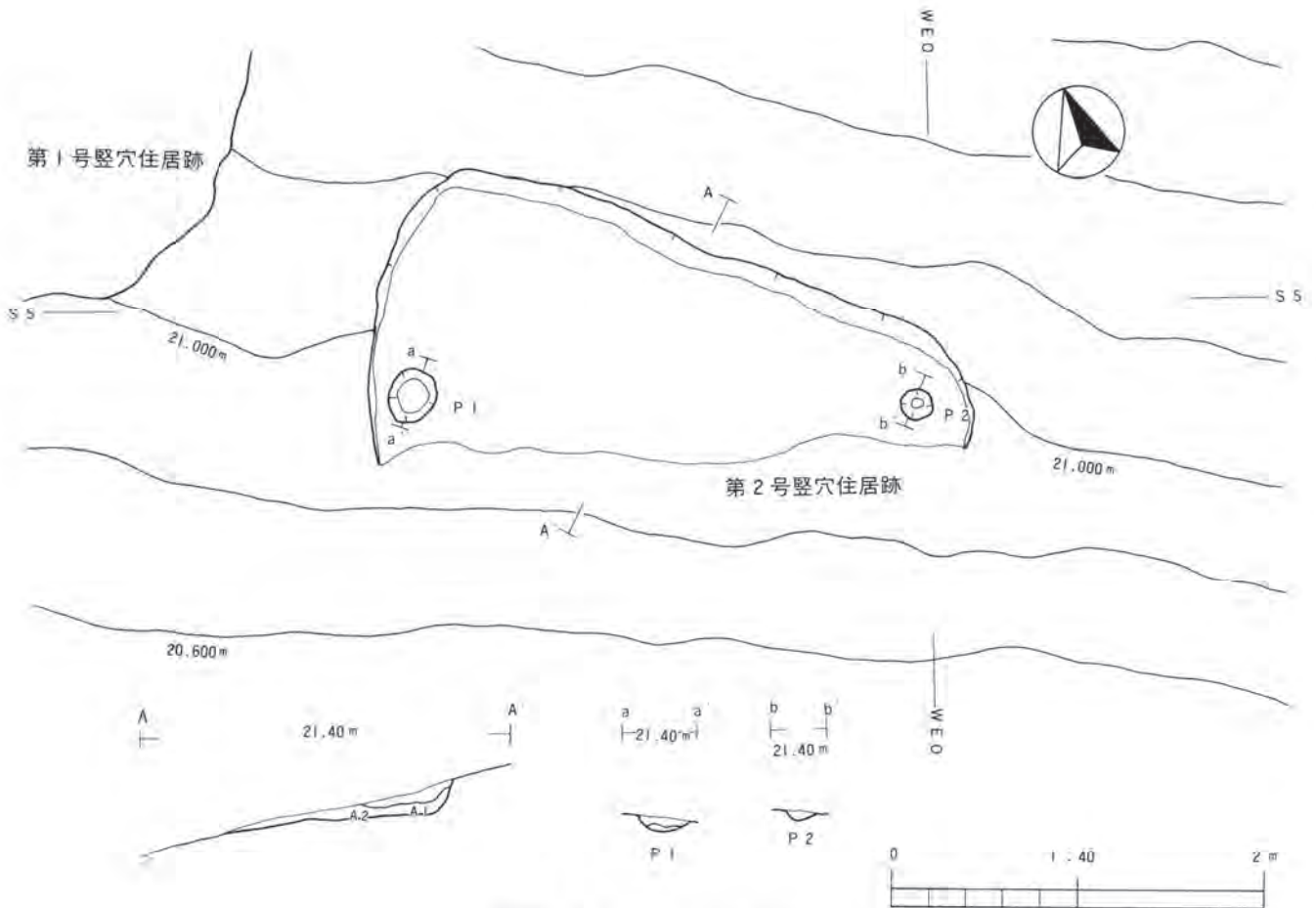
埋土
床面

埋土は、黒褐色～黒色土を基本とするA層が堆積し、炭化物粒を多く含む。

床面は、固くしまり地山面をそのまま利用するほぼ平坦面である。なお、当住居跡内には、炉などの施設は存在しない。

柱穴は、床面上にP₁、P₂の2ヶ所検出した。どちらにも、明確な柱アタリ痕は確認できない。P₁、P₂は、東西の両壁際に各々位置しP₁は長径0.4m、床面からの深さ0.08m、P₂は長径0.16m床面からの深さ0.05mといずれも浅く小規模なピットである。

当住居跡内からの出土遺物はない。



第10図 第2号竖穴住居跡

第3号竪穴住居跡 (第11、12図 図版32)

調査区の西側に位置し、第10号土壇跡に切られる。

平面形は、残存部分から推定し円形状を呈するものと考えられる。

規模は、残存部分において長軸4.15m、短軸2.15m以上をはかる。壁は、約45度の傾斜でややゆるやかに立ちあがり北壁で標高0.13mを残す。

埋土は、黒褐色～黒色土を基本とするA層からなり炭化物粒を多く含む。

床面は、ほぼ平坦面だがやや南側へ傾斜する。地山面をそのまま利用しており固くしまる。

炉及び柱らしきピットなどは、当竪穴内には確認できなかった。

遺物は、ほぼ床直上面から少量出土している。第12図1、2は羽状縄文を地文とするもので1は、施文技法3 aの羽状縄文で比較的太い原体を用いた条の長いもの。繊維を多量に含み、厚さ1.1cmをはかる厚手の破片で、胎土には砕け散ったような状態の白色鉱物、石英砂などがみられる。2は施文技法1による、原体圧痕文が横位に施文されその間に施文技法2による羽状縄文を配置する。1とは逆に羽状縄文は、細い原体で条の短いものを用いている。

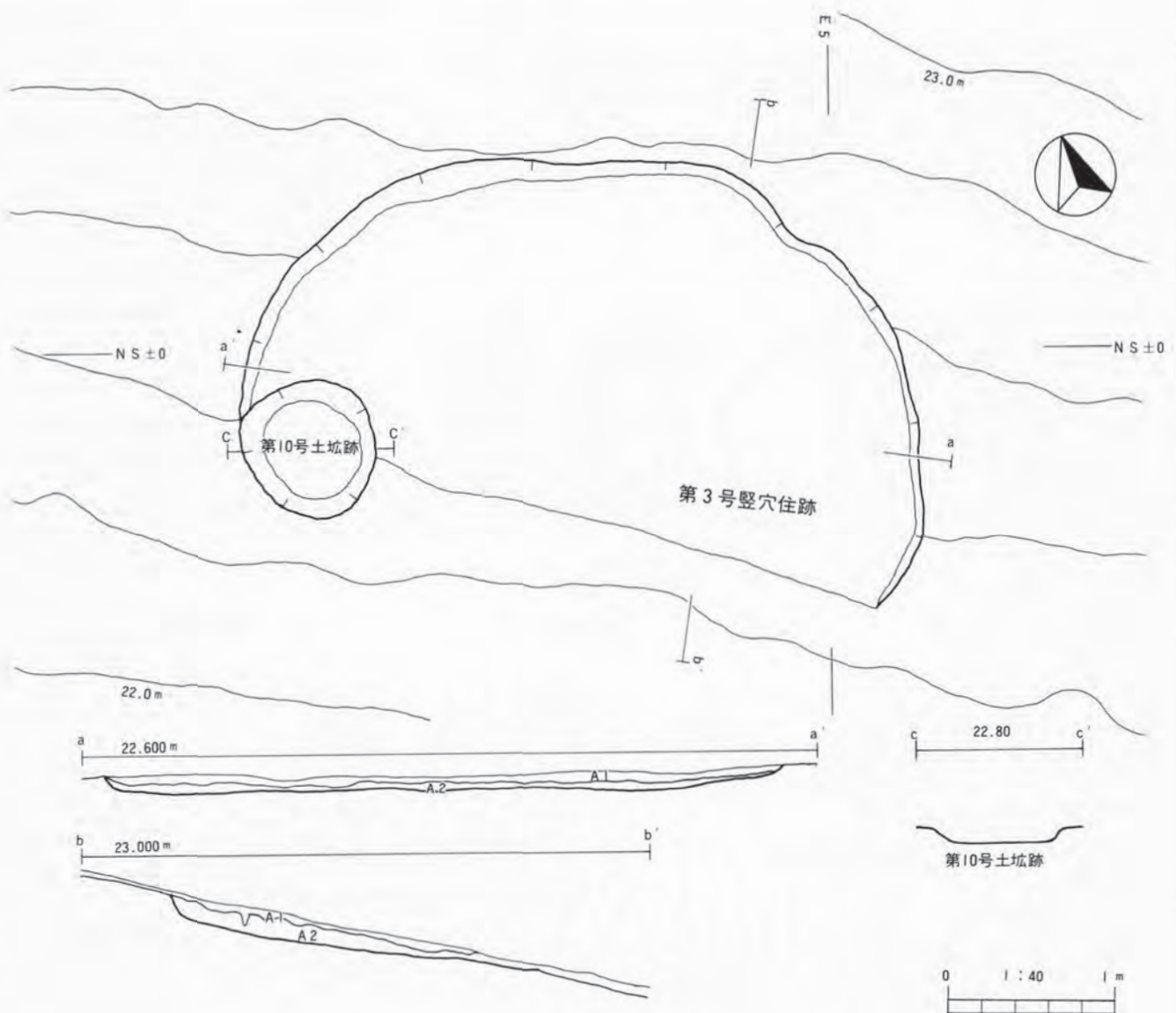
平面形

規模

埋土

床面

土器



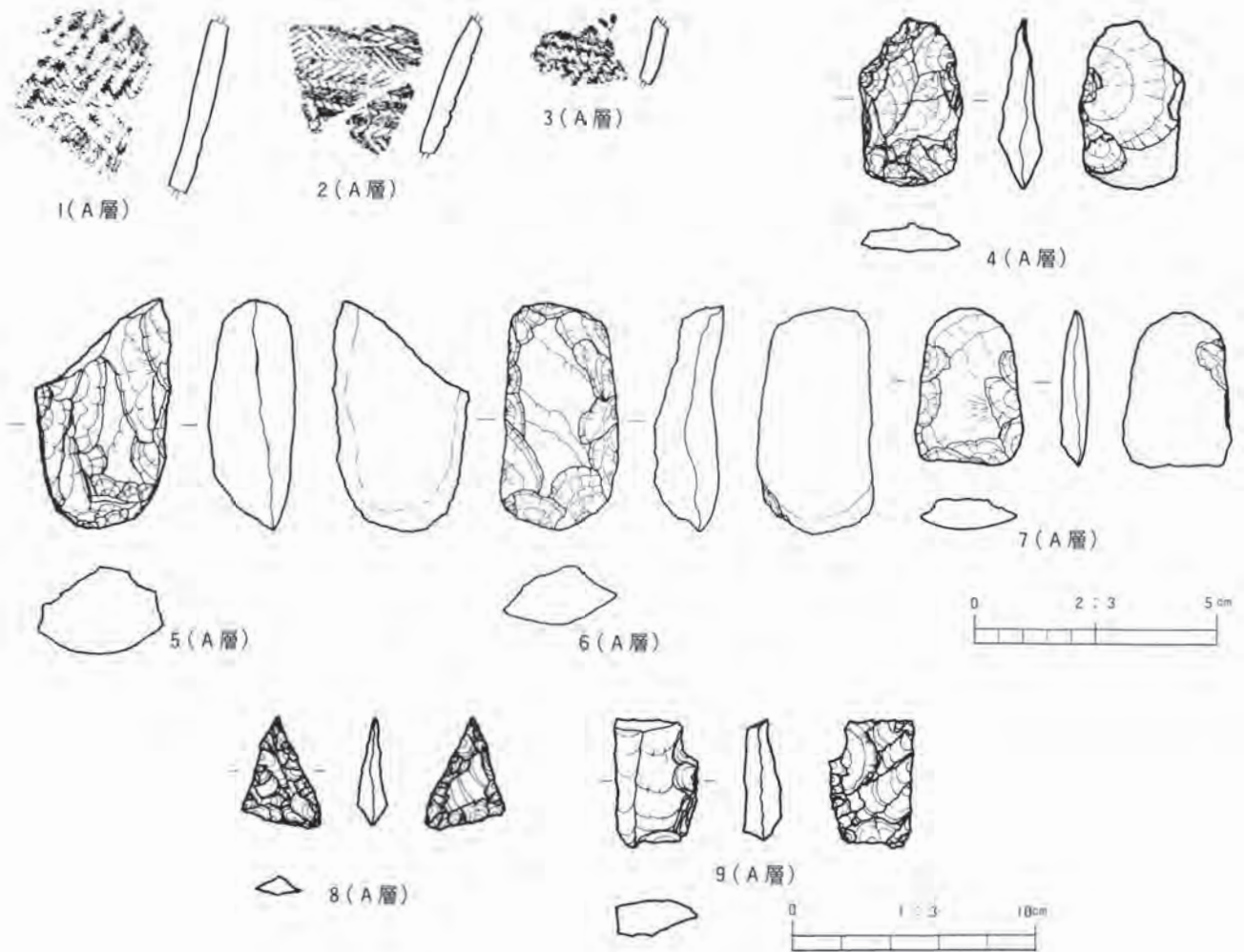
第11図 第3号竪穴住居跡

石器

胎土は、1 とほぼ類似しているが黒っぽい粉状～粒状の鉱物を含んでいる。3 は施文技法 6 による斜縄文を地文にもつもの。繊維の含み方は少なく、焼成は良く固くしまっている。

4～7 は打製の石器で、いずれも石斧と考えられる。4 は背面の一部にだけ自然面を残すものだが、5～7 とは異なり刃部を両刃状に作っている。5 は欠損品で全体の形状は不明だが、断面が三角状のかなり厚いもので、両側縁部付近を中心に調整の剥離が施され中央には第 1 次剥離面を残す。6 は刃部の方がやや幅が広い、長方形の形態となるもの。5 と同様に縁辺部にのみ調整の剥離を施し、中央部分は第 1 次剥離面を大きく残す。7 は薄手の撥形の形態をとる小形のもの。刃部がほぼ直線状となり、基部を除く三辺に調整の剥離を施す。5～7 の背面は自然面を残す。

8、9 は小剥片を利用した剥片石器。8 は石鏃。三角形状の形態をとるが、左右非対称であり基部は平基で幅 1.6cm をはかる。調整剥離は丁寧さを欠き、背面には大きく第 1 次剥離面を残す。9 は長方形の小剥離片を利用し、一方の側縁に調整剥離を施し刃部とする剥器類の機能が考えられるもの。



第12図 第3号竖穴住居跡出土遺物

第4号竪穴住居跡（第13、14図、図版33）

調査区の中央部西側に位置する。第8号土壇跡を切り、第9号土壇跡に切られる。

平面形は、残存部の隅の状態から隅丸の方形～長方形を呈するものと考えられる。

平面形

規模は、残存部で長軸4.38m、短軸1.21m以上をはかる。壁はほぼ直からやや傾斜をもって立ちあがり、北壁で壁高0.66mを残す。

規模

埋土は暗褐色～黒褐色土を基本とするA層（A₁～A₃）から成り、ほぼレンズ状に堆積する。いずれも硬くしまりをもち、A₃層中にはA₁、A₂～A₃層に比べて多量の焼土塊が含まれており、遺物も多く含まれている。

埋土

床面は、第8号土壇跡付近に一部貼床が認められるほかは、地山面をそのままに利用した平坦面となるが、北西隅が約0.18m程一段高くなる。炉跡などの施設は確認できない。

床面

柱穴は、P₁～P₅まで検出したが、P₁、P₅には明瞭なアタリ痕が認められる。P₂は、床面からの深さ0.06m程の浅い小規模なピットである。

遺物は、すべて埋土中から出土したものである。土器片はすべて繊維を含んだものだが、第14図1～4はその含む量は少ない。1～3は、施文技法2、3による羽状縄文を施文したもので、1は施文技法3aの羽状縄文を施文するもので口唇部は平坦に整形し口縁部上端より羽状縄文が施文される。焼成が軟調なためか、器内外とも磨滅が著しい。胎土には、多量に砂粒が含まれているのが観察される。2も施文技法3aの結束部のない羽状縄文を施文した体部片。3は施文技法2により、結束する羽状縄文を施文したもので、条の細く短い原体を用いている。4は施文技法8による撚糸文を施文したもので、厚さ1.1cmをはかる厚手のもの。焼成は軟調で、胎土には混入物があまり含まれていない。5～7は施文技法6により、斜縄文を地文にもつもの。5は、多量の繊維を含み内面の凸凹が著しい。6、7は、器表面の一部に炭化物の付着が認められ、6は胎土中に金雲母を含む。7は羽状縄文の可能性もあるが、磨滅が著しく判然としない。胎土中には、砕け散ったような白色鉱物が多量に認められる。

土器

第14図8～11は、打製の石器でいずれも背面に自然面を残す石斧である。8、9は小形、10、11は中ないし大形のもの。8は、一部を欠く欠損品だが、ほぼ楕円形状の形態となるもの。両側縁部～基部にかけて、調整の剥離が施されている。背面の自然面は、側縁の一部に剥離を加えている。9は、刃部の幅が広くなり、二等辺三角形の形態となるもの。両方の側縁部を中心に細かい調整の剥離が加えられる。背面は、一方の側縁の一部を整形のため大きく剥離しており、自然面はほぼ平坦である。10は、一方の側縁部が直線的となり、ほかの三辺が半円状になる形態をとる。ほとんどが粗く大きな剥離で整形されており、背面は一方の側縁部に大きな剥離を残す。11は、基部と刃部の両端を欠くが、長方形の形態となるものか。正面は、中央部に第1次剥離面を大きく残し、縁辺の四辺に調整の剥離を加えている。また、背面も側縁の一部にのみ剥離が認められるだけで、自然面は半円状にゆるやかに湾曲している。

石器

第14図12～18は剥片石器。12、13は石鏃。12は、基部が平基となる二等辺三角形の形態になるもの。両面ともに基部付近に第1次剥離面を残しており、先端部を中心に細かい調整剥離が施されている。13は、基部が凹基ぎみで12よりは縦長な二等辺三角形の形態をとる。背面の一方の側縁部に第1次剥離面を大きく残すものである。14は、楔形石器（ピエス・エスキュー）である。上下端に細かい剥離がみられ、下縁が機能部と考えられる。16は石錐。断面が台

形～三角形に近い棒状の剥片の先端に、細かい調整剥離を施している。15、17、18は調整剥離の施されたもの、及び縁辺部に細かい剥離痕のあるものである。

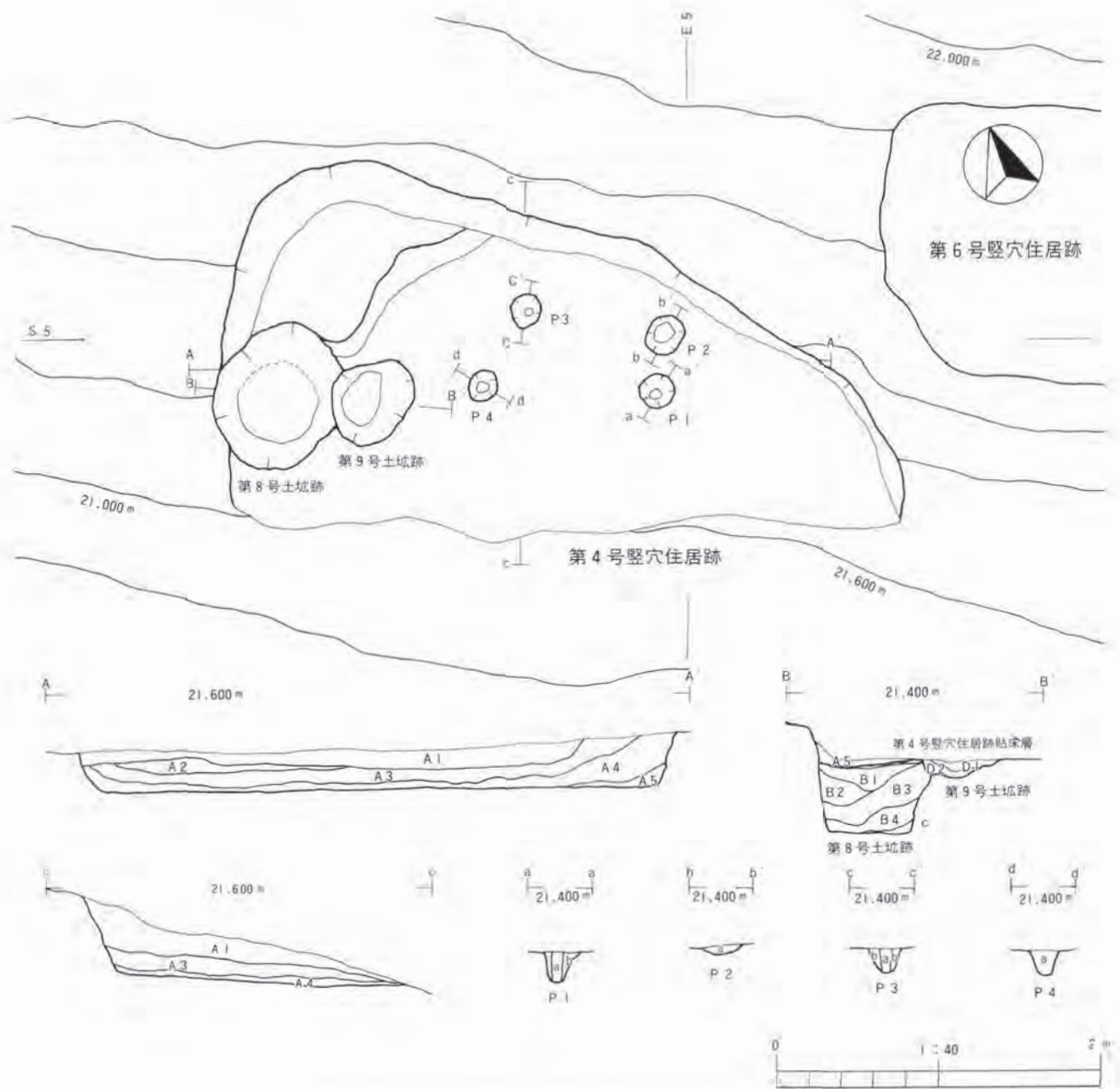
第8号土坑跡 (第13図)

平面形

第4号堅穴住居跡内の西壁際に位置する。第4号堅穴住居跡、第9号土坑跡よりも古い。平面形は、ほぼ円形状となり、堅穴住居跡床面下の検出面で径0.93m、底部径0.5m、深さ0.45mをはかる。壁は、ほぼ直に立ちあがりピーカー状の形態を呈す。底面は平坦である。

埋土

埋土は、大きくB層、C層に2分される。B層(B₁～B₄)は、暗褐色～褐色系の土を基本とするやわらかくしまりのない層で、人為的に埋められたものと考えられる。C層は、底面に部分的に堆積していたもので、炭化物や焼土を大量に含む黒色土層である。本土坑跡からの出土遺物はない。



第13図 第4号堅穴住居跡, 第8号・9号土坑跡

第9号土坑跡（第13図）

検出の段階では確認できなく、第4号堅穴住居跡床面精査時に確認したものであるため、もともとの深さなどは不明。ただ、第4号住居跡の貼床層を切って構築しており、重複関係からみれば、第4号堅穴住居跡、第8号土坑跡よりも新くなる。

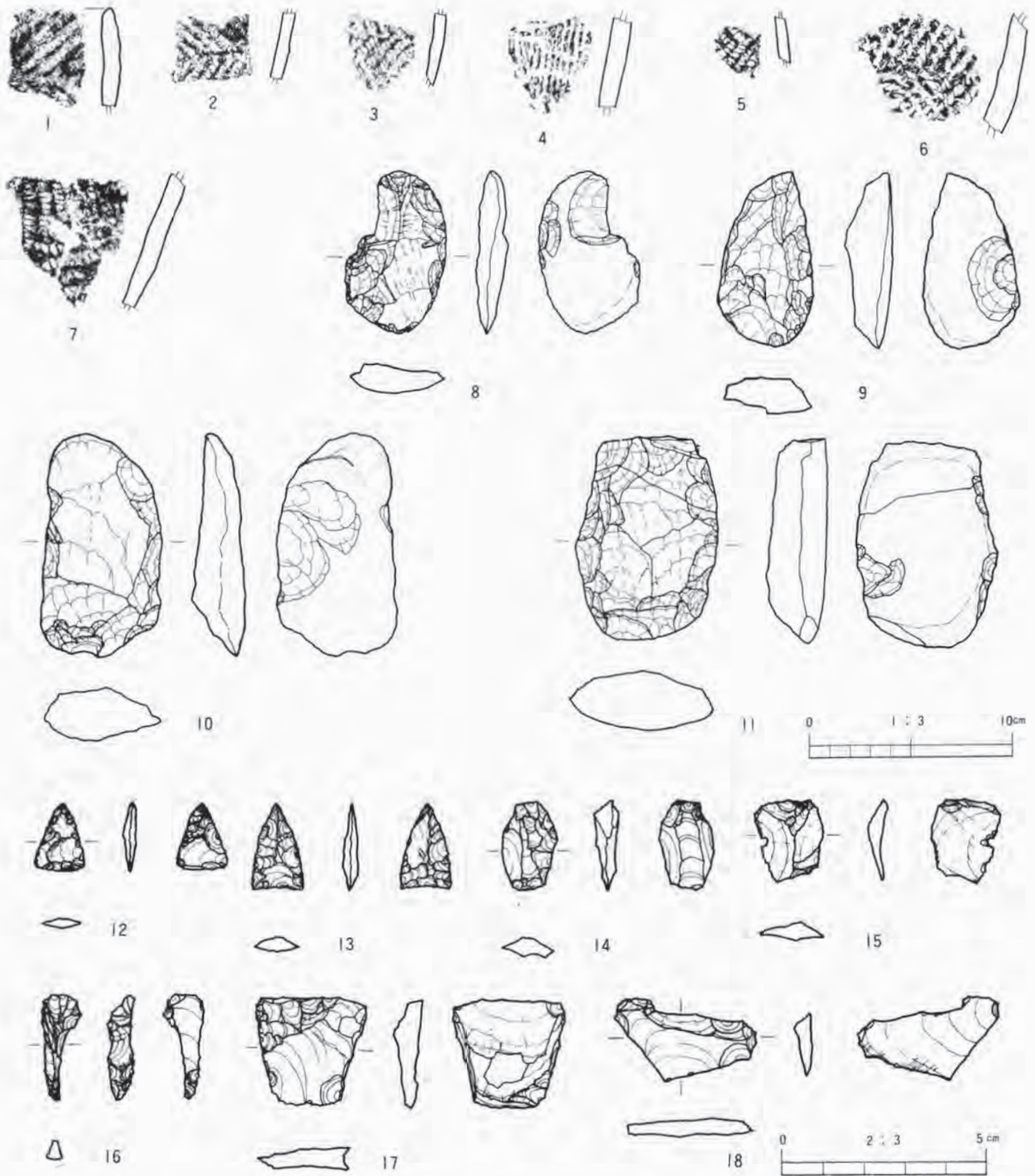
平面形は、ほぼ円形～楕円状を呈するもので、径0.40mをはかるものである。

埋土は、黒褐色～暗褐色土を基本とする層（D層）である。出土遺物はない。

重複関係

平面形

埋土



第14図 第4号堅穴住居跡出土遺物

第5号堅穴住居跡（第15～17図 図版6、34、35）

調査区の中央部やや西に位置する。

平面形

平面形は、長方形の形態を呈すが各隅、特に西側の隅は若干丸味を有す。規模は、長軸2.79m、短軸1.96mをはかる小形の堅穴である。壁は、直に立ちあがり、壁高は北壁で0.78mを残す。

埋土

埋土は、大きくA、B、C層に大別できる。A層は、暗褐色土～黒褐色土を基本とする層で多量の礫や炭化物、焼土塊などをブロックに含むこと（特にA層）や、その堆積範囲が北半部分に集中する事から人為的に堆積した層と考えられる。B層は、暗褐色土を基本とする層で、黄褐色～褐色の地山ブロックを含む層。C層は、床面上を覆う薄い層で、暗褐色土を基本とする層。粘性を若干有し、北側壁付近では比較的厚く堆積する。

床面

床面は、東側に幾分凸凹があるがおおむね平坦面である。

また、炉などの施設はみあたらないが、東壁寄り部分に径0.5m、深さ0.04mほどの浅い皿状のピット（凹地）を確認したが、使用目的などその性格などは不明。

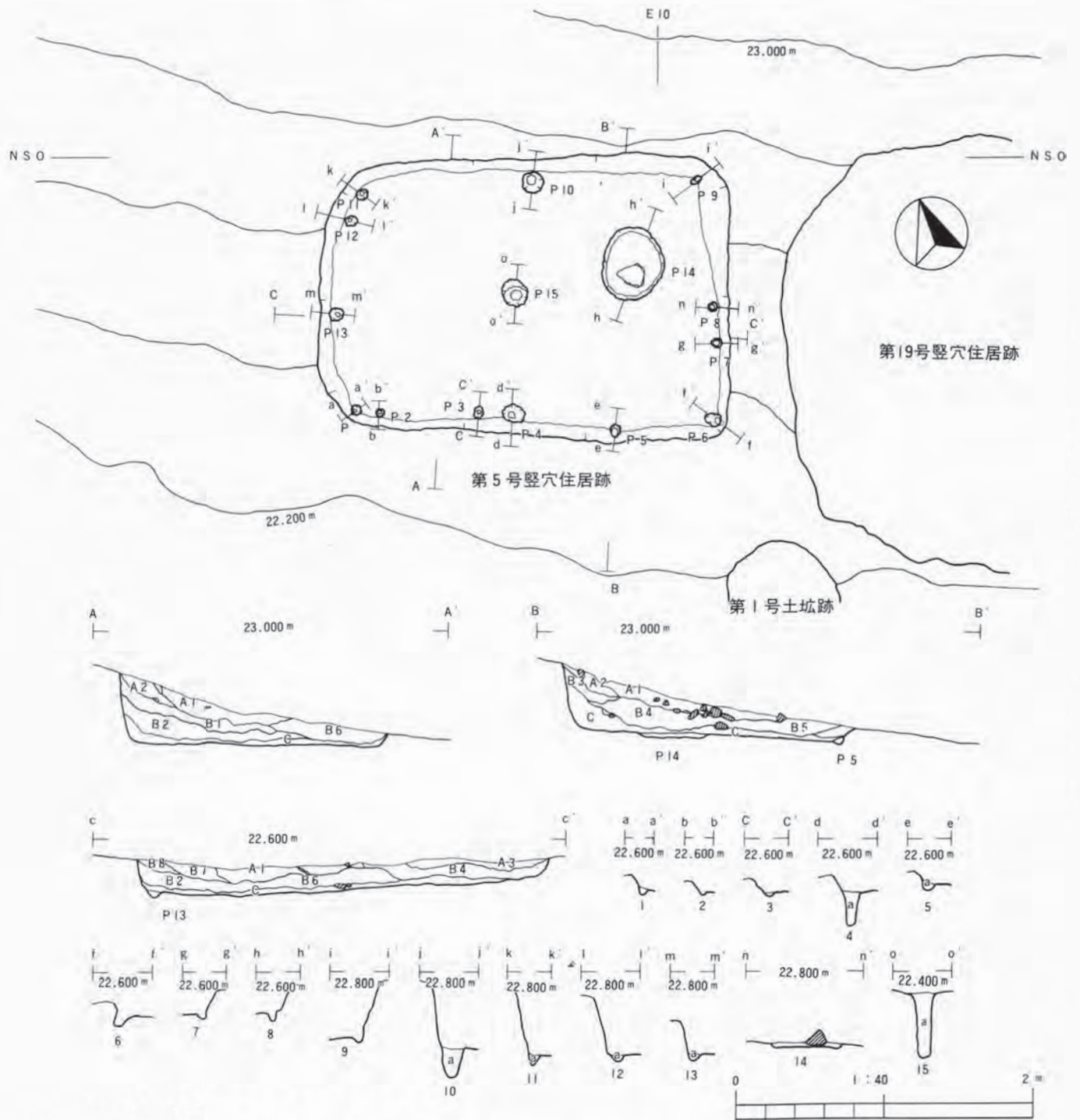
柱穴及び柱穴状のピットは、P₁～P₁₅、P₁₆の14ヶ所を確認した。ほぼ中央部に位置するP₁₆が、床面からの深さ0.45mと一番深いものである。P₁～P₁₅は、壁際をめぐるように存在する浅い小ピットである。P₁₆を中心に縦、横、対角線上に各ピットが配置されており、P₁₀～P₁₅～P₁の縦ライン上のピットだけが、他のものに比べて大きく深い。

土器

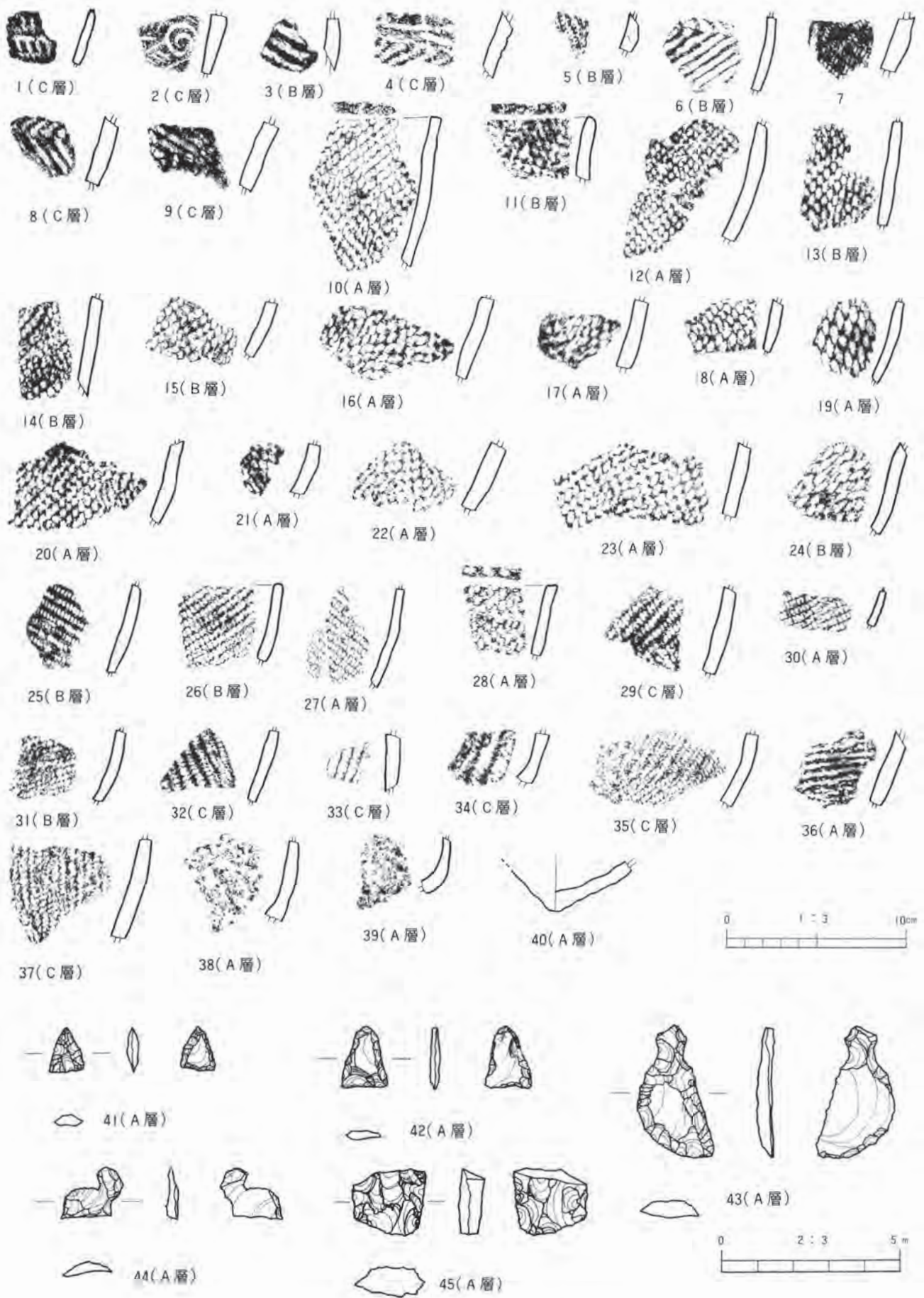
遺物は、各層から出土している。土器片はすべて繊維を含むもの。第16図1は、施文技法9aにより上下2段に刺突文を施文したものの。2は、施文技法1と9aにより施文されるもので、渦巻状の原体圧痕文と斜位に施文した原体圧痕文間に連続する刺突を施文したものの。3、4は施文技法1による原体圧痕文を施文したものの。6～9は羽状縄文を施文したものの。6、7、9は施文技法3aによる結束のない羽状縄文を施文しており、条と節が明瞭で太くて条の長い原体を用いて深く施文するもの。8は、施文技法2による結束する羽状縄文を施文し、器厚1.2cmをはかる厚手のものである。焼成があまりよくなく、軟質で磨減が著しい。10～24、28は、施文技法7による地文を施文しているもので、繊維の含有量も多いものから極端に少ないものまである。10、11、28は口縁部の破片で、10は、口唇部を平坦に整形しているだけだが、更に11は指頭圧痕文を施し、28には、刺突文を施文する。胎土中には、概して、繊維の含有量の多いものは、白色鉱物や石英砂などのほかの混入物も多く、繊維の少ないものはほかの混入物も少なくなるようである。また、胎土中に金雲母を含むもの（11、22、24）もみられる。25～27、29～35は施文技法6による斜縄文を地文にもつもの。29は、羽状縄文の一部の可能性も考えられる。34は、底部（尖底～丸底？）にほとんど近いもの。36、37は施文技法8による縦ないしやや斜位に施したもの。40は、尖底部の破片。A層から出土しており、施文技法7による地文をもつ土器の底部の可能性はある。

出土土器を層的にみれば、施文技法7を用いるものはほとんどが上層のA層、特にA₁層を中心に出土し、施文技法2、3による羽状縄文はそれよりも下位のC層から主として出土している。

第16図41~45は剥片石器。41、42は石鏃。いずれも基部は平基のもので形態的には三角形状を呈し、A層中から出土したものである。41は、縁辺部に調整剥離を施し、背面の中央部に大きく第1次剥離面を残すもので、基部幅0.9cmをはかる小形のもの。42は、両面に第1次剥離面を残す。先端部は、さほど鋭利に尖がるものではない。43、44は石匙。43は、つまみ部に対し側縁の一方が大きく湾曲するもの。両面に第1次剥離面を残すが、特に背面はつまみ部を除きほとんどが第1次剥離面で、片刃状の刃部になる。



第15図 第5号竖穴住居跡



第16图 第5号竖穴住居跡出土遺物

44は、刃部を欠きつまみ部を残す欠損品。45は、上半を欠くものだが、両面ともに第1次剥離面を残す調整剥離が施されるもの。

46~49は打製の石器。いずれも背面に自然面を残す石斧。46は、楕円形状の形態を呈すもので縁辺部にのみ調整の剥離を施すもの。背面の自然面には手を加えていない。47は、基部を欠く。断面は三角形を呈すもので、正面はほぼ全面に調整の剥離を施している。背面は、側縁の一部に大きな剥離が認められるが、これは形をととのえるためのものか。48は、楕円形状の形態をとる小形のもので、背面は自然面の側縁部には、細かい剥離がみられる。49は、長方形形状の形態を呈すもので、中央部に大きく第1次剥離面を残し縁辺部だけに調整の剥離を残す。断面は台形状を呈す。背面は自然面をそのまま残す。

第6号竪穴住居跡（第18、19図 図版35）

調査区のはぼ中央に位置する。

平面形は、隅が幾分丸味を帯びる方形~長方形の形態を呈すものと考えられる。

平面形

規模は、残存部で長軸2.78m、短軸1.70m以上をはかる。壁はほぼ直に立ちあがり、北壁で壁高0.57mを残す。

規模

埋土は、黒褐色土を基本とする。炭化物粒子を含むA層が堆積する。

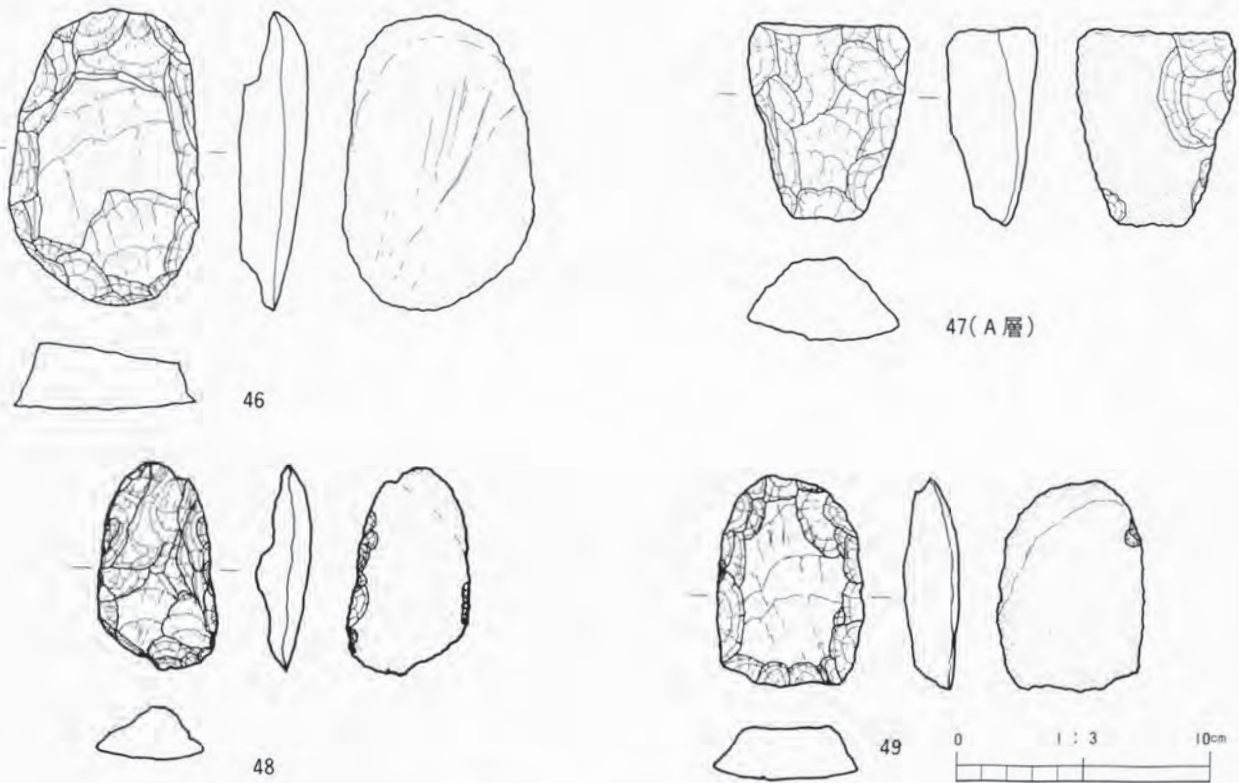
埋土

床面は、固くしまる平坦面で地山面をそのまま利用している。炉などの施設及び柱穴状のピットなどは、確認できなかった。

床面

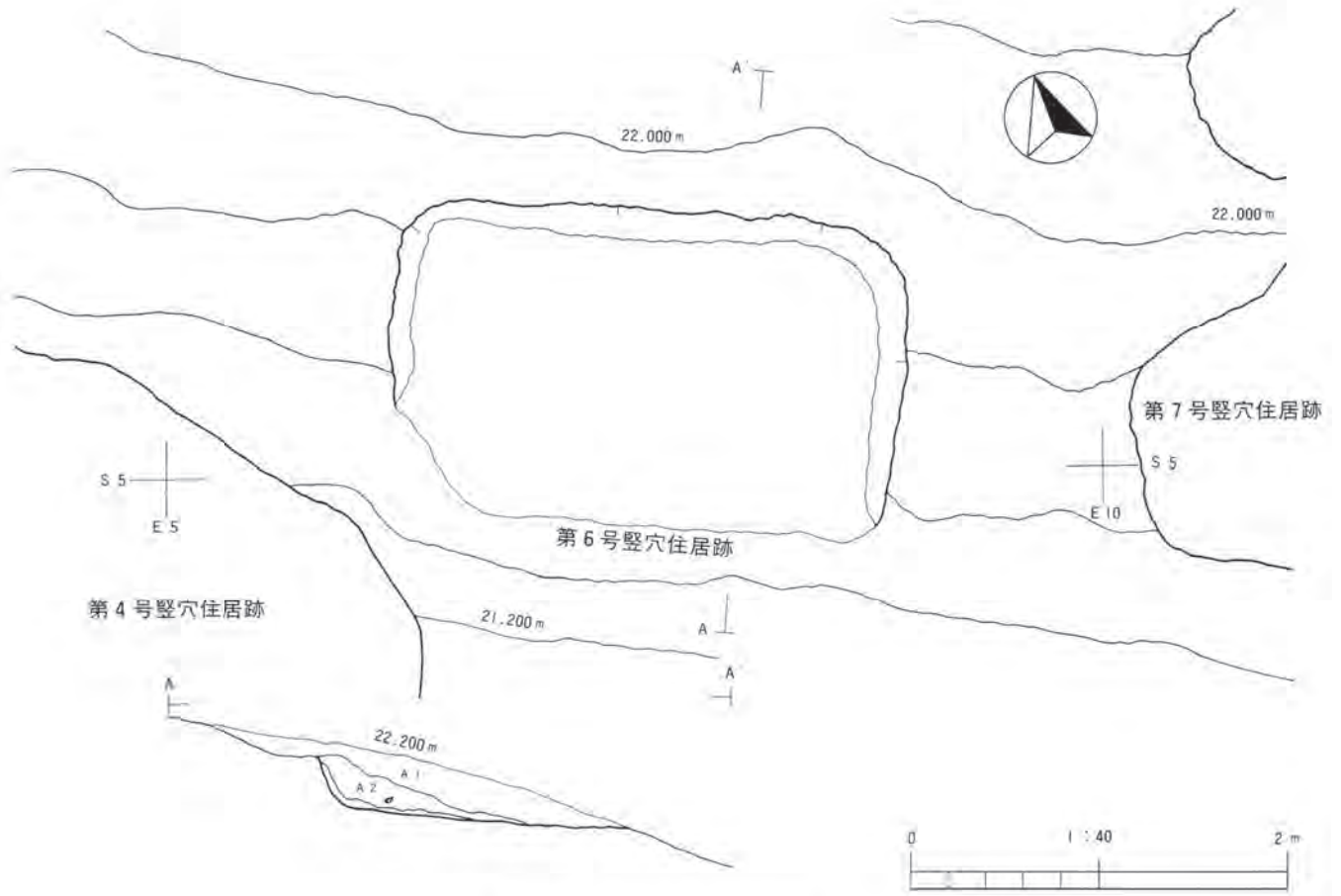
遺物は、少量ながら出土している。いずれも埋土中からのもの。第19図1、2は、どちらも繊維を含むもので、施文技法6による斜縄文を地文にもつ。2は、口縁部の破片。

土器

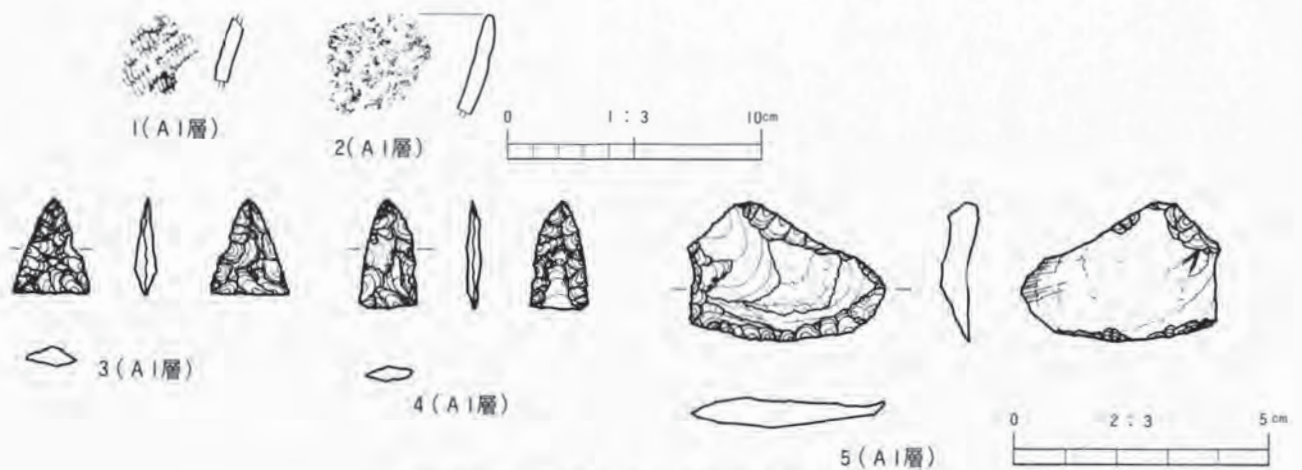


第17図 第5号竪穴住居跡出土遺物②

第19図3～5は剥片石器。3、4は石鏃。3は、両面とも第1次剥離面を残さない程に、剥離調整を施している。基部が平基となる正三角形の形態をとる。先端部は鋭利に尖る。4は、縦長の剥片を利用する縦長の三角形の形態のもの。5は、不定形の剥片を利用する削器・搔器類。



第18図 第6号竖穴住居跡



第19図 第6号竪穴住居跡出土遺物

第7号竪穴住居跡 (第20~24図 図版7、8、36)

調査区のほぼ中央部に位置する。

平面形は、西側が大きく張り出し、東側も幾分張り出しぎみとなる不整形プランを呈す。

平面形

規模は、残存部で長軸3.50m、短軸2.20m以上をはかる。壁は、やや傾斜をもつがほぼ直線的に立ちあがり、北壁で壁高0.40mを残す。

規模

埋土は、黒褐色土を基本とするA層(A₁~A₄)から成る。A層はA₁~A₄に細分できるが、A₁層は、西壁付近にのみ堆積する。竪穴床面のほぼ全域を覆うA₃層から、比較的多くの遺物が出土した。A₁、A₂層中には、黄褐色の地山ブロックが多く含まれる。また、A₃層には量的に少ないが、炭化物粒や焼土の小塊が含まれる。

埋土

床面は、少し凸凹があるが固くしまっており、おおむね平坦面である。

床面

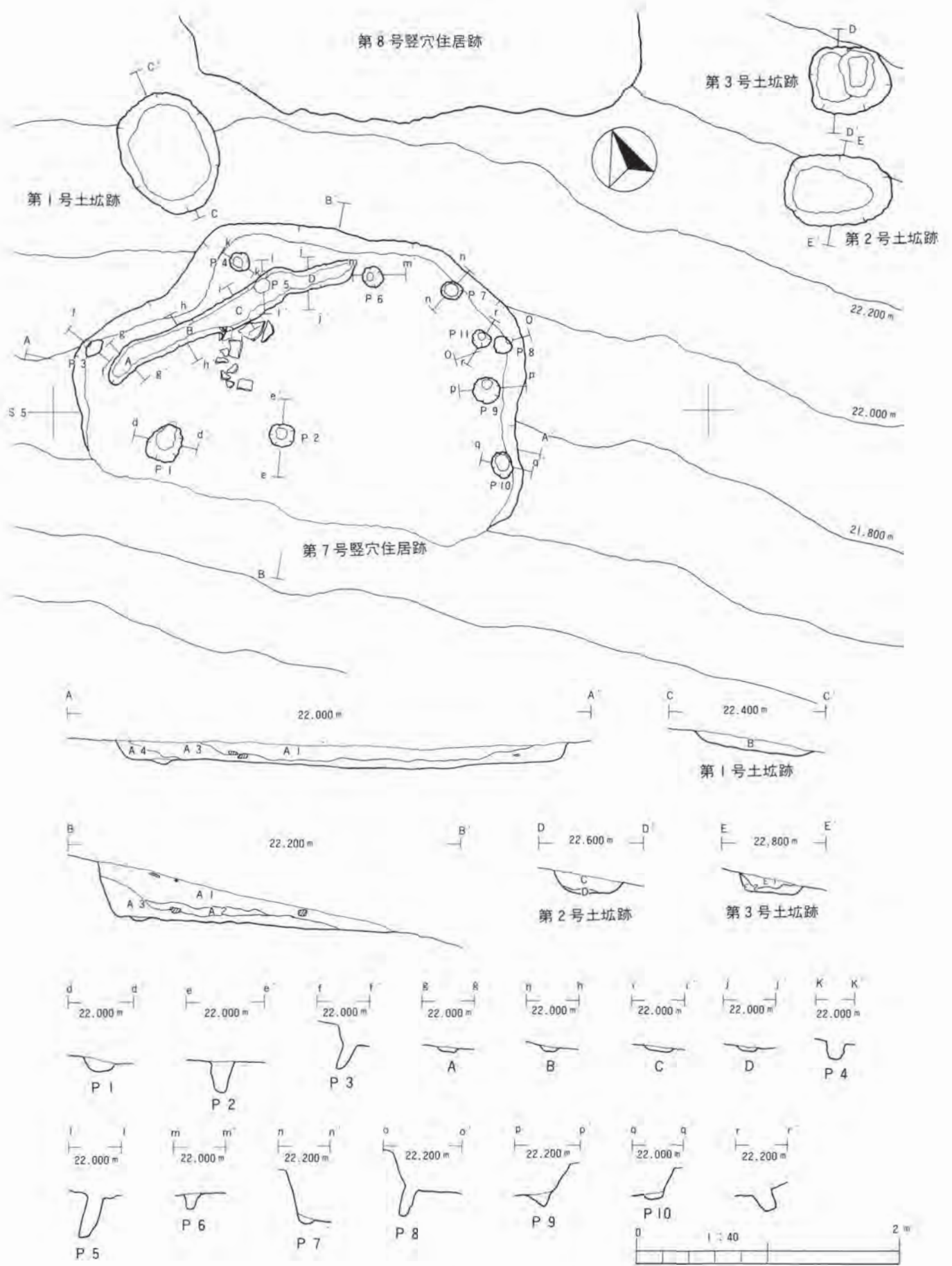
周溝は、北西壁沿いに1本存在する。周溝(第20図のセクションA~D)は、床面からの深さが0.03~0.04m内外の浅いもので、その断面は開いたU字形を呈す。

柱穴状ピットはP₁~P₁₁まで検出したが、このうち比較的深いものはP₂、P₃、P₅、P₈でこのうちP₂は、竪穴のほぼ中央部に位置し鉛直方向にのびるものである。P₃、P₅、P₈はいずれも壁際及び北西部の周溝壁際に位置し、各々、竪穴内部方向に向かうようにななめにのびている。また、竪穴中央部に位置するP₁、P₂以外のものは、壁沿いにめぐるように位置しているが特徴的である。

床面上には、炉跡などの施設は、存在しない。

遺物は、A₃層~床直上にかけて多く出土している。第21図1は、床直上からまとまって出土したもので、施文技法7により施文される縄文を地文とする深鉢型土器である。地文は、口縁部上端から施文されており、ほぼ体部全体に施文されている。口径は推定で35.5cmをはかる。口唇部頂部は平坦に整形され、その上に指頭圧痕を施す。内面は多少凸凹はあるが、なめらかに調整する。器厚は、1.3cmと比較的厚手のものだが、焼成は良く胎土もち密で硬質である。繊維の含有量は少なく、繊維以外の混入物も少ない。底部形態は不明だが、底の小さい平底ないし丸底となると思われる。第23図1は、口縁部の破片で施文技法1、9により施文されている。原体圧痕により、渦巻文及び口縁と平行するものと斜位になる圧痕文が施され、その間に

土器



第20图 第7号竖穴住居跡, 第1号·2号·3号土坑跡

連続する刺突文を配すものである。口唇部の断面は、丸味を帯びるようである。2～10は、羽状縄文及び羽状縄文の一部と思われるものを施文したものである。このうち、6、7は施文技法2による結束する羽状縄文を施文するタイプに類似し、短い原体を用いている。他のものは施文技法3aによる羽状縄文となるものと思われる。11は、施文技法4、6により施文されるもので、口縁部上端にループ文?がみられ、以下は斜縄文の地文となるもの。口唇部は、やや外削りぎみに整形されている。12、15は、施文技法7による縄文を地文にもつもの。13、14、16～18は施文技法6による斜縄文を地文とするもの。13、14は口縁部の破片で、13は口唇部が薄くなるもので、14は、口唇部を内削りに整形したもの。13の口縁部内外面には、炭化物が付着している。16は、非常に硬質なもので、器厚が0.5cmと比較的薄手で小形の鉢になるものか。20は、底部に近い破片で尖底～丸底になるものと思われる。21は、施文技法8により、撚糸文を施文する口縁部の破片で、口唇部は平坦に整形され、頂部には円形の刺突が施される。器形的には、口縁部上端で「く」の字状に外反する。

第23図22～25は剥片石器。22は石鏃で、基部が平基となるやや縦長な二等辺三角形の形態を呈す。両面とも第1次剥離面を残さずに剥離調整を施し、先端部は鋭利に尖がる。23は、縦形石匙のつまみ部を欠くものと思われる。側縁部はほぼ直線的であるが、先端部で片側に湾曲する。湾曲する側の側縁部は、両面から調整剥離を施し両刃状の刃部形態となっている。24、25は、逆三角形の小剥片を利用した削器・搔器類と思われる。

第24図26～35は打製石器。26～31は、背面に自然面を残す石斧。26、27は、長方形の形態となる小形のもの。両者とも断面台形状を呈し、中央部に第1次剥離面を残す。26は、背面の両側縁部にも調整剥離を施している。29は、刃部幅が広がる撥形の形態を呈し、下辺の刃部を中心に調整剥離を施している。28、30、31は欠損品。32は、円礫を打ち欠いて片刃の刃部を作り出した礫器（チョッパー）で、刃部は鋭い。33～35は、断面三角形の自然礫の側縁部を使用した特殊磨石。機能磨面（A面）は、いずれも1.3～1.5cm幅で調整面（B面）は、4～5cm幅のものである。

石器

第1号、2号、3号土坑跡（第20図 図版7）

第1号土坑跡は、第7号堅穴住居跡と第8号堅穴住居跡の間に位置する。

ほぼ楕円形の平面形を呈し、長軸0.93m、短軸0.74m、検出面からの深さ0.10mをはかる浅い皿状の土坑である。

平面形

埋土は、暗褐色土を主体とし褐色土ブロックが混入するB層が堆積する。埋土中からは、図示できなかったが、極小の土器片や剥片が出土している。

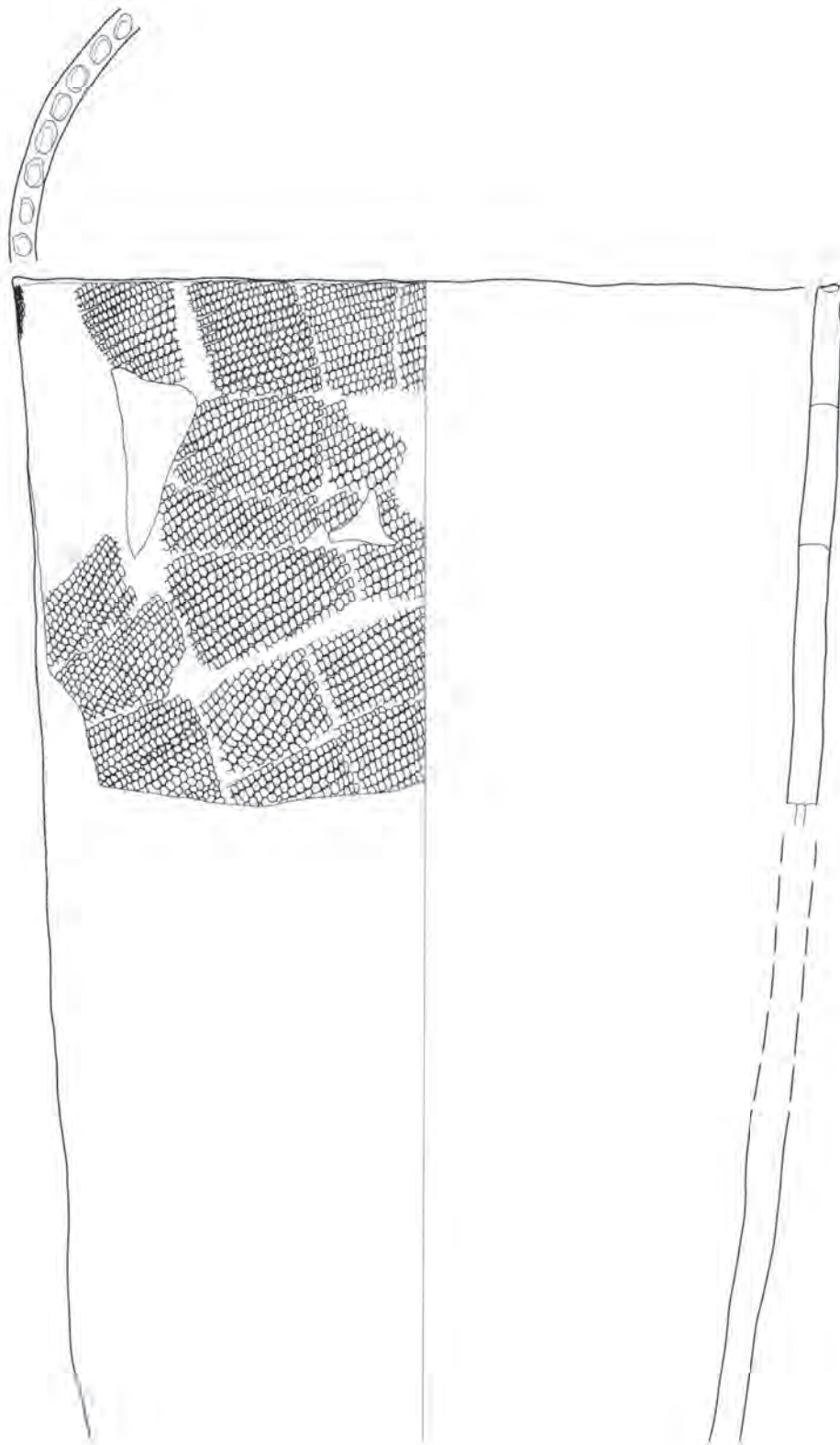
埋土

第2号土坑跡は、第9号堅穴住居跡の南に位置する。

ほぼ楕円形の平面形を呈し、長軸0.82m、短軸0.53m、床面からの深さ0.15mをはかる土坑で、壁はゆるやかな傾斜で立ちあがる。埋土は、暗褐色土を基本土とするC層と褐色土を基本とするD層に分けられる。出土遺物はない。

平面形

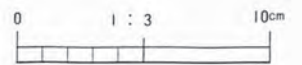
埋土



第21図 第7号竪穴住居跡出土遺物①



第21図 I の拓本



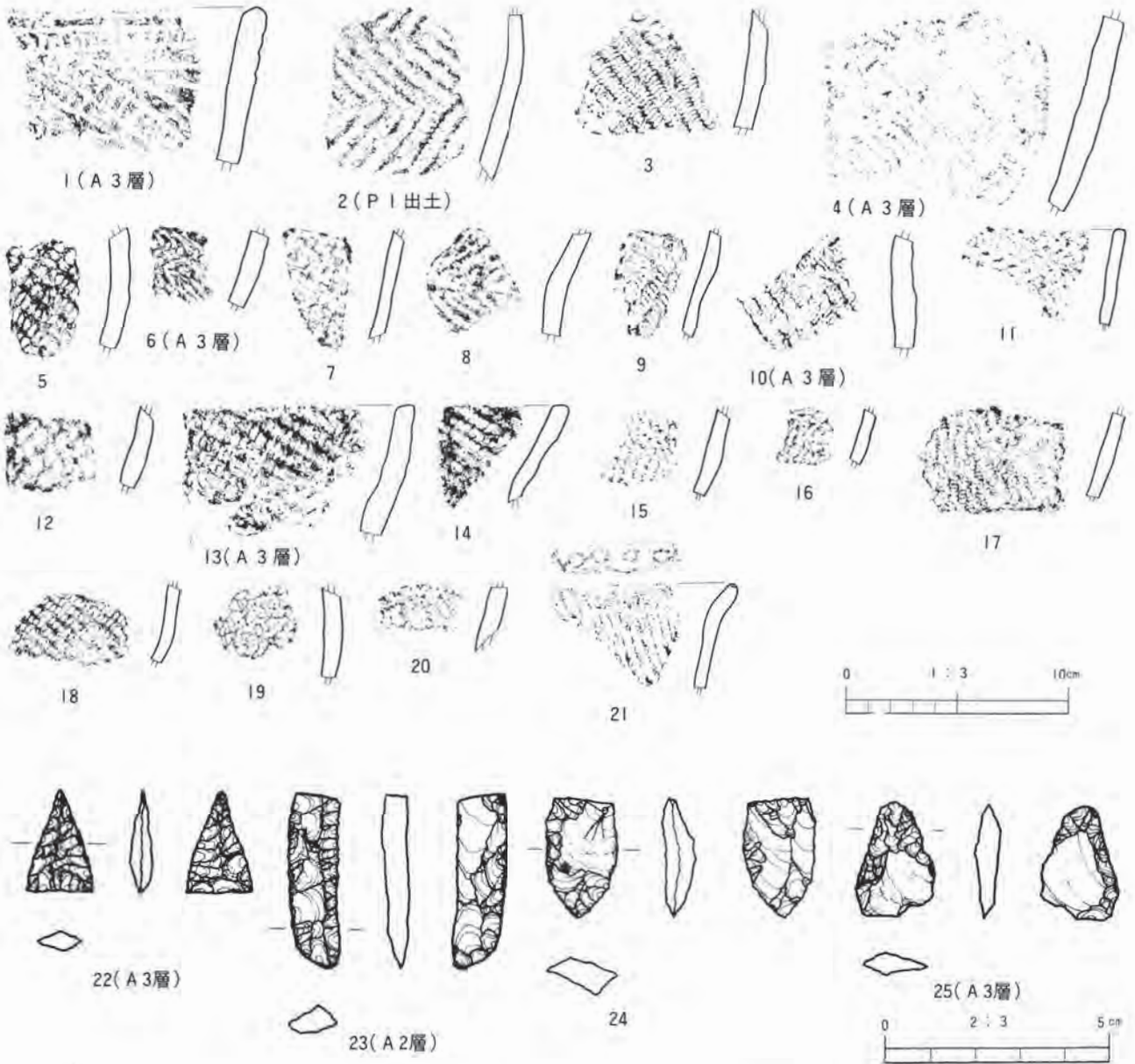
第22図 第7号竖穴住居跡出土遺物②

第3号土坑跡は、第2号土坑跡のすぐ北側に位置する。

平面形
埋土

ほぼ円形の平面形を呈し、径0.15mをはかる。底面中央付近が更に凹む土坑で、壁はやや直線的に立ちあがる。埋土は、暗褐色土を基本とする層（E₁、E₂）から成る。中央部の凹みには比較的炭化物粒を含んだ土が堆積する。

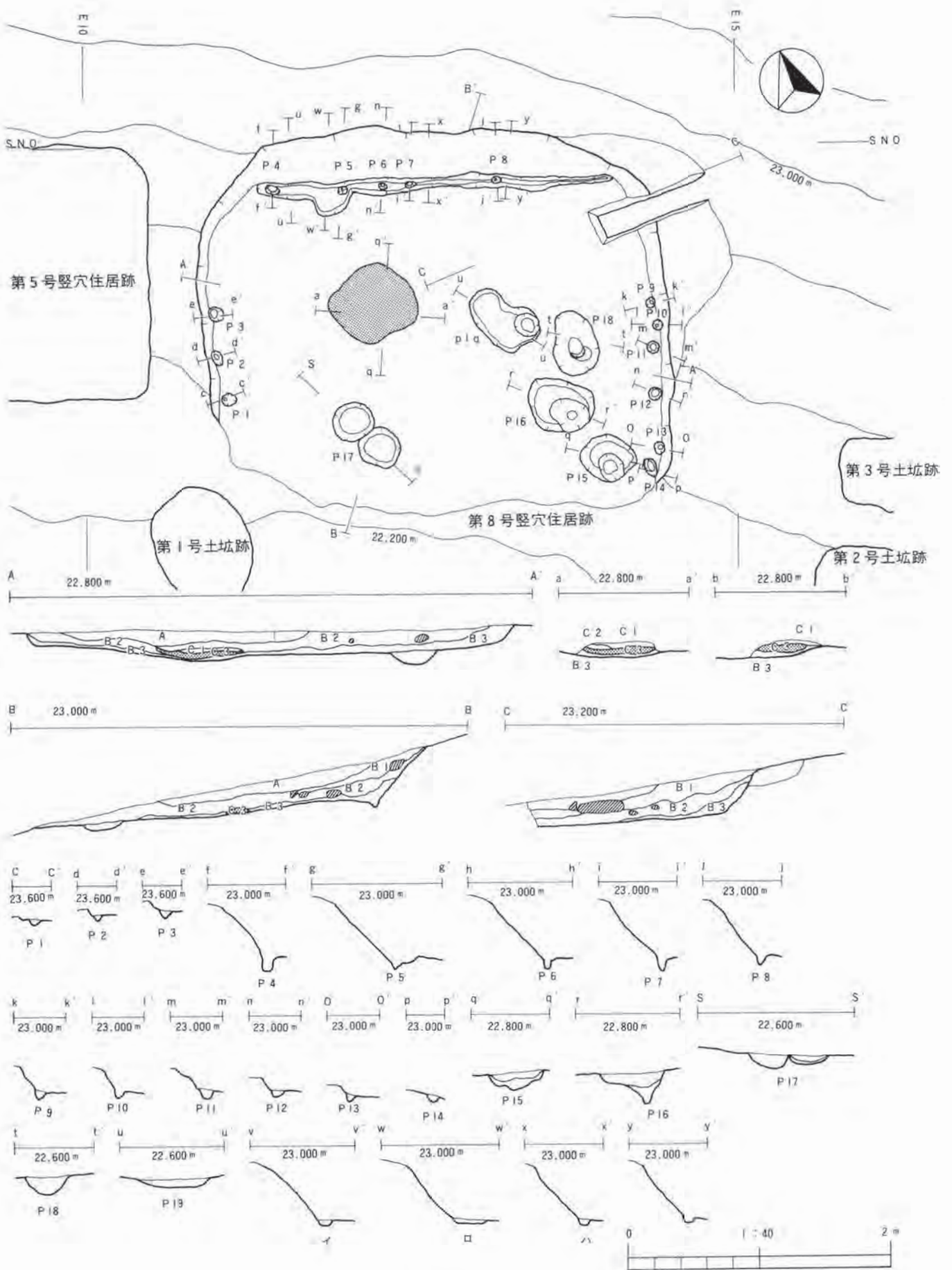
出土遺物はない。



第23図 第7号竖穴住居跡出土遺物③



第24图 第7号竖穴住居跡出土遺物④



第25图 第8号竖穴住居跡

第8号竪穴住居跡（第25、26図 図版9、10、37）

調査区のほぼ中央部に位置し、第9号竪穴住居跡と重複するが、これよりも新しい。

平面形は、隅丸の方形～長方形を呈すものと推定される。

規模は、残存部分で長軸3.62m、短軸2.93m以上をはかる。壁は、東西壁はほぼ直に立ちあがるが、北壁は約45度の角度の傾斜をもち立ちあがる。壁は北壁で0.70mを残す。

埋土は、A層・B層・C層に大別される。A層は、褐色土を基本土とする層で多量の砂が混入し、やわらかくしまりのない層である。B層は、B₁～B₃層に細分できる暗褐色土を主体とする層である。B₁・B₂は、比較的かたくしまっているが、B₃層は、黄褐色の地山ブロックを多く含む。C層は、焼土層（C₃層）である。これは、B₃層の上もしくは、その途中に堆積しており当住居跡が廃棄され埋没する過程において形成されたものと考えられる。焼土は、厚さ0.05mをはかりかたくしまっており、投棄されたものというよりかなり現地性の強いものであるが、当住居跡に伴うものではない。周辺の住居跡内にも炉などの施設は確認できないので、屋外の炉跡の可能性も考えられる。

床面は、ほぼ平坦面だがやや南側～傾斜するようである。

北壁沿いに周溝が存在する。周溝（セクション・イ～ニ）は、床面からの深さが0.05m程の浅いもので、その断面はU字形を呈す。また、周溝内にはP₁～P₈までの小ピットを確認した。これらはほぼ鉛直方向にむいている。

柱穴及び小ピットは、周溝内のP₁～P₈以外にも検出している。P₁～P₃は西壁沿いに、P₄～P₁₁は東壁沿にめぐる小ピットで、P₁₃～P₁₅は、長径0.3～0.5mをはかる円形～だ円形のピットである。

遺物は、土器片を中心に出土しているが、量的には多くない。すべて繊維を含むものだが、その含有量は少ないものが多く胎土中の混入物もあまり多くなく焼成も良好で硬質なものが多い。第28図1は、口縁部の破片。器形的には、体部が外傾し口縁部で直になると考えられるもので、口唇部断面は内割ぎぎみに整形して施文技法6による斜縄文を地文として施文した後、口縁部上端に施文技法5による平行沈線を施し、その間に施文技法9により半截竹管による連続した刻目を配し、口縁部文様帯を形成する。2は、施文技法1による原体圧痕の渦巻文の一部がみられる。3～5は、施文技法3aによる羽状縄文を施文するもので、条の長く太くしつ

重複関係

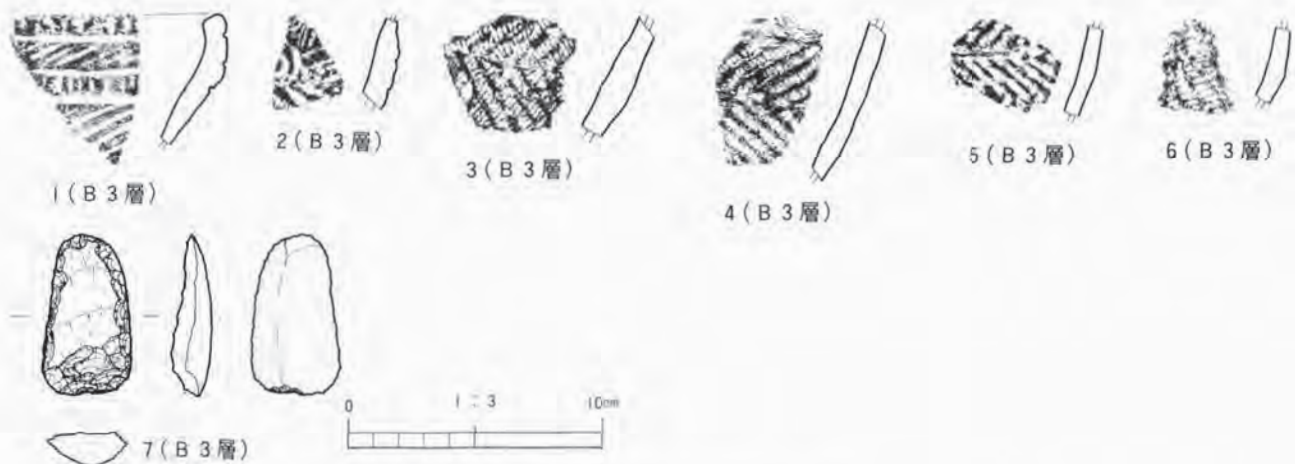
平面形

規模

埋土

床面

土器



第26図 第8号竪穴住居跡出土遺物

かりした原体を用い非常に明瞭に施文される。6は、施文技法6による斜縄文を地文とし、焼成・胎土とも硬質なものである。

石器

7は、打製の小形石斧で背面に自然面を残すもの。刃部が幾分幅広くなる撥形の形態をとるもので、刃部を中心に縁辺部に調整剥離を加えるもの。背面の自然面には手を加えない。

第9号竪穴住居跡（第27～30図、図版10～12、39）

重複関係

調査区のほぼ中央部に位置し、第8号、10号竪穴住居跡と重複する。第8号竪穴住居跡に切られ、第10号竪穴住居跡を切る。

平面形

平面形は、隅丸の長方形～楕円形を呈するものと推定される。

規模

規模は、残存部分で長軸5.15m、短軸2.85m以上をはかる。壁は、やや傾斜をもちそのまま直線に立ちあがる。壁高は、北壁で0.25mを残す。

拡張

当住居跡は新旧2時期の炉跡、床面の高低差及び周溝が3本めぐることなどから、2回～3回にわたり拡張された住居跡の可能性も考えられる。

埋土

埋土は、暗褐色土を基本とするA層から成りA₁～A₄に細分できる。A₁層中には、多量の自然隙がブロック状に混在する。A層は炭化物粒を比較的多く含む。A₁～A₄層とも埋土はかたくしまっている。

床面

床面は、周溝B付近を境に北壁側が幾分高くなるが、高い所、低い所ともそれら自体はほぼ平坦な面であるが、全体的には幾分南側へ傾斜する。

周溝はA～Cの3本存在するが、周溝Aは、細長い溝状のピットによるもので連続する1本の溝とはならない。一番深くしっかりとしたつくりなのは周溝Bで、一番南側に存在する周溝Cは浅い。

柱穴状のピットは、北壁沿いにP₁、P₂を検出したが、どちらも小規模なものである。また、柱穴状のピット以外にP₃を検出したが、これは、床面からの深さ0.10mをはかる浅い皿状のピットで、その性格や使用目的などは不明である。

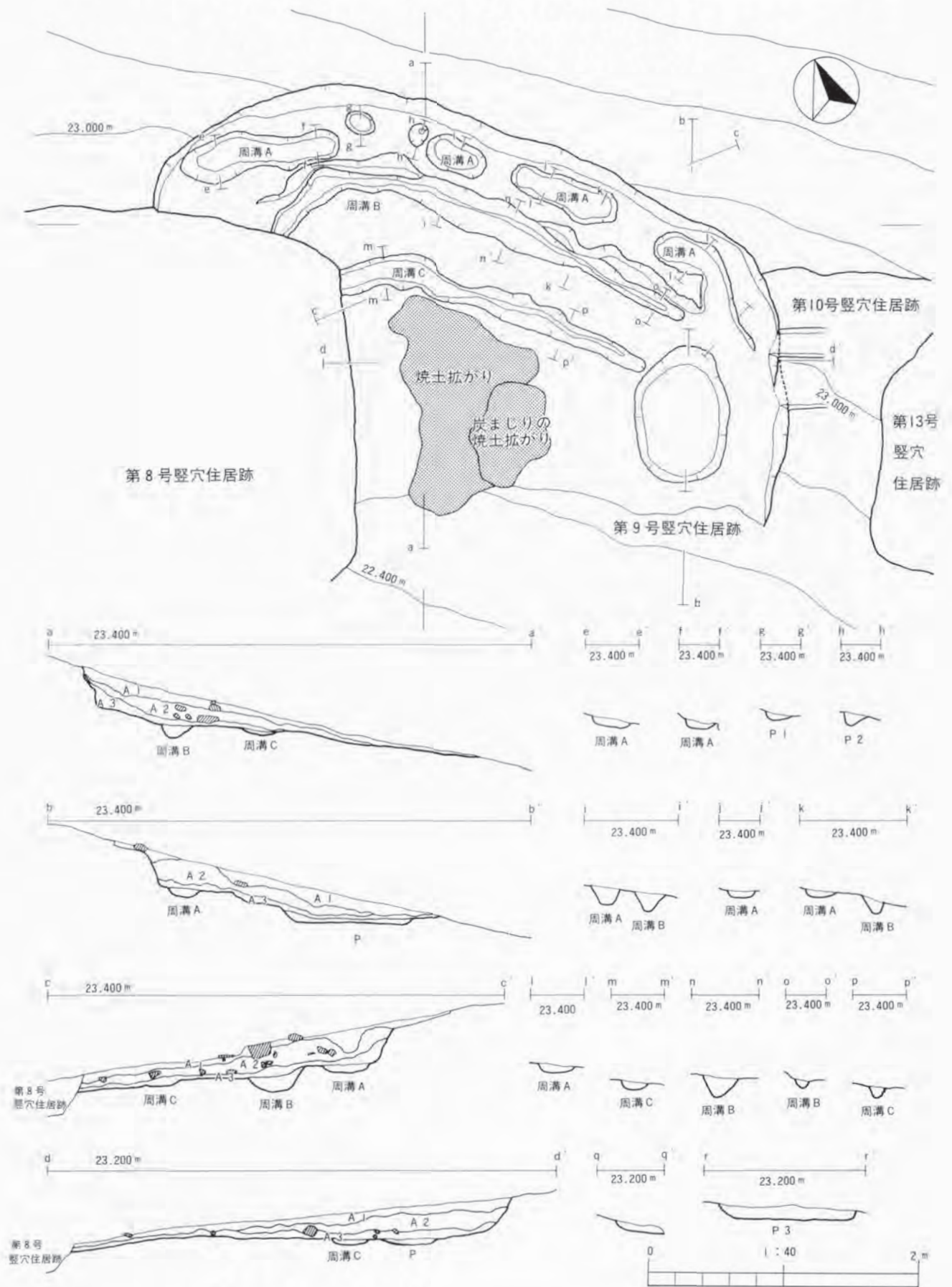
地床炉

炉跡は、住居跡のほぼ中央部に1.5m×0.5mの焼土及び炭まじり焼土の拡がりを検出したが、精査の結果新旧2時期存在する。両期とも地床炉で炉床は比較的良く焼けておりしまっている。新期炉は、床面の北側寄りに位置し焼土の浸透層を掘り下げた最終段階では、1.05×0.55mの不整楕円形の浅い凹みとなる。旧期炉は、新期炉の東南側に位置し焼土の浸透層を掘り下げた最終段階では、0.55×0.35mの不整楕円形の凹みとなる。また、新期炉の焼土下からは、扁平な礫の集石を検出したが、これは、断面a-a'の観察から旧期炉にも切られる古い時期のものである。1.55×1.3mのほぼ方形の浅い掘り込みが伴うがその性格等は不明である。

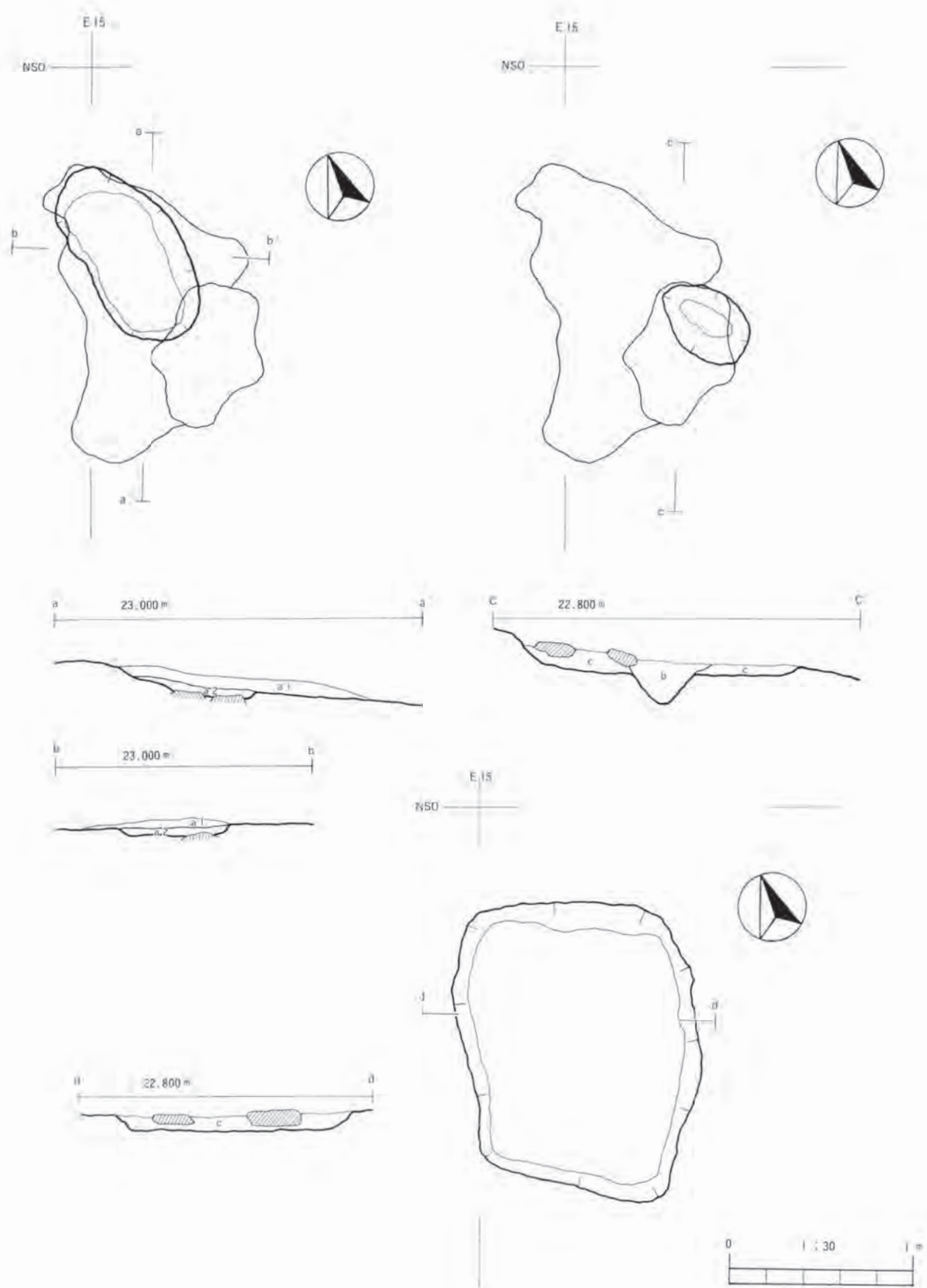
礫の集石

土器

遺物の出土量は、量的には少ないが床面上から出土しているものも何点がある。第29図1は施文技法6aの縄文-縄文の土器片。今回の発掘調査では、縄文-縄文の土器片は数点出土しているがそのうちの1つである。繊維の含有量は少ない。節径0.75cmをはかる太い原体によって施文されており、補修孔と思われる孔がみられる。2は、口縁部～体部上半にかけての破片で、器形的には体部が膨らみ口唇部が外反する逆「く」の字状を呈す小形の鉢と考えられる。口唇部は、丸味をもちそのままぬけており、口縁部上端には施文技法9による斜位に連続する刻目を施し、地文境にも同じように連続する刻目を縦位に施し、その間には刺突文をめぐらし

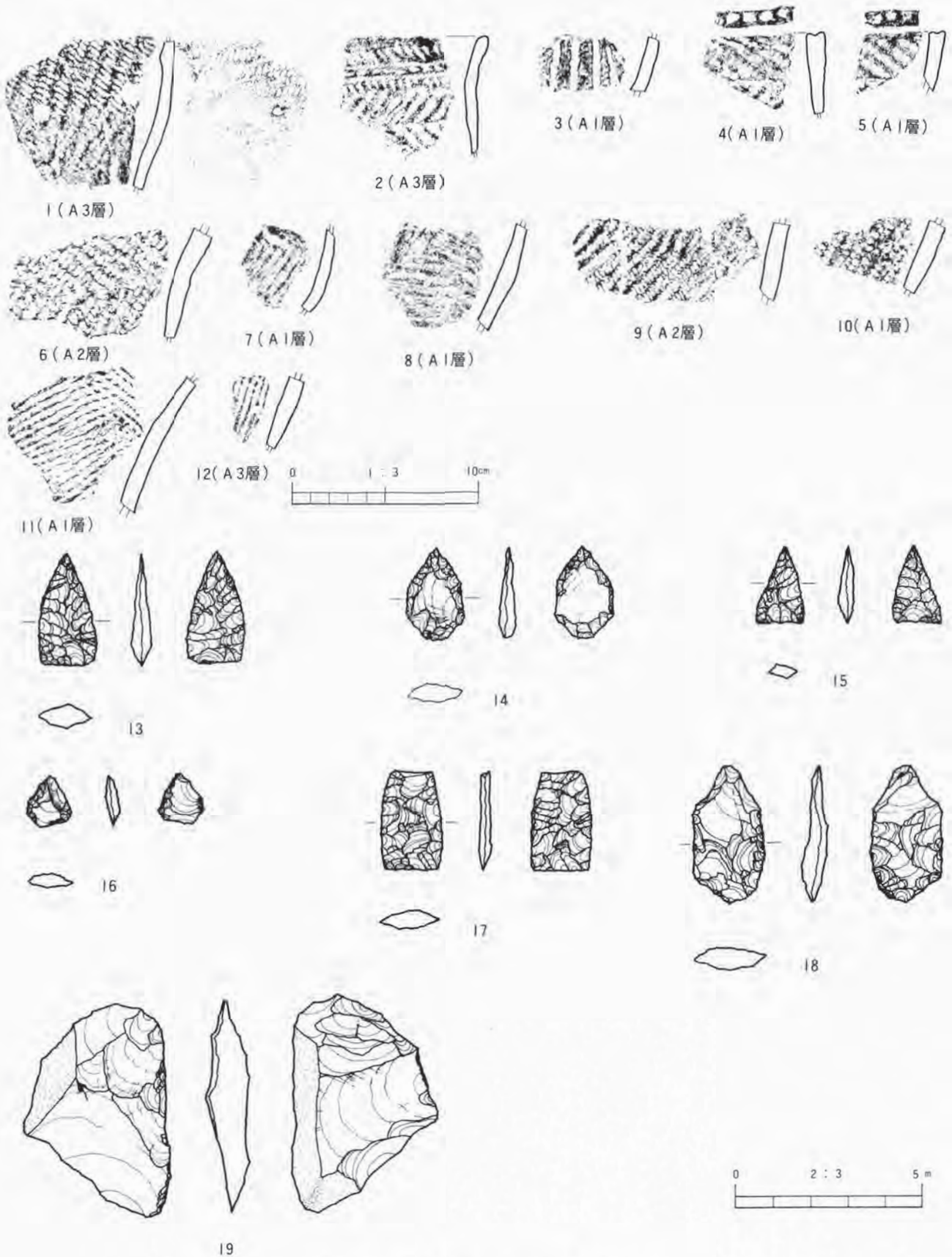


第27図 第9号竪穴住居跡



第28图 第9号竖穴住居跡炉跡

口縁部文様帯を形成している。体部には、施文技法3 aによる羽状縄文を地文として施文する。
 繊維のほかその他の混入物も多く含まれる。3は、施文技法1による原体圧痕文を施こしたも



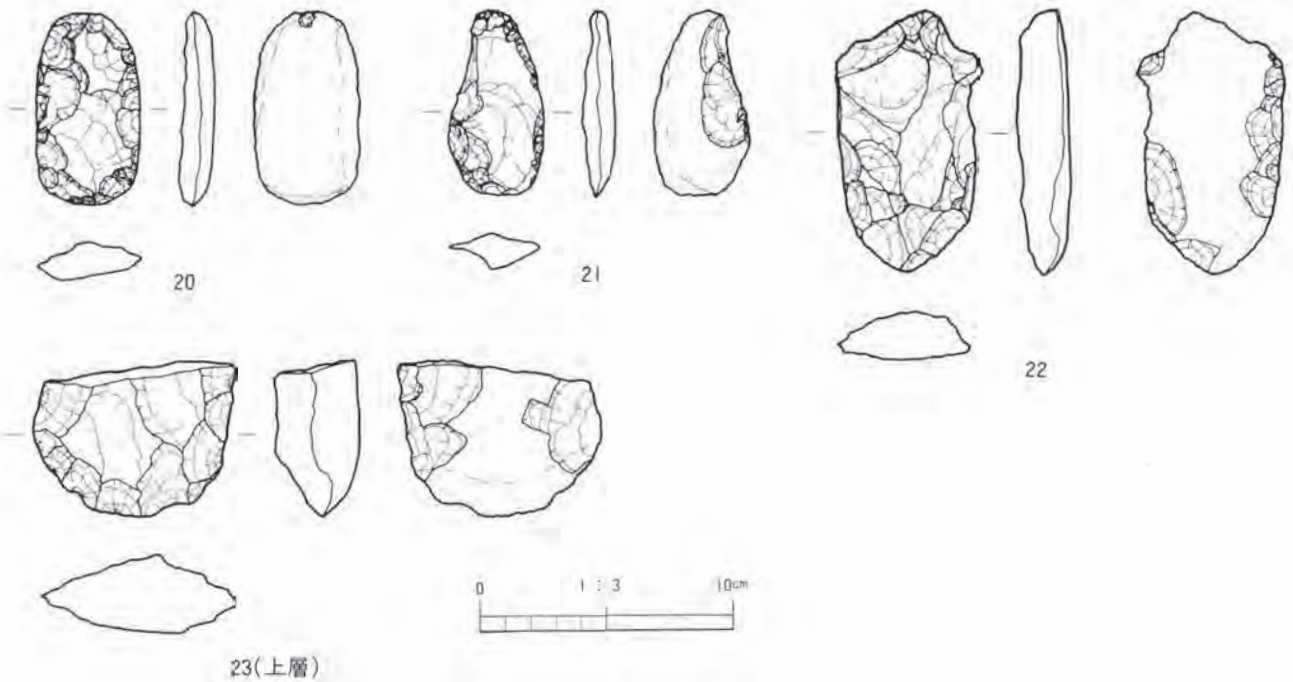
第29図 第9号竪穴住居跡出土遺物①

石器

の。4～8は、いずれも施文技法3aによる羽状縄文を施文したもので、4と5、8と7は各々同一個体の破片である。4、5は、口縁部の破片で口唇部は肥大気味になり頂部は平坦に整形された後に円形の刺突文を施し、口縁部上端より羽状縄文を施文し、節の大きい太めの原体を用いる。6は、厚さ1.25cmをはかる厚手のもの、7、8は焼成が不良のためか磨滅が著しく詳細は不明。9、10は施文技法6による斜縄文を地文にもつもの。10の外面には多量のタール状の炭化物が付着する。11、12は施文技法8による撚糸文を縦から斜位ぎみに施文するもの。

第29図13～19は剥片石器。13～17は石鏃。13は、基部が平基となる二等辺三角形の形態をとるもの。両面とも第1次剥離面が残らないように調整剥離を施す。14は、木の葉状の形態をとるもの。両面ともに中央部に大きく第1次剥離面を残し縁辺部にのみ調整剥離を施す。15は基部が若干凹基気味に作り出すもの。16は、全長1.3cm程の小形なもの。基部はやや丸味をもつ。17は、先端部を欠くが縦長な二等辺三角形の形態をとるものと考えられる。18は、縦長の剥片を利用した削器類と考えられる。19は、石核。

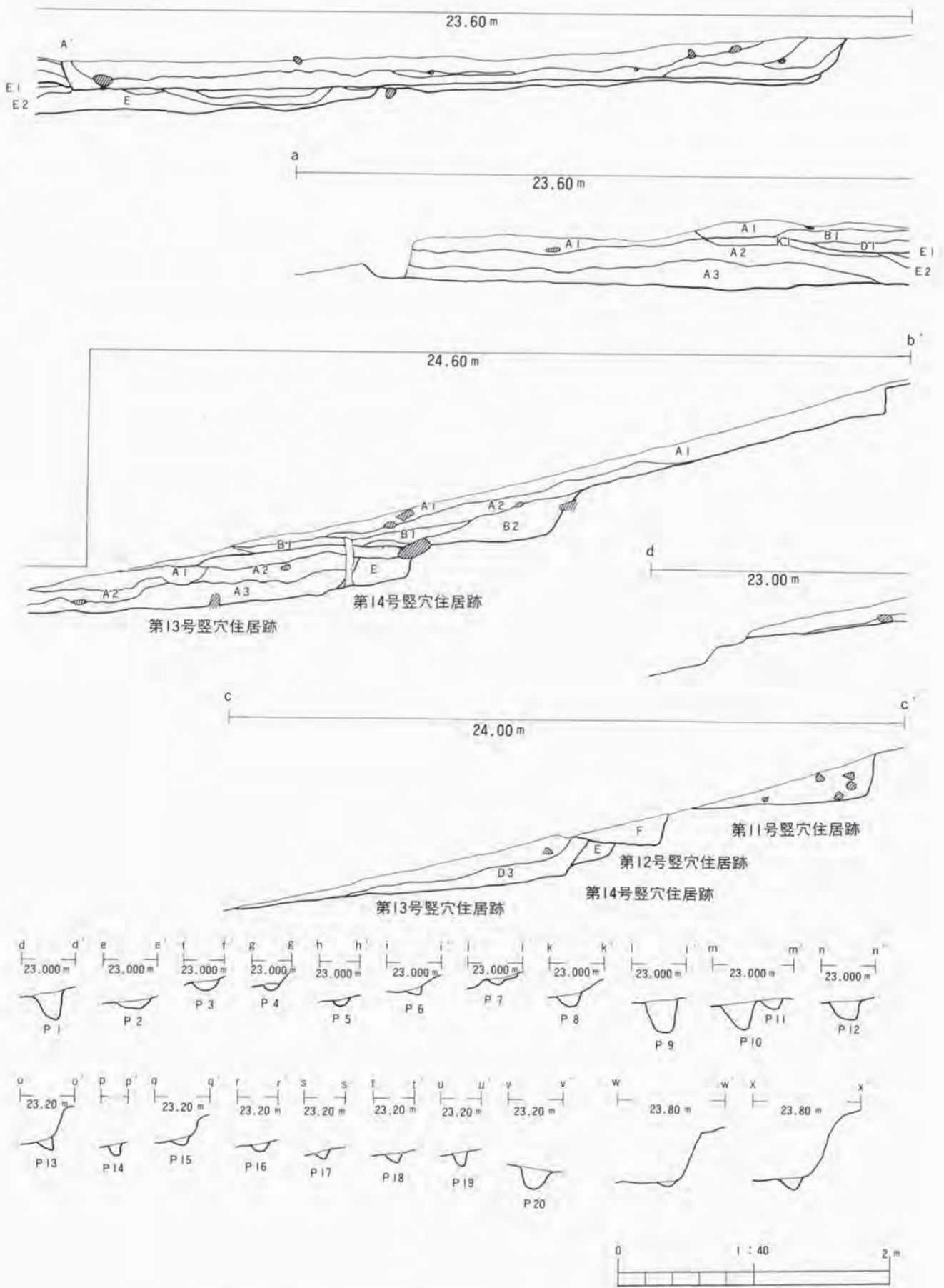
第30図20～23は、打製の石器。いずれも背面に自然面を残す石斧類。20は、楕円形の形態をとるもので、背面はそのまま自然面を残す。21は刃部が幅広くなる撻形の形態をとるもの。背面に残る大きな剥離は欠損によるものと思われる。22は、刃部付近に丁寧な細かい調整の剥離を施し、基部付近は雑な感じの剥離がみられる。23は欠損品。



第30図 第9号竪穴住居跡出土遺物②



第31图 第10号, 12号, 13号, 14号, 15号竖穴住居跡



第32图 第10号, 12号, 13号, 14号, 15号竖穴住居跡断面图

第10号竪穴住居跡（第31、32図 図版13）

- 重複関係** 第9号竪穴住居跡、第13号竪穴住居跡の間に位置するが、両者に切られるため平面形、規模など詳細は不明である。
- 埋土** 埋土は、暗褐色土を基本とする層から成る。遺物などは出土しなかった。
- 床面** 床面は、平坦面で、レベル的には第9号、13号よりも高い。

第12号竪穴住居跡（第31、32図 図版13）

- 重複関係** 第10号、13号、14号と重複するがこれらよりも新しい時期のものである。
- 平面形** 平面形は、残存部分から隅丸の方形～長形状を呈するものと推定される。
- 規模** 規模は、残存部分で長軸1.95m、短軸0.65m以上をはかり、壁はほぼ直に立ちあがり壁高は北壁で0.20mを残す。
- 埋土** 埋土は、黒褐色土を基本とするF層が堆積する。
- 床面** 床面は、東側の方が一段高くなり段差を有すが、それぞれは平坦面である。地山面をそのまま利用している。
- 床面には、炉などや柱穴ピットなどは確認できない。出土遺物はない。

第13号竪穴住居跡（第31～33図 図版13、38）

- 重複関係** 第10号、12号、14号、15号、16号竪穴住居跡と重複する。第10号、12号、14号竪穴住居跡を切り、第15号、16号竪穴住居跡に切られる。
- 平面形** 検出時には、第14号竪穴住居跡として精査を始めたが、土層断面観察時に第13号住居跡、第14号住居跡の重複するものである事が判明したが、東壁部分をすでに掘りすぎていた。平面形は、大むね長方形～方形状を呈するものと推定される。規模は、残存部分で長軸3.10m、短軸1.95m以上をはかる。壁は、ほぼ直に立ちあがり壁高は北壁側で0.20mを残す。
- 埋土** 埋土は、暗褐色土を基本とするD層から成り、D₁～D₃層に細分できる。D₁層はやや砂質の暗い土でD₂、D₃層は、褐色土をブロック状に多く混入する固くやしまりのあるものである。遺物はD₂層から多めに出土している。
- 床面** 床面は、やや南側に傾斜する平坦面で貼床などは認められず地山面をそのまま利用している。
- 柱穴は、当竪穴の範囲内にはP₁～P₆、P₈の7ヶ所存在するがすべて伴うものかは確認できなかった。P₃、P₄、P₅、P₈は北壁際沿いに位置する。P₁は、床面からの深さ0.20mをはかる比較的深さのあるものである。

第14号竪穴住居跡（第31、32、34、35図 図版13、14、38、39）

- 重複関係** 第12号、13号、15号、16号竪穴住居跡と重複するが、すでに切られ一番古い時期のもの。
- 平面形** 平面形は、残存する北壁と東壁の一部から長楕円形状を呈するものと推定される。規模は、残存部分で長軸7.70m以上、短軸4.00m以上をはかる大形のものである。壁は、ほぼ直に立ちあがり壁高は、北壁で0.15mを残す。
- 埋土** 埋土は、E層から成るが、第13号竪穴住居跡埋土のA層よりは明るい暗褐色土を基本とし、褐色土のブロックを混入する。固くて比較的しまりがある。

床面は、多少凸凹が認められる平坦な面である。地山面をそのまま利用しているが、降雪と降霜のため十分な精査ができなかった。

床面

床面上には、かなりの広範囲にわたり2ヶ所の焼土の拡がり認められたが、前述の理由のため十分な精査ができなかった。第16号、17号竪穴住居跡などと同様な地床炉の可能性も考えられる。

地床炉

柱穴及びピットは、床面上にP₇、P₉～P₂₀までを確認した。P₇、P₁₃、P₁₆、P₁₈は壁際沿いに存在する小杭状のピットである。P₉、P₁₀、P₁₂、P₂₀は、長径0.30m前後の楕円形～円形状のプランを呈し、床面から深さ0.25～0.15mをはかるピットである。これらのピットは、いずれも中央部付近にあるものだが、降雪及び降霜のためかなり床面があれため東側など他の部分にも柱穴状のピットは存在していたものと考えられる。

第15号竪穴住居跡（第31、32、36図 図版13、14、37）

第13号、14号、16号竪穴住居跡と重複するが、第13号、14号竪穴住居跡より新しく第16号竪穴住居跡に切られる古いものである。

重複関係

検出の段階では第14号竪穴住居跡単独の竪穴として精査に入ったが、断面観察によりこれが第14号と15号竪穴の重複するものと判明したため、大半の部分はすでに壊してしまった。

平面形、規模は、断面図をもとに推定すれば、平面形はほぼ隅丸の長方形～楕円形状を呈し、規模は短軸2.70m、長軸3.50mをはかる。壁は、約45度弱の傾斜で立ちあがり壁高は北壁で0.20mを残す。

平面形
規模

埋土は、A層、B層、C層、K層に分けられる。A層は、A₁、A₂層に細分される。A₁層は、暗褐色の粘質土を基本土とし褐色土塊を混入する。固くて比較的しまっている。A₂層は、少し砂っぽくやや明るい暗褐色土を基本土とし、暗褐色土塊を含む。固くて比較的しまっている。B層は、B₁・B₂層に細分される。B₁層は、暗褐色の砂質土を基本土とし褐色土を粒塊状に混入する。非常に固く比較的しまっている。B₂層は、暗褐色土を基本土とし粘性のあるやや暗い暗褐色土を塊状に混入する。固くて比較的しまっている。C層は、焼土層。黄色が強い暗褐色土に焼土を塊状に混入する。比較的固さはあるがあまりしまりが無い。K層は、構築土層。粘性のある褐色土を基本土とし暗褐色土を塊状に混入する。固くて比較的しまっている。

埋土

床面は、平坦面で構築されたものである。固くて比較的しまっている。

床面

炉は、構築土層（K層）に焼土層（C層）がのこっており、これが地床炉になる。

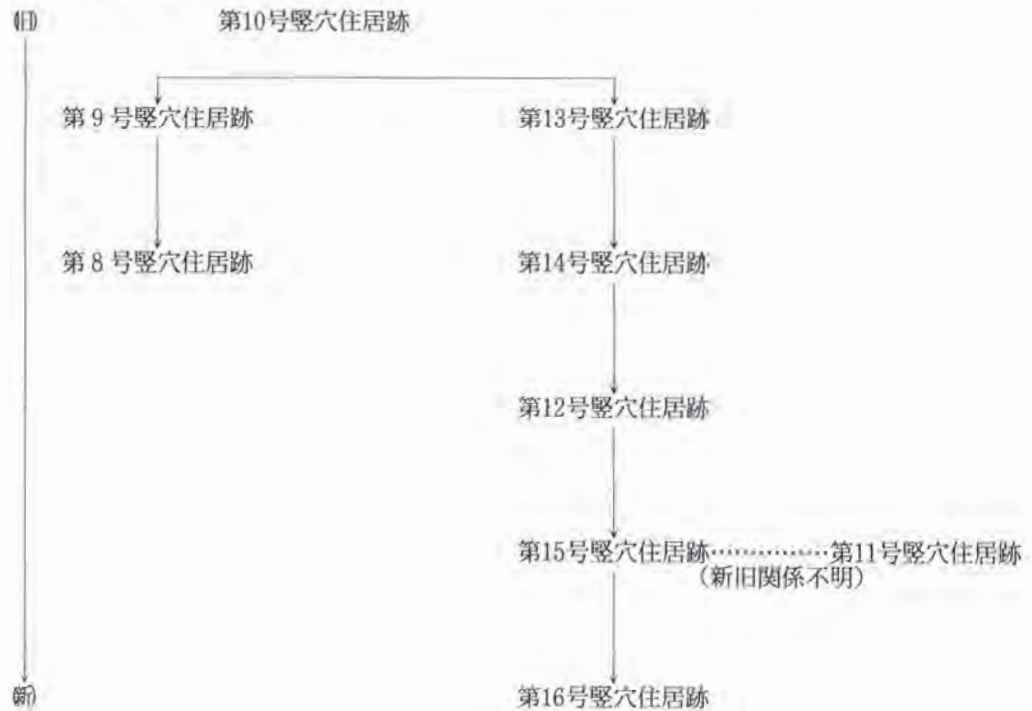
地床炉

柱穴状のピットなどは、確認できなかった。

9棟の重複

今回の調査では、調査区の中央部～東辺部にかけて存在する第8号～16号竪穴住居跡までの9棟が重複関係にあり、煩雑なためここで整理する。土層断面の切り合い関係と各竪穴から出土した土器の新旧関係とは必ずしも一致しない面もある。これは、あまりにも狭い範囲内に密集することや極めて短期間の重複によることなどの影響と考えられる。以下、第8号～16号竪穴住居跡の新旧関係を土層断面観察の結果に基づくと以下の通りとなる。

◀新旧関係▶



以上のうち、第11号竪穴住居跡と第15号竪穴住居跡の新旧関係は不明である。また、第9号10号と第13号～16号竪穴住居跡は、直接、切り合っている訳ではないので新旧は不明。

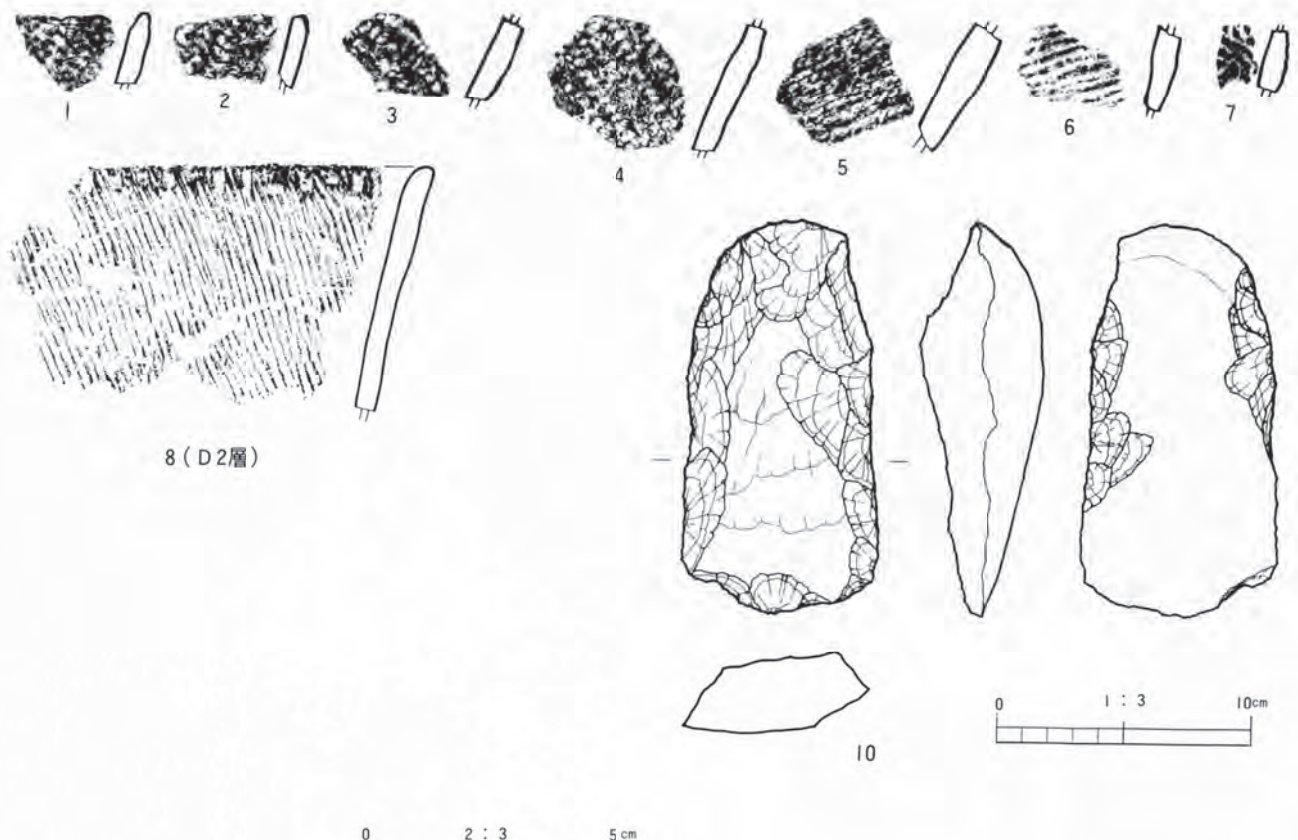
第13号竪穴住居跡から出土した遺物は、D層を中心に出土した。第33図1～4は施文技法6による斜縄文を地文にもつもので、いずれも比較的太い原体を用いて施文する。1、2は口縁部の破片。1の口唇部は、内外から薄く狭まりそのまま抜ける。外面の一部にタール状の炭化物が付着する。2は、口唇部を平坦に削り整形しているもので、胎土中には細かい繊維や白色鉱物、石英砂などの混入物が多量に含まれる。5～8は施文技法8による撚糸文を縦～斜位に施文するもの。5は、厚さ1.6cmをはかる厚手のもので、胎土中の繊維の含有量は少ないが他の鉱物などの混入物が多くみられる。6、7の胎土中には、金雲母が含まれる。8は、口縁部～体部にかけての大破片。口唇部断面は、やや内削ぎとなり頂部はほぼ平坦となる。口縁部上端から施文技法8の撚糸文を地文として施文した上から口縁部上端には、割り箸状の工具？（半截竹管の凸面？）を強めに押しつけたような刻目を施している。口縁部内外面にはタール状の炭化物の付着が認められ、胎土中の繊維の含有量や他の鉱物などの混入物は少なく胎土はち密である。裏面は多少凸凹はあるが、横ナデによりなめらかに調整されている。

第13号竪穴住居跡出土土器

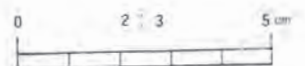
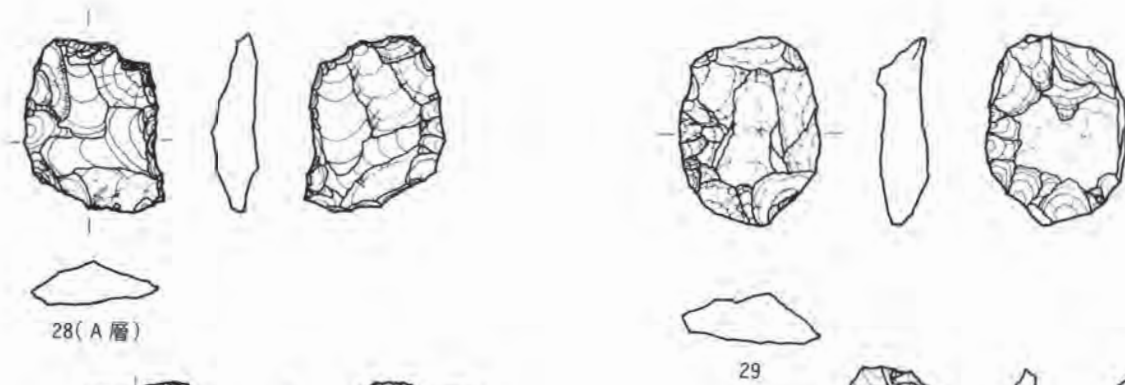
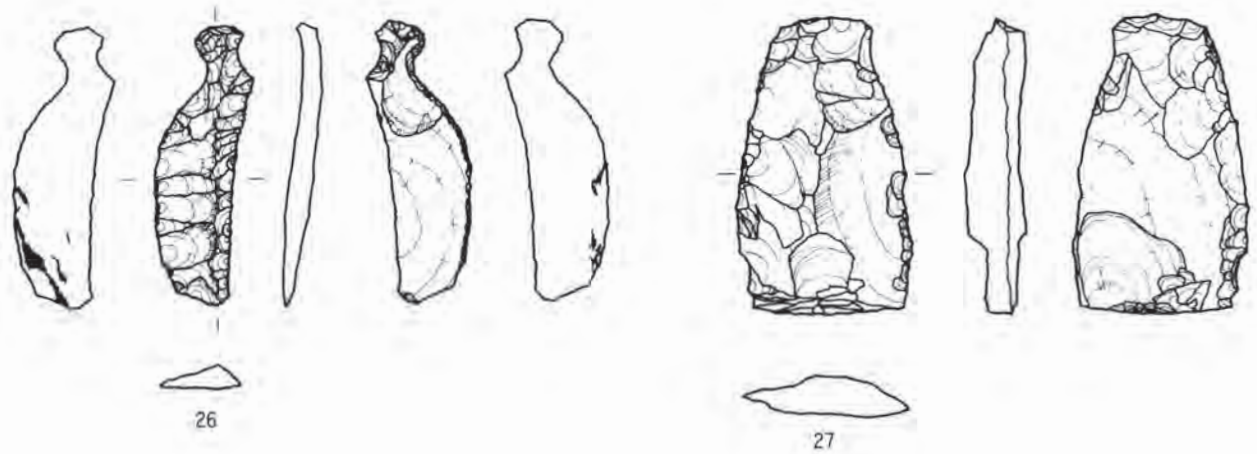
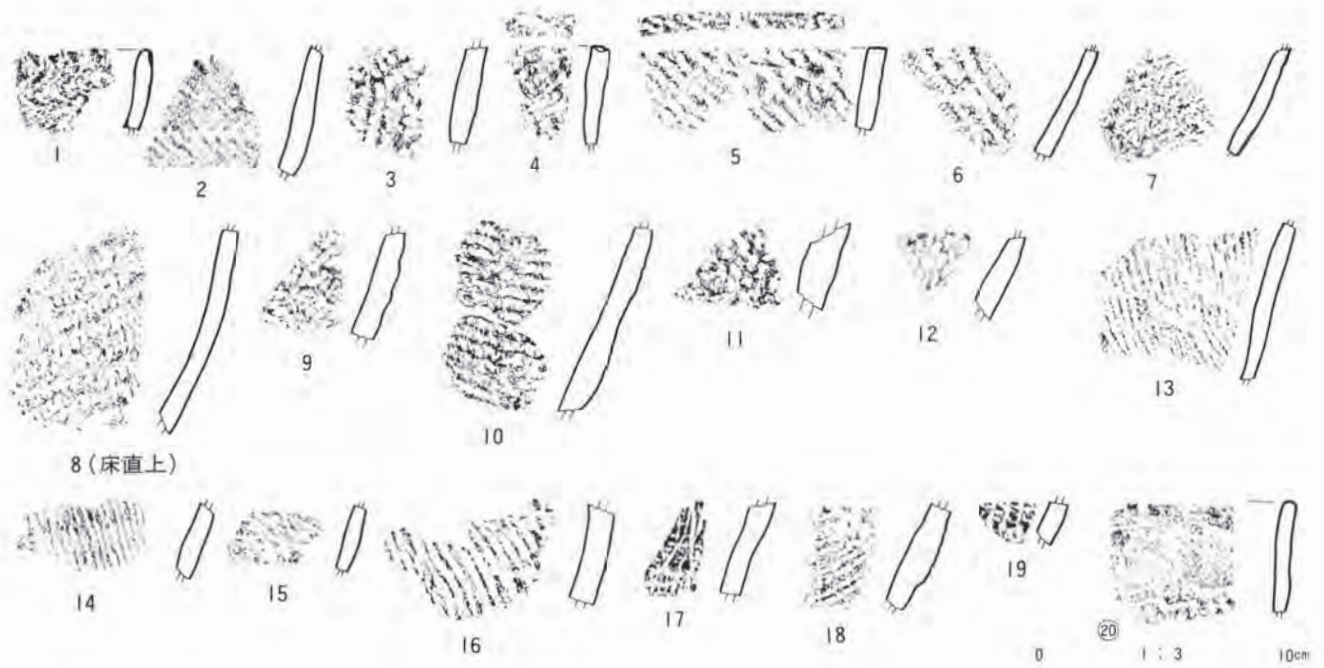
9は、剥片石器の欠損品。石べら状石器の先端部片と思われる。背面は大きく第1次剥離面を大きく残すもので縁辺部に細かい調整剥離を施し両刃状に刃部をつくるもの。

第13号竪穴住居跡出土石器

10は、裏面に自然面を残す打製の石斧。大形で刃部幅が広がる撥形の形態を呈するもの。両側縁部を中心に調整の剥離を施し、下端の刃部は薄く鋭利に作る。背面は両側縁部に剥離が認められるが、自然面を大きく残す。

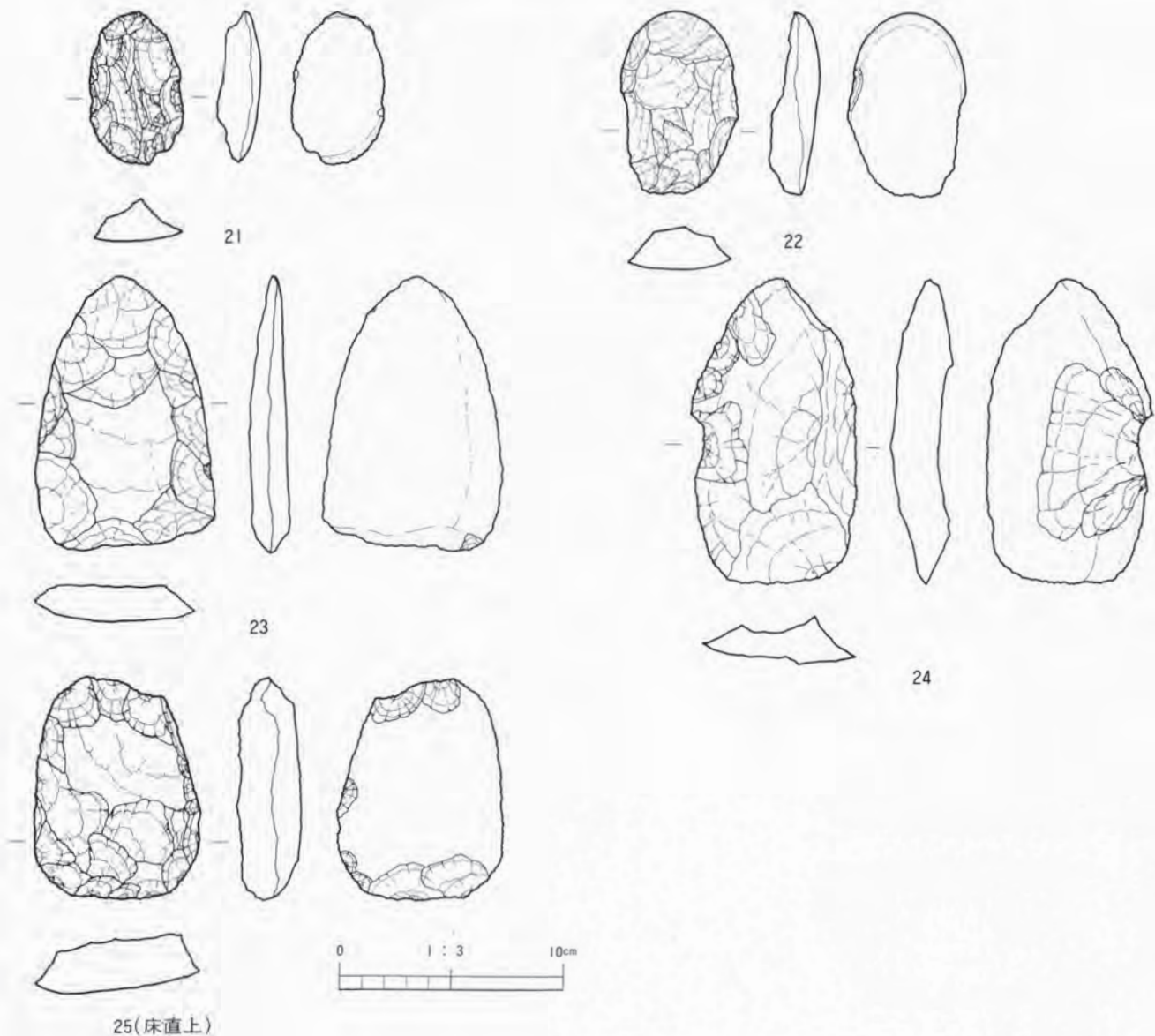


第33図 第13号竪穴住居跡出土遺物



第34図 第14号竪穴住居跡出土遺物①

第14号竪穴住居跡から出土した遺物の量はあまり多くない。第34図1～20の土器片のうち20だけには繊維を含まないものである。1～3は、羽状縄文を施文するもの。1は、口縁部片で口縁部上端から施文技法2により結束する羽状縄文を施文したのちに、口縁部上端に刻目を施す。2も1と同様に施文技法2による羽状縄文で、ともに短かく細かい原体を用いる。4～10は施文技法6による斜縄文を地文にもつもの。4、5は口縁部片でともに口唇部頂部は平坦に整形された後、4は原体圧痕文、5は縄文を回転させている。5は、口縁部上端に条の短い縄文原体の圧痕文?がめぐる。4、5ともに胎土中の繊維の含有量が多い。10は、縄文が斜位というよりも横に走行する?もの。11、12は施文技法7による縄文を施文したもの。11は厚さ1.4cmをはかる比較的厚手のもので外面にタール状の炭化物が付着する。12の胎土中には金雲母を含む。13～19は施文技法8による撚糸文を施文したもの。13、14、16は斜位に施文する。19は、地文に斜縄文を施文した上に撚糸文を施している。20は、繊維を含まないもので口縁部が無文となり頸部～体部にかけての部分に施文技法10による横位の不整撚糸文を施文する。



第35図 第14号竪穴住居跡出土遺物②

26～31は剥片石器。26は、縦形の石匙で、一方の側縁部が湾曲する形態をとる。背面には大きく第一次剥離面を残し湾曲する方にのみ細かい剥離がみられる。また、湾曲する刃部下端にはアスファルト？状の付着物が認められる。27は、長方形の剥片を利用して作られた削器類で両側縁を刃部にしている。28、29は楕円形状の剥片を利用した削器搔器類。30は、欠損品のため判断しかねるが、石匙の刃部に相当する部分と思われる。

35図21～25は打製の石器。いずれも背面に自然面を残す石斧。21、22は小形のものである。背面の自然面21～23は背面には手を加えていない。24は、背面に大きな剥離を残す。

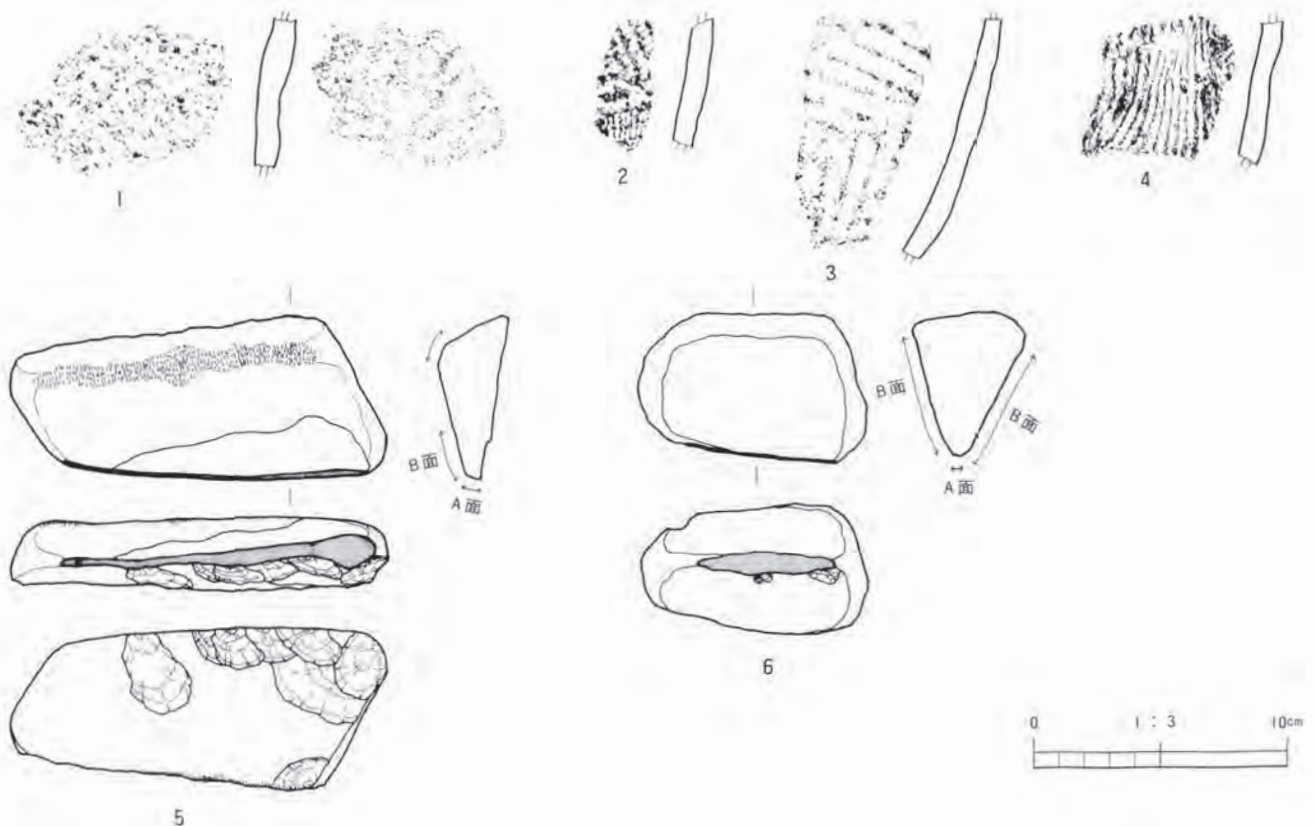
第15号竪穴住居跡から出土した遺物量は少ない。

第15号竪穴住居跡出土土器

第36図1～4は、すべて繊維を含む土器。1は、施文技法6 aの表裏両面に縄文を施文する縄文一縄文の土器片。太く粗い縄文を施文する。繊維の含有量は少ないが、胎土中には黒色鉱物を多量に含み、ち密さを欠く。焼成は比較的良くて硬質な感じがする。2、3は羽状縄文を施文したもの。2は、施文技法3 aの結束のない羽状縄文を施文する。石英砂を比較的多く含む。3は、施文技法3 aの羽状縄文を施文したもの。節径の大きい太い原体を使用している。細かい繊維を比較的多く含み、胎土中には極く細かい白色鉱物や石英砂を含む。4は、施文技法8の撚糸文を縦位に施文するもの。繊維の含有量は少なく、ほかの混入物も少ない。器内面にはタール状の炭化物が多量に付着する。

第15号竪穴住居跡出土石器

5、6は、断面三角形の特殊磨石。5は、長軸方向に半分に分かれたもの。機能磨面と反対側の面には敲打痕がみられ敲石として再利用されたものと考えられる。6は、小形のもので、調整磨面がかなり幅広い。



第36図 第15号竪穴住居跡出土遺物

第11号竪穴住居跡（第37、38図 図版12）

調査区のほぼ中央部に位置し、南東隅で第15号竪穴住居跡と重複するが、新旧関係は確認できなかった。

平面形は、ほぼ長方形～方形を呈するものと推定される。

平面形

規模は、残存部で長軸2.36m、短軸1.42m以上をはかる。壁高は、北壁で0.2mを残す。

規模

埋土は、A層とB層に分けられる。A層は、A₁～A₃層に細分される。A層は、暗褐色の砂質土を基本土とし暗い暗褐色土を塊状に混入する。固くてしまりのあまりない層である。A₂層は当竪穴埋土のうち一番暗い土で暗い暗褐色土の砂質土を基本土とし暗い褐色土を塊状に少量含む。固くてあまりしまりがない。A₃層は、暗褐色土の砂質土を基本土とし、褐色土や黒褐色土を塊粒状に含みA₁層に似る。固さはあるが、しまりはほとんどない。B層は、黒褐色の粘質土を基本土とし、暗褐色土を塊状に混入する。壁際の床面付近に堆積するもので、非常に多くの炭化物粒を含む。固さもしまりもあまり感じられない。

埋土

床面は、ほぼ平坦面で地山面をそのまま利用する。

床面

炉跡や柱穴状のピットなどは、床面上には確認できなかった。



第37図 第11号竪穴住居跡

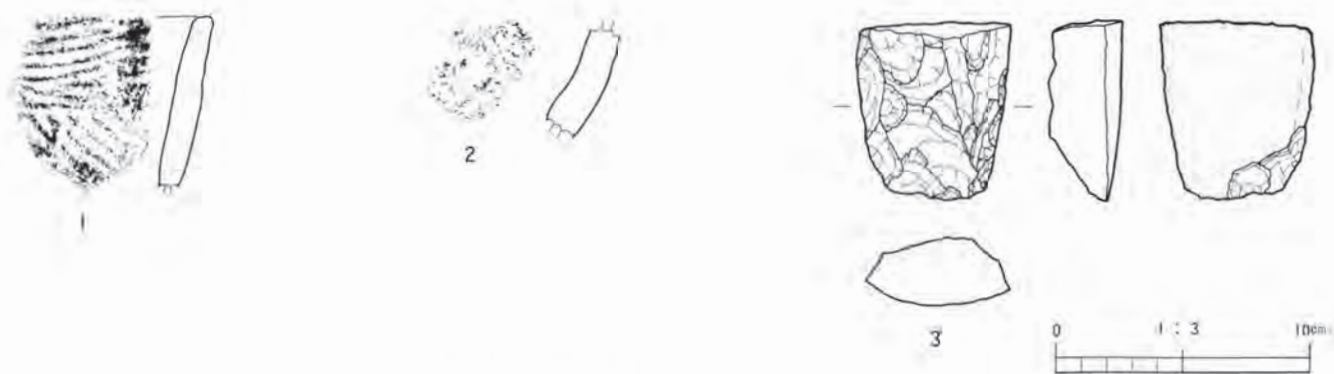
第11号竪穴住居跡から出土した遺物は、量的には少ない。

土器

第38図1、2は、繊維を含む土器片。1は、口縁部の破片で、口唇部の頂部は平坦に整形される。口縁部上端から口縁部にかけては、施文技法6 dの横走る縄文を施文し口縁部文様帯を形成する。体部には、施文技法6 bによる単節の斜縄文を施文するもの。器厚は、1.1cmと比較的厚手である。胎土中には、繊維以外の混入物が多く、胎土のち密さを欠く。2は、かなり底部に近い破片で、器厚1.5cmとかなり厚い。底部の形態は、尖底～丸底風を呈するものと推定される。体部には、施文技法6 bによる単節の斜縄文を施文する。縄文は、節径の比較的大粒な原体を用いて施文されたもので、拓影図の下半部分は無文部である。胎土中の繊維の含有量は比較的多く、胎土中の混入物も多くなる。焼成もあまり良好とはいえ脆弱な感じがする。

石器

3は、打製の石器で、体部の上半から基部を欠く。形態的には、側縁部が直線的となり長方形形状を呈するものと推定される。正面は、側縁部～刃部の縁辺部を中心に調整の剥離を施しており断面が台形状を呈する。背面の自然面は、下端の刃部の一部に大まかな剥離がみられるが、これは、使用時によるものと考えられるもので、背面の自然面自体には剥離を施さないものと考えられる。



第38図 第11号竪穴住居跡出土遺物

第16号竪穴住居跡（第39～43図 図版14、15、40）

第14号、15号竪穴住居跡と重複するが、これらよりも新しいものである。

平面形は、隅丸長方形～長楕円形状を呈するものと推定されるが、北東隅が幾分張り出す。規模は、残存部分で長軸5.75m、短軸2.82m以上をはかる。壁は、東西壁はほぼ直に北壁は約45度弱の角度で立ちあがり、壁高は北壁で0.4mを残す。

埋土は、A～E層に大別できる。A層は、褐色土を基本とする砂質土層で暗褐色土塊や、やや明るい褐色土塊を含む。B層は、埋土中最も暗い暗褐色土層でB₁、B₂層に細分できる。B₁層は褐色土塊を含み固くしまっている。B₂層は、中央部付近にのみ薄く堆積するもので、炭化物粒を含み固く比較的しまっている。C層は、竪穴床面のほぼ全域を覆う明るい褐色土を基本とするやや粘土質土層である。D層は、東壁付近に堆積する褐色土を基本とする砂質土層で、固く比較的しまっている。E層は、明るい褐色土層で、固くしまっている。壁際にのみ堆積しており壁崩壊土層と考えられる。

床面は、大むね平坦な面で貼床などはみられない。また、北東隅には一段高い面が存在し、P₃が位置する。

周溝は、北西壁際に検出したが、連続せず西側と東側の2つの溝状のピットに分かれる。どちらも床面からの深さが0.04～0.07mと浅い。西側の方の底面は径が0.10m強の小規模なピット、P₆が存在する。

柱穴状のピットは、P₁～P₃の3ヶ所を検出したが、いずれも明瞭な柱アタリ痕が確認できず柱穴となるかは判断できなかった。

炉跡は、地床炉で床面上に焼土の拡がりを2ヶ所検出した。どちらも現地性の焼土で第40図は、焼土の浸透層を掘りあげた後の浅い皿状のピットである。西側のものは、かなり壁際近くに位置する。

遺物はE層を除き各層から出土しているがC層からの出土が幾分多い。

第41図1は、施文技法6 aの内外面に縄文を施文するもの。口唇部の頂部は平坦に整形される。焼成は非常に良く、胎土もち密で硬質のものである。器外面には多量のタール状の炭化物の付着が認められる。2は、口縁部の突起部分の破片で施文技法1による渦巻状の原体圧痕文が施文される。3、4は施文技法3 aによる羽状縄文が施文されるもの。どちらも、太くて節径の大きな原体を用い非常に明瞭な施文となっている。5～14、20は、施文技法6による斜縄文を施文にもつもの。6は、3、4の縄文と非常に類似するもので羽状縄文の一部の可能性がある。7は、焼成が良く胎土もしまった感じで非常に硬質なもので、縄文は、太くて粗いものである。9、10は口縁部の破片で、9は、口唇部が薄くなり頂部には刻目が施されている。10は、口唇部の頂部を平坦に整形しており、地文の縄文は太くて粗い。厚さ0.7cmと比較的薄手である。12は、細い原体の縄文でくすべ色を呈す非常に焼成の良いものである。15～19、21、22は、施文技法8の撚糸文を施文したものの。15は口縁部の破片で、器形的には「く」の字状を呈すものである。口唇部の頂部は平坦に整形され、口唇部に対して平行に原体圧痕文を施す。口縁部上端からは縦位の撚糸文を施文している。胎土中の繊維は少ないが、白色鉱物を多量に混入する。16、17、19は同一個体、もしくは類似するもので比較的太い原体を使用している。胎土中の混入物も非常に多く、焼成のあまり良くない脆弱な厚手のものである。18は、整然と

重複関係

平面形

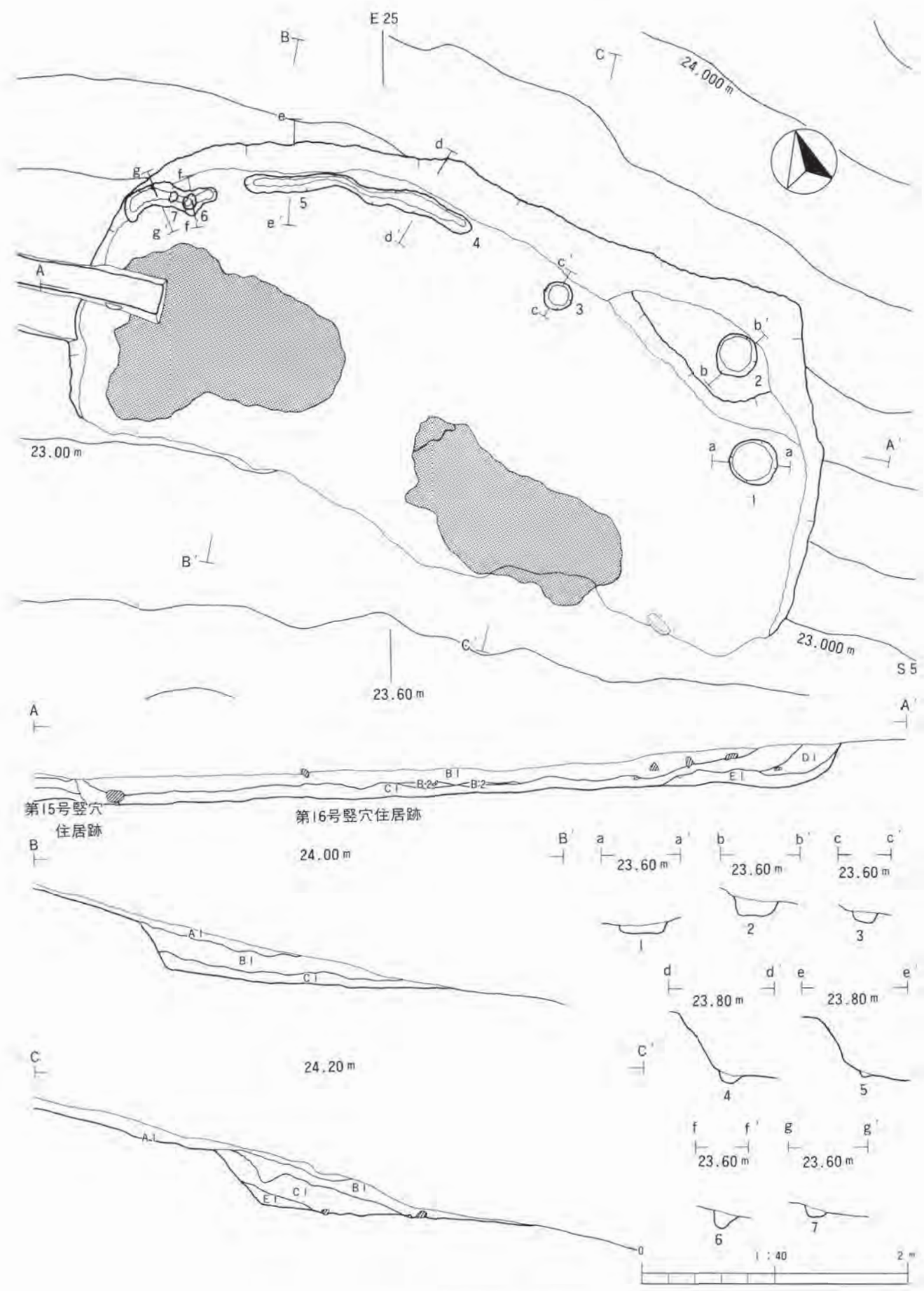
規模

埋土

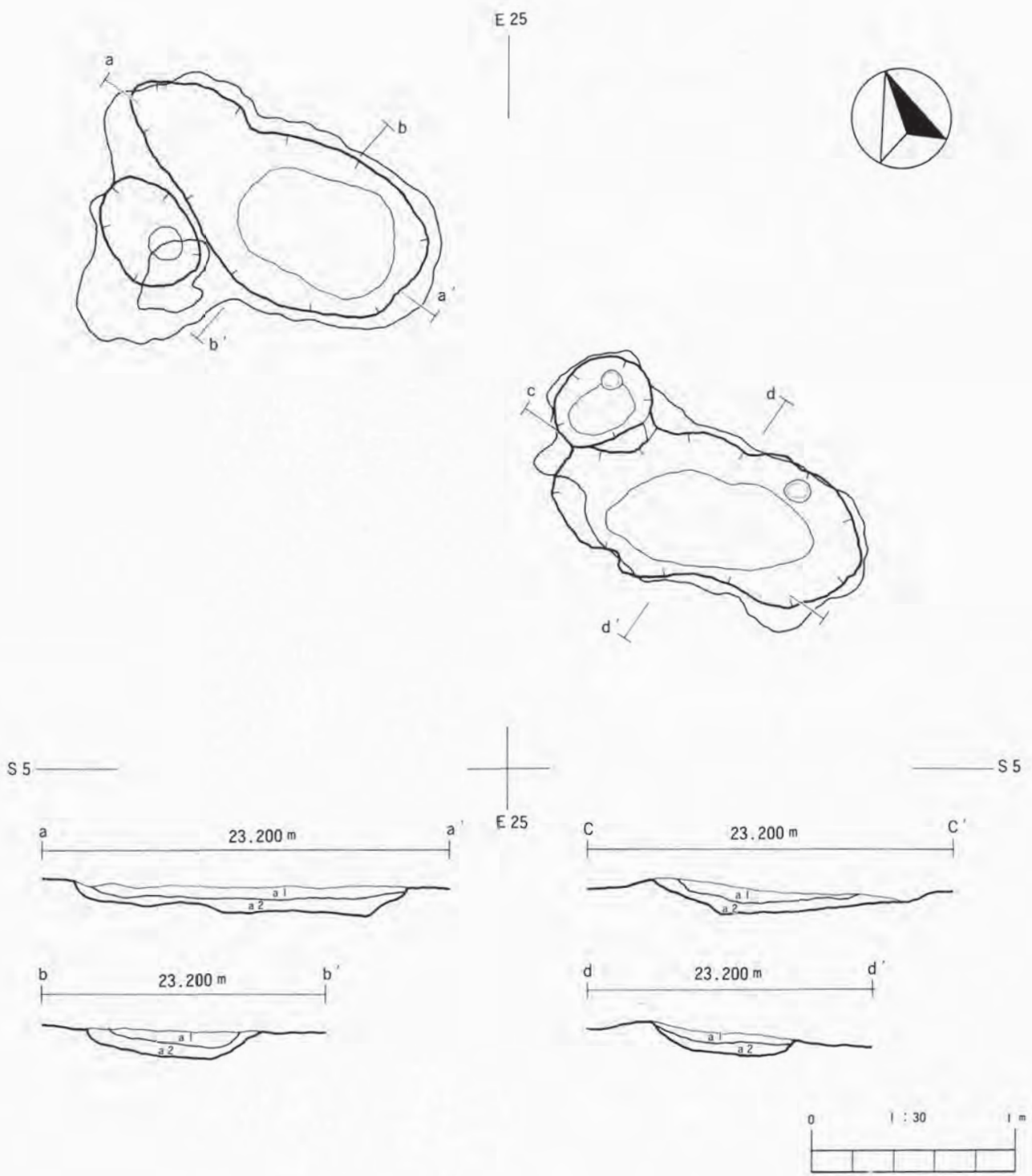
床面

地床炉

土器



第39图 第16号竖穴住居跡

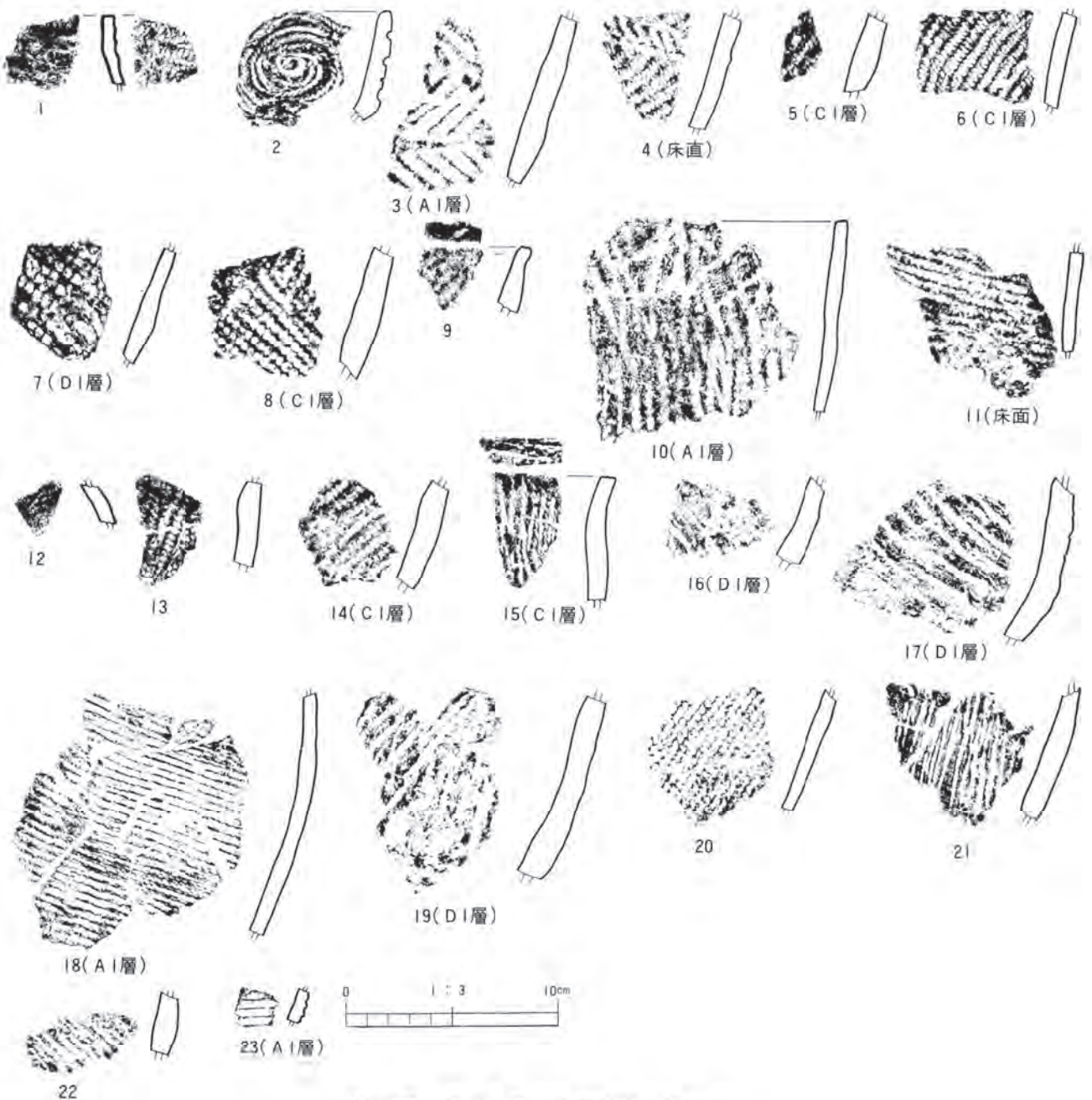


第40図 第16号竖穴住居跡炉跡

した撚糸文で斜位に施文する。厚さ0.8cmと撚糸文を施文したものの中では比較的薄手である。胎土中の繊維の含有量が多いが、焼成は良く硬い感じのするものである。21は、細い原体を使用するもので胎土中の繊維以外の混入物は少ない。23は、極小片であるが、施文技法5の平行沈線文を施文する。沈線間の山になる部分の断面は三角形を呈する。

石器

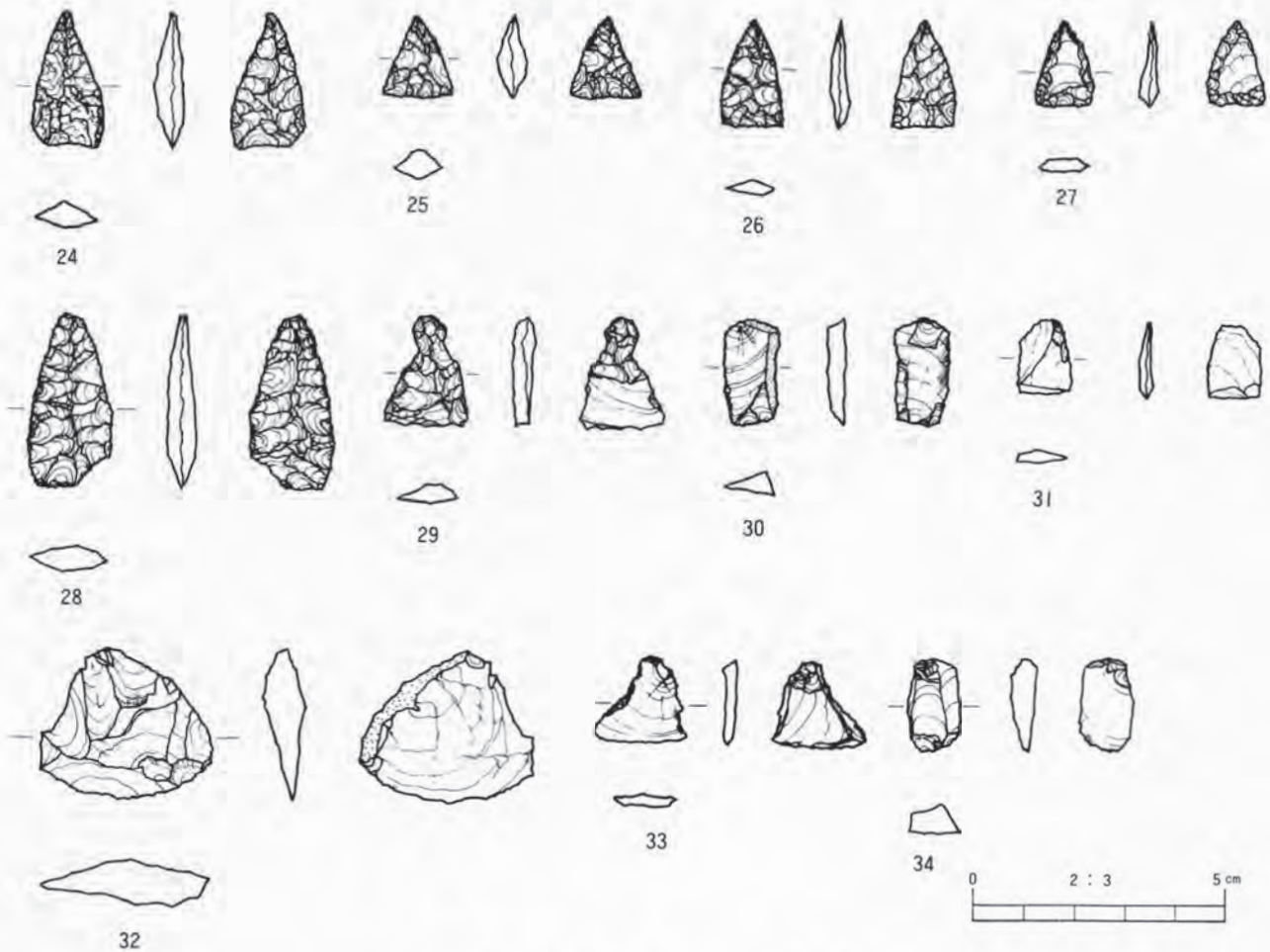
第42図24~34は剥片石器。24~28は石鏃。24は、左右非対称の縦長三角形の形態で基部はわずかに凹基ぎみとなる。両面ともに剥離調整を施し第1次剥離面を残さない。25は、基部は平基となる正三角形の形態となるもの。26は、25と同じように左右非対称な三角形の形態をとり、基部の一部を欠くものだが、縦長の二等辺三角形の形態となる。全長3.5cm以上の大形のもの。両面ともに丁寧に剥離調整を施し第1次剥離面は残らない。29は、下半部を欠く石匙の欠損品。つまみ部は両面ともに細かく調整剥離を施す。30、31は長方形状、32、33は三



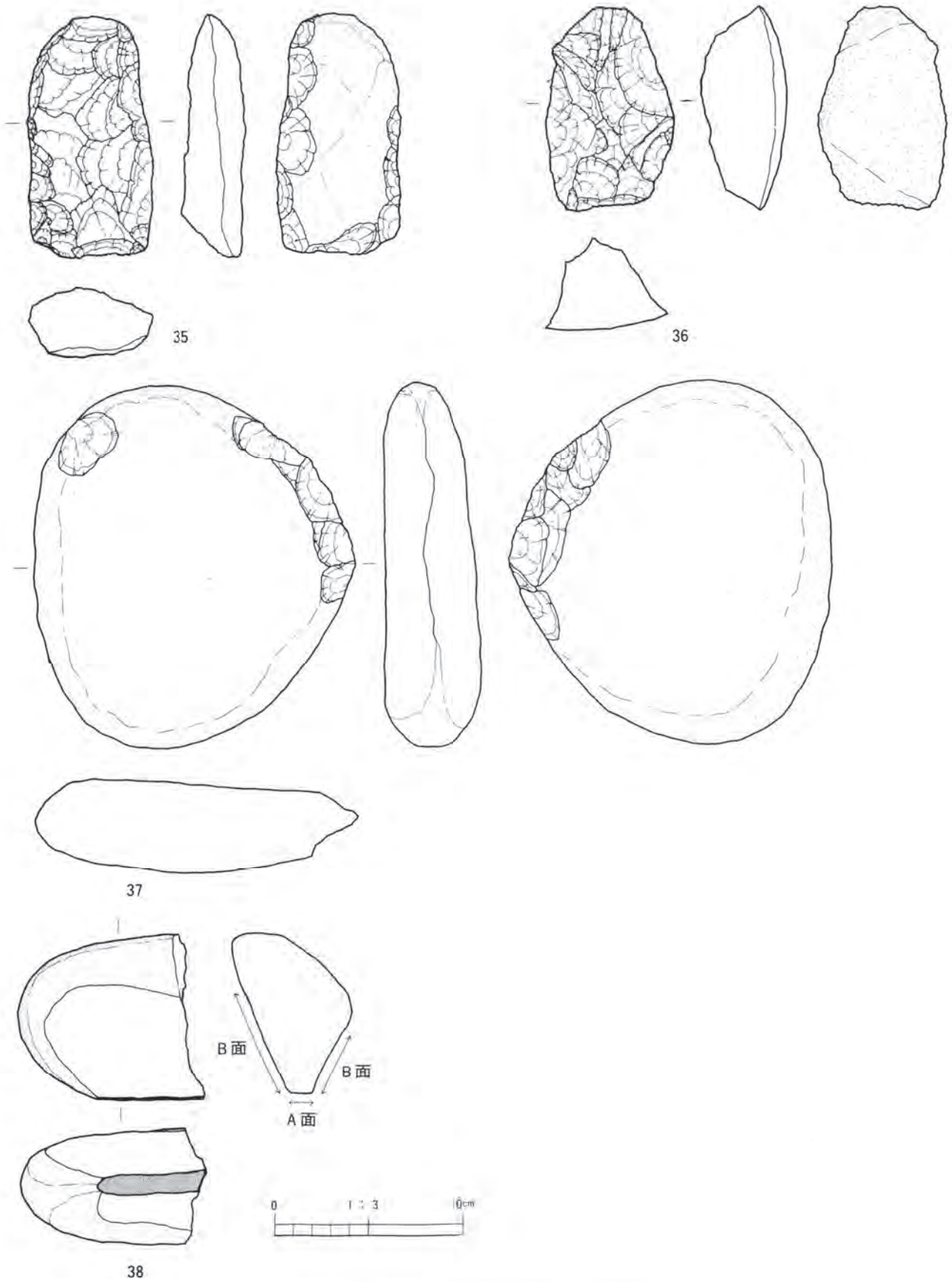
第41図 第16号竪穴住居跡出土遺物①

角形状の剥片を利用した削器・搔器類。34は、楔形石器（ピエス・エスキーユ）。上下両端に細かい小剥離がみられる。

第43図35～38は打製石器。35、36は背面に自然面を残す石斧。35は両面ともに両側縁部～下端刃部にかけて調整の剥離を施す。下端刃部は直線的になり、幅が少し広がる撥形の形態をとるもの。36は楕円形状の形態となり断面が三角形状を呈す。背面の自然面はそのままに残す。37は、一方の側縁が膨らむ円形状の形態をとる礫の一方の側縁に両面から剥離を施し両刃状の刃部をつくるもの。刃部以外は自然面をそのままに残している。38は、断面三角形を呈す特殊磨石。機能磨面（A面）幅は1cmと狭いが、調整磨面（B面）は比較的広くなる。



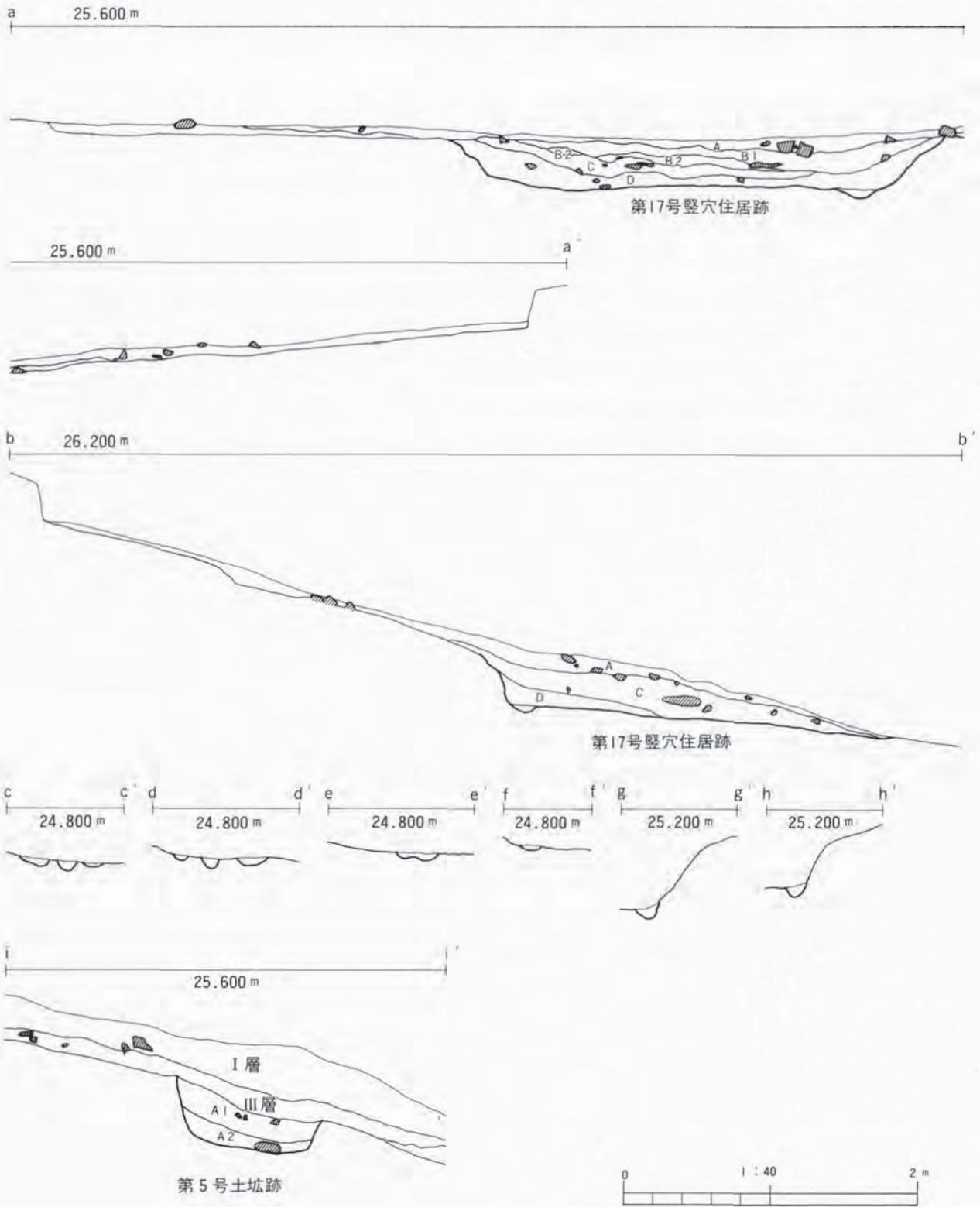
第42図 第16号竖穴住居跡出土遺物②



第43图 第16号竖穴住居跡出土遺物③



第44图 第17号竖穴住居跡, 第5号土坛跡



第45图 第17号竖穴住居跡，第5号土坛跡断面

第1号炉跡 (第44図)

第17号竪穴住居跡の北西側に0.35×0.40mをはかるほぼ円形の焼土の拡がりを検出した。これは、現地性のものでどの住居跡に伴うかは不明だが、屋外炉跡と考えられる。

第17号竪穴住居跡 (第44～53図 図版16～20、41～44)

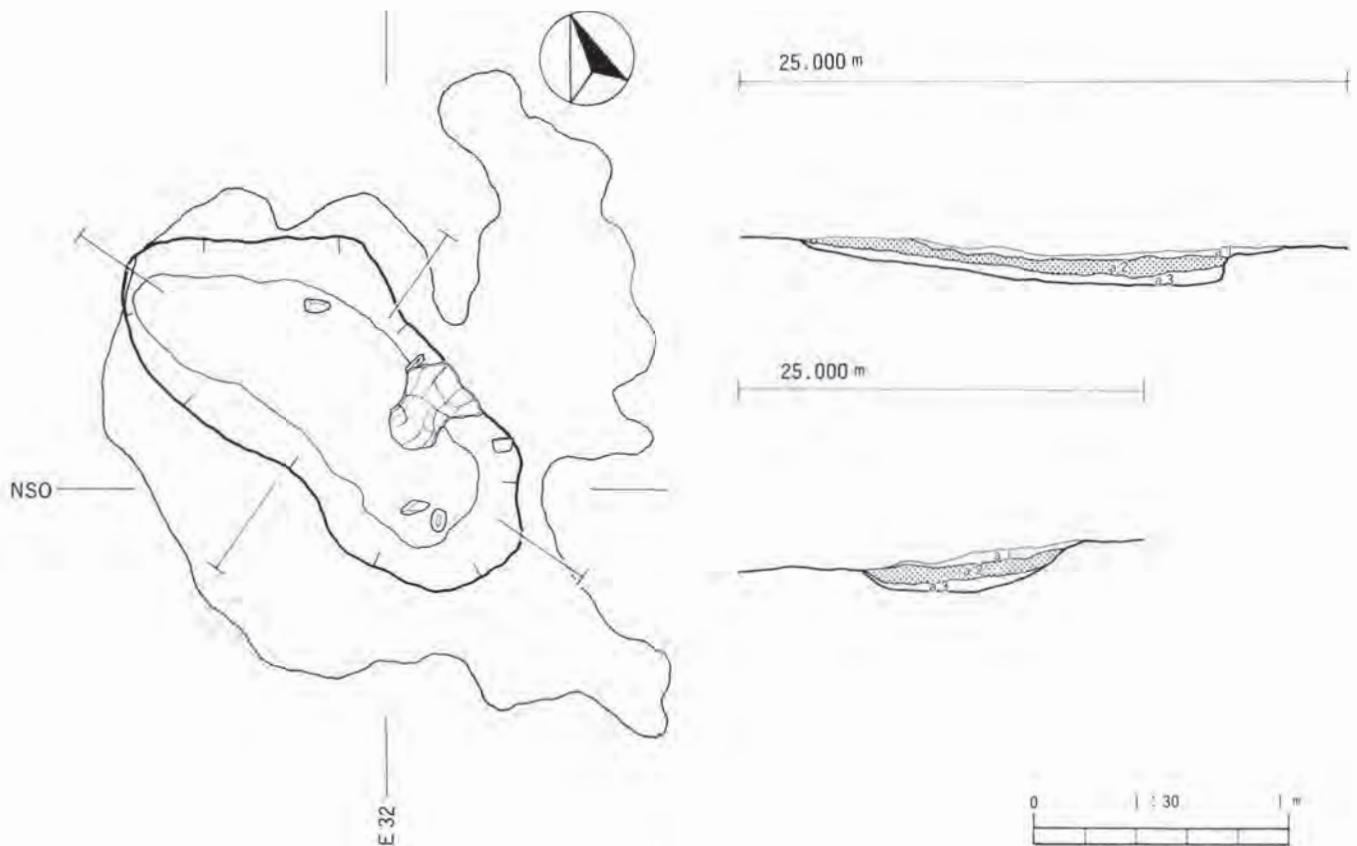
調査区の東端に位置する。

平面形
規模
埋土

平面形は、南東隅を欠くが不整形ないし隅丸方形の形態を呈するものと推定される。

規模は、残存部分で長軸5.6m、短軸3.9m以上をはかる。壁は、西～北はゆるやかに、北～東は床面からややきつく立ちあがり中段でゆるやかに外傾する。壁高は、北壁で0.3mを残す。

埋土は、A層、B層、C層、D層の4層に大別される。A層は、こぶし大から人頭大くらいの自然礫を多く含む層で遺構の外側にまで広く堆積していた。やや暗く砂を多く含む粘質土の褐色土を基本土とし、褐色土塊を含み固く比較的良くしまっている。土器などを多く包含する。B層は、埋土中最も明るい色調を呈し2層に細分される。B₁層は、粘性の強いやや明るい褐色土を基本土とし、褐色土塊や黄褐色砂質土などを含み固くしまっている。土器片や炭化物粒をわずかに含む。B₂層は、全体的にやや白味があった層で、やや明るい褐色土(砂を多く含む粘質土)を基本土とし、黄褐色砂質土や褐色土塊などを含むが、B₁層よりは混入土は少ない。C層は、粘性のある暗褐色土を基本土とし褐色土塊や、やや暗い暗褐色土塊などを少量含



第46図 第17号竪穴住居跡炉跡

み、固く比較的良くしまっている。炭化物粒を多く含むほか土器片を含む。D層は、やや明るい褐色の粘質土を基本土とし、黄褐色粘質土塊や褐色粘質土を含み固く比較的良くしまっている。

床面は、平坦で凹凸がほとんどない。貼床は認められないが固く良くしまっている。

炉は、床面のほぼ中央部に南北2.8m、東西2.25mの不整形を呈する地床炉があり、炉床は良く焼けておりしまっている。炉の付近の床面からは、小形獣の四肢骨を中心とする焼骨片がわずかに出土しているが、同定できるものはなかった。

周溝は、東壁では壁際に、北壁では壁からやや離れる。東壁側は、幅0.15～0.2m、深さ0.07mで1条だが、北壁側で3条となる。最も外側のは重複しない。内側の2条は重複するがセクション(e-e')では新旧関係をつかむことができなかった。壁や床の状況などからすると、内側へ拡張した可能性が大きいと考えられる。

柱穴状のピットは、床面上には確認できなかった。

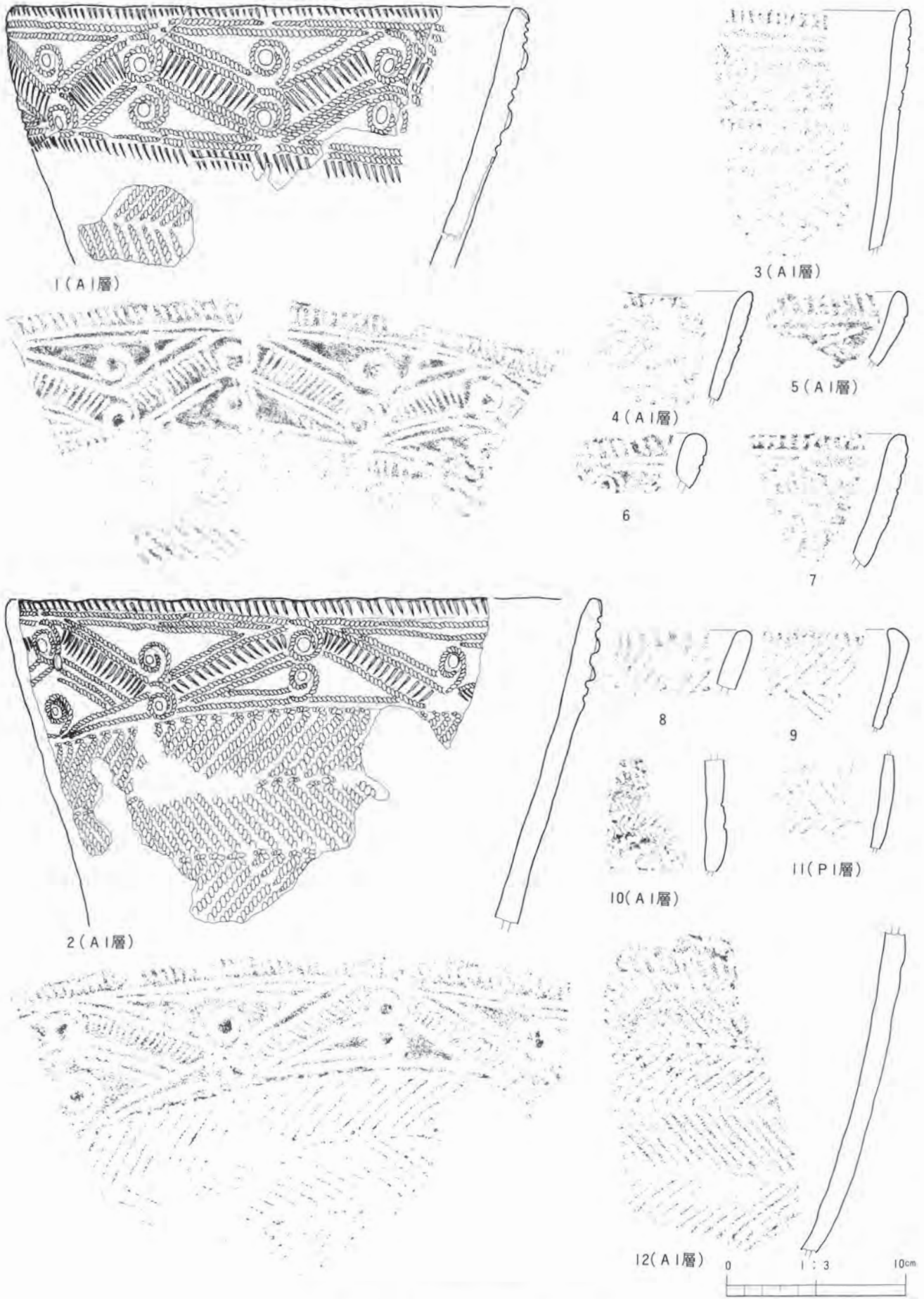
遺物の出土量は、比較的多い。第47図1、2は口縁部～体部上半にかけての大破片。1は、推定口径28cmをはかる深鉢土器。口唇部断面はやや外削ぎぎみで丸味をもつ。口縁部文様帯は施文技法1、9の原体側面圧痕文と連続する刻目文で構成される。口縁上端と頸部には、連続する刻目文をやや斜めに施文し、さらに2条の原体圧痕を横位に施し口縁部文様帯を区画する。口縁部文様帯は、原体圧痕による渦巻文が縦、横に規則正しく配列され、その間に渦巻を連結する斜位の原体圧痕及び連続刻目文が施される。体部には施文技法3aの羽状縄文が施文される。器厚は、1.3cmと比較的厚手のもので、胎土には短くて細かい繊維を含むが量的には少なく、石英砂や粗砂を含む。土器自体は焼成が良くかたくしまっている。2は、推定口径32cmをはかる深鉢土器。1と同様に口唇部断面は外削ぎぎみで丸味をもち、口縁部文様帯は1とほぼ同様であるが、頸部の連続刻目文及び横位に施される原体圧痕がみられない。なお、1も同様であるが渦巻文の中心部が粘土粒の高まりとなる。体部には、施文技法3aの羽状縄文が施文されるが、原体の末端が閉じられループ状の施文がみられる。器厚は、1.3cmをはかる比較的厚手のもので、焼成、胎土など1と類似する。3～28は、体部に施文技法3aの羽状縄文を地文として施文されるもので、このうち3～14には、施文技法1、9の原体圧痕文や刻目文、刺突文が付加される。3～9、16は口縁部の破片。3～7は、原体圧痕による円形に近い渦巻文や2～3条の横位、斜位の原体圧痕文、連続する刻目文を施文し口縁部文様帯を形成するもの。口唇部の形態は、内削ぎぎみのもの(3、4)と平坦なもの(6、7)がある。繊維の含有量は、1、2に比べて多くなり、特に4、5などは細かい繊維を多量に含む。また、胎土中の繊維以外の混入物も非常に多くなり、3、5、7は砕けて細くなった白色鉱物、4、6は石英砂粗砂が多く、1、2と比べて3～7は、焼成も胎土も良くない。全体的に雑なつくりとなっている。8、9、16は、口縁部上端より施文技法3aの羽状縄文を施文した後に、口縁上端に刻目を施すもの。16は、口縁上端に刻目を施さないもの。口唇部の断面は、平坦なもの(8、16)、内湾ぎみに口唇部が肥大するもの(9)があり、3～7と同様に、胎土中の繊維以外の混入物(特に白色鉱物)が多い。10～15、17～28は頸部～体部及び体部の破片で、10～14は、原体圧痕文や連続する刻目文を施文する。体部の羽状縄文は、すべて施文技法3aの羽状縄文節径の大きい太い原体を用いている。

床面

地床炉

小型獣の四肢骨

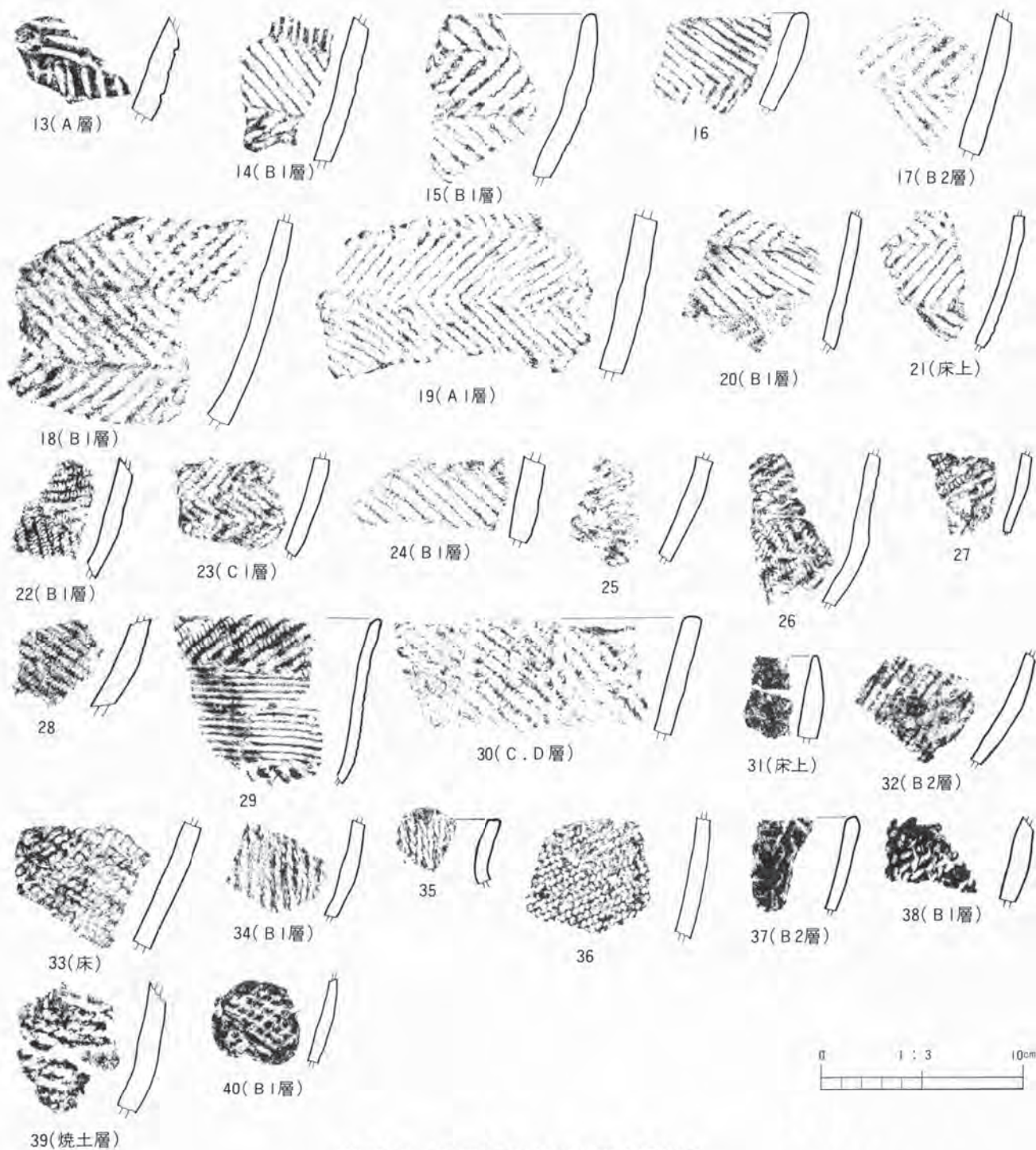
土器



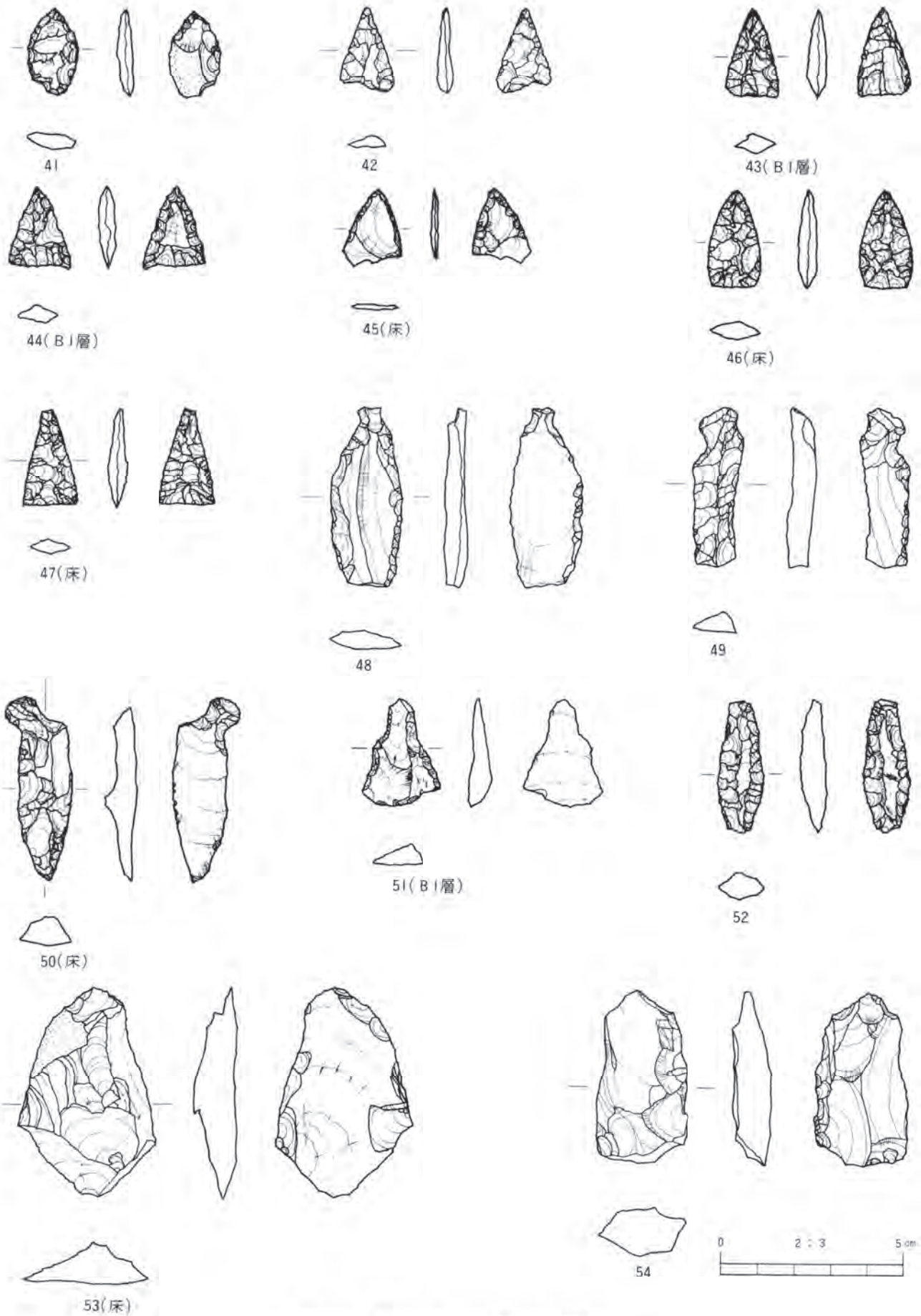
第47図 第17号竖穴住居跡出土遺物

29は、口縁部の破片で口縁部上端より施文技法6の斜縄文を施文し、頸部に施文技法5による、12条の平行沈線を施し、体部に口縁上端とは逆方向に斜縄文を施文する。口唇部は内削ぎされるもので、器厚0.6cmの比較的薄手のもの。胎土は、ち密で繊維以外の混入物も極めて少なく、焼成も比較的良い。

30～33は、施文技法6の斜縄文を施文するもの。30は、口唇部頂部を平坦に整形し口縁部上端より斜縄文を施文する。繊維の含有量は非常に多く、胎土中には石英砂、粗砂も多く混入する。31は、口唇部が内外から狭まり薄くなるもの。30とは逆に繊維の含有量は少なく、胎土中の混入物も少ない。



第48図 第17号竪穴住居跡出土遺物②



第49図 第17号竖穴住居跡出土遺物③

34、35、39、40は施文技法8の撚糸文を縦～斜位に施文するもの。35は、口縁部の破片で口唇部が外反する。口唇部頂部は平坦に整形され、上面には円形刺突文が施される。34、35とも器厚が0.7cmと比較的薄く、胎土中の混入物も少ない。39、40は、焼成、胎土とも悪い粗製なもの。39は撚りの太い原体を使用する。器厚1.4cmと厚手なもので繊維を多く含む。

36は、施文技法7の縄文を施文するもの。

37は、繊維の含有量は極くわずかな口縁部の破片で、縦位に条痕文？らしき施文がみられる。器表面には条線のような横線がみられる。



第50図 第17号竪穴住居跡出土遺物④

38は、胎土中に多量の繊維を含むもので施文技法14の組紐状の文様?を施文したもの。細かい粗砂や白色鉱物を含む。

第49、50図の41~64は剥片石器。41~47は石鏃。41は、基部の一部を欠くもので木の葉状の形態となるもの。背面に大きく自然面を残すが、両面とも先端部に細かい調整剥離を施している。42~45は、基部の一部を欠くが基部がほぼ平基な三角形状の形態となる。42は、両面ともやや大まかな調整剥離で整形、仕上げするもの。43は、やや厚味をもち横断面が菱形を呈する。44は、先端部にやや厚味をもつもので、背面中央部に第1次剥離面を残す。45は、非常に薄い剥片を利用したもので、両面とも先端部~両側縁にかけ細かい調整剥離を施し、中央部に大きく第1次剥離面を残す。46は、両側縁部がやや丸味をもち基部が最大幅とならない形態となるもの。両面とも第1次剥離が残らないように調整剥離を施す。47は、縦長の二等辺三角形状の形態となるもの。45~47は床面上から出土したものである。

48~50は縦形石匙。48は、刃部の先端部を欠く。形態的には楕円形状となるものと思われる。刃部の調整剥離は、側縁部に比較的細かく施こされ中央部に大きく第1次剥離面を残す。49は側縁の刃部が直線的となるもの。一方の側縁部だけに、両面から調整剥離を施している。50は刃部に対して、つまみ部分が約45度傾くもの。背面は、第1次剥離面をそのままに残し、片刃調整の刃部となる。

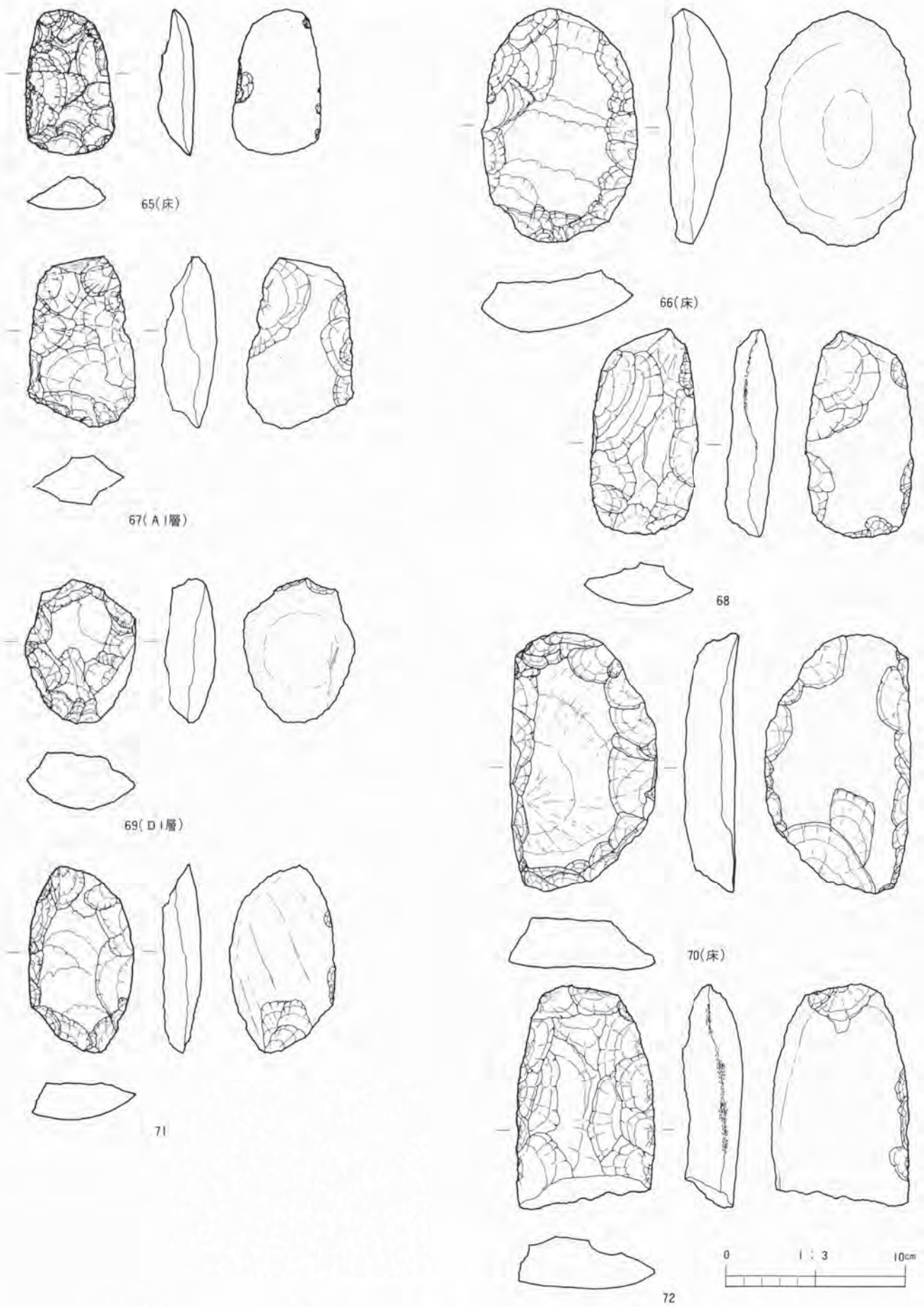
52~64は、大~小剥片を利用した削器、搔器類と思われるもの。52は、横断面が菱形となり両面の中央部に第1次剥離を残す。両側縁部から入念に剥離調整を施している。機能的には、削器的なものが考えられる。53~56は、比較的大きめな剥片の側縁部を利用したもの。

60~64は、小剥片を利用したもの。

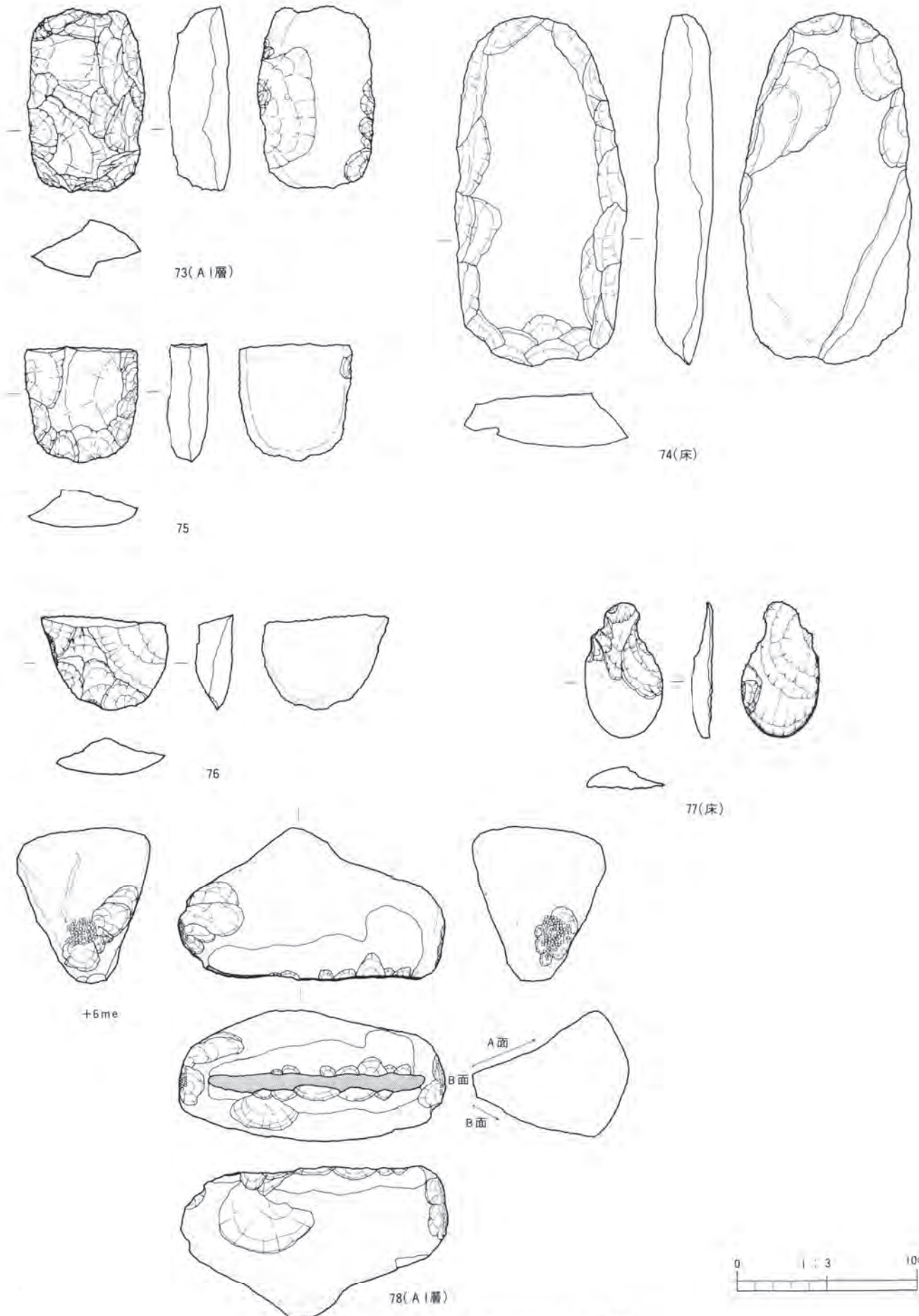
第51~53図の65~80は、打製の石器。65~77は、背面に自然面を残す石斧。形態的には、楕円形状を呈すと考えられるもの。(66、69、71、74~76)、両側縁部が直線的になる長方形を呈すと考えられるもの。(68、72、73)、刃部幅が広がる撥形を呈すもの。(65、67)、半円状を呈すもの(70)がある。66は、横断面が台形状を呈し両側縁~刃部にかけて調整の剥離を施す。背面の自然面はそのままに残す。67、68は、背面の側縁部に大きな剥離がみられる。69は、小形のものでほぼ円形に近い。背面は基部に細かい剥離がみられる。70は、両面とも両側縁部に細かい調整の剥離がみられ、両刃状に調整された刃部となる。72は、下端の刃部を欠くが、大形のものである。側縁部は、敲打?により磨滅している。73は、背面の一方の側縁部に大きな剥離がみられる。74は、全長19.7cmをはかる大形のもの。縁辺部にのみ調整の剥離を加え、中央部に大きく第1次剥離を残す。背面は、基部~側縁部上部に剥離がみられる。

77は、横断面が楕円形のを縦に半割したもので、側縁上部~基部にかけて剥離を施したもの。

78~80は、断面三角形の特殊磨石。78は、機能磨面(A面)に調整剥離がみられる。また、長軸方向の両端部は敲石として使用しており敲打痕が認められる。79は、機能磨面幅1.0cmのもので調整磨面(B面)幅はせまい。80は、逆に幅広い調整磨面となっている。



第51図 第17号竖穴住居跡出土遺物⑤



第52図 第17号竖穴住居跡出土遺物⑥

第5号土坛跡（第44、45、53図 図版49）

第17号竪穴住居跡の東側の調査区境に一部を検出したが、大部分は調査区外となる。

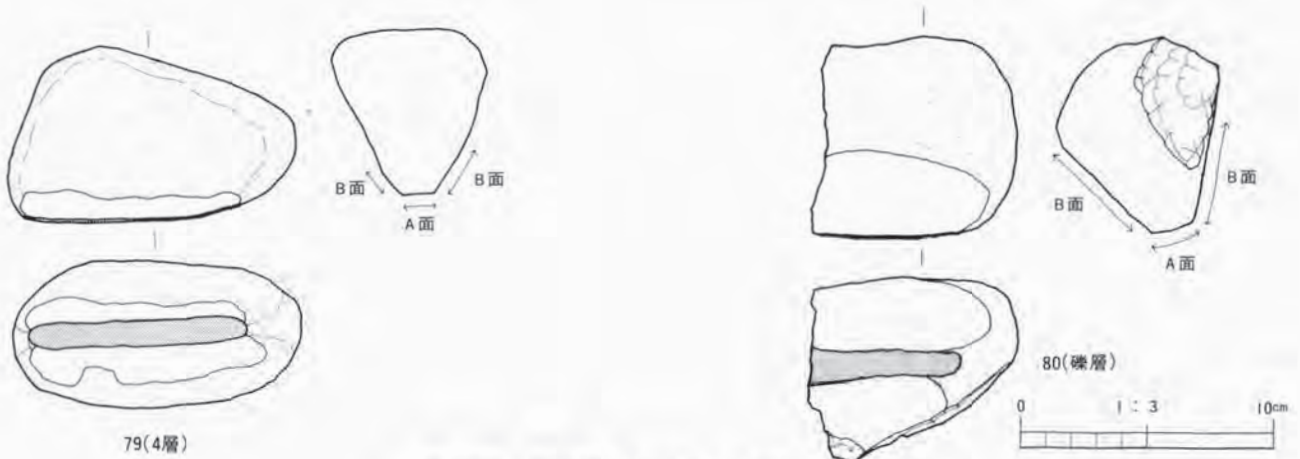
平面形は、方形～長方形を呈すと推定される。規模は、短軸で1.0mをはかる。壁は、底面からややきつく立ちあがり壁高は、北壁で0.4mを残す。 平面形

埋土は、A₁、A₂層に細分されるA層から成る。A₁層は、暗い暗褐色土を基本土とし褐色土を塊粒状に含む。固さ、しまりともあまりない。A₂層は、暗褐色土を基本土とし褐色土を塊状に含む。固く比較的しまっている。 埋土

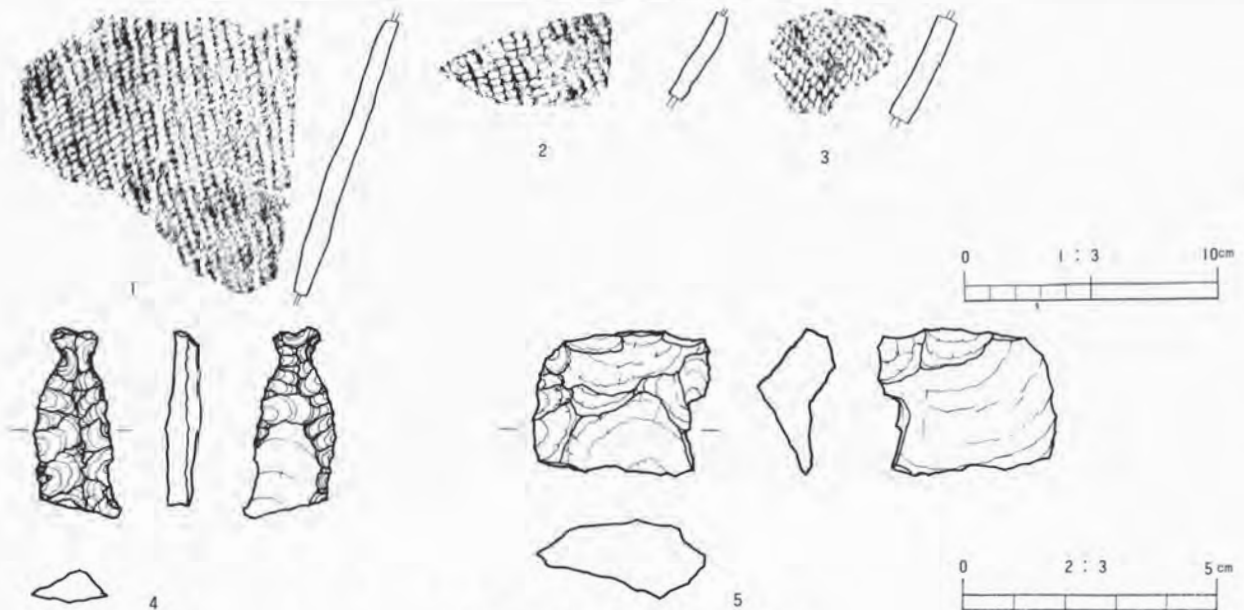
底面は、ほぼ平坦面である。

遺物は、少量ながら出土している。第53図1～3は、施文技法6の縄文を施文したもの。3点は同一個体と思われる。節径の比較的小さいものを用い整然と施文する。繊維の含有量は少ないが、白色鉱物や石英砂などを含む。 土器

4、5は剥片石器。4は、刃部の先端を欠く縦形の石匙。一方の側縁部は両面から細かい調整剥離を施し両刃状に調整する。つまみ部分の剥離も入念なもの。5は、四角形の剥片の側縁部を利用した削器類。 石器



第53図 第17号竪穴住居跡出土遺物⑦



第53図 第5号土坛跡出土遺物

第18号竪穴住居跡 (第54～59図 図版20～22、45～47)

重複関係

調査区の東端に位置し東壁側が調査区外に延長する。第19号、34号竪穴住居跡と重複するがこれらよりも新しい。

平面形
規模

平面形は、残存部分から隅丸の長方形～楕円形状を呈するものと推定される。規模は、残存部分で長軸6.2m、短軸3.2m以上をはかる。壁は、床面からほぼ45度で立ちあがり北壁側で壁高0.65mを残す。

埋土

埋土は、A層、B層、C層、E層に大別される。A層は、褐色の粘質土を基本土とし固く比較的しまっておりA₁～A₄層に細分される。A₁層はA層中最も明るくA₂、A₃層は、やや暗くなる。B層は焼土層でB₁～B₃層に細分される。B₁層は褐色の砂質土を基本土とし明褐色土や暗褐色土を塊粒状に含む。固く比較的しまっている。B₂層は焼土層。B₃層は焼土の浸透層。B₄層は褐色の粘質土を基本土とし固く比較的しまっている。C層は、やや明るい褐色の粘質土を基本土とし床面のほぼ全域を覆う。比較的固くしまっている。E層は、周溝の埋土で褐色の粘質土を基本土とし比較的固いがしまりはしない。

床面

床面は、西側がテラス状に一段高くなる。貼床が認められ、床面下に構築土K₁層が確認された。K₁層は、明るい褐色の粘質土で固くしまっている。床面自体は、比較的固くしまる。

炉は、地床炉で床面上に0.75×0.65m、1.05×0.70mの焼土の拡がりを確認した。炉床は、良く焼けてしまっている。

周溝は、北壁沿いにテラス状に一段高くなる所まで存在する。幅0.17、深さ0.20mをはかる。西壁際にも浅い細長いピットを検出したが、周溝の一部かは確認できなかった。

柱穴状のピットは、P₁～P₃まで検出したが、いずれも小杭状の小規模なものである。

出土遺物については、77、78ページに記述した。

第19号竪穴住居跡 (第54～56 60図 図版21、46)

重複関係

第18号、34号竪穴住居跡と重複するが、第18号よりは古く第34号よりは新しい。

平面形

平面形は、方形～長方形を呈すると推定される。規模は、残存部分で長軸2.55、短軸2.50m以上をはかる。壁は、床面からほぼ直に立ちあがり壁高は0.18mを残す。

埋土

埋土は、D層が堆積する。D層は、D₁、D₂層に細分される。D₁層は、暗褐色の粘質土を基本土とし黒褐色土塊を含む。固さはあまりないが比較的しまっている。D₂層は、明るい暗褐色土を基本土とし褐色土塊、黒褐色土塊を含む。比較的固くしまっている。

床面

床面は、ほぼ平坦で地山面をそのまま利用する。比較的固くしまっている。

地床炉

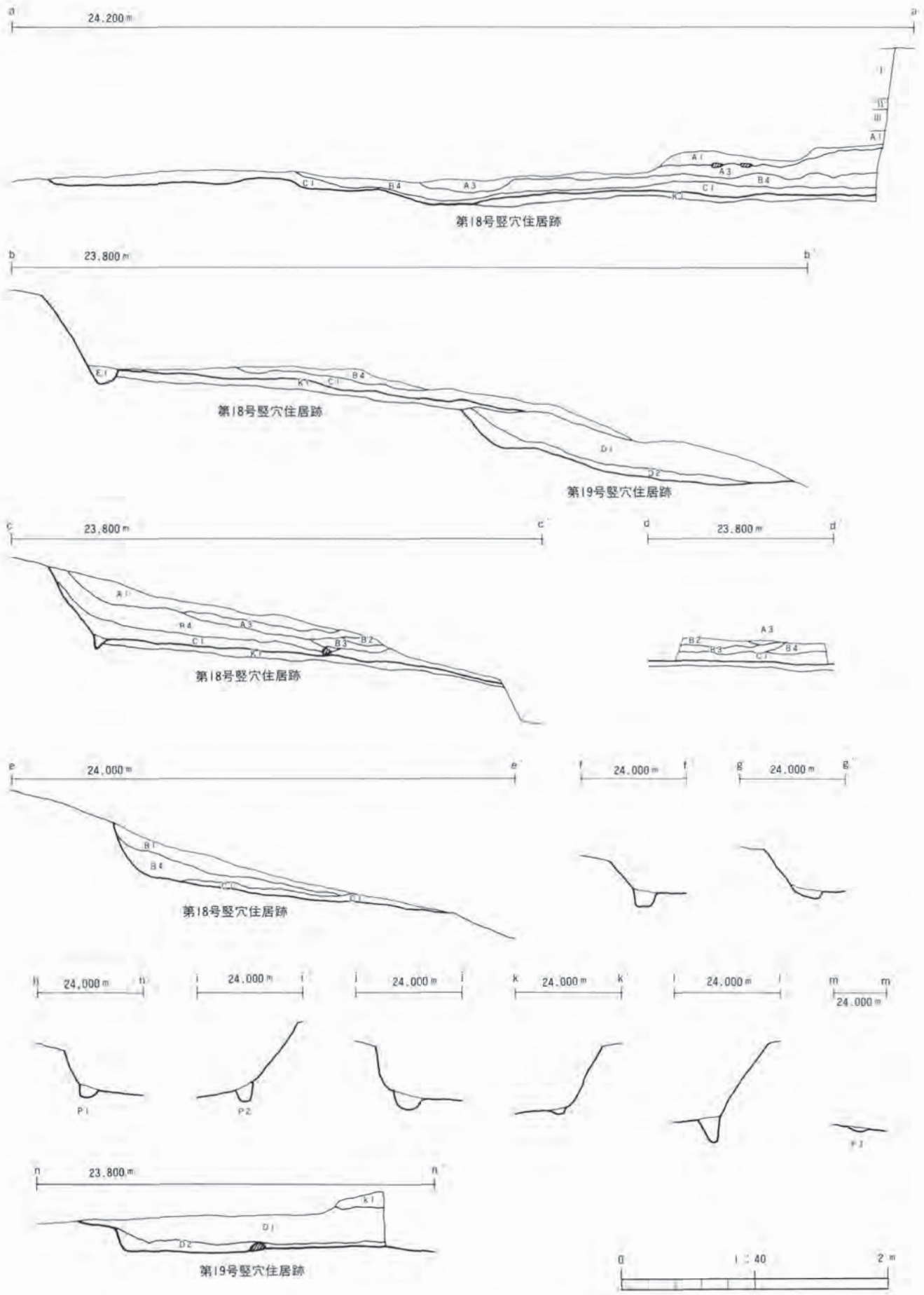
炉は、床面上に0.5×0.3m、0.55×0.50m以上の焼土の拡がりをもつ地床炉があり、炉床は良く焼けておりしまっている。

柱穴状のピットなどは、確認できなかった。

出土遺物については、78、79ページに記述した。



第54図 第18、19号竖穴住居跡

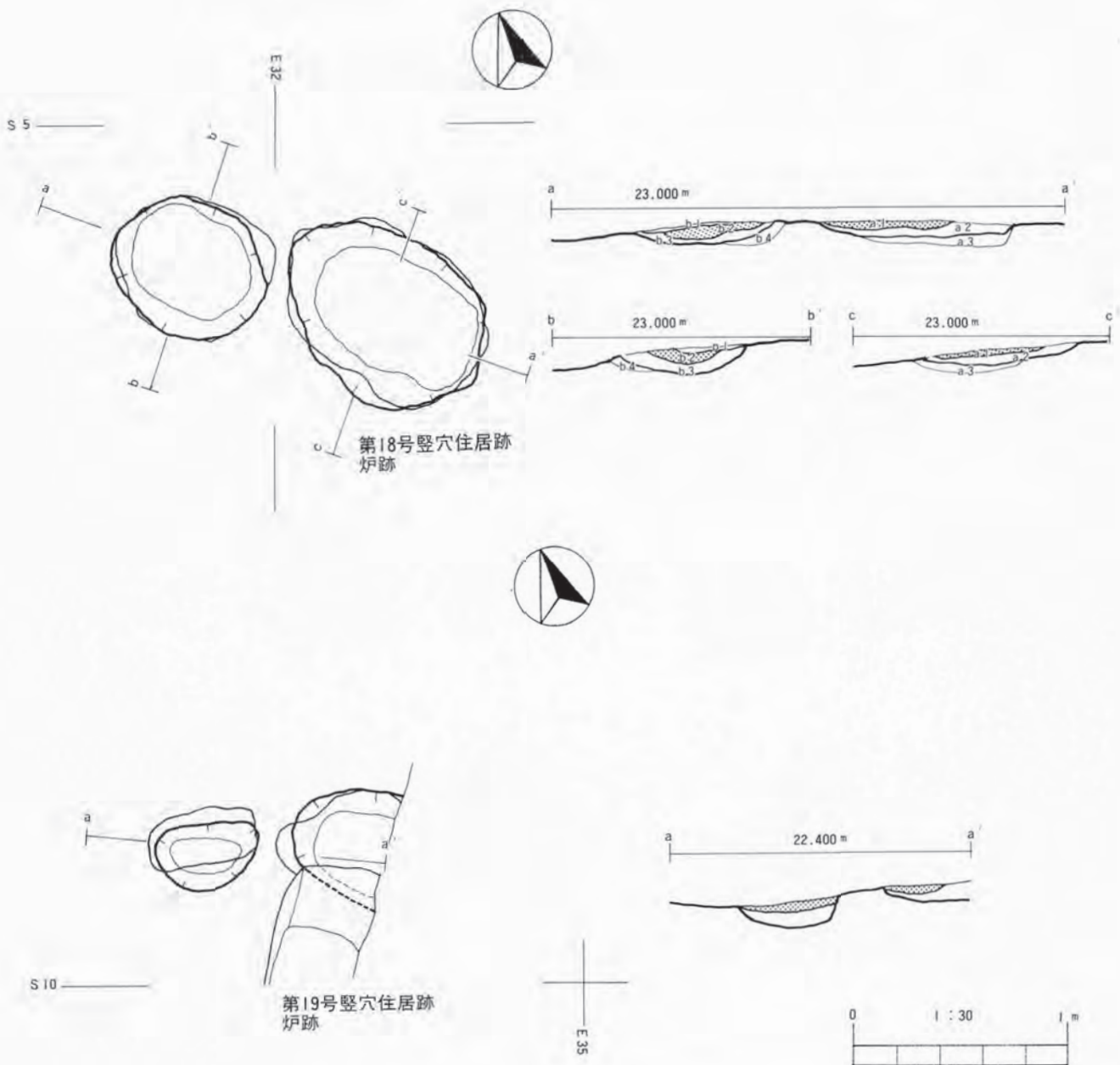


第55图 第18、19号竖穴住居跡断面图

第18号竪穴住居跡から出土した遺物は、第57～59図である。また、床面上に倒立した状態にあった土器は、極めて脆弱ですでに極小片となっていたため復元できなかった。

第57図1は、施文技法6bの単節斜縄文を施文するもので、口縁部の破片で口唇部の頂部を平坦に整形する。上面には、縄文を回転させて施文している。地文の縄文は、節径の比較的大きい原体を用いており粗い感じがする。胎土中には、細かい繊維を比較的多く含み、繊維以外の混入物も黒色鉱物が多く観察される。胎土や焼成などは、第15号竪穴住居跡から出土している縄文—縄文の土器片に極めて類似する。2も施文技法6bによる単節斜縄文を施文したもののだが、整然とした縄文である。3は、口縁部の破片。口唇部の頂部は平坦に整形され、口縁上端外面がひさし状に突き出る。ひさし状に突き出した口縁部上端に縄文の粒がみられるが、詳細は不明。器外面の凸凹はかなり激しく繊維痕が観察されるが、器内面は、さ程凸凹はなく、

土器



第56図 第18号、19号竪穴住居跡炉跡

横ナデに調整する。胎土中の繊維の含有量が多い。4は、堅穴床面上に倒立してあった土器の体部片で、施文技法8の撚糸文を施文した、極めて粗製の土器である。器厚1.5cmをはかる厚手のもので、石英砂や粗砂を多量に含む。繊維の混入率は小さい。

石器

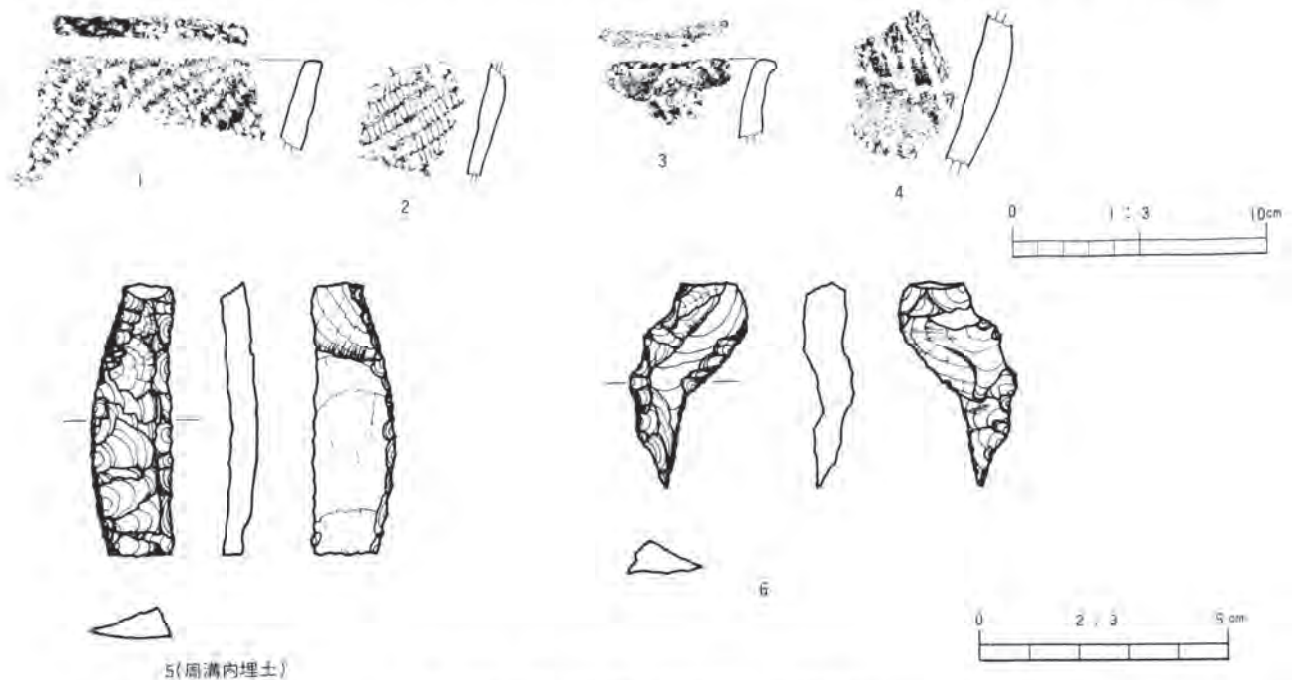
5、6は剥片石器。5は、つまみ部分と刃部の先端を欠く縦形石匙である。一方の側縁部は両面から細かい調整剥離を施し両刃状の刃部となる。6は、鋭利な先端部に細かい調整剥離を施し機能部とした石錐。形態的にはやや角度の広い「く」の字状を呈すもの。

第58～59図1～13は、打製の石器。7～18は、背面に自然面を残す石斧。形態的には、楕円形状を呈すもの（7～9、11、13、14、16～18）と円形を呈すもの（15）、撥形に近いもの（10）、半円状に近いもの（12）がある。背面は、側縁の一部に剥離のみられるもの（7、9、11、17）、側縁～刃部にかけて剥離のあるもの（13）、基部に剥離のあるもの（10）やそのまま残すもの（8、12、14～16、18）がある。横断面は、すべて中央部に第1次剥離面を残す台形状を呈すものである。

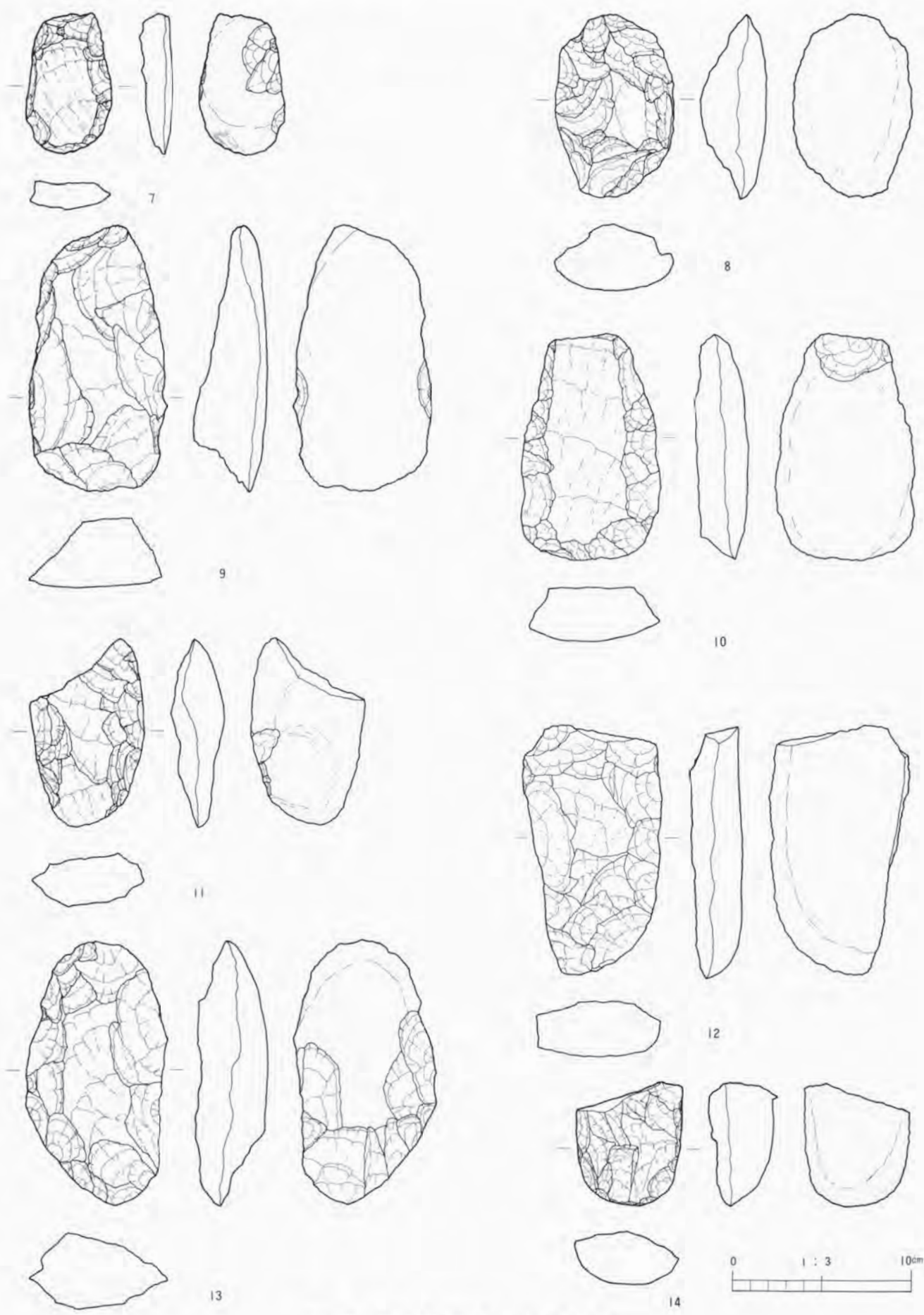
19は、断面が三角形の特殊磨石。機能磨石（A面）は幅1.7cmとやや広い。調整磨石（B面）は広くとるもの。

土器

第19号堅穴住居跡から出土した遺物は、第60図である。第60図1は、施文技法3aの羽状縄文を施文したもの。節径の大きな太い原体を使用する。胎土中の繊維の含有量は、比較的多く石英砂や細かい白色鉱物を含む。2は口縁部上端より施文技法8の撚糸文を横～斜位に施文したもの。口唇部はやや内削ぎで頂部は平坦に整形する。器厚は1.5cmと厚手のもの。胎土中の繊維の含有量は非常に少なく、比較的大きな粗砂や石英砂を大量に含む。また、少量ながら金雲母も含まれる。胎土は、ち密さを欠き、焼成も良好とはいえ粗製のものである。3は、施文技法6bか7か判断できなかった。繊維の含有量は少なく、石英砂や粗砂が含まれる。胎土は、ち密さを欠き焼成も不良である。4、5は施文技法8の撚糸文を縦～斜位に施文するもの。

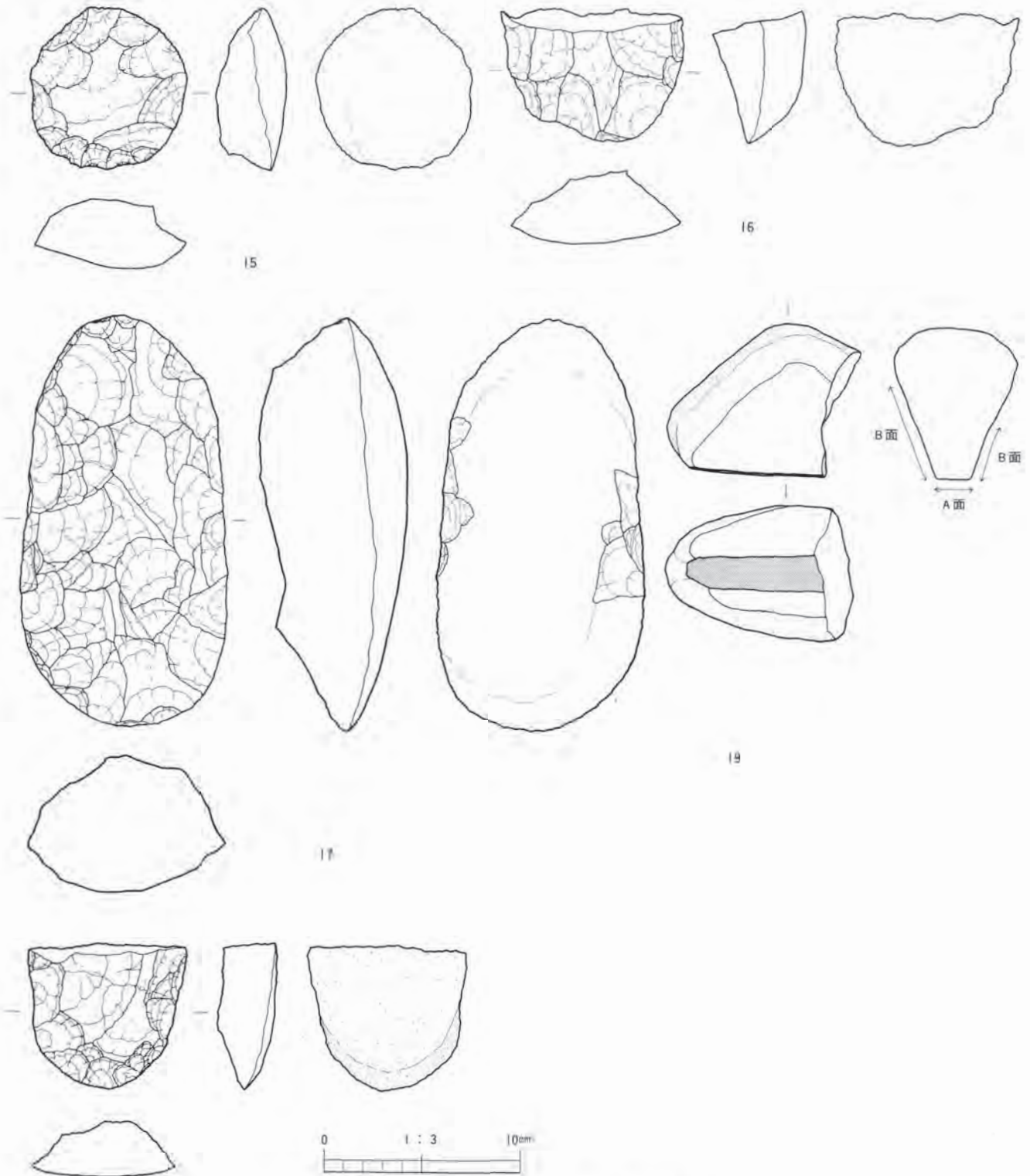


第57図 第18号堅穴住居跡出土遺物①



第58图 第18号竖穴住居跡出土遺物②

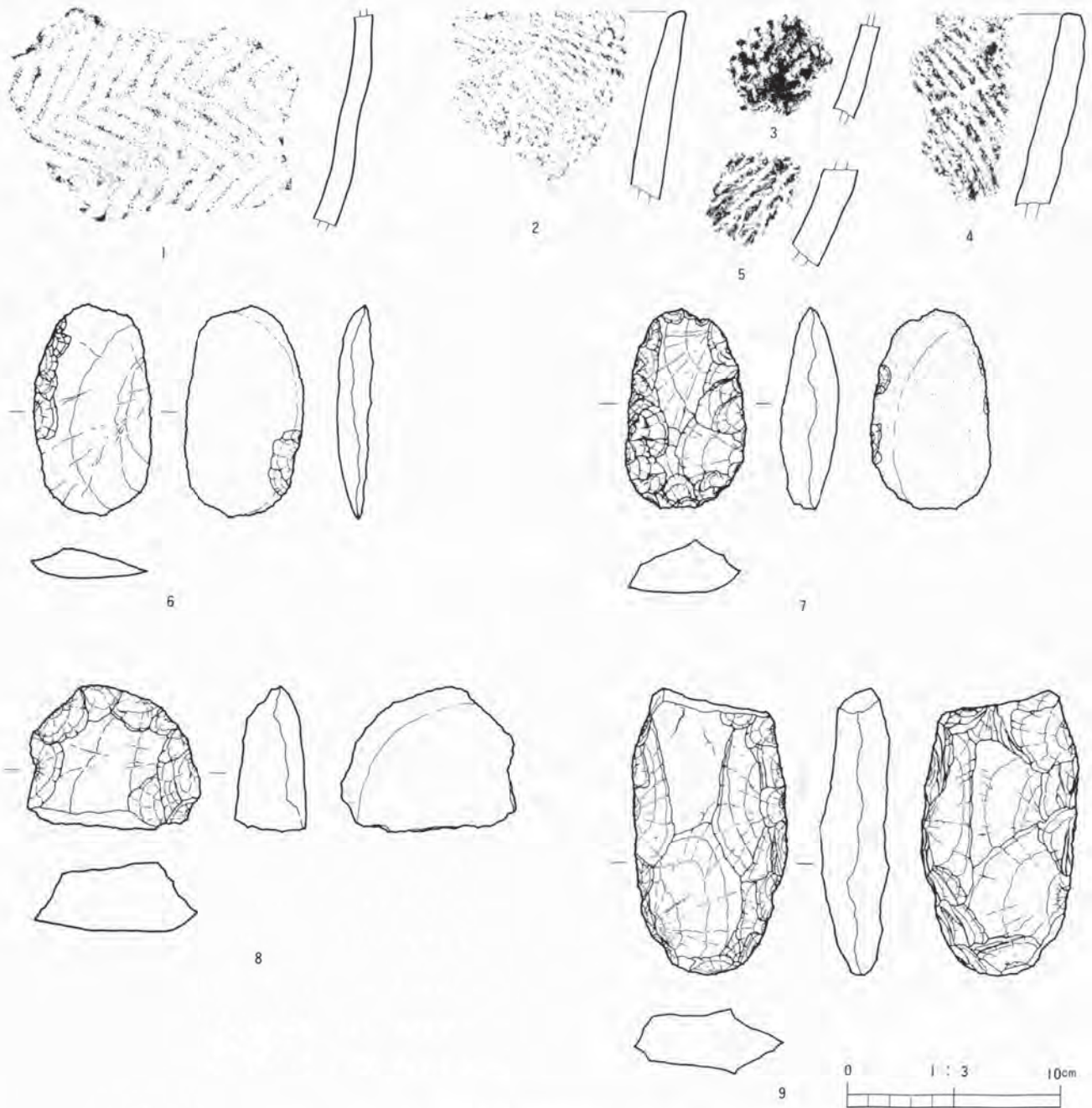
4は、口唇部の頂部を平坦に整形する。4、5とも胎土中にはほとんど繊維を含まず、粗砂や石英砂を大量に混入する粗製なもの。



第59図 第18号竪穴住居跡出土遺物③

6～9は、打製の石器。6～8は、背面に自然面を残す石斧。形態的には3点とも楕円形状を呈す。6は、ほとんど調整の剥離を施さない薄手のもの。

7、8は、中央部に大きく第1次剥離面を残し、縁辺部にのみ調整の剥離を施すもの。7は、背面の側縁の一部に剥離がみられる。8は、背面をそのままに残す。9は、両面に調整の剥離を施す打製石斧。基部を欠くが楕円状の形態を呈す。



第60図 第19号竖穴住居跡出土遺物

第20号竪穴住居跡（第61、62図 図版47）

調査区の西側、第1号竪穴住居跡の南側に位置する。

平面形 規模

平面形は、ほぼ長方形の形態を呈す。規模は長軸1.90m、短軸1.37mをはかる小規模なもので竪穴住居跡といえるものか疑問は残る。壁は、ほぼ直に立ちあがり、壁高は西壁で0.38mを残す。

埋土

埋土は、A層とB層に分けられる。A層は、さらにA₁層、A₂層に細分される。A₁層は、褐色土を基本とする粘質土で固くしまる。A₂層は壁際に堆積するもので、明るい褐色土を基本とする。固く比較的しまっている。壁崩壊土層と思われる。B層は、焼土層で床面のほぼ全域に広がっているが、焼土の浸透層などは確認できず炉跡などの現地性のものではない。比較的固くしまっている。

床面

床面は、平坦で固くしまっている。また、床面上には、炉跡や柱穴などのピットは、確認できなかった。

土器

出土遺物は、極小片が中心で、拓影図で掲載できたのは第62図5の1点だけである。

これは、施文技法2の結束する羽状縄文を施文したもので、条の短い原体を用いている。

第21号竪穴住居跡（第61、62図 図版47）

調査区の西端、第20号竪穴住居跡のすぐ東隣に位置する。

平面形 規模

平面形は、隅丸の方形状を呈するものと推定される。規模は、残存部分で、長軸3.75m、短軸3.00m以上をはかる。壁は、ほぼ直に立ちあがり、壁高は北壁で0.44mを残す。

埋土

埋土は、A₁～A₃層に細分される。A₁層は、暗褐色土の砂質土層を基本土とし、褐色～黄褐色砂質土を粒塊状にわずかに含む。固くしまっている。A₂層は、やや明るくなる暗褐色土を基本土とし、褐色～黄褐色砂質土を塊状に多く混入する。固く比較的しまっている。A₃層は、少し粘性のある暗褐色土を基本土とし炭化物粒を含む。褐色～黄褐色砂質土を粒塊状にわずかに混入する。固く比較的しまっている。また、A₁～A₃層には、全体に砂礫粒を含み砂っぽくなる。

床面

床面は、中央部付近が若干凹むが、大むね平坦面である。地山面をそのまま利用する。

柱穴状のピットは、P₁～P₅の5ヶ所検出した。P₁、P₅は、北西隅に位置しいずれも竪穴内部方向に向く。P₁、P₂は、床面からの深さ0.07mの浅い皿状のピット。P₃は、深さ0.21mをはかる比較的深いものである。

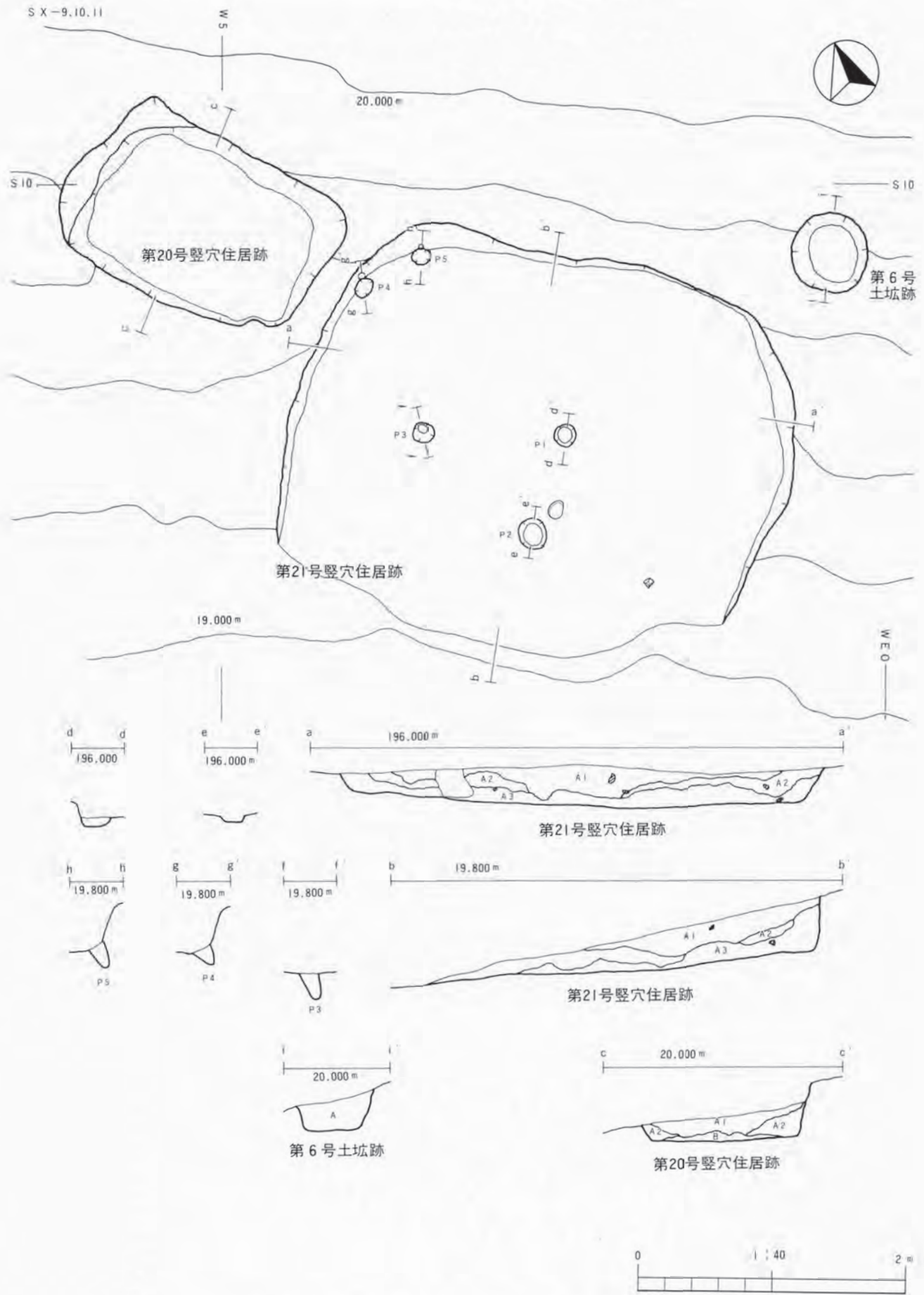
遺物の出土量は少ない。第62図1～4は、繊維を含む土器片。6～8は剥離石器。

土器

1は、施文技法2の結束する羽状縄文を施文するもの。節径の小さく短かい原体を使用している。器厚は0.7cmと比較的薄手のもの。繊維の含有量が多い。内面は凸凹が少なくなめらかで、焼成も比較的良い。2は、施文技法6bの単節斜縄文を施文したものの。胎土にち密さを欠き脆弱な感じがする。胎土中には繊維を比較的多く含み、白色鉱物、石英砂のほか黒色鉱物が観察される。3は、口縁部の破片で、口唇部の頂部は平坦に整形される。口縁部上端から斜縄文が施文される。4は、施文技法8の撚糸文をやや斜位に施文する。底部に近い破片と思われる。繊維の含有量は少ないが、白色鉱物や粗砂を大量に含むもの。

石器

6は、先端部を欠く石鏃。基部が平基となる三角形状を呈するもの。両面に第1次剥離面を



第61图 第20号、21号竖穴住居跡、第6号土坑跡

残す。最大厚0.03cmと薄い。7は、一方の側縁部に片面から細かい調整剥離を施し片刃状の刃部を作りだしたもの。8は、三角形の剥片の側縁部を利用したもの。7、8ともに機能的には削器、搔器の類と考えられる。

第6号土坑跡（第61図）

第21号竪穴住居跡の北東側に位置する。

平面形

径0.58mをはかるほぼ円形の平面形を呈するもの。検出面からの深さ0.30mをはかる。

規模

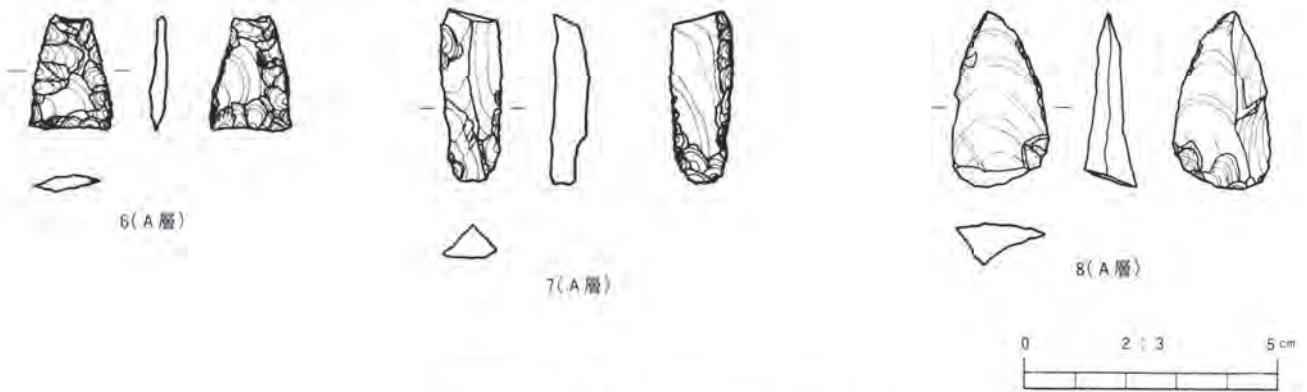
壁は、底面からほぼ直に立ち上がり、底面は平坦面である。

埋土

埋土は、暗褐色土を基本とするA層から成る。やわらかく、全くしまりのない土で、炭化物粒子を若干含む程度である。遺物は出土しなかった。



第62図 第20号、21号竪穴住居跡出土遺物



第62図 第21号竪穴住居跡出土遺物

第22号竪穴住居跡（第63～65図 図版23、48）

調査区の西南側、第21号竪穴住居跡のすぐ南に位置する。

当住居跡は、東・西・北壁の外に南東側の南壁の一部が確認でき、平面形、規模などほぼ全容を把握できるもの。

平面形は、隅丸の長方形～楕円形状を呈し、規模は、長軸3.73m、短軸3.01mをはかる。壁は、西～北壁側はほぼ直に立ちあがるが、東壁側は、かなりゆるやかである。壁高は、北壁側で0.37mを残す。

平面形
規模

埋土は、大きくA層とB層に分けられる。A層はA₁層、A₂層に細分される。A₁層はやや暗い暗褐色土を基本土とし、多量の自然礫や炭火物粒、焼土を含み固くしまっている。A₂層は、やや明るい暗褐色土を基本とし、褐色～黄褐色土のブロックが混入し、A₁層よりも多く炭火物粒や焼土を含む。比較的固くしまっている。B層は、粘性のある明るい褐色の粘質土を基本土とし、壁際を中心に褐色～黄褐色土がブロック状に混入する。比較的固いが、あまりしまりが無い。

埋土

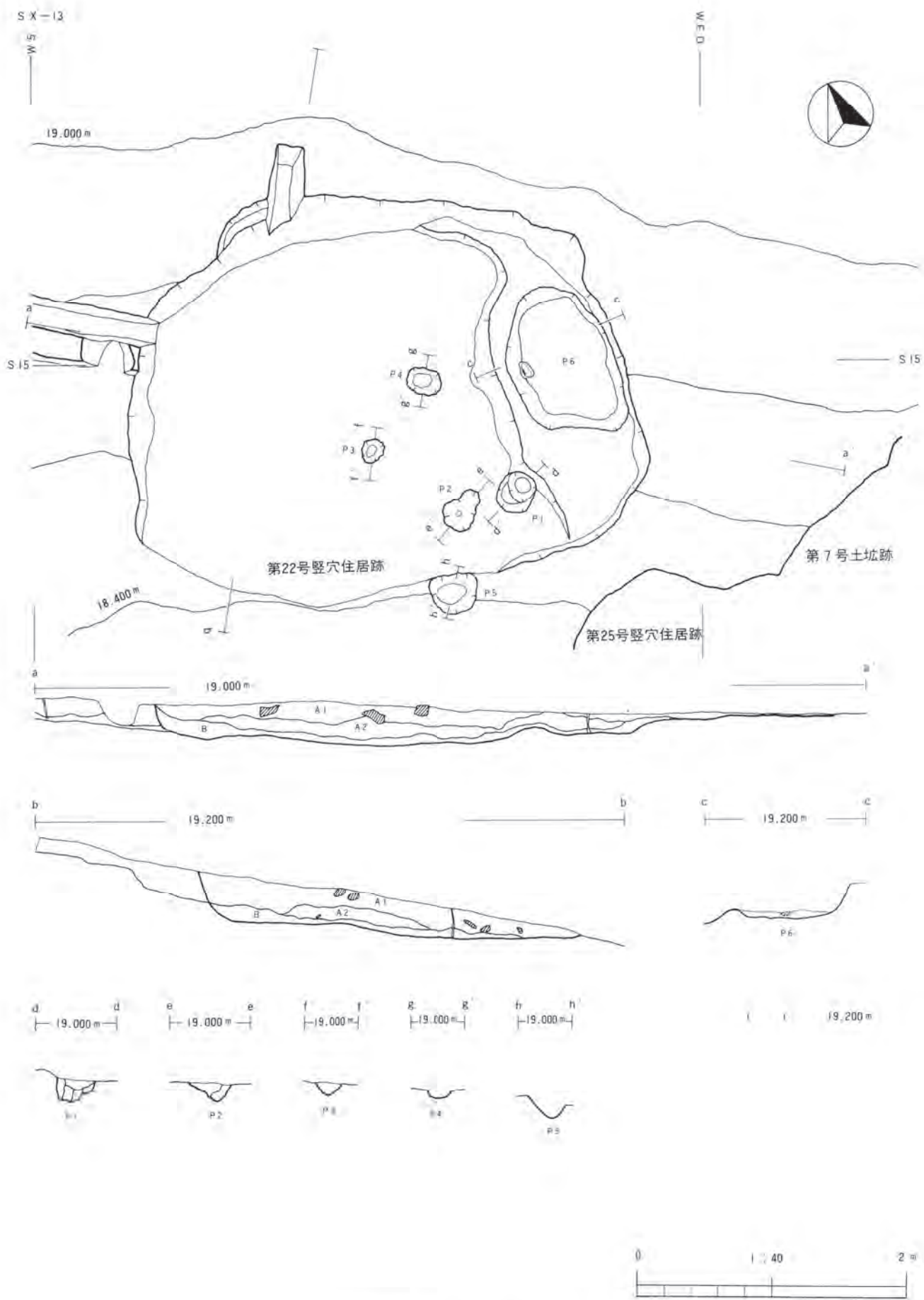
床面は、地山面をそのまま利用しているが、中央部付近から南側が幾分低くなる。また、東側がテラス状に一段高くなっており、床面とは、約0.15mの比高差をもつ。このテラス状の高い部分には、1.2×0.75mの不整楕円形の浅いピットが存在するが、ピット内からは何も出土しなかった。

床面

柱穴状のピットは、床面上にP₁～P₄、床面以外にP₅を検出したが、明瞭な柱痕跡の認められたのはP₁だけである。P₁は、径0.3m、深さ0.15mをはかる小規模なものである。P₂～P₄は、柱痕跡の確認できない小規模なものである。P₅は床面からはずれるが、径0.35mと比較的大きなものである。

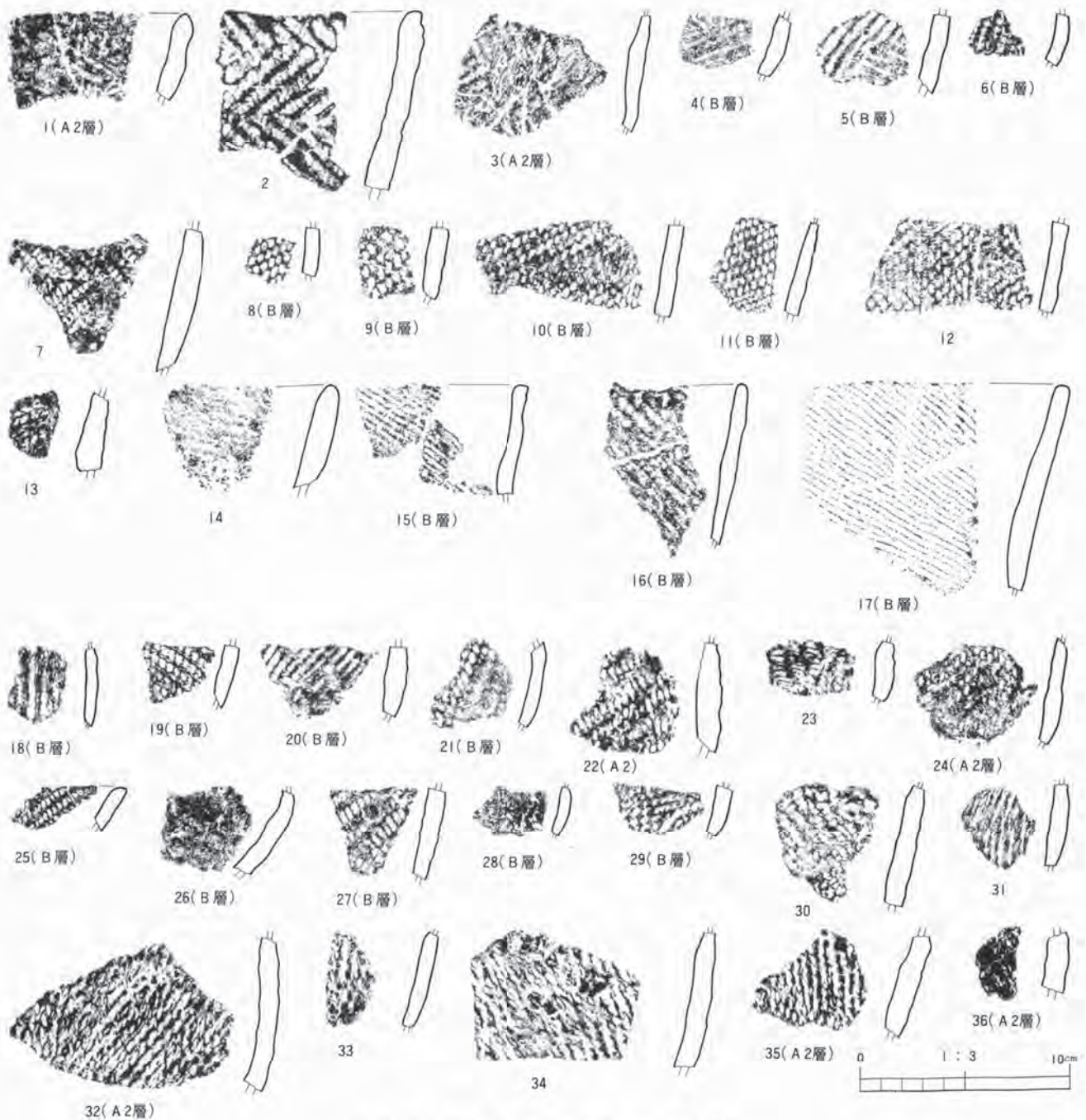
遺物は、A層、B層からの出土が多かった。第64図1～35は、すべて繊維を含む土器である。1～7は、羽状縄文を施文したものの。1は、口縁部の破片。口縁部はやや外反ぎみとなり、口唇部は内外より狭まり薄くなってそのままぬける。口縁部上端より施文技法2の結束する羽状縄文を施文している。施文原体は短くて細いものを用いているようだが、磨滅が著しく詳細は不明。2も口縁部の破片だが、1とは逆に太くてしっかりとした原体を使用する施文技法3aの羽状縄文を施文する。口唇部断面は、やや内削ぎとなる。繊維の含有量は比較的多く、胎土中には細かく砕けた白色鉱物、石英砂などの混入物を多量に含む。3～5は、磨滅が著しく不明瞭なものだが、1と同様に短かくて細かい原体を用いて、施文技法2の羽状縄文を施文する。7は、施文技法3bの条と条の間隔が広くなる。8～12は、施文技法7の縄文を施文するもの。いずれも胎土中に含まれる繊維以外の混入物は少ない。10は、底部に近い破片で器内面には炭化物が付着する。11は、8～10、12と比べて細かい撚りの原体を用いている。14～30は、施文技法6の斜縄文を地文にもつもの。14～17、25は口縁部破片。14は、厚さ1.4cmを比較的大きな厚手のもの。口唇部頂部は、平坦に整形され薄くなるもので、口唇部上面には、斜位に刻目を施している。胎土中の繊維の含有量は少ないが、繊維以外の小石や石英砂などの混入物が非常に多い。15は、口唇部頂部を平坦に削り整形し、口縁部上端にひさし状に粘土が突き出たままとなっている。胎土中には14と全く逆で繊維は多いが、その他の混入物は極端に少ない。器内面はなめらかに調整している。16は、口唇部頂部を平坦に整形して、口縁部上端に半截竹管の

土器



第63图 第22号竖穴住居跡

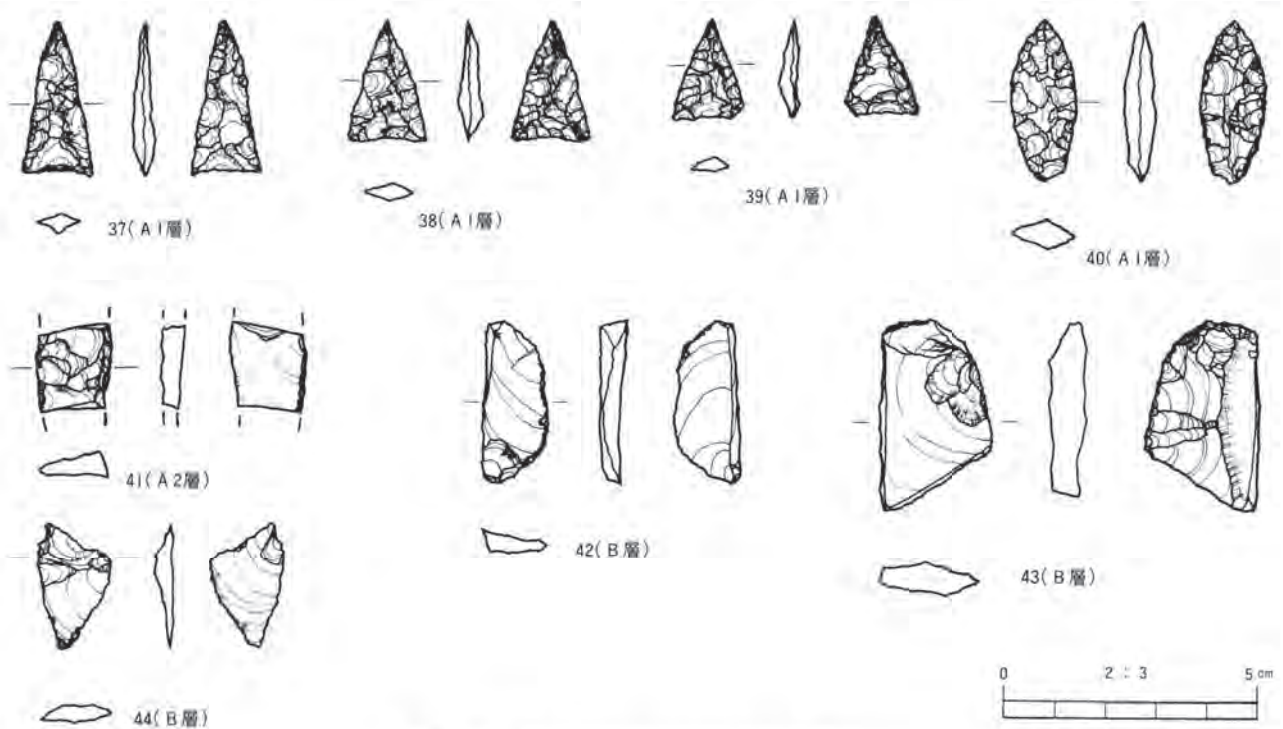
凸面を押しあてたような刻目を施している。刻目は、地文の縄文を施文した後に施されている。17は、やや内削ぎぎみの平坦な口唇部に整形するものだが、地文の縄文を施文後に口唇部を整形している。25は、口唇部断面が内削ぎとなるもの。22は、内面に炭化物が付着している。23は非常に太い原体で、その末端部を細い糸のようなもので継いでいるものか。26は、かなり底部に近い破片で地文は不明。おそらく尖底～丸底をなすものと考えられる。27は、羽状縄文の可能性もあるので、2と同様に太くて節の大きな原体を用いている。31～36は、施文技法8の撚糸文を施文したもの。いずれも厚さが1.1～1.2cmと比較的厚手のもの。32、34は焼成が良く硬くしまっている。32は、内面に34は外面にタール状の炭化物の塊が付着する。32～35に比べて、36は細い撚りの原体を用いている。



第64図 第22号竖穴住居跡出土遺物①

石器

第65図37～44は剥片を利用した石器。37～39は石鏃。37は、縦長の二等辺三角形の形態となる細身のもので、基部は凹基きみである。両面とも基部の方は大まかな調整剥離だが、先端部の方は細かい調整剥離を施している。38、39は、基部幅の比較的広い二等辺三角形の形態をもつものである。40は、基部の狭い木の葉状の形態をもつ小形の尖頭器と考えられる。基部の一部を欠くものだが、両面ともに第1次剥離面を残さずに調整剥離が施されている。41は、縦形石匙の刃部の一部である。一方の側縁だけを刃部として使用するものである。42、43は不定形の削器、搔器類。薄く鋭利となった一方の側縁に細かい調整剥離を施し刃部としている。



第65図 第22号竖穴住居跡出土遺物②

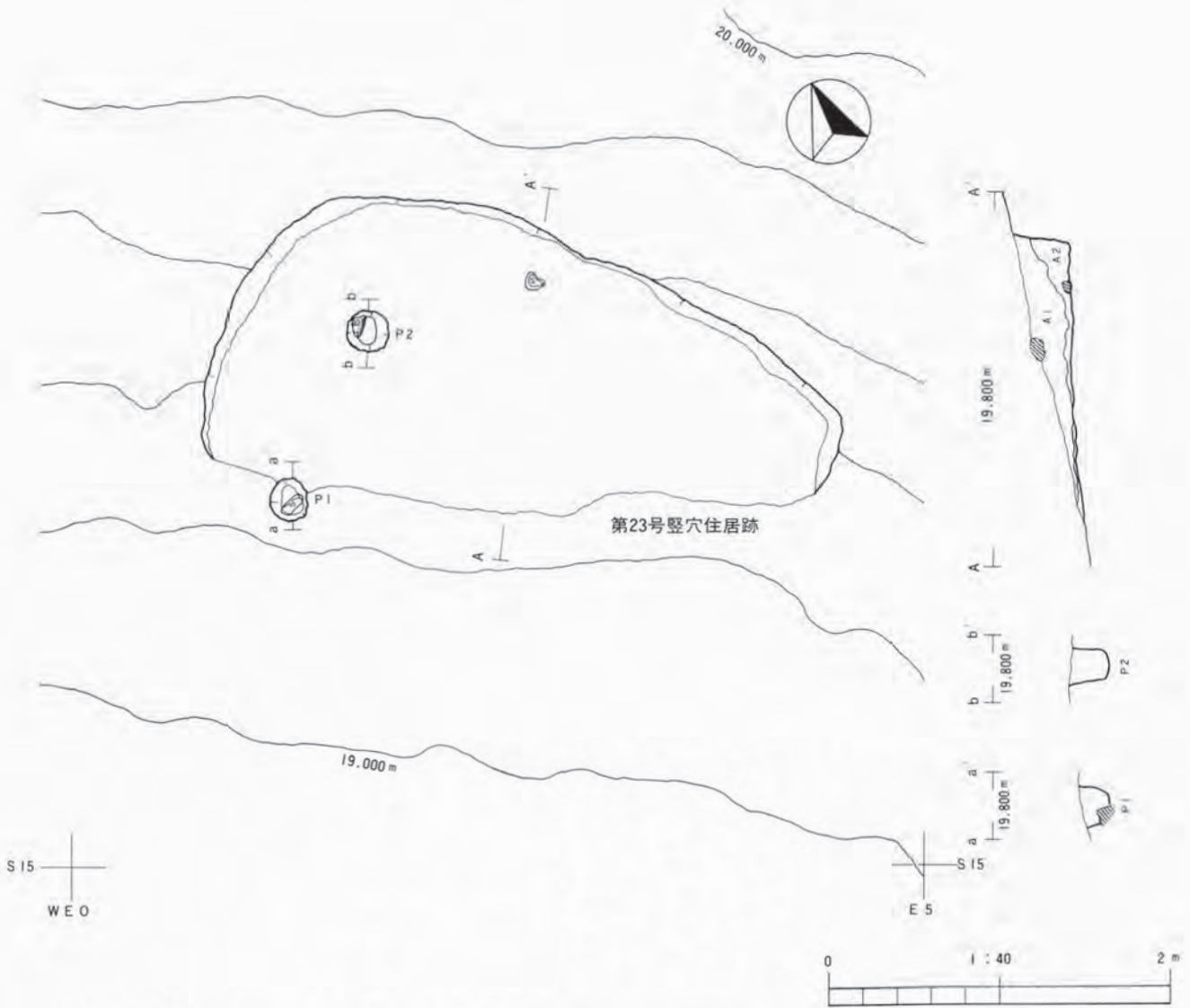
第23号竖穴住居跡（第66、67図 図版22、23）

調査区の西側、第21号竖穴住居跡の東に位置する。

平面形は、隅丸ぎみの長方形～楕円形状の形態になるものと推定される。規模は、残存部分
 平面形
 で、長軸3.65m、短軸1.77m以上をはかる。壁は床面からほぼ直にきつく立ちあがり壁高は北
 規模
 壁で0.33mを残す。

埋土は、A層のみが堆積する。A層は、A₁、A₂層に細分される。A₁層は、暗褐色土を基本
 埋土
 土とし角のとれた丸い石（自然礫）を多量に含み、固く比較的良好にしまっている。A₂層は、
 やや明るい暗褐色土を基本土とし床面のほぼ全域を覆う。壁際付近には多量の黄褐色砂質土の
 塊が混入する。炭化物粒や焼土を多く含み固く比較的良好にしまっている。

床面は、地山面をそのまま利用している。多少凸凹は認められるがほぼ平坦な面で、固くし
 床面
 まる。貼床などは認められない。



第66図 第23号竖穴住居跡

柱穴状のピットは、P₁とP₂を検出したが、いずれも堅穴西側に位置する。P₁、P₂ともに径が0.25m強の小ピットで、床面からの深さが0.22mと0.15mをはかるものである。明確な柱痕跡は確認できない。

石器

遺物は、A₁層より斜縄文を地文にもつ極小片が数点と床面上から第67図1の石器が出土した。これは、縦形の形態でつまみ部分の作り出しが小さいものである。刃部は、一方の側縁が湾曲するもので各々の側縁は、片面からだけからの細かい調整剥離を施している。

第24号堅穴住居跡（第68、69図 図版49）

調査区の西南地区、第26号堅穴住居跡の北側に位置する。

平面形

平面形は、長方形～隅丸の長方形を呈するものと推定される。

規模

規模は、残存部分で長軸3.15m、短軸1.55m以上をはかる。壁はやや傾斜をもち直線的に立ちあがる。北壁側で、0.22mを残す。

埋土

埋土は、A層とB層に大別される。A層は、A₁、A₂層に細分される。A₁層は、暗褐色土を基本土とし、炭化物粒や自然礫を含む。比較的固くしまっている。A₂層は、やや明るい暗褐色土を基本土とし、褐色土をブロック状に含む。B層は、褐色土を基本土とし、褐色～黄褐色土塊状に含む。壁側付近にのみ堆積するもので固く比較的しまっている。遺物は、このB層の上面から多く出土した。

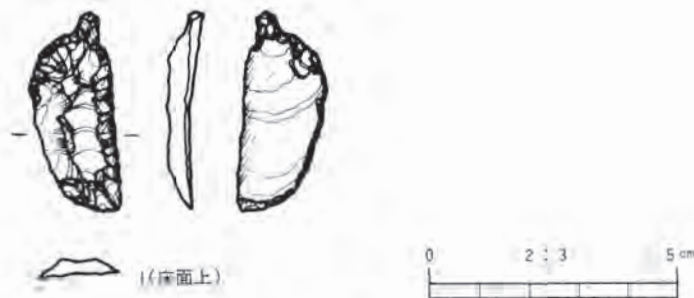
床面

床面は、地山面をそのまま利用しているが、覆土が薄いことと、検出面の地山面の上ののる表土層が浅いためか耕作による影響がみられ、小さい凸凹が認められる。床面自体は固くしまる。

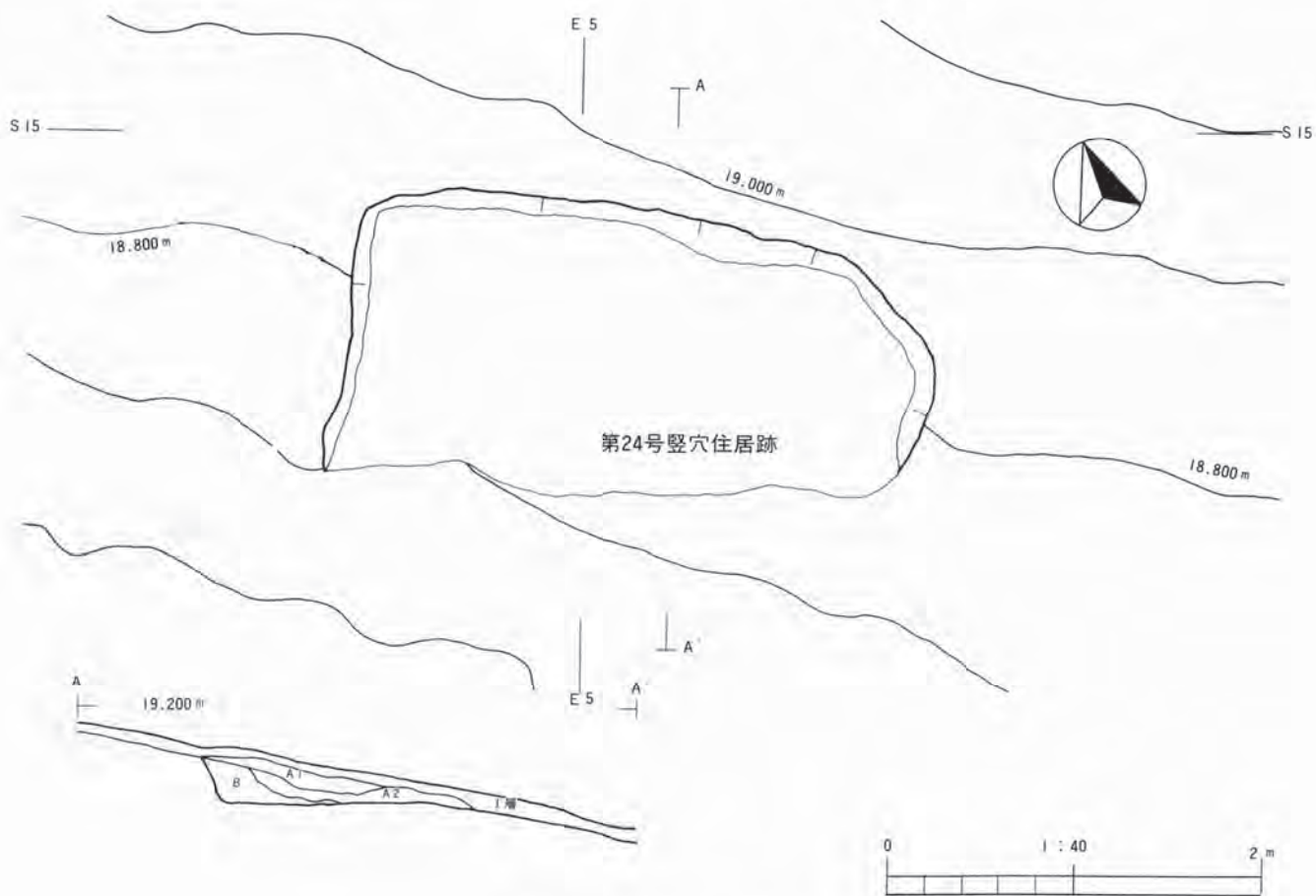
柱穴などのピットは、全く確認できなかった。

土器

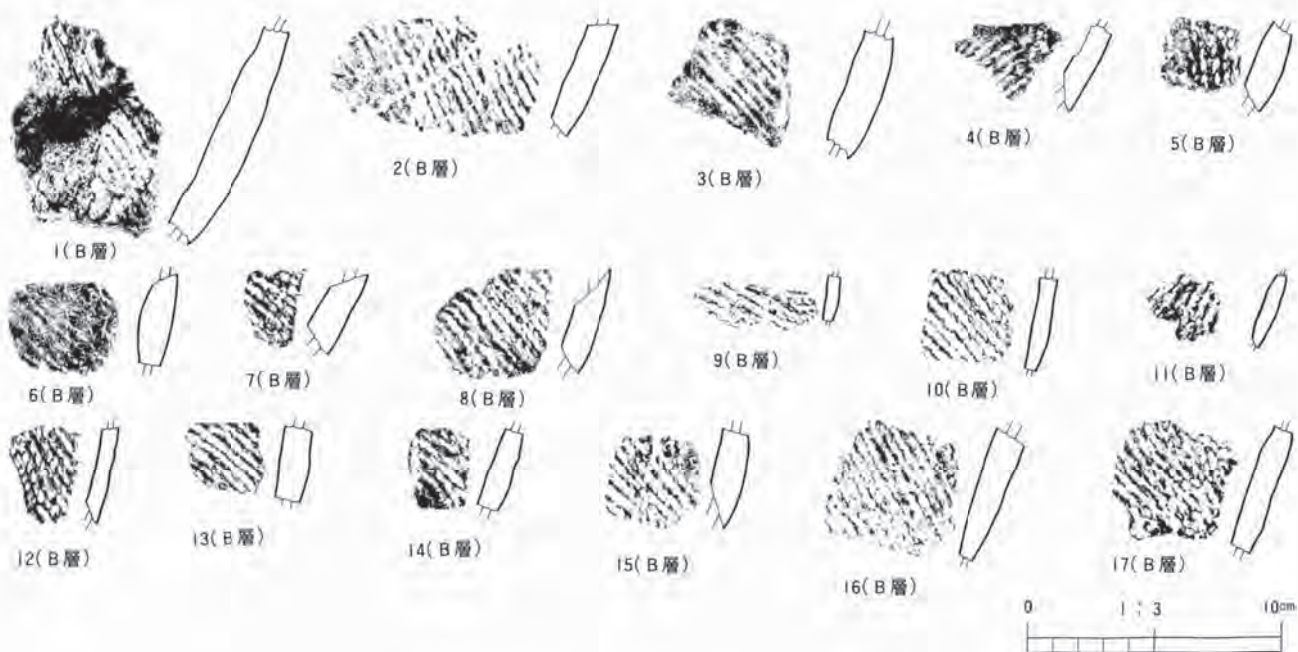
遺物は、B層の上面、しかも、堅穴の北西側から比較的まとまって出土している。これの出土土器はすべて施文技法8の撚糸文を地文にするものである。撚糸の太さ、胎土、焼成などから2～3個体に分けられそうである。1～4、6～8、15及び5、9～12、16、17は各々同一個体のものとみられるもので、13、14はどちらのものかは良くわからないもの。基本的には、すべて厚さ1.1～1.5cmと比較的厚手で繊維の含有量が少ない粗製のものである。胎土には、砕け散ったような極く細かい白色鉱物がみられ、量的には少ないが石英砂を含む。



第67図 第23号堅穴住居跡出土遺物



第68图 第24号竖穴住居跡



第69图 第24号竖穴住居跡出土遺物

第25号竪穴住居跡（第70図）

重複関係

第22号竪穴住居跡の南東側に位置し、第7号土壇跡と重複するが、遺構検出の段階で掘りすぎてしまったため新旧関係は確認できなかった。

平面形

平面形は、不明であるが一部残存する北壁の状況から推定すれば、北壁の中央部が張り出すような形態となっており、不整な楕円形～円形を呈すものである。

規模

規模は、残存部分において、長軸3.0m、短軸1.0m以上をはかる。壁は、床面からほぼ直に立ちあがり、壁高は0.20mを残す。

埋土

埋土は、暗褐色土を基本土とするA層が堆積する。A層は、更にA₁層、A₂層に細分される。A₁層は、やや暗い暗褐色土の粘質土を基本土とし褐色～黄褐色土を粒塊状に含む。固くしまっている。A₂層は、A₁層に比べて明るい暗褐色の粘質土を基本土とし褐色～黄褐色土を塊状に多く含む。固く比較的しまっている。A₁層、A₂層とも炭化物粒などはほとんど混入せず、遺物も出土しない。

床面

床面は、地山面をそのまま利用しており貼付などは認められなかった。床面自体は、ほぼ平坦で非常に固くしまっている。

竪穴には、炉跡や柱穴、ピットなどは確認できなかった。

当竪穴からは、全く遺物は出土しなかった。

第7号土壇跡（第70、71図 図版49）

第25号竪穴住居跡と重複するが、遺構検出の段階で掘りすぎてしまったために新旧関係は確認できなかった。

平面形

平面形は、掘りすぎにより南壁を壊してしまったが、残りの状況から楕円形状を呈すものである。

規模

規模は、推定で長軸1.55m、短軸1.30m以上をはかる。

壁は、北壁側では底面からやや傾斜をもち立ちあがるが、西壁、東壁側は、底面からほぼ直に立ちあがる。壁高は、北壁側で0.35mを残す。

埋土

埋土は、A層、B層、C層に大別される。A層は、暗褐色の砂質土を基本土とし黄褐色～褐色の粘質土を粒～小塊状に含み、自然礫や遺物を混入する。非常に固くしまっている。B層は、褐色土を基本土とし、B₁層、B₂層に細分される。B₁層は、やや明るい感じの褐色の砂質土を基本土とし黄褐色土を小塊状に含む。少量ながら炭化物粒や焼土を混入し、自然礫や遺物を含む。固くしまっている。B₂層は、B₁層に比べて暗い褐色の砂質土を基本土とし、黄褐色土の混入も少なく、固くしまっている。C層は、壁際に堆積するもので明るい褐色の砂質土を基本土とし、黄褐色土を塊～小塊状に多量に含むが、遺物はほとんど混入しない。比較的固さはあるが、しまりを欠く。

底面

底面は、ほぼ平坦で幾分南側へ傾斜する。第25号竪穴住居跡の床面とほぼ同じ位のレベルである。底面自体は、固くしまりをもつ。

遺物は、第71図に示す通りである。ほとんどがA層中から出土したもので、土器はあまり出土しなかった。

第71図1は、施文技法2の結束する羽状縄文を施文するもの。器内面側が剥落している。羽状縄文は、節径が細かく短い原体を使用している。胎土中には、比較的多く繊維を含むが、繊維以外の混入物は少ない。焼成自体は、比較的良く硬質な感じがする。2は、施文技法7の縄文を施文するもの。胎土中には、繊維を比較的多く含むが、繊維は短かく細かいものである。また、繊維以外には、石英砂、粗砂を含むが、量的には極めて少量である。3は、施文技法6bの斜縄文を施文するもの。胎土は、2に類似し細かく短い繊維を含む。繊維以外の混入物は極端に少なく、ほとんど認められず、ち密なものである。焼成も非常に良好で硬質である。

土器

4～7は、剥片石器である。4、5は石鏃。4は、二等辺三角形の形態を呈すもので、基部が凹基となる。先端部が急に細くなり尖る。調整剥離は、両面とも細かいが背面中央部に自然面を残す。先端部の調整剥離は特に入念である。5は、やや縦長な二等辺三角形の形態となるものである。全体的に細身で、基部幅1.6cmをはかる平基なもの。中央部から基部にかけての一部にアスファルト状の付着物がみられ、着柄剤の一部と考えられる。6、7は、いずれも縦形の石匙。6は、刃部の両側縁部がほぼ直線的で長方形の形態を呈すもの。つまみ部分は両面からの入念な剥離調整で作り出されている。刃部の両側縁も入念な剥離だが、一方の側縁部は両面から細かい調整剥離を施し両刃状に調整している。7は、つまみ部分が刃部の主軸線に対し、やや傾くものである。刃部は、一方の側縁部が大きく湾曲するものである。湾曲す

石器



第70図 第25号竪穴住居跡、第7号土坑跡

る側縁部には、片面からのみ細かい調整剥離を施し片刃状に調整している。背面の剥離は、かなり大まかなものである。

第26号竪穴住居跡（第72～77図 図版24～25、50～52）

調査区の西南部に位置する。

平面形

平面形は、北東、北西隅の状態からほぼ方形～長方形の形態を呈するものと推定されるが、西壁の一部に小さな張り出しがある。

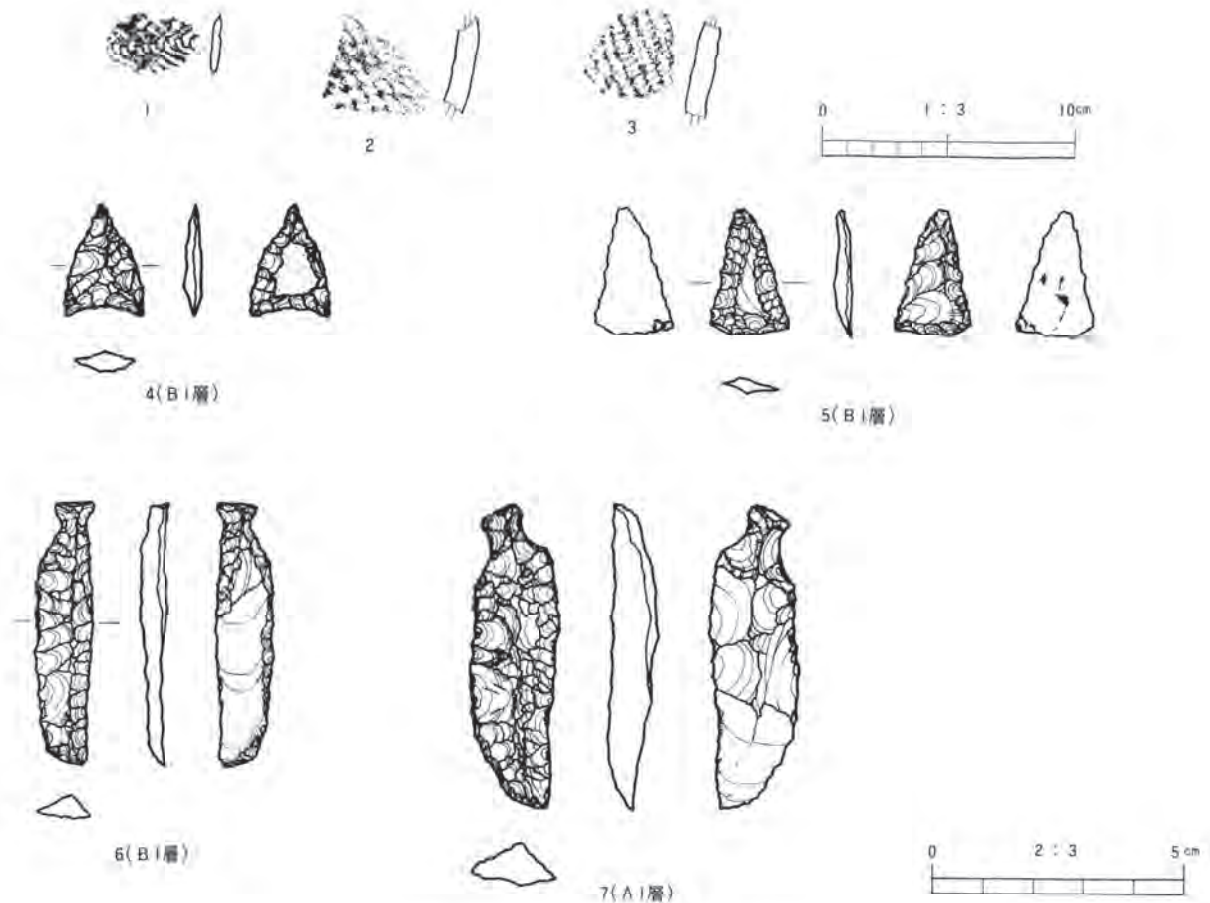
規模

規模は、残存部分で長軸6.42m、短軸3.50m以上をはかる比較的大きな竪穴である。

壁は、やや傾斜をもつが直線的に立ちあがる。壁高は、北壁側で0.40mを残す。

埋土

埋土は、A層、B層、C層、D層、E層に大別される。A層は、A₁～A₅層に細分される。A₁層は、焼土をブロック状に多量に含む暗褐色砂質土を基本土とし固くしまっている。A₂層は、やや暗い暗褐色土を基本土とし、砂粒や礫の砕けた粒が多量に含まれる。比較的固くしまっている。A₃層はやや明るい暗褐色土を基本土とし、細かい炭化物粒を多く含む。A₄層、A₅層は、暗褐色～黒褐色系の砂質土を基本土とし褐色土塊を含み、多量の中～小礫をブロック状に混在し、炭化物粒も多く含む比較的固くしまっている。A₁～A₅層までのA層は、かなりの部分が人為的に堆積したものと考えられる。B層は、B₁、B₂層に細分される。B₁層は、粘性のあるやや明るい褐色粘質土を基本土とし黄褐色砂質土が混入する。固さはあまりないが、比較的しまっている。B₂層は、褐色粘質土を基本土とし固くしまっている。B₁、B₂層のB層中に



第71図 第7号土坑跡出土遺物



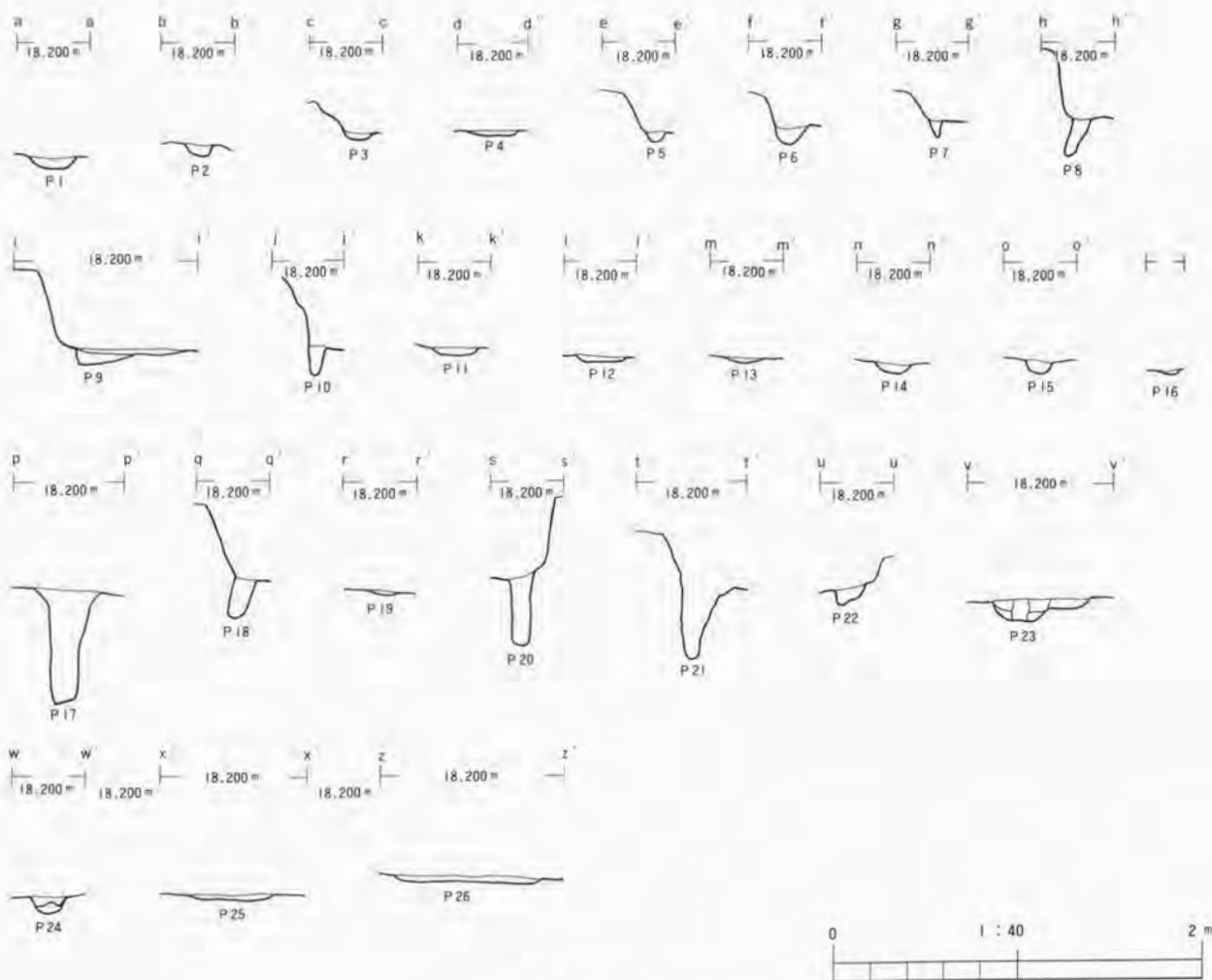
第72図 第26号竪穴住居跡

は、多量の土器などの遺物が含まれる。C層は、C₁、C₂層に細分され、東壁付近に堆積する。C₁層は、暗褐色土を基本土とし、褐色～黄褐色の粘性のある土が粒塊状に混入する。固くしまっており、炭化物粒、焼土粒などを含む。C₂層は、明るい暗褐色土を基本土とし、非常に固く良くしまっている。D層は、西壁の小さな張り出し部分から西壁際床面上に堆積する。明るい褐色砂質土を基本土とし、暗褐色土を塊状に含み比較的固くしまっている。E層は、床面のほぼ全域を覆う。非常に粘性の強い黒褐色土を基本土とし、きれいな黄褐色粘質土を塊状に含む。やわらかくあまりしまりが無い。

床面は、凸凹の少ないほぼ平坦面で固くしまっている。また、床面上には、炉などの施設は確認できない。

床面

柱穴状のピットは、P₁～P₂₆まで検出した。これらのうち、P₉、P₂₅、P₂₆は浅い皿状のピットで柱穴にはならない。P₁₇は、床面のほぼ中央部に位置し長径0.35m、深さ0.62mをはかる楕円形の深いものである。P₃、P₅～P₈、P₁₀、P₁₅、P₁₈、P₂₀～P₂₂は、長径が0.10～0.25m強の比較的小規模なもので西～北～東壁際沿いにめぐり、鉛直方向から竪穴内部方向に向かうものである。また、P₁₇付近（スクリントーン部分）には、炭化材や炭化物塊が分布し、長さ0.42m、幅0.06m、厚さ0.03～0.04mをはかる炭化材が床面に貼りつくように検出している。



第73図 第26号竪穴住居跡断面図

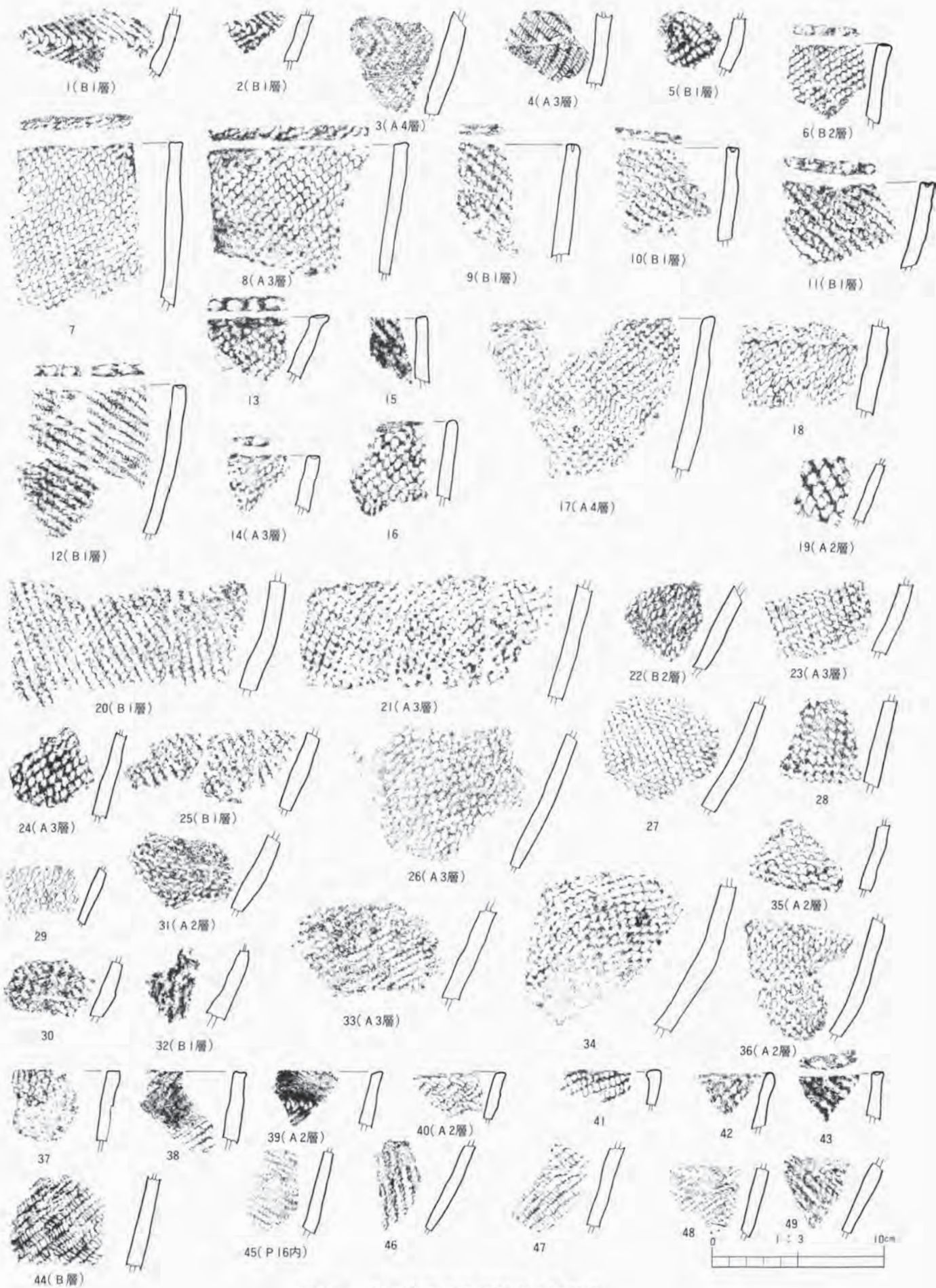
遺物は、B層中からの出土が比較的多い。土器は、すべて繊維を含むもので、全体的には、施文技法7の縄文が施文されたものが多い。

第74図1～5、39は、羽状縄文を施文したもの。1と2は、B層上面から出土したもので同一個体片と思われる。短かくて細い原体を使用し、施文技法2の結束する羽状縄文を施文しており、繊維の含有量は少なく胎土中の混入物も少ない。焼成は良く、かなりしっかりとしたものである。3、4は、施文技法3bの結束しない羽状縄文を施文したもの。3は、施文の羽状縄文と羽状縄文の間を区画するような擦痕状の横ナデ?がみられる。胎土中には、比較的多く石英砂を含む。4は、異なる原体を用いた羽状縄文で、繊維を多く含む胎土中には、細かい白色鉱物を多く含む、石英砂はあまり多くない。5は、条と条の間隔が広く施文技法3cによる羽状縄文と思われる。39は、磨滅が著しくはっきりとしないが、施文技法2の結束する羽状縄文を口縁部上端から施文した口縁部の破片。口唇部は内削ぎに整形している。繊維の含有量は多く胎土中の混入物も非常に多く、黒色の鉱物が多く認められる。

6～36は、施文技法7の縄文が施文されるもの。6～17は口縁部片。6は、口唇部を平坦に整形し、指頭圧痕を施すものである。器内面は凸凹が著しい。7、8は、口唇部上面に回転縄文を施文したもので、どちらにも器外面に煤状の炭化物の付着が認められ、繊維の混入量も多い。また、7の胎土中には、わずかであるが金雲母が含まれている。9は、口唇部上面に板状のような肉厚の薄い工具による刺突文が施される。10～12は、口唇部上面に半截竹管による刺突文を施すものだが、10は、凸面を器内面側に11、12は器外面側にして刺突文を施文している。9～12の胎土中には、繊維の混入量は少なめで繊維以外の混入物が非常に多くなる。13は、口唇部を内削ぎに整形し、口縁部上端がひさし状に大きく突き出る。口唇部上面には、指頭圧痕もしくは半截竹管の凸面を軽く押しあてた様な圧痕文が施される。繊維の含有量が極端に少なく、繊維以外の混入物もあまり多くない。14は、口唇部上面に指頭圧痕を施すもの。15は、口唇部を平坦に整形しただけのもので、口唇部上面には何も施文しない。16は、口唇部に手を加えず、そのまま丸味をもってぬける。繊維の含有量が多いが、他の混入物は少なくなる。17は、口唇部を内削ぎに整形し上面に何も施文しない。繊維及び他の混入物も多く、胎土中には金雲母が含まれる。以上の16を除く口縁部片は、すべて口縁部上端より地文として施文技法の7による縄文を施文した後に、口唇部頂部を整形したり刺突などを施したりしている。18～36は体部から底部近くにかけての破片。18は、器外面に小さな段差がみられる。19は、比較的大きめな節となる原体を用いているもの。20は、かなり底部に近い破片と思われるもの。21、24、26、30は、1つ1つの節や条の方向などが不明瞭なもの。23は、複節の原体を用いたものか。以上の体部片は、繊維の混入量の多いもの(21、31)と少ないもの(19、24、26、27、29、33、35、36)があり、繊維以外の混入物も繊維の多さに比例する傾向がみられる。また、胎土中に金雲母を含むもの(24、26、31～33、36)がある。

37は、口縁部上端に施文技法4のループ文がみられるもの。口唇部は平坦に整形されている。

38、40～42、44～54は、施文技法6の斜縄文を地文にするもの。38は、口唇部頂部を平坦に整形し上面に指頭圧痕を施す。口唇部外面には、小さくひさし状に粘土が突き出る。器外面には煤状の炭化物が付着する。胎土中には多量の繊維を含むが、それ以外の混入物は極端に少ない。40は、口唇部上面に円形の刺突文を施すもので、口唇部断面は内削ぎとなる。焼成も良く



第74図 第26号竖穴住居跡出土遺物①

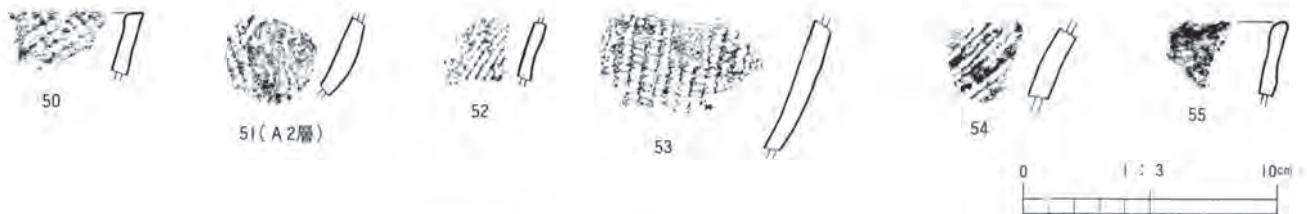
石器

胎土はち密で硬質な感じがする。41、42は、口唇部上面に何も施文せず口唇部断面は、やや丸味をもつ。どちらも繊維の含有量は少ない。45は、P₁₀埋土中から出土したもので、細かい節となる原体を用いている。46は、斜縦文であると思われるが、撚糸文であるかもしれない。51は、底部に近い破片で、底部形態は尖底～丸底風を呈するものと推定される。52は、薄手のもので色調がくすべ色を呈し非常に硬い。胎土中には繊維及びそれ以外の混入物は少ない。

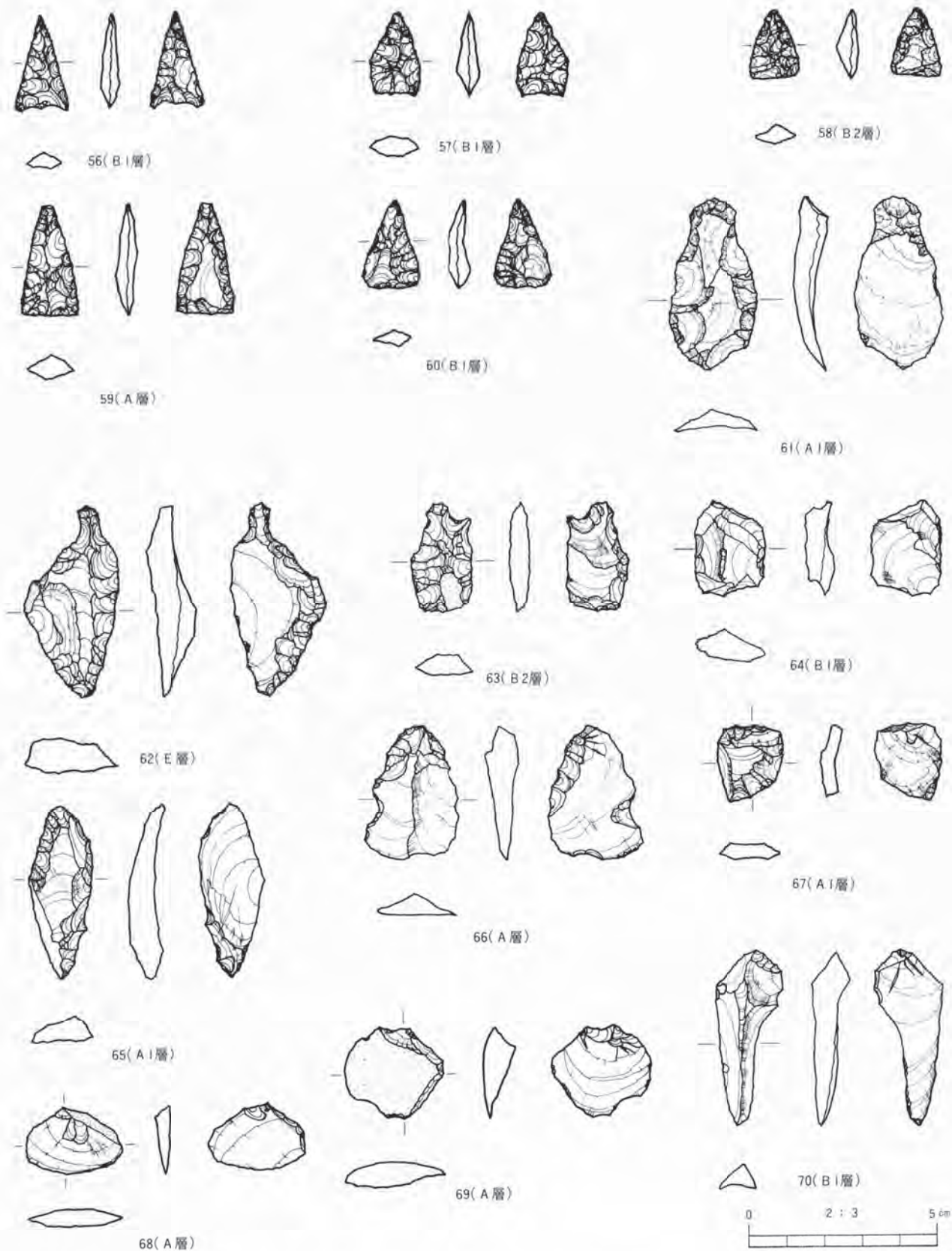
第76図56～70は剥片石器。56～60は石鏃。基部は、凹基ぎみを呈す56以外はすべて平基となる。57は、左右非対称のもので、60は下半部が膨らみ加減の形態となり、それ以外は、三角形の形態を呈す。61～63は縦形石匙。61は、つまみ部分以下の両側縁部が湾曲し刃部下半が一方へ大きく屈曲する形態となる。剥離調整は大まかで、つまみ部分作り出しも不明瞭である。背面も、つまみ部分以外は第1次剥離面をそのまま残す。62は、つまみ部分が小さく、刃部が一方の側縁に頂点をもつ三角形の形態を呈す。三角形頂部の一部に自然を残す。刃部は、両側縁部を各々別の面からのみ剥離を施す片面調整のものである。63は、形態的に石匙といえるものか判別しかねたが、つまみ状の作り出しが認められるため石匙と判断したものである。64～70は、剥片を利用した不定形な削器・搔器類。

第77図71は、今回の調査で出土した唯一の磨製石斧。刃部幅が広がる撥形の形態を呈す。器面は、一部に整形による？敲打痕を残すが全体的には丁寧に研磨され、特に、刃部は入念で蛤刃状の刃部である。両側縁部には、大まかな剥離がみられるが、使用時にできたものと考えられる。

72～76は、打製の石器。72、73は背面に自然面を残す石斧。72は、刃部先端の一部を欠くが、楕円形状の形態となるものである。基部を除く側縁から刃部にかけて調整の剥離を施し、背面の自然面はそのままに残す。73は、基部を大きく欠く。背面の大きな剥離は欠損時にできたものと思われる。74、75は、自然礫の一端を打ち欠き片刃の刃部を作り出した半円状の礫器。どちらも、比較的鋭い刃部をもちチョッパー的な機能をもつ石器と考えられる。76は、長楕円形の自然礫の一端を両面から打ち欠き両刃状の刃部を作り出している。機能的には、74、75と同じ様に、チョッパー的なものが考えられる。



第75図 第26号豎穴住居跡出土遺物②



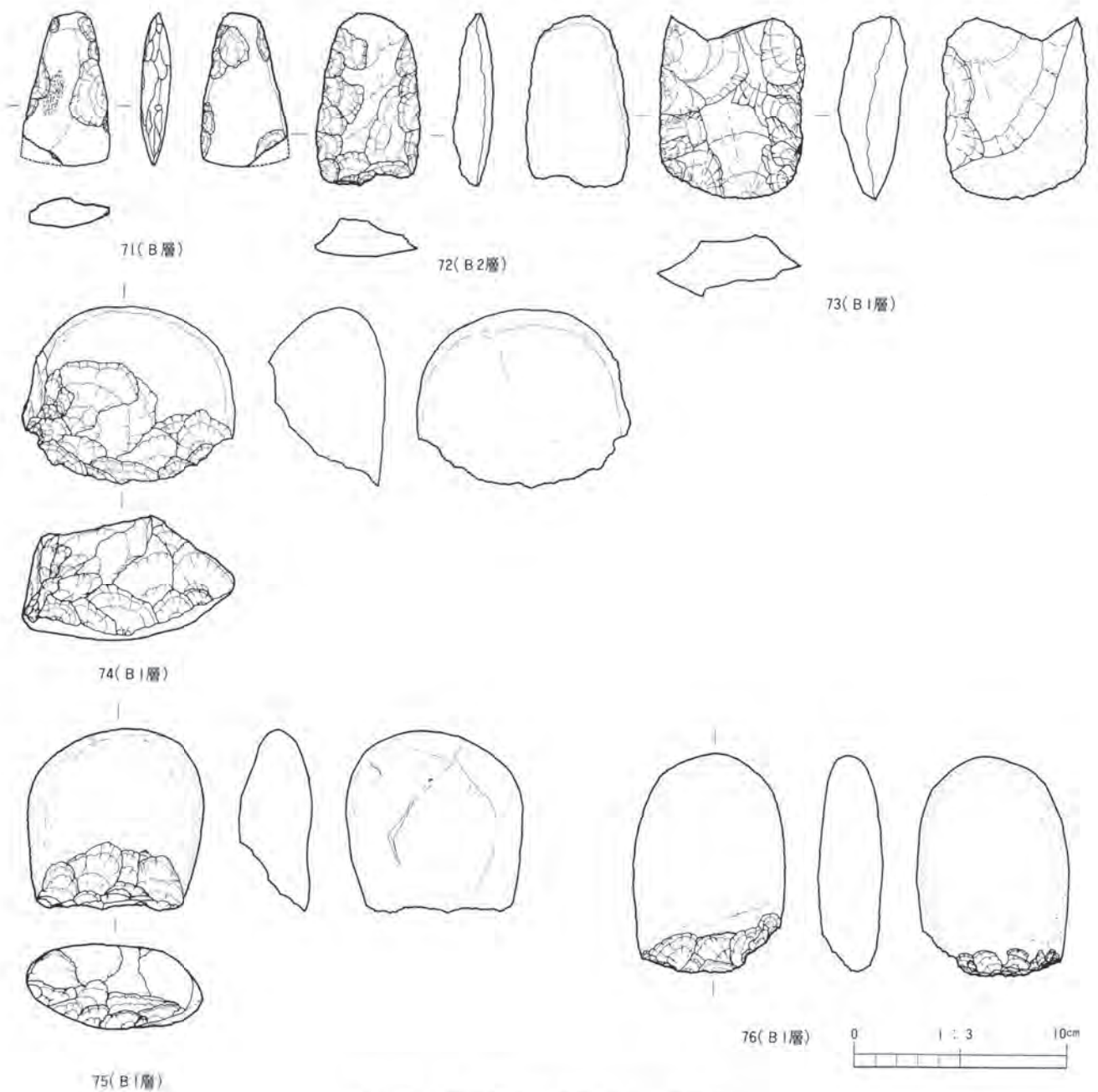
第76図 第26号竖穴住居跡出土遺物③

第27号竪穴住居跡（第78～83図 図版26～28、52～54）

調査区の西南部、第26号竪穴住居跡の東南側に位置する。今回の調査においては一番低位のレベルに存在するものである。

平面形 平面形は、ほぼ方形を呈するもので、規模は、長軸2.85m、短軸2.42mをはかる。完結した平面形をもつもの。壁は、北・南・東壁はほぼ直にたちあがるが、西壁はやや傾斜をもって立ちあがる。壁高は、北壁で0.50mを残す。

埋土 埋土は、大きくA層とB層に分けられる。A層は、A₁層・A₂層に細分される。A₁層は、暗褐色の粘質土を基本土とし、黒褐色土が塊状に混入する。炭化物粒や砂礫を多く含み、固くしまっている。A₂層は、明るい暗褐色土を基本土とし、褐色～黄褐色の砂質土が粒塊状に混入する。固くしまっており、炭化物粒を含むほか、土器片などの遺物を多く出土した。B層は、



第77図 第26号竪穴住居跡出土遺物④

B₁、B₂層に細分される。B₁、B₂層とも褐色の砂質土を基本土とし、黄褐色の砂質土を粒塊状に含み比較的固くしまっている。遺物は、B₁層ではわずかに出土するが、B₂層になるとほとんど出土しなくなり、A層と比べると極端に減る。

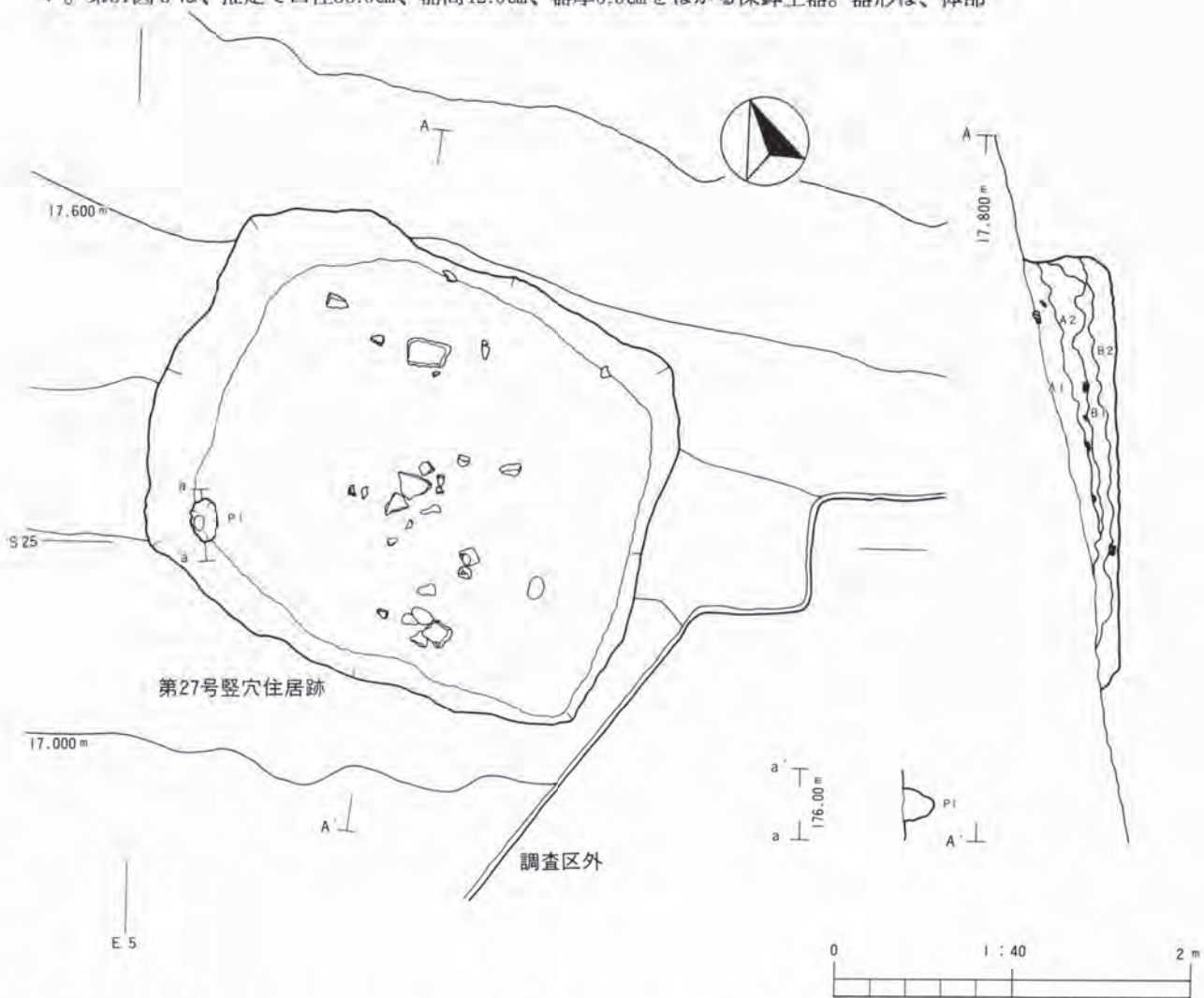
床面は、平坦で固くしまる。

柱穴状のピットは、南西隅にP₁の1個だけを検出した。床面からの深さ0.18mをはかる小規模なもので、埋土は堅穴B層と同じものである。

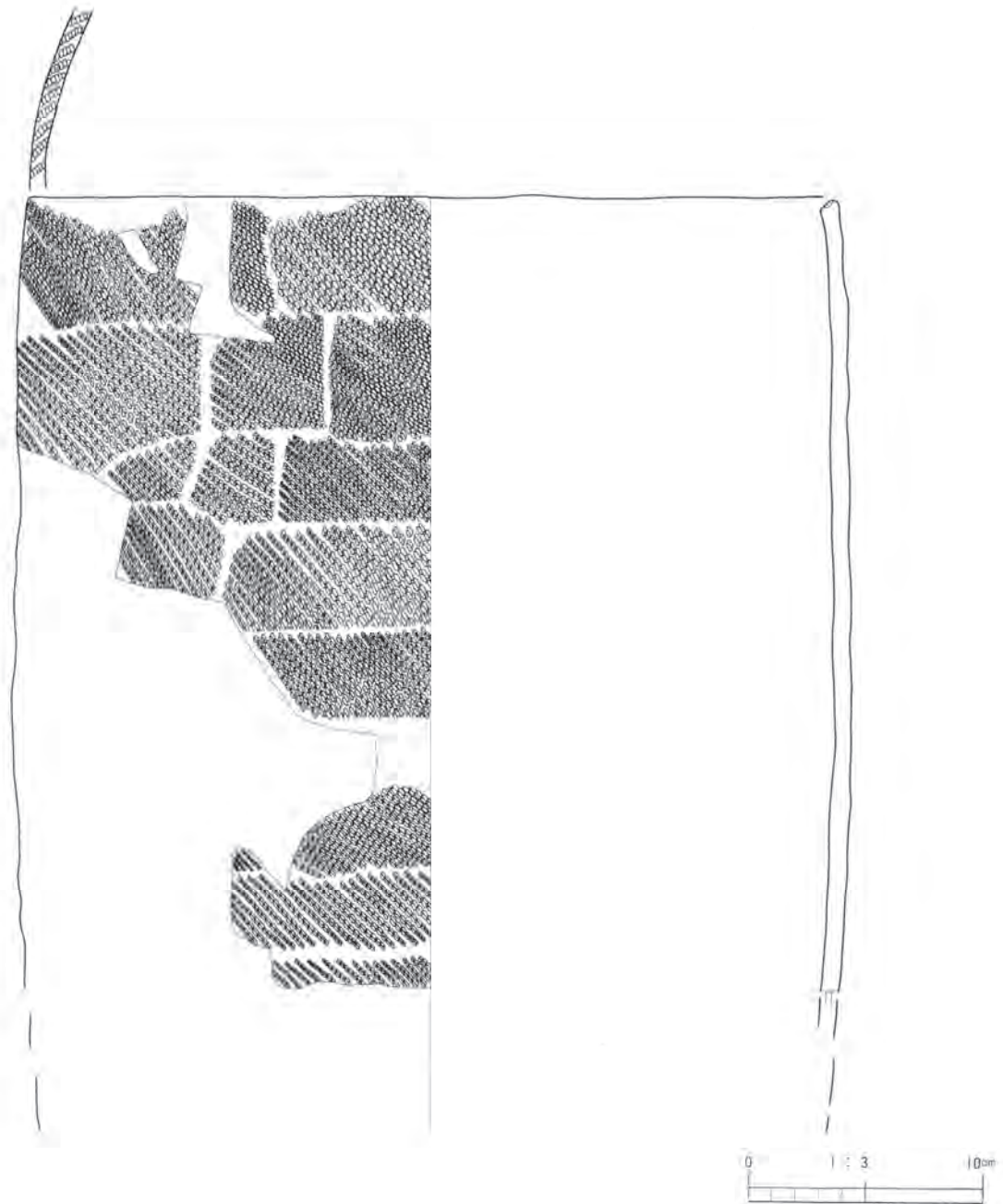
遺物は、A₂層を中心に出土した。第79図1は、推定で口径36.5cm、器高70.0cm、器厚1.0cmをはかる尖底深鉢土器と推定される。口唇部の頂部は、平坦に整形され上面には、回転縄文を施す。口縁部上端から体部全面にかけて施文技法7の複節縄文を横位に回転させ施文している。体部に縄文を施文した後に、口唇部の整形を行っている。胎土中の繊維の含有量は多く、繊維以外にも白色鉱物や石英砂、粗砂などを比較的多く含む。焼成は比較的良好で比較的硬質なもの。第80図3は、推定で口径16.0cm、器高15.0cm、器厚0.65cmをはかる小形の土器。口縁部は小波状となり、底部は尖底～丸底風となるもの。口唇部の頂部は平坦に整形、上面には縄文が施される。口縁部上端から体部にかけては、施文技法6bの斜縄文を施文するが、あまり深く施文せず明瞭でない。繊維は細かいものが比較的多く含まれるが、繊維以外の混入物は多くない。第81図3は、推定で口径36.0cm、器高42.0cm、器厚0.9cmをはかる深鉢土器。器形は、体部

床面

土器

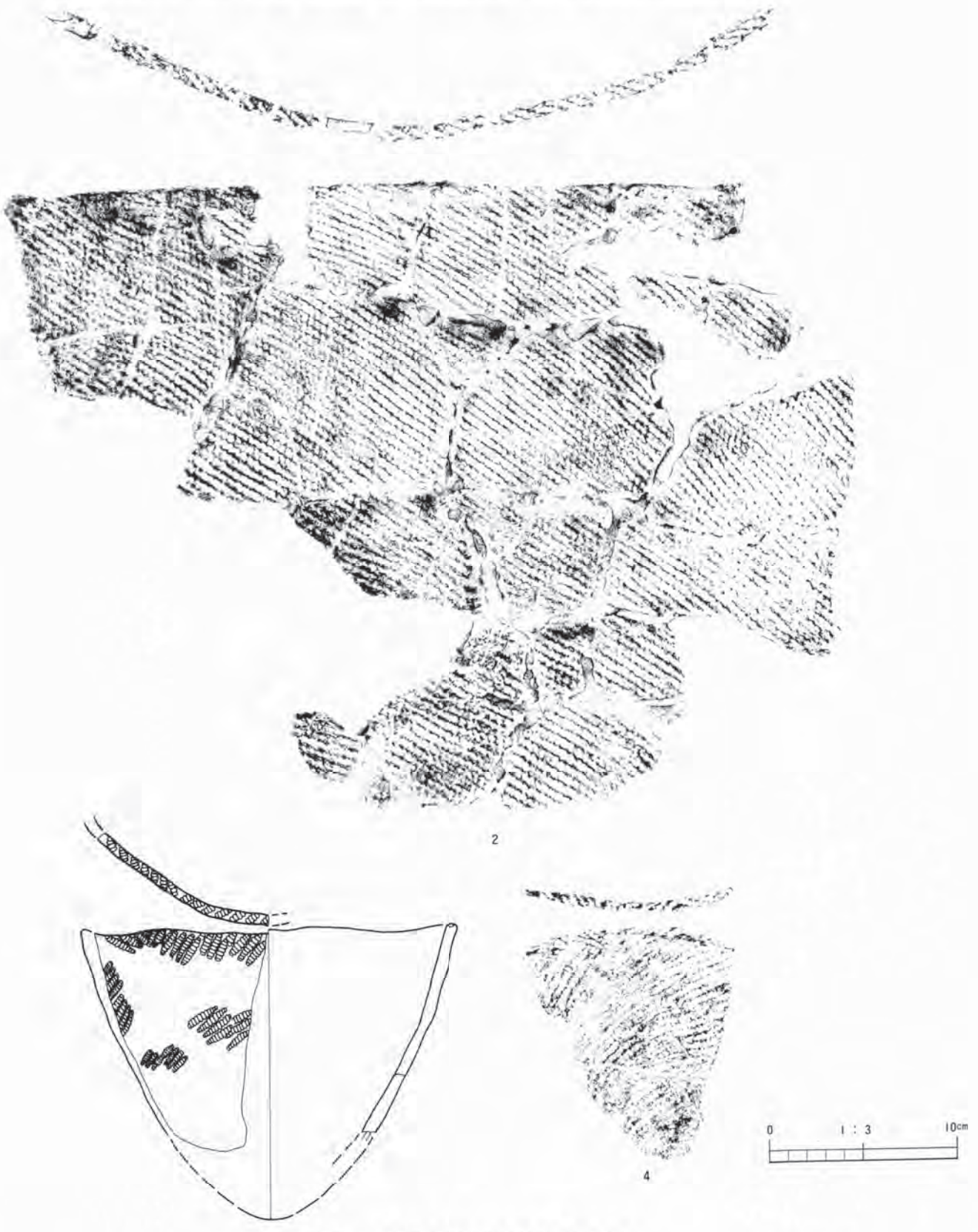


第78図 第27号竖穴住居跡

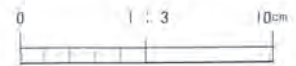
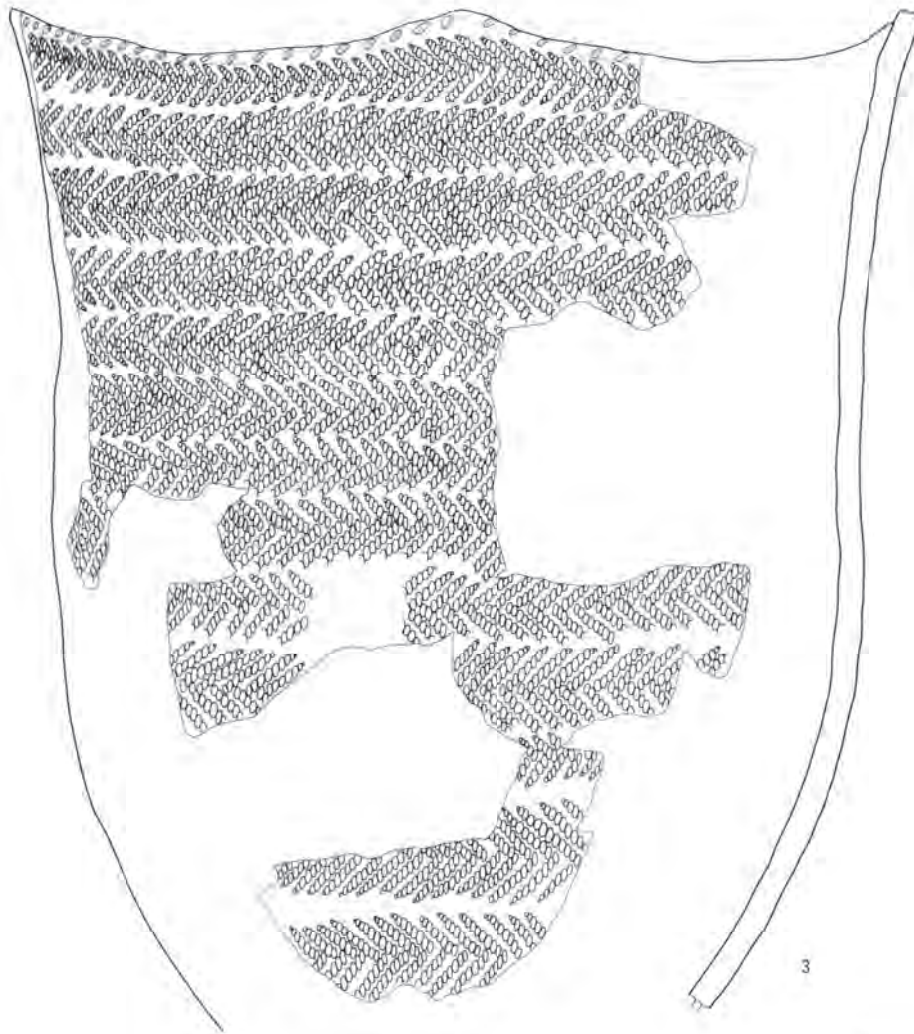


第79図 第27号竖穴住居跡出土遺物①

中半がやや膨らみ口縁部から体部にかけては、施文技法2の結束する羽状縄文を施文する。比較的条が短かく節径の小さな原体を用いている。結束部は明瞭に残る。繊維は、細かいものが多く混入する。繊維以外の混入物も粗砂や白色鉱物など比較的多い。以上の1～3は、埋土のA層中から出土したものである。第82図5は、口唇部を欠くだけのほとんど口縁部と思われる



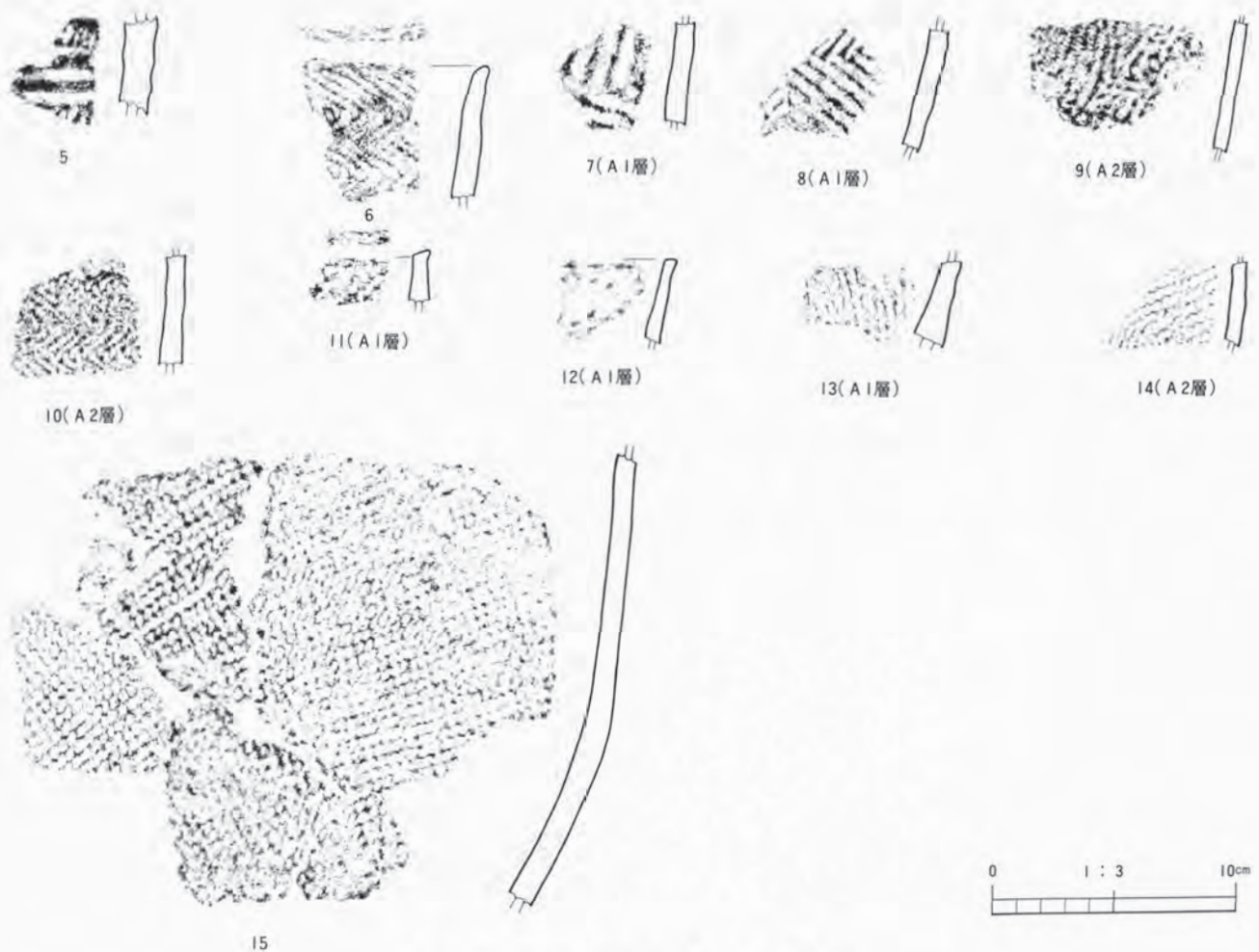
3 第80図 第27号竖穴住居跡出土遺物②



第81図 第27号竖穴住居跡出土遺物③

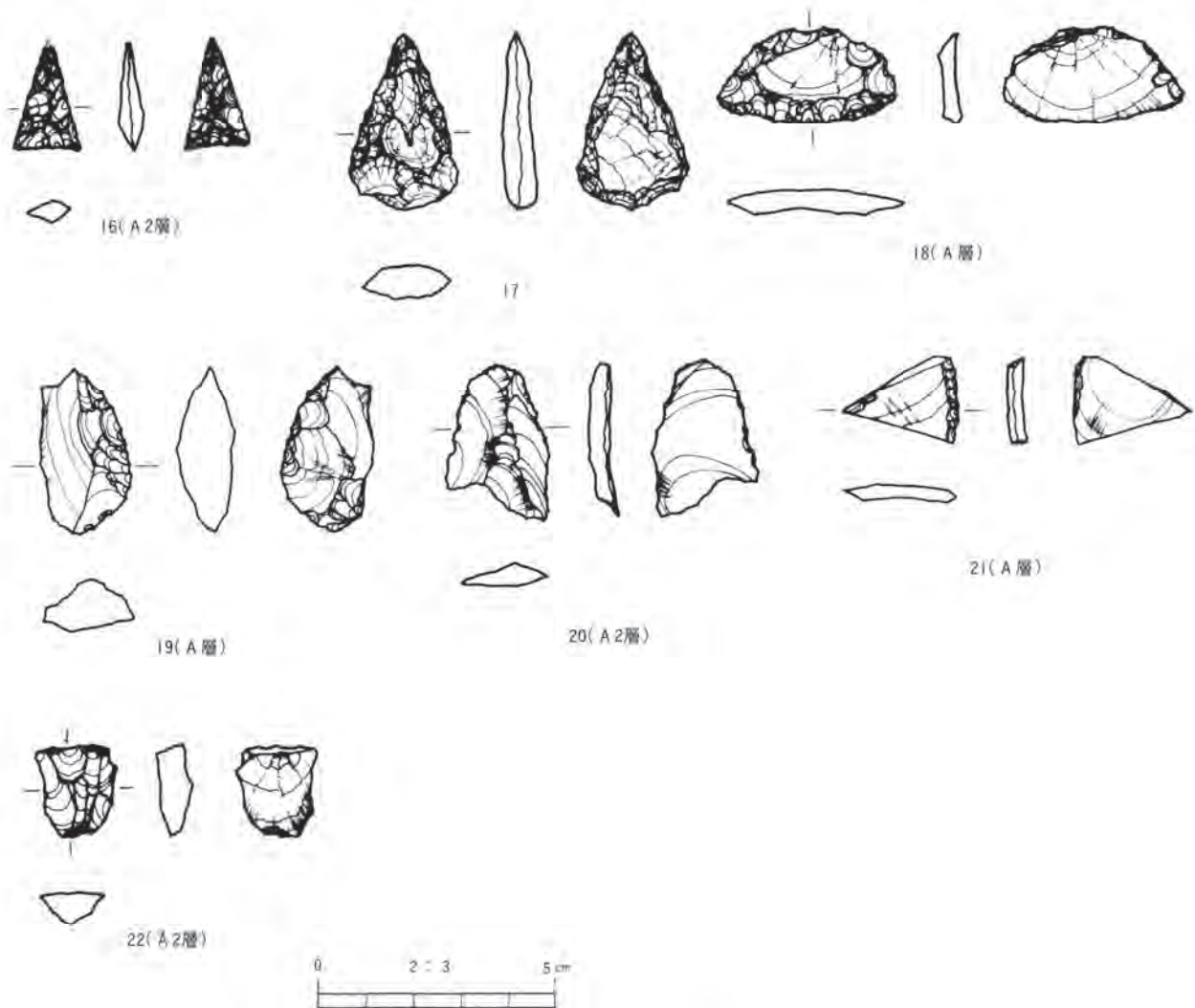
る破片。上下にやや斜位に連続する刻目を施し、その間に施文技法1の原体圧痕文を平行に3条施文する。器厚1.4cmと厚手なもの。繊維の含有量は少ない。6は、口縁部上端から施文技法2の結束する羽状縄文を施した口縁部の破片。口唇部断面は平坦で上面には、長い植物繊維を入れる。胎土中の繊維の含有量が多いが、短いものである。繊維以外にも粗砂や石英砂を含む。7は、施文技法3aの羽状縄文を施文する。節径の大きい原体を用いる。焼成や胎土などは、5に類似する。8は、施文技法3の結束しない羽状縄文を施文し、格子状になるものか。胎土には、繊維のほか粗砂、石英砂を含む。焼成は良好である。9、10は、施文技法2の結束する羽状縄文を施文したもの。11は、口縁部の小破片。口唇部は、内削ぎに整形され外面がひさし状に突き出る。繊維の含有量が多いが、繊維以外の混入物は極端に少ない。12は、器厚0.55cmと薄手な口縁部片。口唇部は平坦でやや外面がひさし状に突き出る。施文技法13の組紐状の文様を施文するもの。13は、施文技法8の撚糸文を施文したもの。胎土中には小石、粗砂が多くみられる。14は、施文技法7の縄文を施文したもの。器厚0.6cmと薄手。繊維以外の混入物は少ない。胎土は、ち密で焼成も良い。15は、施文技法7の縄文を施文した体部の大破片。胎土中の繊維の含有量は比較的多く、粗砂、石英砂を含む。

第83図16~22は剥片石器。16は、二等辺三角形の形態となる石鏃。両面とも入念な調整 石器



第82図 第27号竪穴住居跡出土遺物④

剥離で特に先端部は丁寧である。17は、基部が半円状となる尖頭器と思われる。縁辺部～先端部を中心に細かく剥離調整を施し、中央部に第1次剥離面を残す。18～21は、剥片の縁辺を利用した削器・搔器の類。22は、楔形石器（ピエス・エスキーユ）である。下端の機能部には、細かい剥離がみられる。



第83図 第27号竪穴住居跡出土遺物⑤

第28号竖穴住居跡（第84図 図版29）

調査区の中央部に位置する。元々は、第29号竖穴と重複していたと考えられる。

平面形は、長方形～方形を呈すものと推定される。

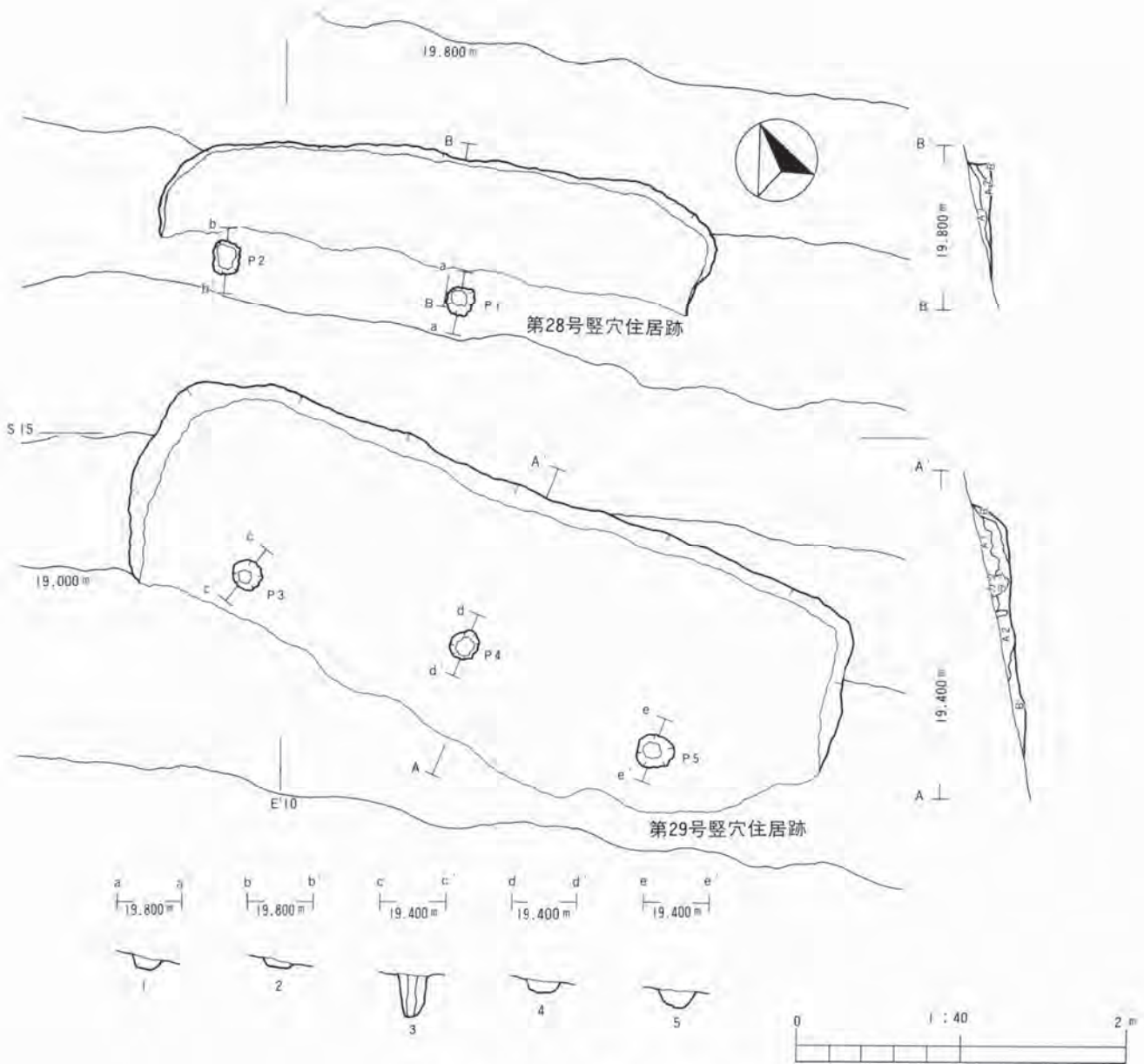
平面形

規模は、残存部分で長軸3.35m、短軸0.70m以上をはかる。壁は、床面からほぼ直に立ち上がり、壁高は北壁で0.15mを残す。

規模

埋土は、A層とB層に分かれる。A層は、A₁、A₂層に細分される。A₁層は、暗褐色の砂質土を基本土とし多量の砂粒を含み砂っぽい。比較的固くしまっている。A₂層は、やや明るい暗褐色土を基本土とし、やはり砂粒を多く含む。B層は、壁際付近にのみ堆積するもので、褐色土を基本土とし、褐色～黄褐色砂質土を塊粒状に混入する。比較的固くしまっている。

埋土



第84図 第28、29号竖穴住居跡

床面

床面は地山面をそのまま利用するもので、耕作の影響によるものと考えられる凸凹以外は、ほぼ平坦な面で、固くしまっている。

柱穴状のピットは、床面上からはずれて少し南側の地山面上にP₁、P₂の2ヶ所を検出した。いずれも深さ0.10m弱の浅いものである。

当堅穴の埋土中からは、遺物はまったく出土しなかった。

第29号堅穴住居跡 (第84図 図版29)

第28号堅穴住居跡のすぐ南側に位置する。

平面形

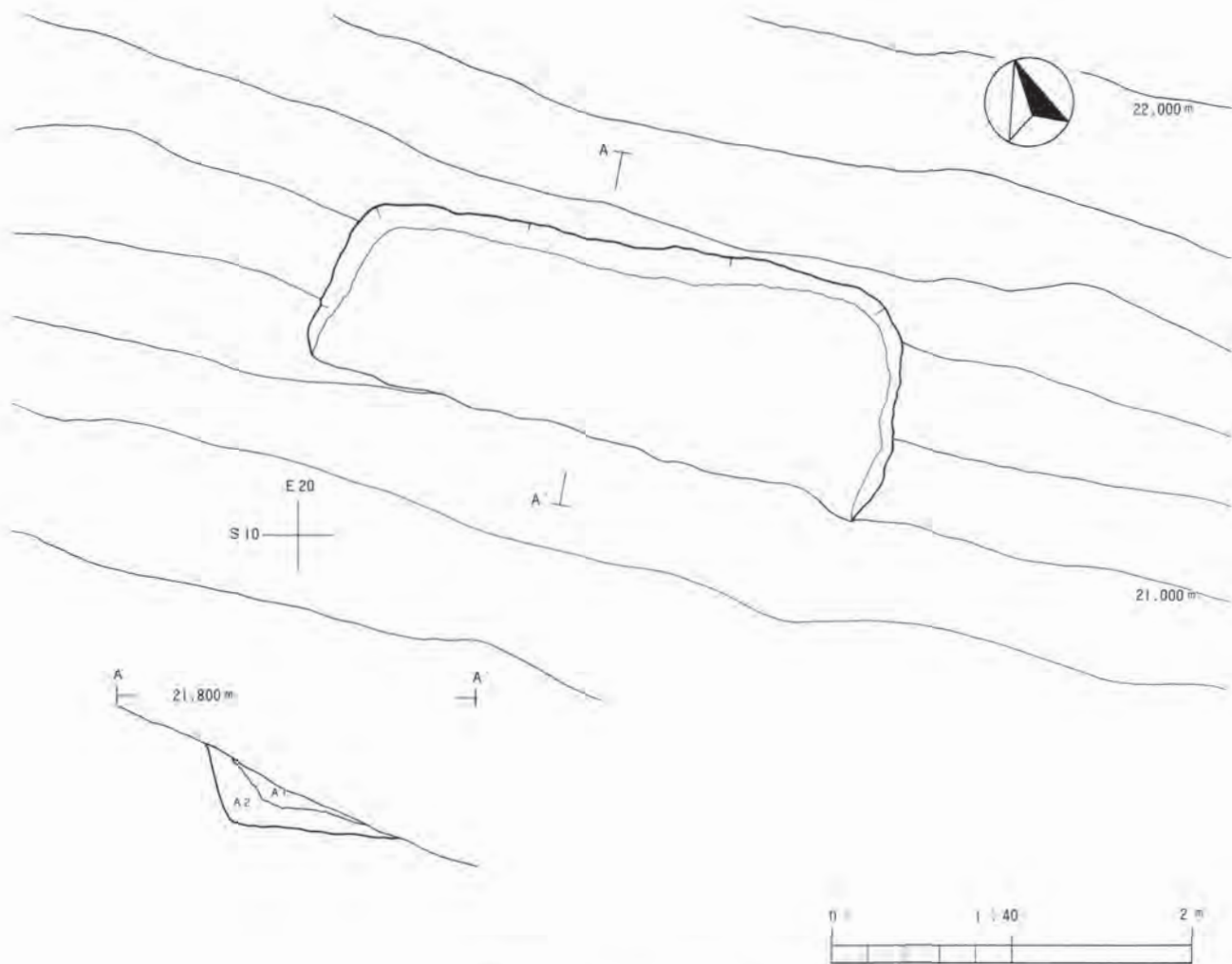
平面形は、長方形～方形を呈するものと推定される。

規模

規模は、残存部分で長軸4.55m、短軸1.70m以上をはかる。壁は、床面から約45度くらいの傾斜で立ち上がる。壁高は、北壁側で0.22mを残す。

埋土

埋土は、大きくA層とB層に分けられる。A層は、A₁、A₂層に細分される。A₁層は、黒褐色土を基本土とし、少量の炭化物粒を含む。固くしまっている。A₂層は、黒褐色土を基本土とし比較的固くしまっている。B層は、褐色土を基本土とし黄褐色砂質土を塊粒状に混入する。比較的固くしまっている。



第85図 第30号堅穴住居跡

床面は、地山面をそのまま利用するもので、平坦に固くしまる。床面

柱穴は、P₃～P₅の3ヶ所検出した。ほぼ一直線上に並ぶ。P₃は、柱アタリ痕跡の認められるもので床面からの深さ0.25mをはかる。P₄、P₅は、床面からの深さ0.10m弱の浅いピットである。遺物は出土しない。

第30号竪穴住居跡（第85図）

調査区の東側に位置する。

平面形は、方形～長方形を呈するものと推定される。平面形

規模は、残存部分で長軸3.25m、短軸1.15m以上をはかる。壁は、やや傾斜をもちながら立ちあがり、壁高は北壁で0.45mを残す。規模

埋土は、A層から成り、A₁、A₂層に細分される。A₁層は、やや粘性のある黒褐色土を基本土とし、炭化物粒や自然礫を多めに含む。比較的固くしまっている。A₂層は、やや明るい黒褐色土を基本土とし、褐色～黄褐色の砂質土を粒塊状に含む。比較的固くしまっている。埋土

床面は、ほぼ平坦で地山面をそのまま利用する。床面

遺物は、出土しなかった。

第31号竪穴住居跡（第86、87図 図版29、30、54、55）

調査区の東側に位置する。

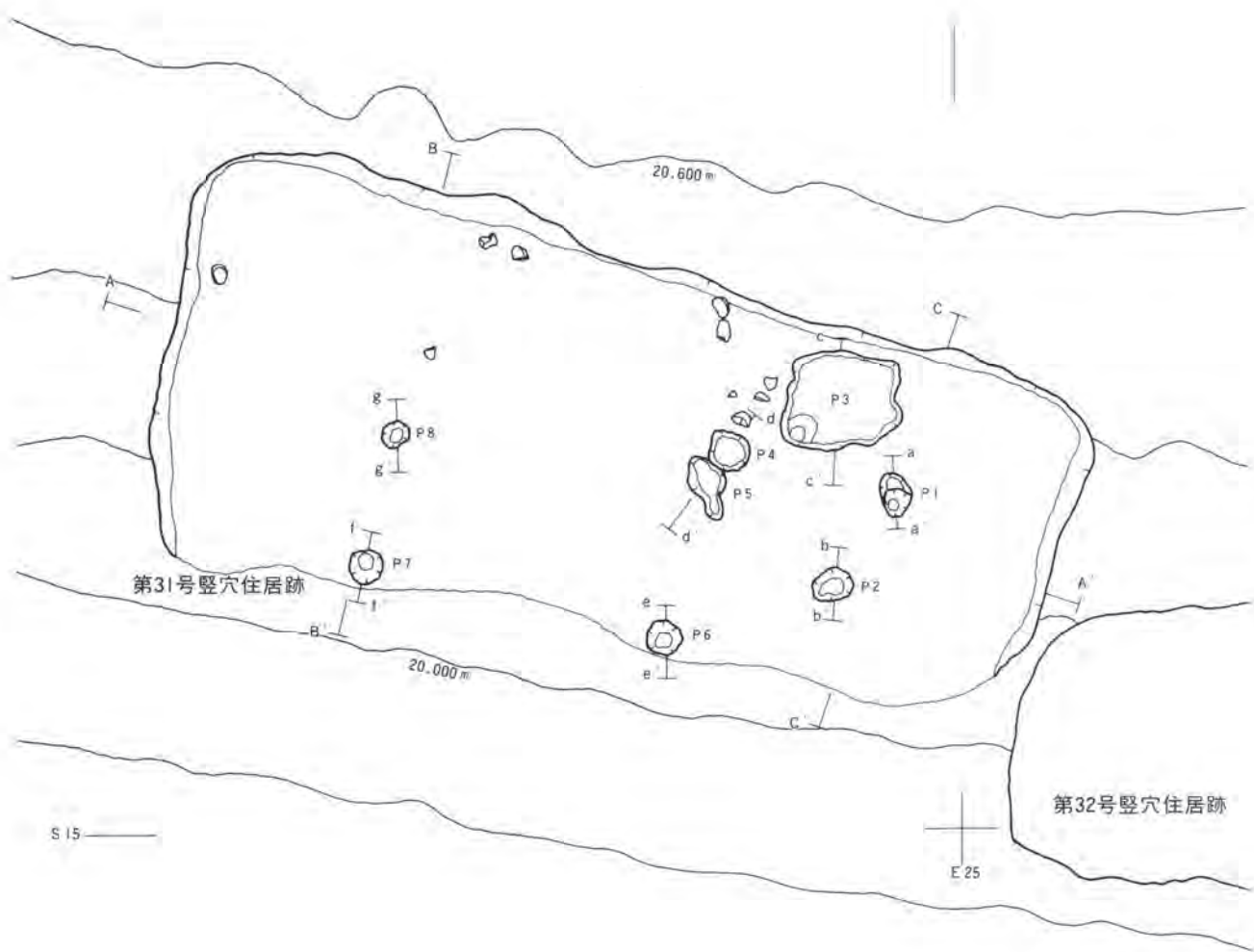
平面形は、長方形～方形を呈するものと推定される。平面形

規模は、残存部分において長軸5.00m、短軸2.00m以上をはかる。壁は、床面からほぼ直ないし、やや傾斜しながら立ちあがる。壁高は、北壁側で0.30mを残す。規模

埋土は、A層、B層、C層に大別される。A層はA₁～A₄層に細分される。A₁層は、明るい褐色土を基本土とし、褐色～黄褐色土を粒塊状に含み、比較的固くしまっている。A₂層は、やや粘性のある褐色土を基本土とし、褐色～黄褐色土を粒塊状に混入し、少量ながら炭化物粒を含む。固さ、しまりともあまりない。A₃層は、明るい褐色土を基本土とし、黒褐色土塊を混入する。固くしまり、砂礫粒を多く含む。A₄層は、やや暗い褐色土を基本土とし、褐色～黄褐色土を塊粒状に多量に混入する。固く比較的しまっている。B層は、B₁、B₂層に細分される。B₁層は、暗褐色の砂質土を基本土とし、ほぼ層の全体的にまんべんなく炭化物粒を多く含む。非常に固くしまっている。B₂層は、やや明るい暗褐色の砂質土を基本土とし、黒褐色土を塊粒状に混入する。固さはあるが、しまりがあまりない。C層は、壁際付近にのみ堆積すのもので、壁崩壊土層と思われる。明るい褐色の砂質土を基本土とし、黄褐色土塊を多く混入する。比較的固くしまっている。埋土

床面は、若干南側へゆるく傾斜するが、ほぼ平坦な面で地山面をそのまま利用する。床面

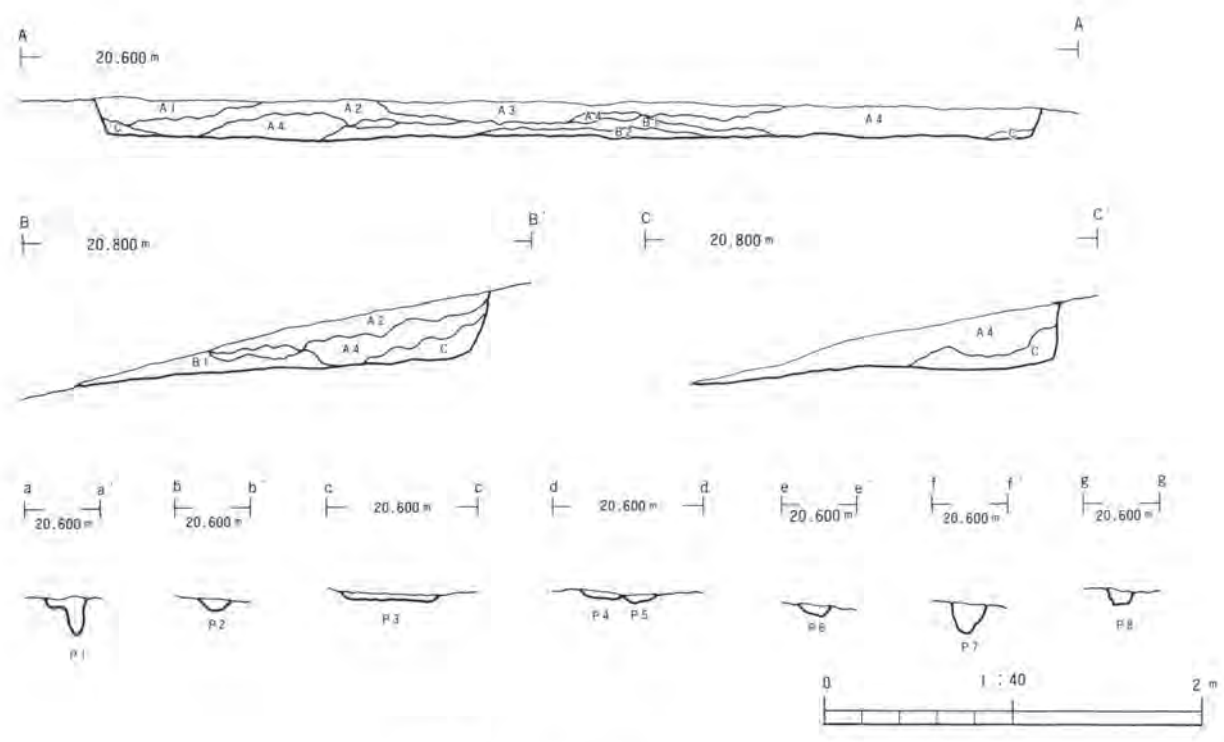
柱穴及びピットは、P₁～P₈の8ヶ所検出した。このうちP₃は、北壁際に位置するもので、0.62×0.50m床面からの深さ0.05mをはかる不整形の平面形を呈す浅い凹みである。ほかのものは、だいたい径が0.2m内外規模の円形～楕円形の平面形を呈すもので、床面からの深さは、P₁が0.20m、P₂が0.07m、P₄～P₆が0.05m、P₇が0.17m、P₈が0.09mをはかるものである。



S 15

E 25

第32号竖穴住居跡



第86图 第31号竖穴住居跡

遺物は、すべてA層からのものであるが、土器片は斜縄文を施文しただけの極小片なため図示できなかった。

第87図4は、三角形の剥片に大まかな剥離を施こしたのち、側縁部に細かい調整剥離を施すが、側縁部の刃部は不明瞭なものとなっている。三角形の先端付近を特に丁寧に剥離調整している。

石器

第87図1～3は、いずれも背面に自然面を残す打製の石斧。1は、基部幅が狭く刃部幅が広がる撥形の形態をとるもの。調整の剥離は側縁部を中心に施しており基部、刃部は第1次剥離面をそのままに残すが、刃部は比較的鋭いものとなっている。背面の自然面は剥離を加えずにそのままに残す。2は、基部を欠損するもので形態的には一方の側縁が湾曲する半円状を呈するものと考えられる。刃部付近を中心に調整の剥離を施しており、背面の自然面も、直線的な側縁部側に大きな剥離を残す。3は、楕円形状の形態をとるもので、ほぼ四辺に調整の剥離を施こし中央部に第1次剥離面を残す。背面の自然面は、一方の側縁に大まかな剥離がみられる。



第87図 第31号竪穴住居跡出土遺物

第32号竪穴住居跡 (第88、89図 図版29～31、54、55)

調査区の東端、第31号竪穴住居跡の東に位置する。

平面形

平面形は、隅丸ぎみの方形～長方形状を呈するものと推定される。

規模

規模は、残存部で長軸4.05m、短軸1.50m以上をはかる。壁は、やや傾斜をもちながら立ちあがる。壁高は、北壁で0.14mを残す。

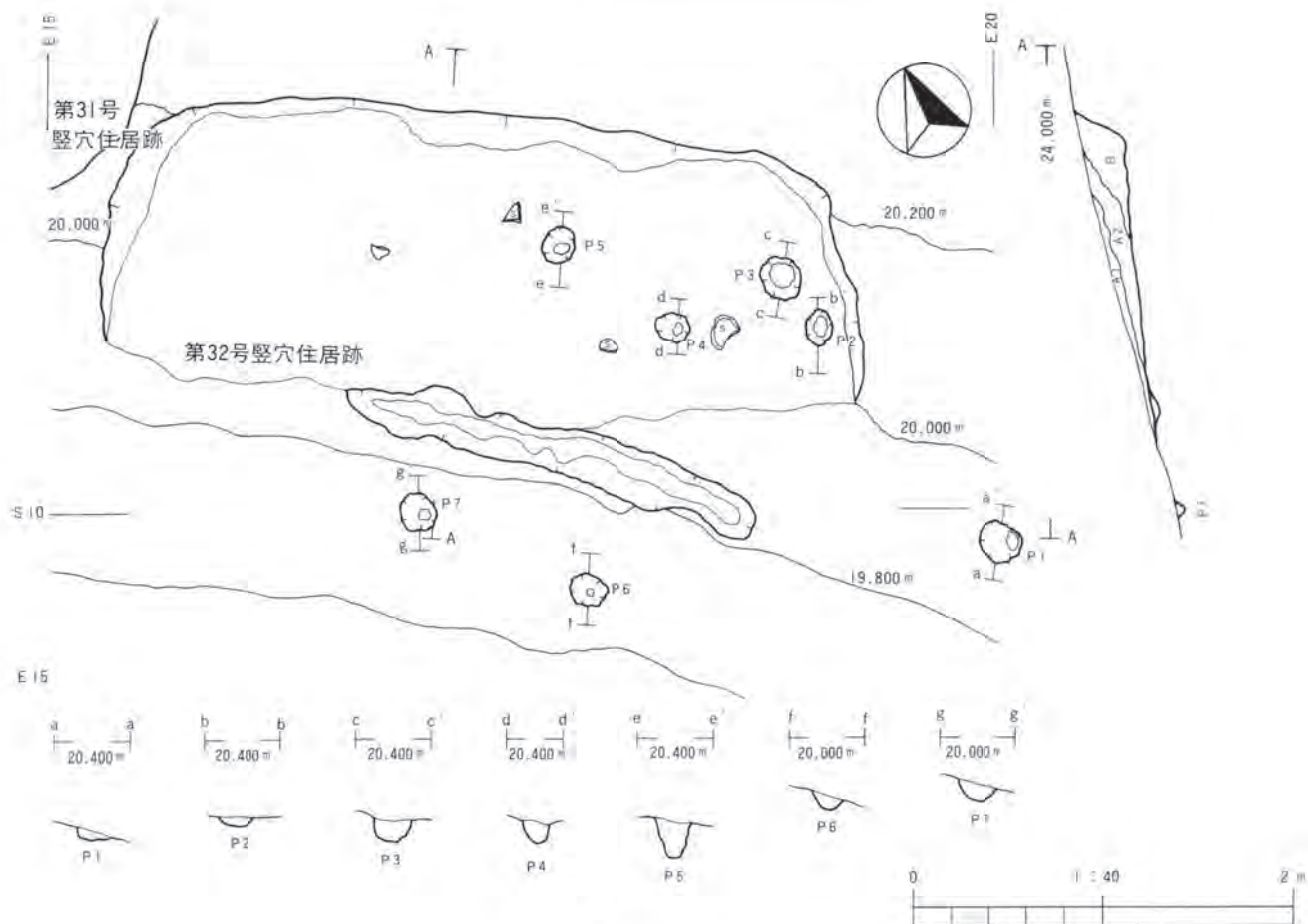
埋土

埋土は、A層とB層に大別される。A層は、A₁層・A₂層に細分される。A₁層は、暗褐色の砂質土を基本土とし、褐色土を粒塊状にわずかに混入する。炭化物粒を多く含み、固くしまっている。A₂層は、やや明るい暗褐色土を基本土とし、褐色～黄褐色を塊粒状に多く混入する。炭化物粒が比較的多く、固くしまっている。B層は、褐色土の砂質土を基本土とし、黒色土塊や黄褐色土塊を混入する。A層中にみられた炭化物粒子は、ほとんど含まない。固く比較的しまっている。

床面

床面は、地山面をそのまま利用するもので、南側に緩く傾斜する平坦面である。

柱穴は、床面上に4ヶ所 (P₂～P₅)、床面外に3ヶ所 (P₁・P₆・P₇) を検出したが、P₁は竪穴の推定範囲内からはずれるものであり、当住居跡に伴うものではないと思われる。床面上のものは、いずれも床面中央より東側に位置するもので直径0.20m程の楕円形～円形状の平面形を呈し、床面からの深さは一番深いP₅で0.20mをはかるものである。床面外のP₆・P₇も浅く小規模なものだが、当住居跡に伴うものかは判別できなかった。



第88図 第32号竪穴住居跡

残存する床面が途切れる付近には、周溝状の溝跡を検出した。長さが2.25m、巾が0.25m、深さ0.04mをはかるものだが、当住居跡よりは古い時期のものである。埋土は、黒褐色土を基本土とし、あまり固さもしまりもない。

遺物は、A層を中心に出土したが、量的には少ない。

第89図1は、繊維を含む口縁部の土器片。口縁部は外反し、口唇部の断面は丸味を有すものである。口縁部上端から施文技法8の縦位の撚糸文が整然と施文されている。繊維の含有量は比較的多く、胎土中にも白色鉱物、石英砂、粗砂などを多く混入している。焼成は比較的良くなかたさがある。2は、繊維を含まない土器片で、施文技法6と10により不整撚糸文と斜縄文を施文する。時期的には新しいものと考えられる。

土器

3は、打製の石器で背面に自然面を残す石斧。楕円形状の形態をとるもの。全体的に大まかな剥離で整形、仕上げている。背面の自然面は、一方の側縁部に大きな剥離を残す。

石器

第33号竪穴住居跡（第90図 図版29、30）

調査区の東南部分に位置する。

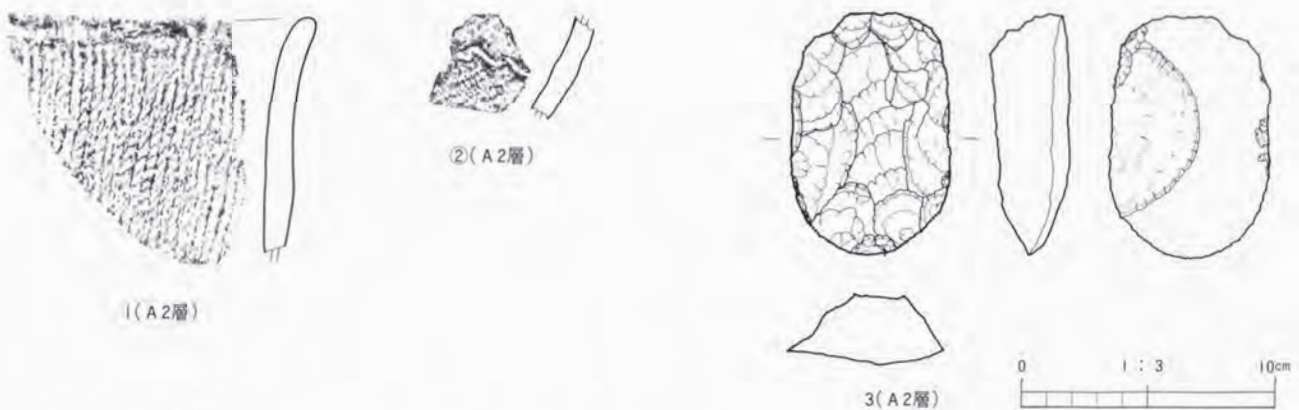
平面形は、長方形を呈するものと推定されるが、西壁が弧をえがく様に湾曲しており、平面形としては、不整形になるものか。

規模は、残存部分で長軸3.42m、短軸1.80m以上をはかる。壁は、床面からあまりきつくない角度で傾斜しながら立ちあがり、壁高は北壁で0.16mを残す。

埋土は、A層とB層に分かれる。A層は、やや粘性のある黒褐色土を基本土とし、多量の焼土及び炭化粒を含むほか、黒色土塊や粘性の強い黄褐色土塊を混入する。固く比較的しまっている。B層は、B₁・B₂層に細分される。B₁層は、暗褐色土を基本土とし、砂礫粒が多く混入し砂っぽい。固くしまっている。B₂層は、明るい暗褐色土を基本土とし、黒褐色土や黄褐色土を粒塊状に混入する。焼土や比較的大きめな炭化物粒や自然礫を含み、非常に固くしまっている。A層、B層ともに砂礫粒を混入し全体的に砂質である。

床面は、地山面をそのまま利用する平坦な面で、固くしまっている。

柱穴及びピットは、床面上からは検出しなかった。



第89図 第32号竪穴住居跡出土遺物

第34号竖穴住居跡（第91図）

第18号、19号竖穴住居跡と重複し一番古いもの。大半が第19号竖穴住居跡構築により破壊されており、その平面形、規模などは不明である。

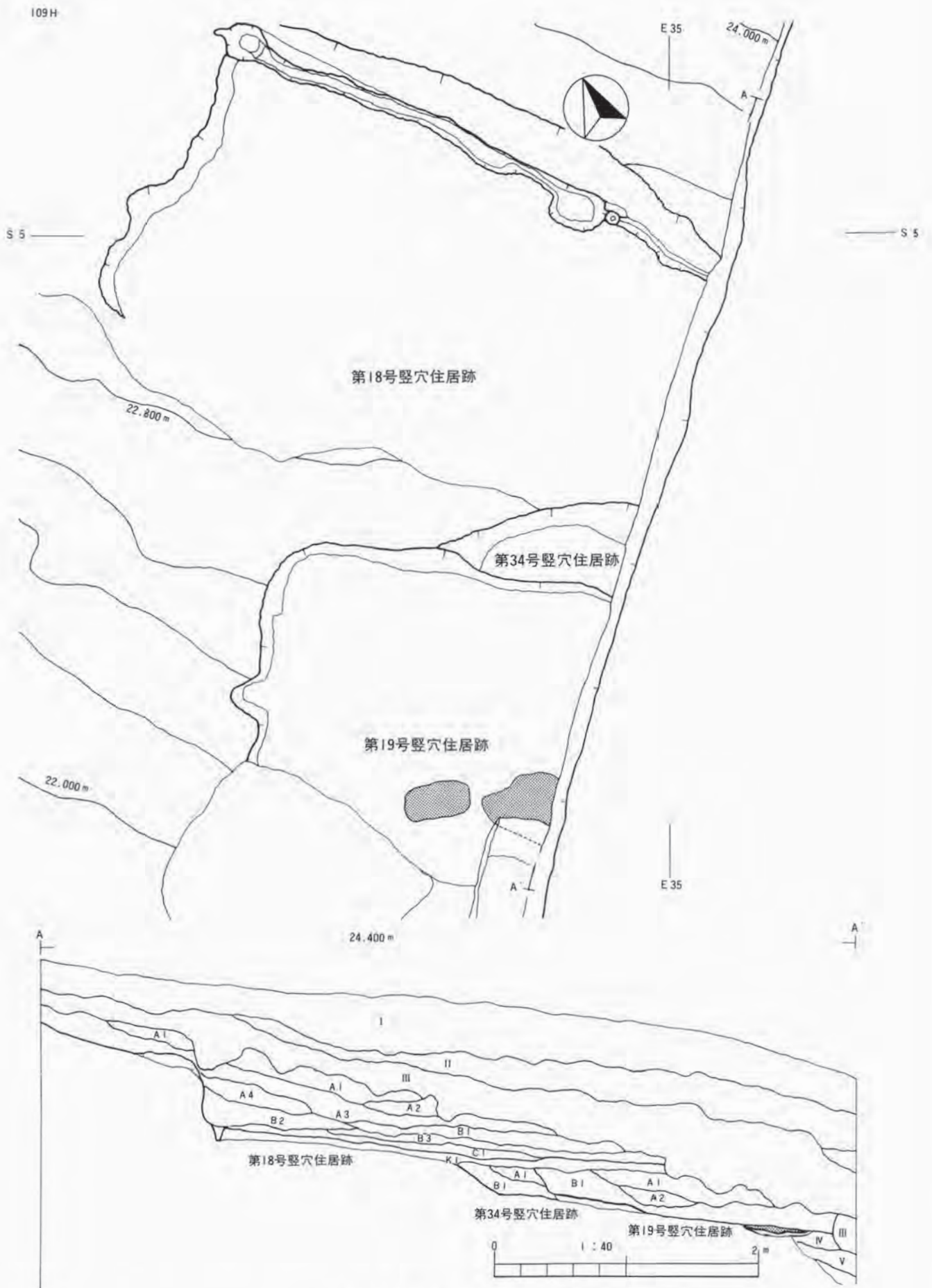
埋土は、A₁層、A₂層が堆積する。A₁層は、やや明るい暗褐色の粘質土を基本土とし褐色土塊を多く含む。固さ、しまり共にあまりない。A₂層は、褐色の粘質土を基本土とし明褐色土塊を比較的多く含む。固さ、しまり共にあまりない。

床面は、一部しか残存しないが、平坦で比較的固い。

遺物などは、出土しなかった。



第90図 第33号竖穴住居跡



第91図 第34号竖穴住居跡

小ピット群（第92図、図版30）

調査区の東南部に比較的まとまって検出された。

1Pから25Pまでの25ヶ所を確認した。これらは、すべてではないが、かなりの部分は本来的には竪穴住居跡などに伴うものであったと考えられるが、後世の削平により竪穴部分はすでに消失してしまい、結果的には、竪穴床面よりも深く掘り込んだ柱穴やピットが浅ったものと考えられる。それにしても、ほとんどは浅い小規模なピットでかなり削平作用が強かったと推測される。

平面形

平面形は、円形状を呈するもの（1～15、17、23）、楕円形状を呈するもの（18～22、24、25）、方形形状を呈するもの（16）がある。

規模

規模は、円形状を呈するものは径0.20～0.30m、楕円形状を呈するものは直径0.40～0.55m、方形形状を呈するものは径0.35mをはかるものが多い。検出面（地山面）からの深さは、0.10m内外の浅いものが圧倒的に多い。

埋土

埋土は、暗褐色の砂質土を基本土とするa層のものと褐色の砂質土を基本土とするb層のものに大きく分けられる。

遺物を出土するピットは、ほとんどなく、出土しても極小片だけで拓影図など図示できるものはない。

遺構外出土遺物（第93～98図 図版56～61）

出土傾向

今回の調査では、遺構外からも多量の土器・石器などの遺物を検出したが、ここでは、遺構内埋土から出土した遺物も含めた上で整理、分類する。

遺構外から出土する遺物は、おもに黒色～黒褐色を呈す基本層序Ⅲ層中に包含されるもので、Ⅰ、Ⅱ層中からは、繊維の含有が認められない時期的に若干新しくなると考えられる土器も出土している。調査区の南東側では、すでに耕作などの攪乱によりⅢ層を喪失しており不明な所もあるが、これから記述する分類した各土器群の出土傾向として、調査区の中央部～北東部分ではⅠ群、Ⅱ群土器が、調査区の南東側ではⅢ群土器が中心として出土した。

(1) 土器

今回の調査で出土した土器は、その大半が繊維を含む縄文時代前期初頭期に相当するもので、竪穴住居跡などの遺構は、すべてこの時期にあたる。土器の編年上からは、極めて限定された時期の集落跡といえる。

ここでは、個々の土器についての施文技法（要素）などに基づき分類するが、器形については、明確に判断できるものがほとんどないため分類基準からはずした。なお、今回の調査で得られた土器は、そのほとんどが口縁部、体部の破片で底部の破片が数えるくらいしか出土していない。

施文技法

個々の土器について観察される施文技法（要素）は、次の通りである。

- 1 原体圧痕文 縄文原体を押捺するもの
- 2 結束する羽状縄文 結束部を有す羽状縄文の施文
- 3 結束しない羽状縄文
 - a 比較的節径の大きい太い原体でL R、R Lの原体を交互に施文し整然とした羽状縄文を表出するもの
 - b aに比べて節径の小さい細かい原体で羽状縄文とするもの
 - c 回転方向を変えた斜縄文を羽状に展開するもの
- 4 ループ文 厳密な意味でのループ文ではなく口縁部上端に原体の末端をループ状に施文するもの
- 5 沈線文 棒状工具による平行沈線文を施文するもの
- 6 縄文 1
 - a 表裏両面に縄文を施文するもの（縄文＝縄文）
 - b 単節斜縄文を施文するもの
 - c 複節斜縄文を施文するもの
 - d 口縁部に横走る縄文を施文するもの
- 7 縄文 2 条と条の間隔が狭く節と節が密着するもので「びっちり縄文」と俗称されているもの
- 8 撚糸文
- 9 刺突文（刻目文）
 - a 半截竹管により刺突（刻目）するもの
 - b 割箸状の棒状工具により刺突（刻目）するもの
 - c 指頭圧痕するもの
- 10 不整撚糸文
- 11 粘土紐貼付文
- 12 S字状連鎖沈文
- 13 組紐状文様 量的には極くわずかで数点のみ
- 14 条痕文？ 第17号住居跡から1点だけ出土しているが、詳細は不明

以上の施文技法のうち、4、10～14に関しては、その出土数が極端に少ない。11、12は遺構の埋土から出土するものはない。

また、施文技法7の縄文は、高橋亜貴子の研究^(註1)によれば、最低限A、Bの2つのタイプに分かれる。施文技法8の撚糸文には、縦～斜位に整然と施文するものと不規則に施文するものがある。

(註1) 高橋亜貴子 「岩手県における縄文時代前期前葉の特徴ある縄文原体をもつ土器について—岩手県滝沢村仏沢Ⅲ遺跡出土例を中心として—」 『山形考古第32回研究大会シンポジウム』1988、7、10

「…(前略)…その縄文原体には構造上少なくとも2種類のものがあることに気付いた。その違いを節の形状に求めると、1つには菱形のもの(Aタイプ)、他には長方形のもの(Bタイプ)に区別される。…(後略)…

Aタイプ…前々段反撚。但し、反撚の際に所謂撚り戻しをかけずに撚り合わせ、次の段で正撚にして安定したものとする。

Bタイプ…前段多条。



第93图 遺構外出土土器①

以上の施文技法（要素）などに基づき、千鶴遺跡出土の土器を分類する。

I 群土器

縄文時代早期後半～末葉に相当する土器。数量的には極めて少なく、わずかに5点のみである。

I 群A類

A類（第29図1、第36図1、第41図1、第96図227、228）

施文技法6aの表裏に縄文を施文する土器。器形などは不明。概して、太くて粗い縄文を施文するようで、胎土もち密で焼成も良く硬質である。

II 群土器

縄文時代前期初頭に相当するもので、第5号竪穴住居跡埋土下層、第17号竪穴住居跡出土土器に代表される一群を一括した。施文技法（要素）などにより4類に細分した。

A類 施文技法1、5、9により口縁部に文様帯を形成し、体部に施文技法3aの羽状縄文を施文するもので、展開する文様の要素などにより3種に分けられる。

II 群A類a種

a種 渦巻状の圧痕文、横位、斜位の側面圧痕文、連続する刺突文、刻目文により文様帯を構成するもの（第16図1、2、第21図1、第26図2、第29図3、第41図2、第47図1～6、10～12、第48図14、第93図1～18、23～26、28、30～41）

器形は、全容を推測されるものは全くないが、第47図1～3、第93図1、2などの大破片のように体部から口縁部にかけてほぼ直立する大形の深鉢と器厚の極端に薄い第93図6などのような小形の鉢などがある。口縁部は、第41図2の渦巻状の圧痕文を施文する口縁の突起部や第92図6の波状を呈すものもあるが、圧倒的に平縁のものが多い。

口縁部文様帯は、第47図1～6、第93図1～3などにみられるように連続の刺突文、刻目文と数条の側面圧痕文で上下を区画し、山形・波状に側面圧痕文を展開しその頂部、谷部に渦巻状の圧痕文を施文する。平行する側面圧痕文間には連続の刺突文、刻目文が付加される。

II 群A類b種

b種 横位、斜位の側面圧痕文、沈線文、連続の刺突文、刻目文により文様帯を構成し渦巻状の圧痕文を欠くもの（第29図2、第47図7、第48図13、第82図5、第93図19～22、27、29）

数量的には、a種に比べてかなり少ないが、器形的には、第29図2、第93図19～22のようにa種ではみられなかった口縁部が内湾するキャリパー形を呈するものがある。

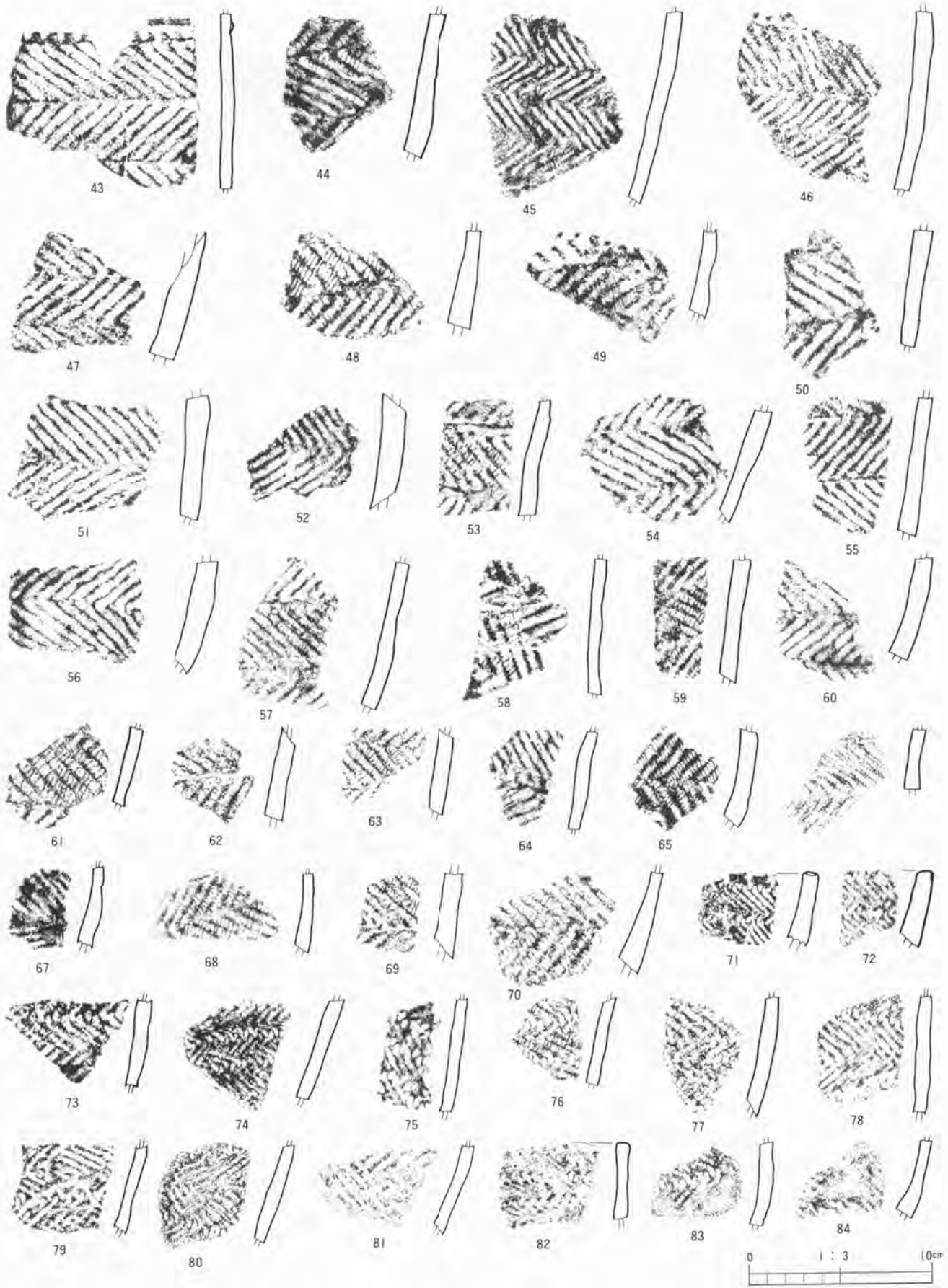
文様は、第29図2、第47図7、第48図13、第82図5、第93図19、21、27、29のように横位、斜位の側面圧痕文と連続の刺突文、刻目文で構成するものと第92図20、22のように沈線文を加えて構成するものに分けられる。

II 群A類c種

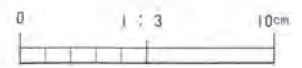
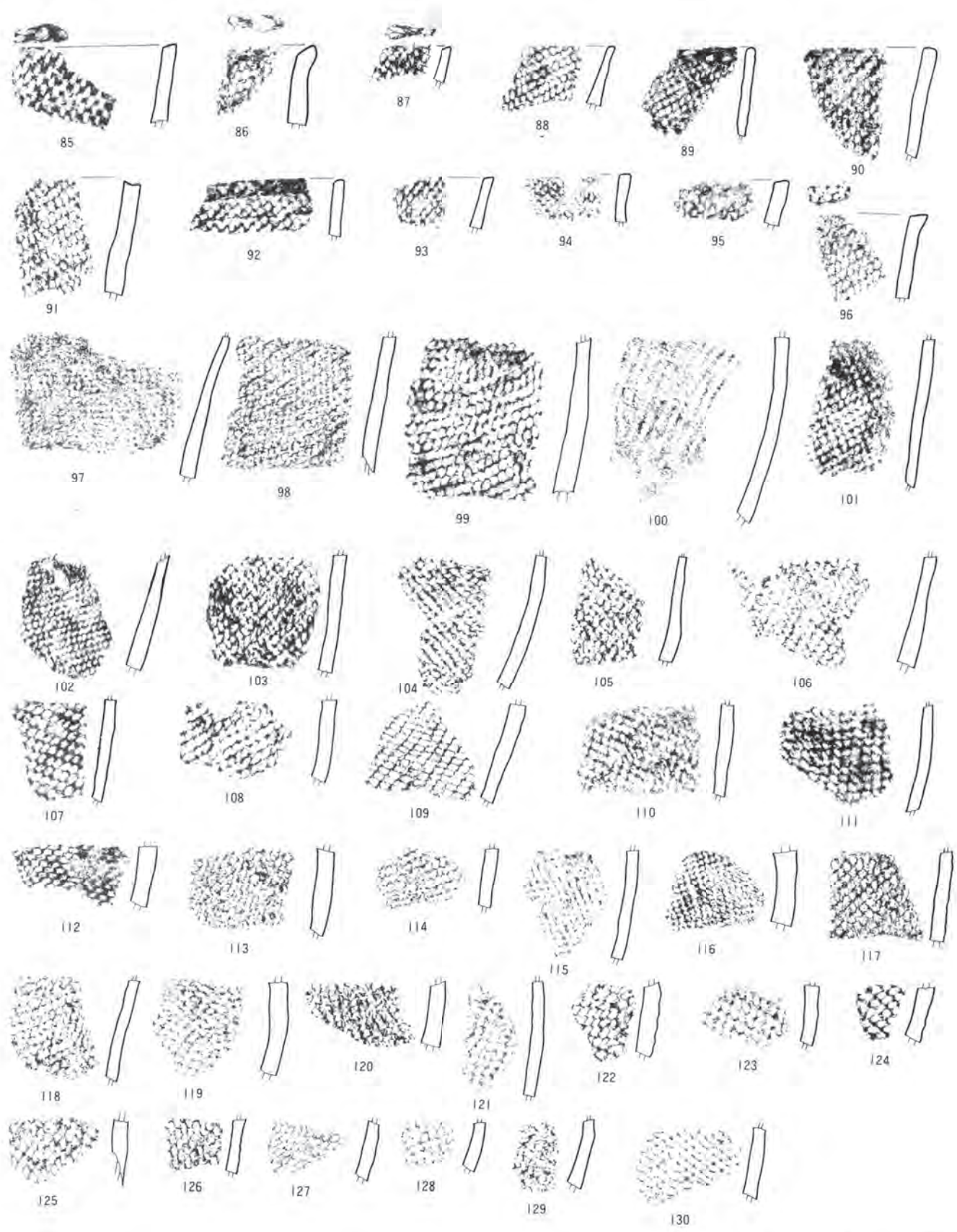
c種 口縁部上端に連続する刺突文、刻目文のみを施文しa種、b種のように文様帯を形成せずに口縁部から羽状縄文を施文するもの（第47図8、9、第93図42）

第47図9と第93図42は、口縁部が内湾するもの。口縁部上端の連続する刺突文、刻目文は縦位に施されるもので、第47図8が他の2点に比べてやや幅の広いものとなっている。

以上のA類のうち、b種は、刺突文、刻目文と沈線文のみによるものが細分される可能性もあるが、数量的に極めて少量なためb種に含めた。



第94図 遺構外出土土器②



第95图 遺構外出土土器③

B類 施文技法 6 d により口縁部文様帯を形成するもの (第38図1) II 群B類
わずかに1点のみの出土。口縁部に横走る縄文を施文し文様帯を構成するもの。胎土中に繊維以外の混入物を多く含む。

C類 施文技法 5、6 b で構成されるもの (第47図29) II 群C種
第17号竪穴住居跡から出土した1点。口縁部に斜縄文を施文しその直下に12条の平行沈線文を施し、体部には口縁部とは逆方向の斜縄文? を施文するもの。

D類 施文技法 3 a の羽状縄文を施文するもので、口縁部片と体部片に分けた。
a種 口縁部片で口縁部上端に連続する刺突文、刻目文を施さないことからA類C種から分離した (第29図4、5 第48図16 第64図2) II 群D類 a種

A類C種と同じ様に口縁部から羽状縄文を施文するもの。第29図4、5は同一個体片で口唇部が肥大し、竹管による円形刺突文を施文する。

b種 結束しない羽状縄文を施すものの体部片でII群A類、D類a種の両者を一括した。 (第9図3、4、6、7 第12図2 第14図1、2 第16図6、7、9 第21図2～5、8～10 第26図3～5 第29図6～8 第36図2、3 第41図3、4 第48図15～28 第60図1 第64図2 第82図7、9、10 第94図43、44、46～58、60～62) II 群D類 b種

以上のII群土器のうちA類、D類とした土器については、その胎土や器厚が類似する。

胎土は、概して繊維の含有量は少ないものが多いが、中には非常に多く含むものも有り比較的上下幅が認められる。繊維以外の混入物としては、白色鉱物や石英砂、粗砂などが認められるが、これらも極端に多く含むものから少ないものがある。

器厚は、1.01～1.30cmと比較的厚手のものが多いと全体の54.9%を占め、0.90cm以上となると76.4%となる。

III 群土器

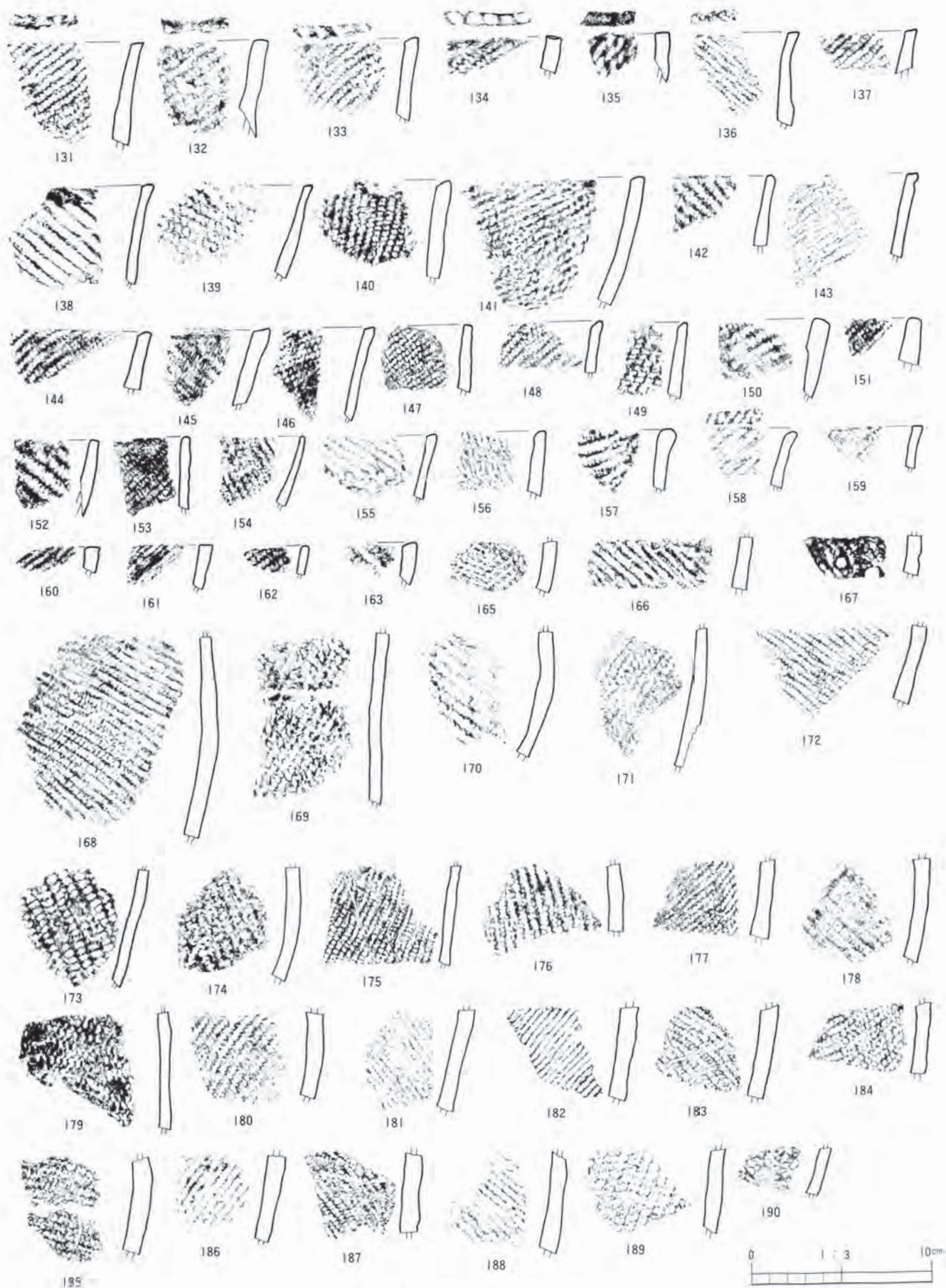
縄文時代前期初頭に相当する土器で、第5号竪穴住居跡埋土上層、第26号、27号竪穴住居跡出土土器に代表される一群を一括した。施文技法 (要素) などにより2類に分類した。

A類 施文技法 9 により口縁部上端に連続の刺突文、刻目文を施し、口縁部から施文技法 2 の結束する羽状縄文を施文するもの (第9図1、2、5、8、10、13、14 第14図3 第16図8 第21図6、7 第35図1、2 第64図1、3～5 第71図1 第74図1、2、39 第81図3 第82図6、9、10 第94図71～84) III 群A類

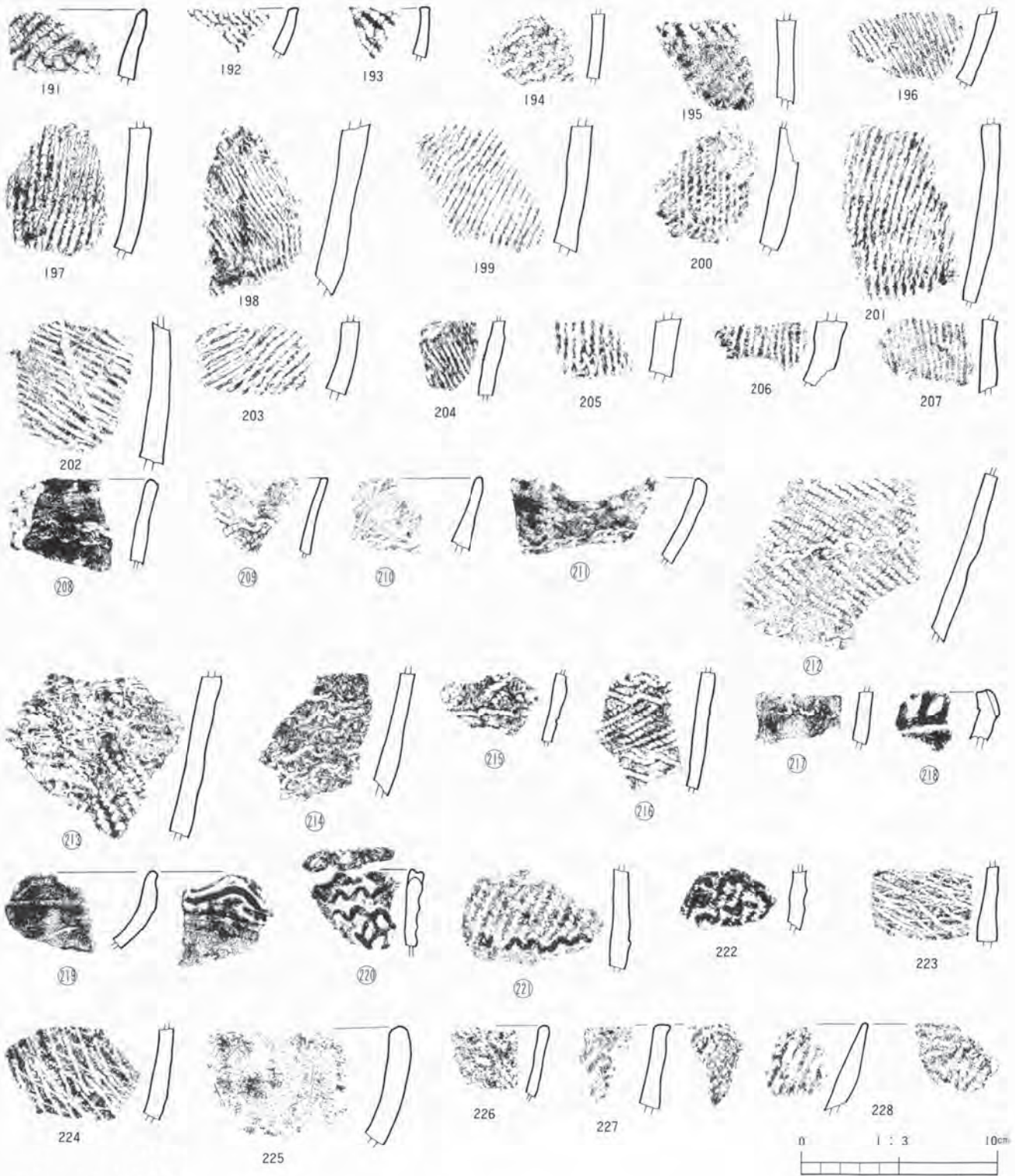
器形を知り得る資料として第27号竪穴住居跡から出土した第81図3がある。口縁部が外反し4個の波頂部を有する波状口縁で、胴部前半が張る丸底風を呈すと考えられる深鉢形土器である。第35図1 第82図6 第94図71、72、82は口縁部の破片で第82図6を除き、口縁部上端に連続の刺突文、刻目文を施す。

胎土は、II群A類土器同様に繊維の含有量の少ないものが多いが、極端に多く含むものもない。繊維以外の混入物としては、白色鉱物、石英砂、粗砂のほかに黒っぽい鉱物が含まれているのが目につくが、混入率には比較的差がある。焼成、胎土の関係からか、比較的軟質なものも多く、硬質なものほとんどない。

器厚は、0.61～0.89cmまでのものが全体の73.7%を占め比較的薄手のものが多い。



第96圖 遺構外出土土器④



第97図 遺構外出土土器⑤

体部の羽状縄文は、節径が小さく短い原体を使用しており磨滅の著しいものは、結束部ばかり目立ち羽状の縄文がほとんど目立たなくなる。

B類 施文技法7の縄文を施文するもので、高橋亜貴子の2分類(註1)に基づき2分した。

B類 高橋のいうAタイプに属するもの。口唇部の施文の種類、有無や体部片で3種に細分した。

Ⅲ群B類a種

a種 口唇部に何らかの施文を有すもの

a₁種 竹管による刺突文を施すもの(第74図11、12)

a₂種 縄文を施文するもの(第74図7 第79図1 第95図96)

a₃種 指頭圧痕文を施すもの(第16図11 第74図6、13 第95図85、86)

a₁種は半截竹管の凸面を器外面側にして施文している。

Ⅲ群B類b種

b種 口唇部に何も施文しないもの(第16図10 第74図15)

口唇部は平坦ないしやや内削ぎに整形する。

Ⅲ群B類c種

c種 体部片を一括した(第16図15~18 21~24 第35図11、12 第47図36 第64図8、10、11 第74図18~23、25~29、31~34 第82図14 第95図100、103~105、107、109~111、115、116、118~124、128~130)

B類 高橋のいうBタイプに属するもの。B類と同じ様に細分した。

Ⅲ群B類a種

a種 口唇部に何らかの施文を有すもの

a₁種 竹管による刺突を施すもの(第74図10、43)

a₂種 竹管以外の工具により施文するもの(第16図28 第74図9)

a₃種 縄文を施すもの(第74図7 8)

a₄種 指頭圧痕文を施すもの(第21図1)

a₂種は半截竹管の凸面を器内面側にして施文している。a₂種の第16図28は断面形が三角形を呈す棒状の工具、第74図9は肉厚の薄い板状の工具で施文している。

Ⅲ群B類b種

b種 口唇部に何も施文しないもの(第74図16、17 第95図88~90、92、94、95)

口唇部は平坦からやや内削ぎに整形する。

Ⅲ群B類c種

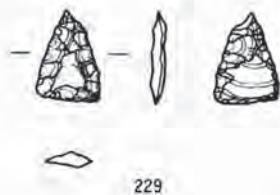
c種 体部片を一括した(第16図13、14、19、20 第60図9、12 第74図24、30、36 第82図15 第95図97~99、101、102、106、108、112、114、117、125~127)

以上のⅢ群B類、B類の土器は、器形、胎土、器厚などにあまり差が認められない。

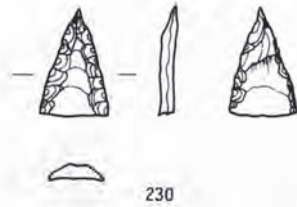
器形は、B類の第79図1とB類の第21図1のように共に口縁部から体部がほぼ直立する尖底の深鉢と推定され、あまり差がないようである。

胎土は、繊維の含有量の多いものから少ないもの様々だが、繊維以外の混入物は少ないものが多い。特に、Ⅱ群A類、D類、Ⅲ群A類土器には一般的にみられる白色鉱物が少なく、ほとんど混入しないものもある。また、数量的には少ないが、金雲母を混入するものがある。

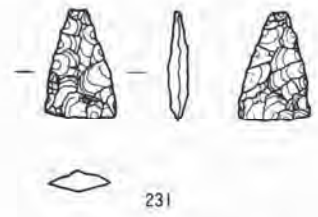
器厚は、比較的薄手な0.6~0.89cmまでのものが、全体の67.1%と多いが、1.01cm以上のものも29.5%と比較的多い。



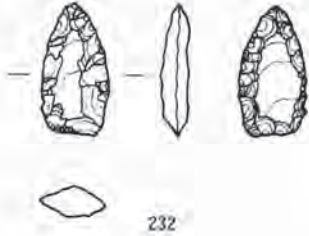
229



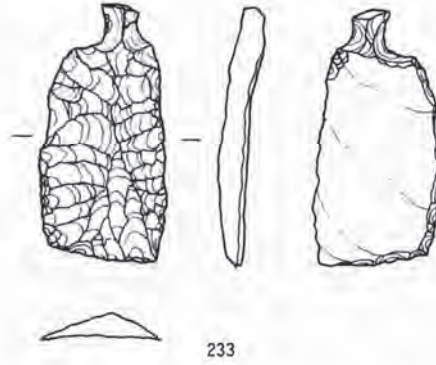
230



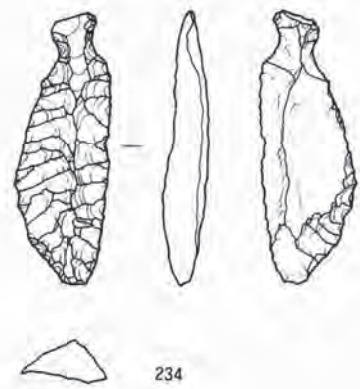
231



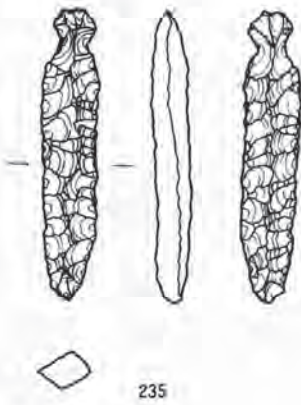
232



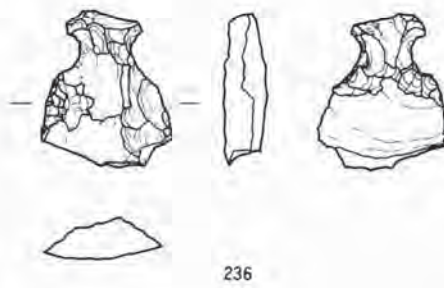
233



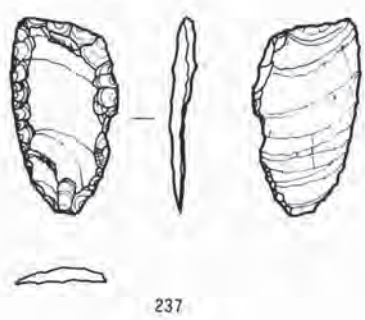
234



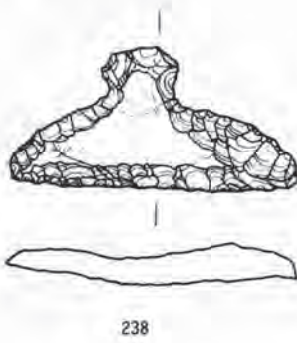
235



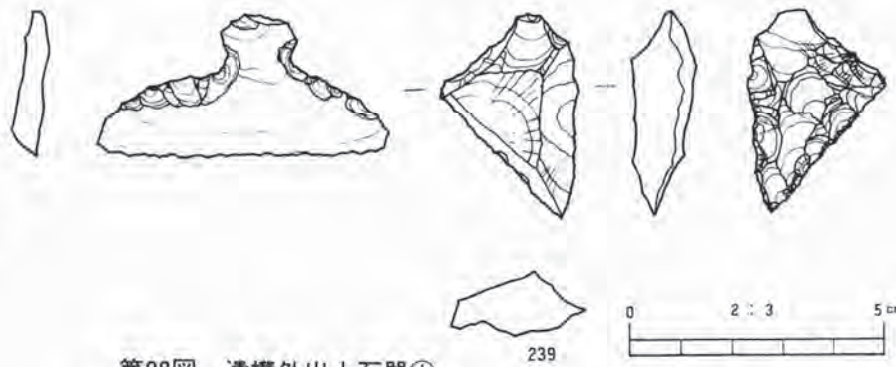
236



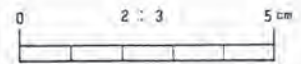
237



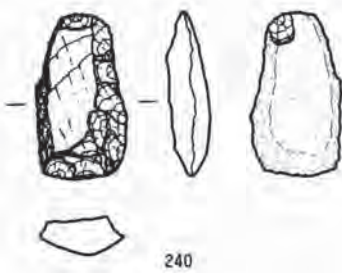
238



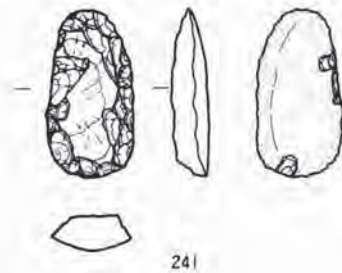
239



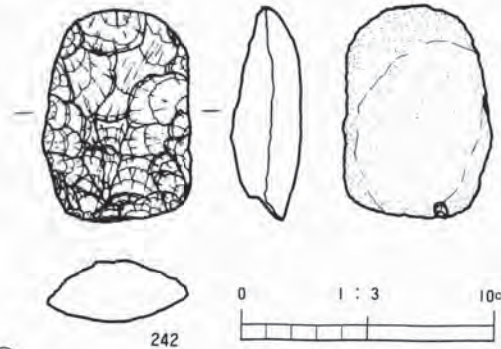
第98図 遺構外出土石器①



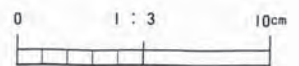
240



241



242



第98図 遺構外出土石器②

IV群土器

II群、III群土器以外の縄文時代前期初頭～前半に相当する土器を一括した。施文技法（要素）などにより8類に分類した。

A類 施文技法8の撚糸文を施文するもので、2種に分けられる。

IV群A類 a種

a種 撚糸文を縦位～斜位に比較的整然と施文するもの（第14図4 第16図36、37 第21図21 第29図12 第33図5、6、8 第35図13、14、16、18 第36図4 第41図15～19、21、22 第47図34、35、39 第57図4 第60図4、5 第62図4 第64図31、33～36 第69図1～16 第82図13 第89図1 第97図196～199、201、202、204～207）

器形は、第21図21、第41図15、第47図35、第89図1のように口縁部が「く」の字状に外反するものと第33図8のように外反しないものがある。外反する第21図21と第47図35は口唇部に円形の刺突文、刻目文を施す。

撚糸文の原体は、太いものと比較的細いものがある。

IV群A類 b種

b種 回転方向をいくつかに変え不規則に撚糸文を施文するもの（第9図28～31 第16図38、39 第29図11 第33図7 第35図15、17 第48図40 第60図2 第64図13、32 第69図17 第97図200、203）

以上のIV群A類土器は、厚手で焼成も良くなく胎土も粗く粗製で脆弱なものが多い。

B類 施文技法6b、6cの斜縄文を施文するもので、口唇部の施文の種類、有無、体部の3種に分けられる。

IV群B類 a種

a種 口唇部に何らかの施文を有するもの

- (1) 竹管による刺突文を施すもの（第74図40 第96図132）
- (2) 竹管以外の工具による刺突文、刻目文を施すもの（第41図9 第64図14 第96図131、133、138）
- (3) 縄文を施文するもの（第35図4、5 第57図1 第80図2 第96図136、157、158、161）
- (4) 指頭圧痕文を施すもの（第74図38 第96図134、135、139）

IV群B類 b種

b種 口唇部に何の施文も有さないもの（第9図15、27 第19図2 第21図13、14 第33図1、2 第41図10 第47図30、31 第62図3 第64図15～17 第74図41、42 第82図11 第96図137、140～156、159、160、162、163）

IV群B類 c種

c種 体部片（第9図16～26 第14図5～7 第16図25～27、29～35 第19図1 第21図16～18 第26図6 第29図9、10 第33図3、4 第35図6～10 第38図2 第41図5～8 11～14、20 第47図32、33 第53図1～3 第57図2 第60図3 第62図2 第64図18～30 第71図3 第74図44～49 第75図50～54 第96図164～190）

以上のIV群a～c種土器は、胎土中にすべて繊維を含むものである。器形を知り得る資料としては、a種(3)の第80図2がある。

C類	施文技法4のループ文を施文するもの(第21図11 第74図37 第97図192)	IV群C類
	いずれも繊維の含有量、混入物は少ない。口唇部は平坦に整形する。	
D類	施文技法13の組紐状文様を施文するもの(第47図38 第82図12)	IV群D類
E類	施文技法14の綾絡文を施文するもの(第47図39)	IV群E類
F類	施文技法10の不整撚糸文を施文するもの(第34図20 第89図2 第97図209、212、213、215)	IV群F類
G類	施文技法12のS字状連鎖沈文を施文するもの(第97図208、210、211、214、216)	IV群G類
H類	施文技法11の粘土紐貼付文を施文するもの(第97図218~221)	IV群H類
	以上のIV群土器のうち、F類、G類、H類土器には繊維を含まない。	
	IV群E類は、II群土器に伴うものである。	

(2) 石器

今回の調査では、遺構内外から比較的多く出土している。

(2)-1 剥片石器

a 石鏃

形態、基部の作り出しから5形態に分けられる。(欠損品は除く)

形態1(二等辺) 三角形状を呈し凹基ぎみとなるもの(第14図13、第49図46、47 第65図37~39 第76図56)

形態2(二等辺) 三角形状を呈し平基なもの(第14図12 第23図22 第76図58~60 第84図16 第98図229、230)

形態3 木の葉状を呈すもの(第29図14 第98図232)

形態4 左右非対称形を呈し凹基ぎみとなるもの(第29号15 第42図24、27)

形態5 左右非対称形を呈し平基なもの(第9図32 第12図8 第16図41、42 第19図3、4 第29図13 第42図25 第98図231)

b 尖頭器

木の葉状の形態を呈し石鏃よりも大形のもの(第65図40)

c 石匙

遺構から出土したものはすべて縦形だが、横形が遺構外から1点出土している。形態や「つまみ部分」の位置などから6形態に分けられる。

形態1 縦形で「つまみ部分」が主軸線に対し平行し刃部が長方形を呈すもの(第9図33、第97図233)

形態2 縦形で「つまみ部分」が主軸線に対し平行し刃部の一方が湾曲するもの(第9図34、第16図43 第34図26 第76図62 第98図234)

形態3 縦形で「つまみ部分」が主軸線に対し平行し刃部の両側縁が湾曲するもの(第76図61)

形態4 縦形で「つまみ部分」が左右いずれかに傾き刃部が長方形を呈すもの(第49図49)

形態5 縦形で「つまみ部分」が左右いずれかに傾き刃部の一方が湾曲するもの(第49図50、

第67図1)

形態6 横形で「つまみ部分」が主軸線に直角につくもの(第98図236)

d 石錐

調整剥離を先端の機能部だけに施すもの(第14図16 第57図6)と全面に施すもの(第98図235)がある。

e 筥状石器

第34図9の1点だけだが、破損品のため詳細不明。

f ピエス・エスキーユ

いわゆる楔形石器(第14図14 第42図34 第84図22)

g 不定形な剥片を利用したもの

機能的には削、搔器の類と考えられるもの。実測図を掲載しないものも含め相当数となる。

(2)一2 打製石器

a 背面に大きく自然面を残す石斧

形態や背面の自然面の残存状況により11形態に分けられる。

形態1 長方形を呈し背面に剥離の認められないもの(第12図6 第17図49)

形態2 長方形を呈し背面の側縁部に剥離を施すもの(第24図26、27 第35図25 第51図68、73)

形態3 楕円形状を呈し背面に剥離の認められないもの(第17図46 第35図21、22 第43図36 第51図66 第59図8、15、17 第98図2)

形態4 楕円形状を呈し背面の刃部に剥離を施すもの(第59図13)

形態5 楕円形状を呈し背面の側縁部に剥離を施すもの(第12図4 第17図48 第30図22 第43図37 第51図71 第59図7、9、11 第60図6、7 第86図3 第88図3 第98図2)

形態6 楕円形状を呈し背面の基部に剥離を施すもの(第30図20 第51図69、74)

形態7 撥形状を呈し背面に剥離の認められないもの(第26図7 第35図23 第86図1)

形態8 撥形状を呈し背面の側縁部に剥離を施すもの(第12図7 第14図9 第24図29 第30図21 第34図10 第35図24 第41図35 第51図65、67)

形態9 撥形状を呈し背面の基部に剥離を施すもの(第59図10)

形態10 半円状を呈し背面に剥離の認められないもの(第59図12)

形態11 半円状を呈し背面の側縁部に剥離を施すもの(第14図10 第51図70)

b 特殊磨石

断面三角形を呈し下端を機能磨面とし両側縁に調整磨面を形成するもの(第33図35 第36図5、6 第42図38 第53図78~80 第59図19)

c 礫器

円礫の一端を打ち欠き片刃状の刃部を作り出すものでチョッパー的機能をもつ(第24図32 第77図74~76)

(2) 磨製石器

a 磨製石斧

第26号竪穴住居跡から出土した1点のみである(第71図71)

IV 調査のまとめ

今回の調査で検出した遺構、遺物は既述のとおりであるが、以下、若干の考察を加えてまとめてみる。

1. 竪穴住居跡

重複するものも含めて34棟の竪穴住居跡を検出したが、第8号～16号竪穴住居跡のように9棟の重複や第9号、17号竪穴住居跡のように拡張が行なわれたと考えられる住居跡も存在し、集落が継続的に営まれていたと考えられる。以下、34棟の住居跡の主な特徴をまとめてみる。

- ① 平面形は楕円形、(隅丸) 方形～長方形、円形プランを基調とするものがある
- ② 竪穴内に炉を持つものと持たないものがあり、炉はすべて地床炉である
- ③ 柱穴は明確に柱穴と判断されるものがないものや壁沿いに小杭状のピットを巡らすものなどがある
- ④ 周溝があるものとないものがある

以上の特徴などから34棟の竪穴は、次の6タイプに分けられる。

6タイプ

A₁タイプ 方形～長方形プランを基調とし壁沿いに小ピットを巡らし、床面中央部に深い柱穴を有す(第5号、7号、26号竪穴住居跡)

A₂タイプ A₁タイプと類似するが、床面中央部に深い柱穴を持たない(第1号、8号、13号竪穴住居跡)

B₁タイプ 柱穴のほとんど確認できないもので方形～長方形プランを基調とする(第6号、11号、20号、21号、24号、27号～33号竪穴住居跡)

B₂タイプ B₁タイプ同様柱穴がほとんど確認できず楕円形プランを基調とするもの(第22号、23号竪穴住居跡)

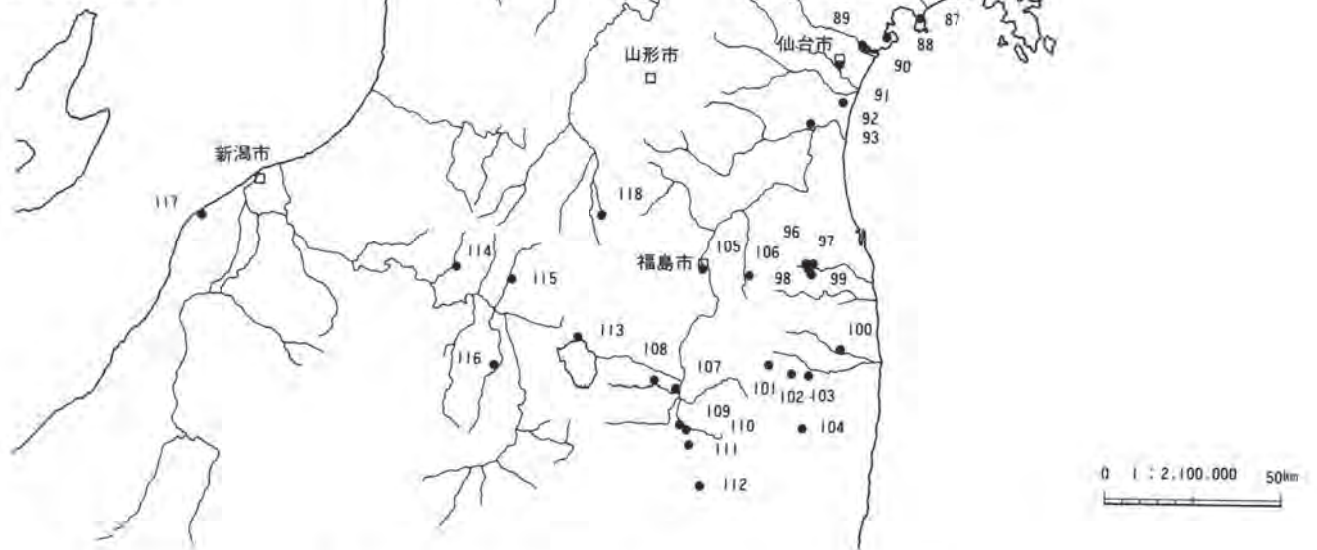
B₃タイプ B₂タイプに類似するが竪穴内に炉、周溝を持つもの(第9号、16号～19号竪穴住居跡)

C₁タイプ 円形プランを基調とするもの(第3号竪穴住居跡)

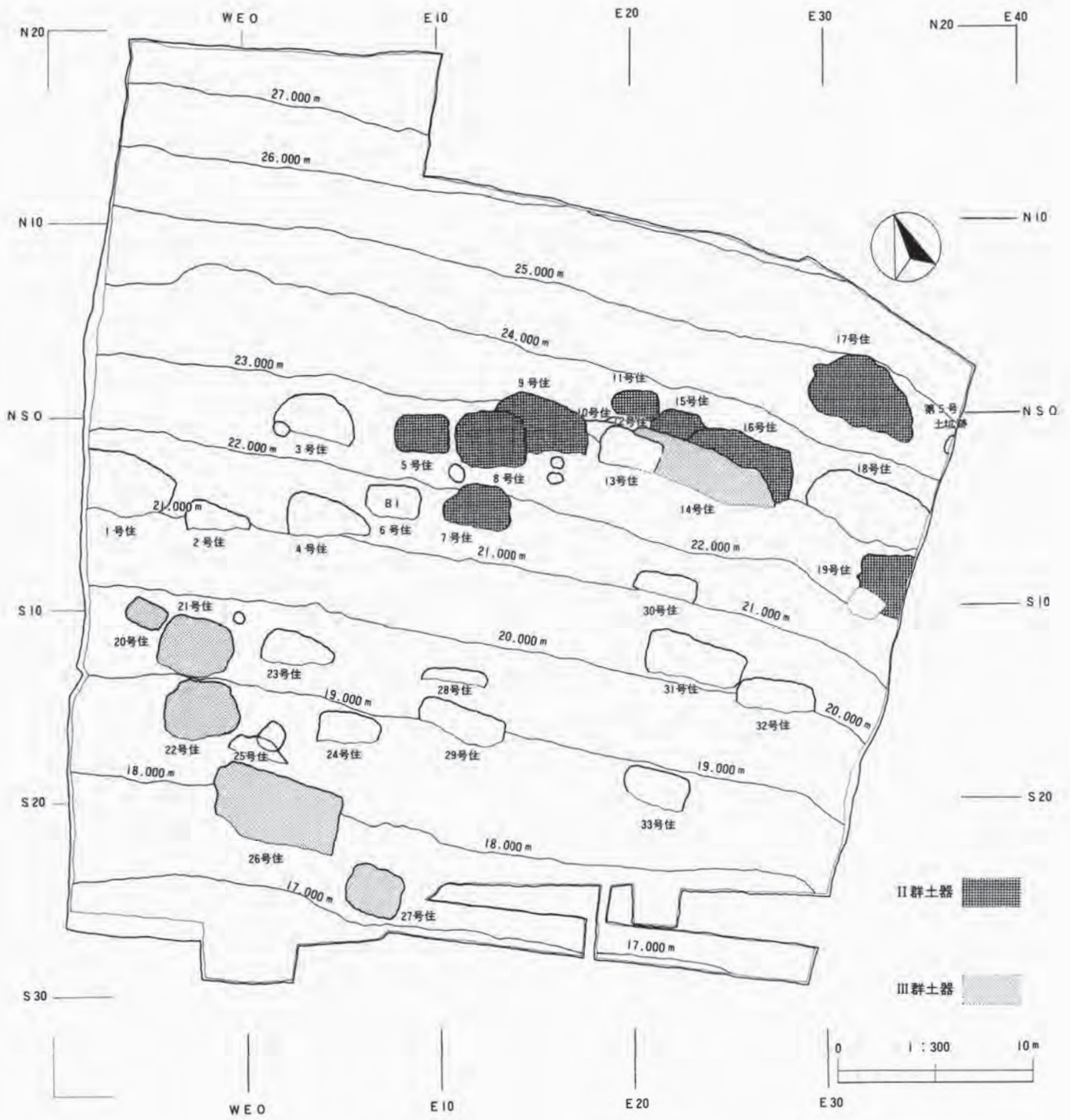
これら6タイプの竪穴は、出土遺物などからすべて縄文時代前期初等～前半のものと考えられる。岩手県内においては、当該期に相当する竪穴住居跡の調査例は少ないが、早期後半～前期前半の竪穴住居跡としては、水沢市駈上遺跡S I-38(縄文-縄文土器出土)、矢巾町大渡野遺跡Ca56竪穴住居跡、Cf12竪穴住居跡(縄文-縄文土器出土)、滝沢村湯舟沢遺跡XIRi住居址(羽状縄文土器出土)、紫波町宮手遺跡Bj24住などが知られているが、滝沢村仏沢Ⅲ遺跡では竪穴を伴う配石遺溝が検出されている。このうち、大渡野遺跡Ca56、宮手遺跡Bj24は、床面中央に支柱穴を持ち壁際、壁外に小ピットが存在し本遺跡のA₁タイプに、湯舟沢遺跡XIRiは楕円形プランで炉、柱穴を有さないもので本遺跡のB₂タイプに、仏沢Ⅲ遺跡の竪穴は長方

1. 物見台貝塚
2. ムシリ貝塚
3. 吹切沢貝塚
4. 下田代納屋遺跡
5. 前坂下遺跡
6. 大石平遺跡
7. 上尾敷遺跡
8. 発茶沢遺跡
9. 表館遺跡
10. 千歳遺跡
11. 新納屋遺跡
12. 唐貝地遺跡
13. 早稲田貝塚
14. 野口貝塚
15. 根井沼貝
16. 日ヶ久保貝塚
17. 和野前山貝塚
18. 長七谷地貝塚
19. 売場遺跡
20. 日計遺跡
21. 小舟渡平遺跡
22. 下松苗場遺跡
23. 白浜遺跡
24. 館平遺跡
25. 赤御堂貝塚
26. 鴨平遺跡
27. 館遺跡
28. 寺ノ沢遺跡
29. 山崎遺跡
30. 大平山元1遺跡
31. 芦野遺跡
32. 能ノ沢遺跡
33. 螢沢遺跡
34. 砂沢平遺跡
35. 永野遺跡
36. 長瀬A遺跡
37. 家ノ上遺跡
38. 沢内B遺跡
39. 中曾根遺跡
40. 上里遺跡
41. ひょうたん穴洞穴遺跡
42. 下平遺跡
43. 下長谷地遺跡
44. 野中遺跡
45. 桜松遺跡
46. 塩ヶ森遺跡
47. 新城館遺跡
48. 堂ヶ沢遺跡
49. 上野遺跡
50. 下猿田遺跡
51. 太田オミ坂遺跡
52. 大渡野遺跡
53. 宮手遺跡
54. 一本松熊沢遺跡
55. 小堀内遺跡
56. 崎山貝塚
57. 赤前遺跡
58. 菜坊遺跡
59. 千鷲遺跡
60. 崎山弁天遺跡

61. 梅ノ木遺跡
62. 長根前遺跡
63. 大曾根遺跡
64. 駈上遺跡
65. 照井館遺跡
66. 蛇土洞穴遺跡
67. 湧清水洞穴遺跡
68. 関谷洞穴遺跡
69. 牧田貝塚
70. 松倉遺跡
71. 七日市貝塚
72. 大館遺跡
73. 湯舟沢遺跡
74. 仏沢川遺跡
75. 白沢遺跡
76. 馬立遺跡
77. 大久保遺跡
78. 飛鳥台地遺跡
79. 桂平遺跡
80. 沼久保遺跡
81. 野駄遺跡
82. 熊野橋遺跡
83. 田柄貝塚
84. 大平館遺跡
85. 南境貝塚
86. 梨木畑貝塚
87. 金山貝塚、龜岡遺跡
88. 船入島貝塚、吉田浜貝塚
89. 大木田貝塚
90. 桂島遺跡
91. 三神峯遺跡
92. 金剛寺貝塚、宇賀崎貝塚
93. 槻木貝塚、上川名貝塚
94. 天神山遺跡
95. 庚申町遺跡
96. 柏久保遺跡
97. 岩下遺跡
98. 松ヶ平遺跡
99. 羽白遺跡
100. 中平遺跡
101. 富作遺跡
102. 上屋敷遺跡
103. 馬々遺跡
104. 宇道遺跡
105. 愛宕原遺跡
106. 北ノ股遺跡
107. 鳴神遺跡、西原遺跡
108. 古亀田遺跡
109. 唐松遺跡
110. 地藏田遺跡
111. 牡丹平遺跡
112. 諏訪平遺跡
113. 登戸遺跡
114. 長者屋敷遺跡
115. 常世遺跡
116. 冨宮西遺跡
117. 布目遺跡
118. 松原遺跡



第99図 縄文時代早期後半～前期前半の遺跡分布図



第100图 竖穴住居跡出土土器别分布图

	タイプ	長軸 (m)	炉の有無	出土土器			
				I群	II群	III群A類	III群B類
1号住	A ₂	4.37	×	0	4	7	0
2号住	?	3.31	×	0	0	0	0
3号住	C ₁	4.15	×	0	1	1	0
4号住	?	4.38	×	0	2	1	0
5号住	A ₁	2.79	×	0	5	1	16
6号住	B ₁	2.78	×	0	0	0	0
7号住	A ₁	3.50	×	0	8	2	3(1)
8号住	A ₂	3.62	×	0	5	0	0
9号住	B ₃	(5.15)	○	1	6	0	0
10号住	?	?	×	0	0	0	0
11号住	B ₁	2.31	×	0	1	0	0
12号住	?	(1.95)	×	0	0	0	0
13号住	A ₂	3.10	×	0	0	0	0
14号住	B ₃ ?	7.70	×	0	0	2	2
15号住	?	3.50	×	1	2	0	0
16号住	B ₃	5.75	○	1	3	0	0
17号住	B ₃	5.60	○	0	29(2)	0	0

	タイプ	長軸 (m)	炉の有無	出土土器			
				I群	II群	III群A類	III群B類
18号住	B ₃	(6.20)	○	0	0	0	0
19号住	B ₃	(2.55)	○	0	1	0	0
20号住	B ₁	1.90	×	0	0	1	0
21号住	B ₁	3.75	×	0	0	1	0
22号住	B ₂	3.73	×	0	1	4	5
23号住	B ₂	3.65	×	0	0	0	0
24号住	B ₁	3.15	×	0	0	0	0
25号住	?	3.00	×	0	0	0	0
26号住	A ₁	6.42	×	0	0	3	31
27号住	B ₁	2.85	×	0	2	4(1)	3(1)
28号住	B ₁	3.35	×	0	0	0	0
29号住	B ₁	4.55	×	0	0	0	0
30号住	B ₁	3.25	×	0	0	0	0
31号住	B ₁	5.00	×	0	0	0	0
32号住	B ₁	4.05	×	0	0	0	0
33号住	B ₁	3.42--	×	0	0	0	0
34号住	?	?	×	0	0	0	0

※① ()内は、復元土器数。

② 0は、拓影図以外の出土土器内にも全く含まないことを意味する。

第1表 各竪穴住居跡別観察表

形プランで壁沿いに柱穴が巡るもので本遺跡A₂タイプに各々類似する。

岩手県外では、青森県の小田野沢下田代納屋B遺跡、長七谷地貝塚、新納屋遺跡(3)、売場遺跡、表館遺跡、宮城県の今熊野遺跡、三神峯遺跡、小梁川遺跡、六田遺跡、山形県の松原遺跡、小林遺跡などで早期後半～前期前半の竪穴住居跡が調査されている。これらは、ほぼ本遺跡の6タイプの中におさまるものだが、時期的なものも考慮しなければならないが、概して、青森、岩手県の東北半ではB₁、B₂タイプ、宮城、山形県の東北半ではA₁、A₂タイプが多いようであるが、B₃タイプのものは極めて少ない。

次に、本遺跡の竪穴住居跡を出土土器別に分類したのが第100図である。これからわかる様にII群土器に伴うものは中央部～北東部に、III群土器に伴うものは南東部と分れる。(このうち第1号竪穴住居跡については、新旧関係を掌握せずに精査してしまったため除外している。)タイプ別にみれば、B₃タイプはII群土器、B₁、B₂タイプはIII群土器に伴うものが多い。A₁、A₂タイプは両者にまたがっているが、III群土器に伴っているのは規模的にはB₃タイプに近い第26号竪穴住居跡だけである。規模的(長軸長)には、A₁、A₂、B₁、B₂タイプは4m前後、B₃タイプは5m超となっている。B₃タイプはII群土器に伴うという確実な点なども含めて考えると、これらのタイプは、時期的に異なるものと考えられるが、同じII群土器、III群土器に伴うものの中でも異なるタイプのものが存在していることや東北半にはB₁、B₂タイプ、南半にはA₁、A₂タイプが多いということなどから地域性の違い、系統的に全く別なものであるということも考えられる。いずれにしても、他地域では特異な竪穴内に炉(地床炉)を有すB₃タイプが比較的多く存在することから、竪穴内に炉を設置し定着しはじめる段階に相当するものと考えられる。

2-(a) 土器

本遺跡からは、既述したように縄文時代前期初頭～前半に相当する土器を中心に出土した。以下、若干の考察を加えてまとめる。

I群土器は、いわゆる縄文—縄文土器で岩手県内では、大槌町崎山弁天遺跡、大船渡市関谷洞窟、矢巾町大渡野遺跡などからまとまって出土している。本遺跡では5点のみの出土で詳細は知り得ないが、口唇部を平坦ないしは内削ぎに整形する、内外面ともに太くて粗い縄文を施文する、繊維の含有量が少ない、硬質なものが多く、器面に煤状～タール状の炭化物が付着する、などの特徴が認められるが、資料点数があまりにも少なく他と比較することには無理がある。いずれにしても、これらI群土器は、広義に縄文時代早期後半～末葉に相当するものである。なお、IV群B類の斜縄文だけの土器中にも、内面に縄文施文が確認できないという点を除き、その縄文、胎土、焼成などが酷似するものもかなり含まれる。

II群、III群土器は、縄文時代前期初頭～前半に相当する土器である。

東北地方南半の該期における土器型式の編年は、山内清男によって室浜式→大木1式が設定されたが、室浜式なるものの内容が今ひとつ不明確であった。しかし、加藤孝によって調査された宮城県柴田町上川名貝塚出土土器によってその内容が明らかとなった。それによれば、出土した土器は上層土器と下層土器の2型式に分類され、上層土器（現在の上川名II式）を前期のはじめに位し、関東の花積下層式に併行するものとした。その土器群は、羽状縄文土器、竹管文土器、撚糸文土器、竹管撚糸文土器から成り、山内清男設定の室浜式にかわり、縄文時代前期初頭の土器型式として上川名II式が設定された。この加藤孝の上川名II式について、林謙作は、宮城県塩釜市桂島貝塚出土の土器群を、口縁部文様帯の欠如、体部文様が縄文（ほとんどすべてが帯状施文による斜行および羽状縄文）にかぎられる、器裏面に擦痕文が例外的にしか認められない、などの理由により上川名II式から分離させ桂島式を設定し、上川名II式→桂島式→三神峯III層土器→大木1式という変遷を提示した。しかし、その後、白鳥良一、後藤和彦らにより、①宮城県塩釜市南境貝塚妙見地区、名取市宇賀崎貝塚B群土器、仙台市三神峯貝塚など桂島貝塚以外の他の遺跡では、桂島式と上川名II式は層位的に分離されない、②桂島式は口縁部文様帯を全く欠き上川名II式とのギャップが有り過ぎ、上川名II式の一部を分けただけで型式としての吟味がなされていない、などの理由から桂島式設定には否定的となっている。

一方、東北地方北半では、上川名II式に併行するものとして長七谷地III群が設定され、前期初頭から前半を長七谷地III群→表館式（芦野第一群土器）→早稲田6類土器という変遷が設定され大筋では受け入れられている。

岩手県内においては、当該期にあたるまとまった資料が少ないことや南北両方の資料及び本遺跡III群B類土器のような特殊な原体、施文技法を有す土器群が出現し、その様相が一層煩雑なものとなっている。このような中、熊谷常正は、岩手県における当刻期の土器を4期に区分した。即ち、I期は、上川名II式に併行する花積下層式類似の土器で構成されるグループ、II期は、関東の関山I式、青森の芦野第一群に相当する時期で、山形文的構成をとるループ文をもつ土器、III期は、早稲田6類に相当する押し引き沈線文、ループ文を伴う土器群、IV期は、大木1式に相当し口縁部にループ文、不整撚糸文をもつものや本遺跡の施文技法7を施文する

上川名II式

桂島式

長七谷地III群

土器などで構成される時期、の以上4期を設定した。

さて、本遺跡から出土したⅡ群～Ⅳ群土器は、縄文時代前期に伴うものである。このうち、Ⅱ群土器、Ⅲ群土器は前期初頭に伴うもので各々層位的にもまとまって出土している。また、型式学的にも両者を分類できると考えられることから、Ⅱ群土器を主体とする一群を千鶏Ⅰ式、Ⅲ群土器を主体とする一群を千鶏Ⅱ式とする。

千鶏Ⅰ式は、第17号竪穴住居跡に代表される土器群で、Ⅱ群、Ⅳ群A類の一部（撚糸文を地文とするもの）、Ⅳ群B類の一部（斜縄文を地文とするもの）、Ⅳ群E類から成り、関東地方の花積下層式、東北地方南半の上川名Ⅱ式、北半の長七谷地Ⅲ群、北海道南部の桔梗野式に併行するものである。

千鶏Ⅰ式

千鶏Ⅰ式のうちのⅡ群A類a種、Ⅱ群A類b種は、各々上川名Ⅱ式の竹管撚糸文土器、竹管文土器に相当し、Ⅱ群A類c種、Ⅱ群D類は、上川名Ⅱ式の羽状縄文土器に相当するが、上川名Ⅱ式の撚糸文土器が欠落する。Ⅱ群C類は、長七谷地Ⅲ群Ad類2種に相当する。

上川名Ⅱ式では地文に結束する羽状縄文と結束しない羽状縄文が混在しているが、千鶏Ⅰ式では、各竪穴住居跡出土土器をまとめた第1表の通り基本的には共伴していない。本遺跡の様に該期において結束しない羽状縄文が主体となることは、岩手県以北には共通する様相である。例えば、青森県八戸市売場遺跡第一次調査3号、5号、9号住居跡、長七谷地貝塚第2次調査4号～6号竪穴住居跡、岩手県滝沢村湯舟沢XIRi住居址など結束しない羽状縄文だけを出土しており、結束する羽状縄文が共伴しない。一方、岩手県以南では、上川名貝塚上層土器、宮城県名取市宇賀崎貝塚8～12層土器、福島県小高町宮田貝塚2a層土器などの様に両者が混在しており必ずしも本遺跡のような出土状況とはなっていない。

次に、口縁部に文様帯を形成するⅡ群A類a種、Ⅱ群A類b種土器は、岩手県内では滝沢村湯舟沢遺跡、雫石町桜松遺跡などから比較的まとまって出土しているが、本遺跡出土のものには、湯舟沢第Ⅱ群1類や桜松3類aにみられるような渦巻文の圧痕文を3～4段有し口縁部文様構成が重層化するものや波頂部に粘土の高まりをもつ波状口縁になるものや湯舟沢にある口縁部上端に円形刺突文を有すなどは存在しない。逆に、本遺跡のものには、口縁部が内湾するキャリバー形のものや口縁部文様構成が単層化することや渦巻の中心部に粘土粒の高まりをもつことや渦巻がくずれて円形状になるものがある。

また、第17号竪穴住居跡から出土した第47図1を代表させてその施文順序を観察すると、まず上下に横位の側面圧痕文を施文し区画する。次に、斜位の側面圧痕文を施文し三角形から山形状の構成を形作り、次にその頂部、谷部に渦巻文を施し、最後に刺突文、刻目文を充填させるという順序になる。この様な施文順序については、山形県米沢市松原遺跡の報告において、秦昭繁が言及しており確かに秦の指摘した統一性が本遺跡のものにも符合する。ただし、松原遺跡や山形県庚申町遺跡出土のものでは、渦巻文と側面圧痕文が一体化したような蕨状撚糸圧痕文を施文するが、本遺跡の場合は一体化しない。

Ⅱ群A類a種、Ⅱ群A類b種のような口縁部文様を形成するものは、北海道函館市サイベ沢遺跡や長七谷地貝塚でも出土しているが、その占める割合は小さく長七谷地Ⅲ群Aa類、Ad類が主体となっている。

以上のように千鶏Ⅰ式は、少量ながら長七谷地Ⅲ群土器が出土していることや地文の羽状縄

文は岩手県以北、口縁部文様は岩手県以南のものに類似し、両者混合の様相を呈す。このようなことは、岩手県中央部の滝沢村湯舟沢遺跡、雫石町桜松遺跡などでもみられ岩手県を中心とした地区でまとまるような様相として位置づけられる。

千鷲Ⅱ式は、第26号、27号竪穴住居跡に代表される土器群で、Ⅲ群A類、Ⅲ群B類、Ⅳ群A類の一部（撚糸文を地文とするもの）、Ⅳ群B類の一部（斜縄文を地文とするもの）で構成されるものである。

このうちⅢ群A類は、かつて林謙作によって提示された桂島式と口縁部文様帯の欠落、口縁部上端の刺突、器形、地文など極めて類似するものである。しかし、既述した通り桂島式は否定され上川名Ⅱ式の中に含まれている。ところが、その否定される根拠のひとつにあげられている宇賀崎貝塚B類土器を詳細に分析すれば、上川名Ⅱ式に比べて撚糸圧痕文で山形状のモチーフを施すものがほとんどないことや地文の羽状縄文が結束するものが主体を占めることが言える。それに本遺跡における層位的事実を加えて考えると、宇賀崎貝塚B群は上川名Ⅱ式から分離されるものと考えられる。

次にⅢ群B類は、本遺跡の第5号竪穴住居跡では上層（A層）から出土し明らかに下層（C層）から出土した千鷲Ⅰ式のⅡ群土器とは層位的に分離する。また、第26号、27号竪穴住居跡ではⅢ群A類と共伴している。このような土器は、岩手県中央部～県北部、沿岸部を中心に出土しており他県にはあまりみられず、岩手県を中心とし分布するようである。県内では、滝沢村仏沢Ⅲ遺跡、湯舟沢遺跡、二戸市沢内B遺跡、田老町小堀内Ⅰ遺跡、宮古市赤前Ⅳ遺跡、崎山貝塚、紫波町宮手遺跡、安代町関沢口遺跡などから比較的まとまって出土している。他県では、ほとんど知られていないが、青森県八戸市表館遺跡では、早稲田Ⅵ類、春日町式に併行する第ⅩⅤ群土器と層位的に共合する第ⅩⅥ群Ⅱ類土器が相当する。

これらの土器は、口唇部の形態、施文の有無や口縁部に文様をもつものなどにより分けられる。口唇部形態は、本遺跡のように平坦ないし、内削ぎに整形するもの（仏沢Ⅲ、湯舟沢、小堀内Ⅰ、赤前Ⅳなど）と口唇部が薄くなりやや外反するもの（沢内B、崎山貝塚など）があり後者には口唇部に施文しないものがほとんどである。口縁部に文様を有すものは、関沢口ではループ文、宮手では不整撚糸文が施文される。更に、崎山貝塚では、当該土器が大木Ⅰ式の不整撚糸文の直前の層から出土し、千鷲Ⅰ式、Ⅱ式のⅢ群A類土器が全く含まれないという層位的事実から、当該土器も時期的に最低限3つに分けられる。即ち、①千鷲、仏沢Ⅲ、赤前Ⅳなどのように口唇部が平坦に整形され施文を有すもの、②崎山貝塚、沢内Bなどのように口唇部が薄くなり施文のないもの、③宮手などのように口縁部に不整撚糸文をもつものの3期である。宮手では、口唇部に文様を有さないものも出土しているが、それらはほぼ②期の崎山貝塚、沢内Bのように口唇部に施文をしないもので、②期→③期の変遷がスムーズに考えられる。①期と②期の間には、ループ文土器と共伴している小堀内Ⅰが入る可能性が考えられるが、現在のところ層位的事実などが不明で定かでない。

以上のように、千鷲Ⅱ式は、上川名Ⅱ式から分離されるもの（Ⅲ群A類）とⅢ群B類がセットとなるものである。Ⅲ群B類は、前述のように極めて岩手色の強いものであり千鷲Ⅱ式も千鷲Ⅰ式同様に岩手を中心とした地区でまとまる様相を呈し、千鷲Ⅰ式→千鷲Ⅱ式という変遷が容易に考えられる。

また、熊谷常正が指摘するように、当該期において岩手県では他地域に比べてループ文、コンパス文などの施文技法を施すものが極端に少ない。このことについては、千鷲Ⅰ式、Ⅱ式で見られるような岩手を中心としてまとまる地域では、ループ文、コンパス文などの代わりに、本遺跡のⅢ群B類のような土器が存在している可能性が考えられる。

Ⅳ群F類は、不整然糸文を横位に施文するものでほぼ大木Ⅰ式～Ⅱ式に相当する。

Ⅳ群G類は、S字状連鎖沈文を施文するものでほぼ大木Ⅱ式に相当するものである。

Ⅳ群H類は、粘土紐貼付文を施文するもので小波状の粘土紐を貼付しており大木Ⅳ式に相当するものである。

2-(b) 石器

本遺跡からは、既に記述したとおりの石器が出土した。これは、出土土器の大半を占める縄文時代前期初頭～前半に伴うものと考えられる。確かに今回の調査で出土した石器は、該期の特徴を表わしている。例えば、三角形の無茎鏃が多く、石匙も縦形のもものがほとんどである。

ここでは、出土量も多く本遺跡に特徴的と考えられる打製の石器について記述する。

a 背面に自然面を残す石斧

このような石器については、すでに『大付報文79』で熊谷常正によって様々な角度から詳細な検討を試みており、本遺跡においてもこれに基づき分類したものである。それによれば、本遺跡出土のものも、石質、製作技法、自然面などほぼ宮古市大付遺跡出土のものに類似している。また、熊谷は、この中で当該石器は、その分布域、時期が極めて特定される可能性を示唆している。

まず、分布域は、岩手県沿岸南部及び北上川流域にはほとんど分布せず、宮古市周辺から八戸市周辺部にみられ、更に北方へ分布する可能性が否定できないものとある。まさに熊谷の指摘する通りで、最近では、八戸市の売場遺跡から比較的多く出土している。

次に、時期的には、積極的にその時期を決定する情報を欠くため改めて発表したいとしているが、大付遺跡からわずかであるが前期初頭の土器が出土していることや八戸市周辺部では早期末～前期にかけての遺跡から出土するなどかなり前期を意識している。

以上のことを含め宮古市周辺の前期の遺物を出土する遺跡での状況をみていくと、本遺跡の他、赤前Ⅳ遺跡、田老町小堀内Ⅰ遺跡からは出土しているが、崎山貝塚からは全く出土していない。即ち、千鷲Ⅱ式としたうちのⅢ群B類土器を出土する遺跡において出土する所としない所があることから、土器のまとめに記述したⅢ群B類土器の①期（本遺跡、赤前Ⅳ）では出土し②期（崎山貝塚）では出土しない。小堀内Ⅰ遺跡は口唇部の形態からすれば①期に近いが口唇部に施文をもつものが少ない。また、県内では数少ないループ文施文土器が出土しておりどちらかといえば②期に近いものである。しかし、当該石器を出土しており②期には入れにくい。ひとつの可能性として小堀内Ⅰ遺跡は、①期と②期の間に入る事が考えられる。そして、縄文—縄文土器を出土する大槌町崎山弁天遺跡からは全く出土していない。

以上のことから、当該石器は、沿岸部に特有なもので、千鷲Ⅰ式から千鷲Ⅱ式、そして小堀内Ⅰ遺跡の時期までに使用された極めて特徴的な石器と考えられる。また、磨滅しやすい軟質なものを材質としているもの、剥離自体が大まかなものが多く、沿岸部に分布することを考慮に入れ、その用途、機能について考えていかなければならない。

b 特殊磨石

断面三角形を呈し、その一側縁部を利用するものである。機能的には、一般的に言われている様に敲き磨くものであるが、その用途に関しては、諸説あるが、当該石器では、調整磨面により機能磨面を一定にしていることに特徴があり、このことは、用途に対して決して無縁であるとは考えられない。

c 礫器

楕円形に近い自然礫を打ち欠き片刃の刃部を作り出しているものである。機能的には、チャッパー的なものが考えられる。本遺跡における出土数は4点と少ないが、崎山貝塚では数多く出土しており、背面に自然面を残す石斧とは好対照をなしている。

あとがき

以上、千鶏遺跡の発掘調査の結果を報告したが、最後、今後に残された課題、より広い大きな観点から考えていかなければならない点を列挙して終りとする。

- ① 堅穴住居跡を6タイプに分類したが、これが時間差、機能、用途などに結びつくものかという問題及び集落としての在り方。
- ② 第17号堅穴住居跡からは獣骨片が出土しており自然遺物が残りうる状況であるにもかかわらず、海に直接面する本遺跡からは海に関する遺物（自然遺物、漁撈具）が全く出土していない。
- ③ 限られたひとつの千鶏という地域内に立地する各遺跡の主体が時期的に異なっていると考えられる（分布調査の結果に基づく）ことから、集団の移動、集落の変遷を考えるうえには非常に興味深いものがあると考えられる。
- ④ 他地域との交流の問題。出土土器などの遺物を分布すれば、北及び南からの影響が色濃く反映されており、かなりの交流があったものと思われるが、陸路よりはむしろ海路を利用した可能性が高い。
- ⑤ 土器などの遺物に関しては、当該期のものが非常に少ないが、今後、増加するものと考えられる。特に、Ⅲ群B類土器は岩手県を中心とした領域を有す人々によって使用されていた可能性が高いが、今後、明らかになっていくものと思われる。

Summary

The excavation in CHIKEI was done by the board of education. Miyako from September to December in 1987. A settlement of the beginning of Early Jomon was unearthed.

Miyako, with a population of 60,000, is centrally located on the Sanriku Kaigan National Park famous for its sawtooth coastline. CHIKEI is in the east side of Omoe Hanto, peninsula east of Miyako. Most of Omoe Hanto is hilly land ranging from 400m to 700m with the highest peak of Mt. Junishin, 731m above sea level. This site is located on the edge of the hillside, 15m~25m above sea level, facing the pacific ocean.

We found 34 pit dwellings of the beginning of Early Jomon, including numerous potteries, stone tools. Nine of them were built on top of another and some have an extension. That suggests that the site had been occupied by successive culture groups. We classified thirty-four houses into six types on the basis of four major features. But we need further study to know whether this classification shows difference in time or in culture.

Potteries unearthed here have some parallels with the Kamikawana II type in southern Tohoku or the Hanazumi Lower Layer type in Kanto. But stratigraphic level of the site, local environmental condition, the area of distribution of type pottery indicate that they belong to a group formed mainly in Iwate region. So we named them Chikei I, II type. It should be noted that III b group of Chikei II type is decorated with a cord intertwined in a peculiar way, which appeared in a limited number of regions and disappeared shortly.

This site is valuable not only because remains with those types of potteries and stone tools are rare in Tohoku district as well as Iwate prefecture, but because this site has a number of pit dwellings. We must do a lot of research on relation between the house remains and the potteries.

※ Summary作成には、阿部豊氏（宮古市在住）の協力を得た。

《参考 引用文献》

- 相原 康二 「大渡野遺跡」(『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』) 岩手県教育委員会 1979
- 阿部 恵 「宇賀崎貝塚」(『宮城県文化財調査報告書67』) 宮城県教育委員会 1980
- 岩瀨 康治・佐藤 則之 (『三神峯遺跡発掘調査報告書』) 仙台市教育委員会 1980
- 大原 一則 (『小堀内Ⅰ遺跡発掘調査報告書』) 岩手県埋蔵文化財センター 1983
- 大湯 卓二・他 (『長七谷池貝塚遺跡発掘調査報告書—昭和53年度第2次』) 青森県教育委員会 1980
- 加藤 孝 「上川名貝塚の研究」(『宮城女子学院大学研究論文集1』) 宮城女子学院大学 1952
- 川崎 利夫・保角 里志・他 「小林遺跡—縄文前期遺跡と平安時代集落跡—」東根市教育委員会
- 桐生 正一・他 「湯舟沢遺跡」滝沢村教育委員会 1986
- 熊谷 常正 「岩手県における縄文時代前期土器群の成立」(『岩手県博物館研究年報1』) 岩手県立博物館 1983
- 興野 義一 「大木式土器理解のために(Ⅰ)」(『考古学ジャーナル13』) ニューサイエンス社 1967
- 興野 義一 「大木式土器理解のために(Ⅱ)」(『考古学ジャーナル16』) ニューサイエンス社 1968
- 後藤 勝彦 「埋蔵文化財第4次緊急調査概報—南境貝塚—」宮城県教育委員会 1969
- 二本柳正一・角鹿 扇三・佐藤 達夫 「青森県上北郡早稲田貝塚」(『考古学雑誌43—2』) 日本考古学会 1956
- 庄野 靖寿 「関山貝塚」埼玉県教育委員会 1974
- 鈴鹿 良一・他 「崎山弁天遺跡」大槌町教育委員会 1973
- 鈴木 明美 「駈上遺跡」水沢市教育委員会 1982
- 鈴木 克彦 (『長七谷地貝塚遺跡発掘調査報告書—昭和52年度第1次』) 青森県教育委員会 1980
- 高橋亜貴子・他 「仏沢Ⅲ遺跡」滝沢村教育委員会 1987
- 高橋与右エ門 「二戸市沢内B遺跡—昭和53年度」岩手県埋蔵文化財センター 1978
- 高橋与右エ門 「上里遺跡」(『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書』) 岩手県埋蔵文化財センター 1983
- 高橋 正之・本沢 慎輔 「盛岡市下猿田Ⅲ遺跡」(『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書—昭和49年度・54年度』) 岩手県埋蔵文化財センター 1981
- 中川 重紀 「雫石町桜松遺跡」(『御所ダム関連遺跡発掘報告書—昭和49・51・55年度』) 岩手県埋蔵文化財センター 1982
- 松野 恒夫 「盛岡市新城館遺跡」(『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書—昭和48・49年度』) 岩手県埋蔵文化財センター 1982
- 三上 昭 「宮手遺跡」(『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』) 岩手県教育

委員会 1980

「金山貝塚」宮城県文化財保護協会 1977

奏 昭繁 「松原」置場考古学会 1977

林 謙作 「宮城県柱島貝塚出土の前期縄文式土器群」(『考古学雑誌46-3』)日本考古学会 1960

松野 恒夫 「新城館」(『御所ダム関連遺跡発掘報告書』)岩手県埋蔵文化財センター 1982

縄文文化検討会 「東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について」1989

写 真 图 版



千鶴遺跡全景

第2図版



遺跡景観



調査区近景



試掘トレンチ



検出遺構

第4図版



第1号竖穴住居跡完掘状況



堆積状況



第2号竖穴住居跡完掘状況



堆積状況

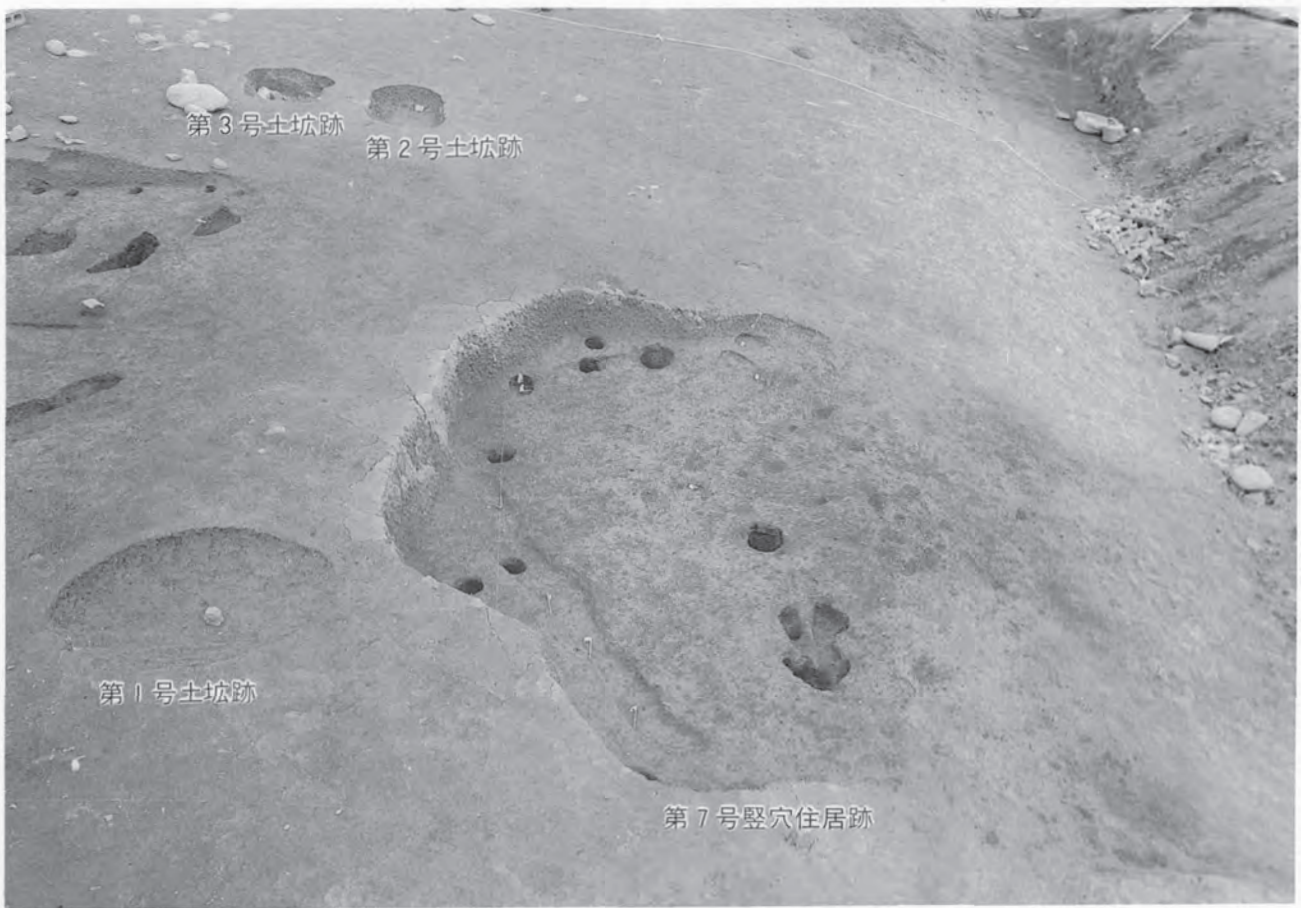
第6図版



第5号竖穴住居跡完掘状況



堆積状況



第7号竖穴住居跡、第1号、2号、3号土坑跡完掘状况



第7号竖穴住居跡遺物出土状况

第8図版



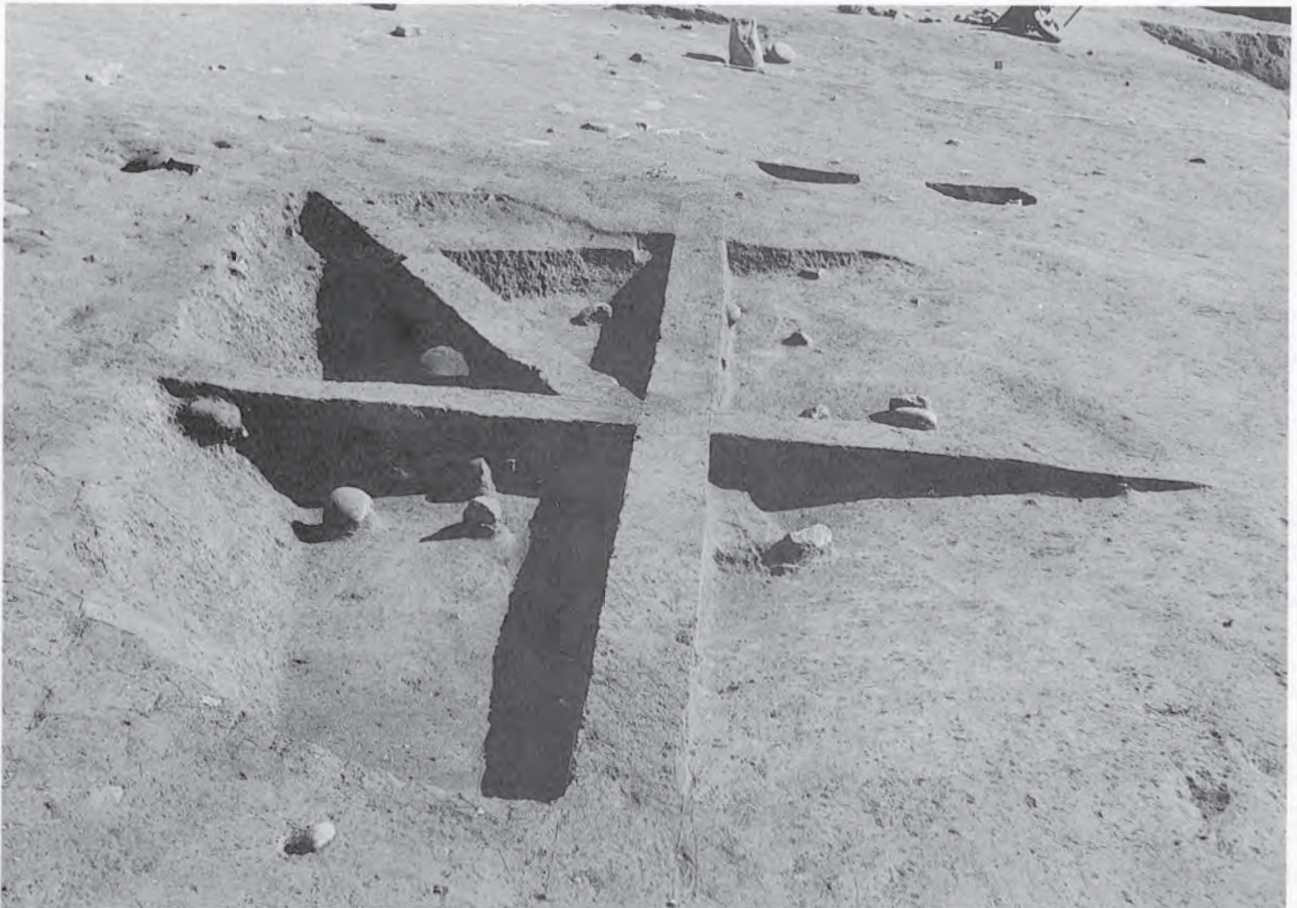
第7号竖穴住居跡堆積状況①



第7号竖穴住居跡堆積状況②



第8号竖穴住居跡完掘状況



堆積状況

第10図版



第 8 号竖穴住居跡周溝



第 9 号竖穴住居跡完掘状況



第9号竖穴住居跡周溝



焼土の堆積状況

第12図版



第9号竖穴住居跡焼土完掘状況



第11号竖穴住居跡堆積状況



第10号～15号竪穴住居跡完掘状況①



第10号～15号竪穴住居跡完掘状況②

第14図版



第13号～15号竪穴住居跡堆積状況



第16号竪穴住居跡完掘状況



第16号竖穴住居跡堆積状況



第16号竖穴住居跡床面

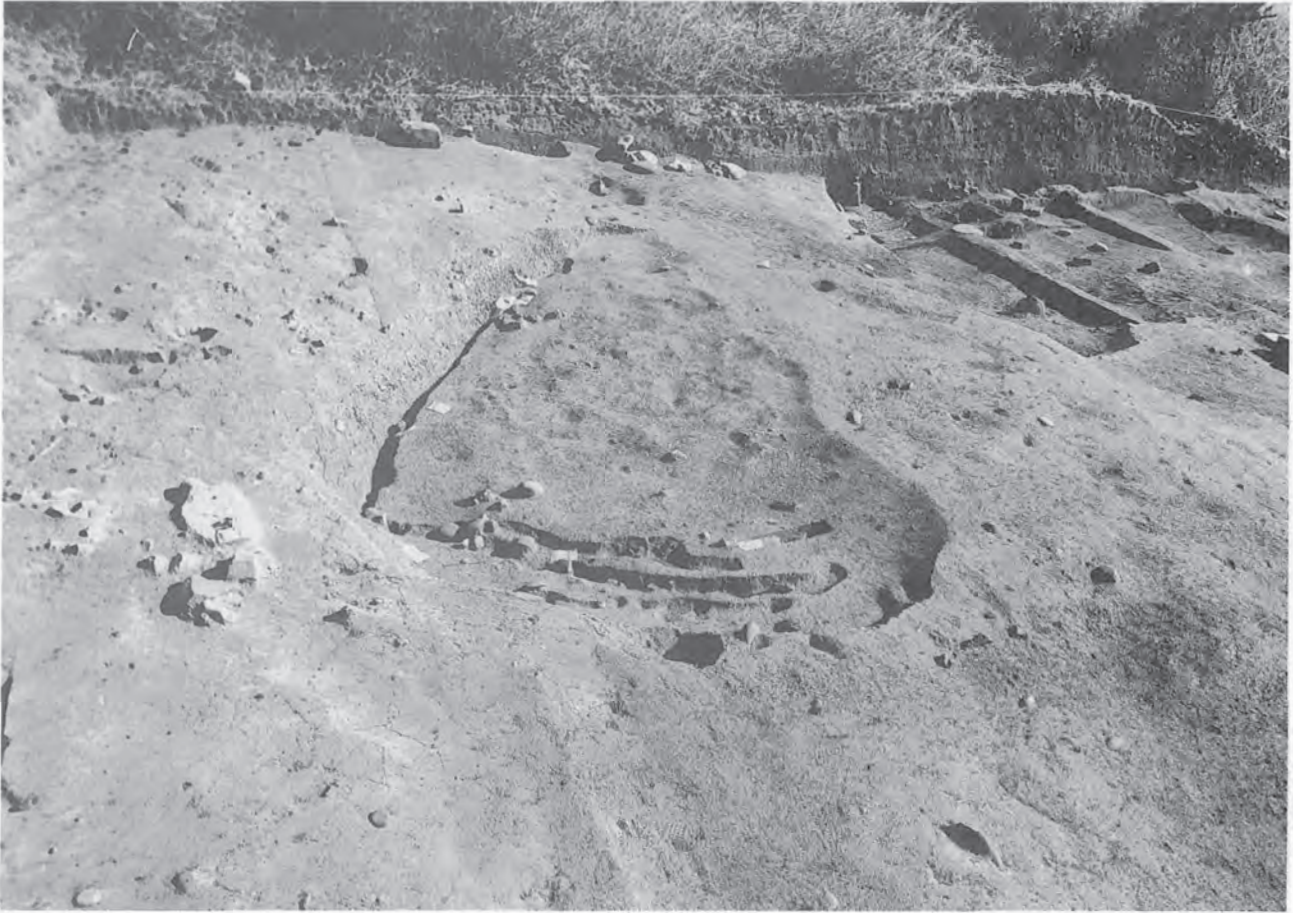
第16図版



第17号竖穴住居跡検出状況（礫層）



完掘状況①



第17号竖穴住居跡完掘状況②



周 溝

第18図版



第17号竖穴住居跡堆積状況



遺物出土状況



第17号竖穴住居跡堆積状況①

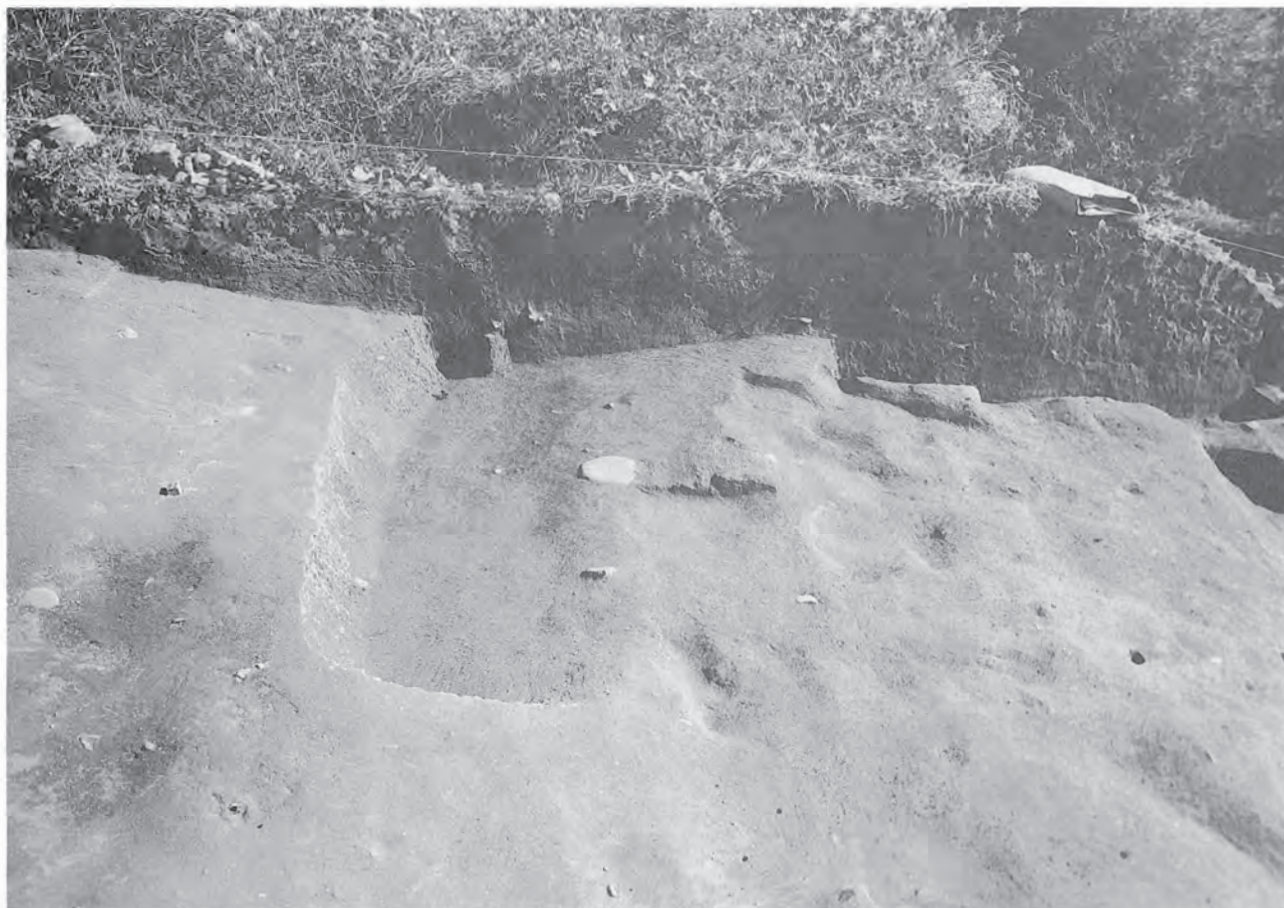


第17号竖穴住居跡堆積状況②

第20図版



第17号竖穴住居跡焼土堆積状況



第18号竖穴住居跡堆積状況



第18号、19号竖穴住居跡完掘状況



第18号竖穴住居跡堆積状況

第22図版



第18号竖穴住居跡焼土堆積状況



第23号竖穴住居跡完掘状況



第23号竖穴住居跡堆積状況



第22号竖穴住居跡堆積状況

第24図版



第26号竖穴住居跡完掘状況



遺物出土状況



第26号竖穴住居跡堆積状況①

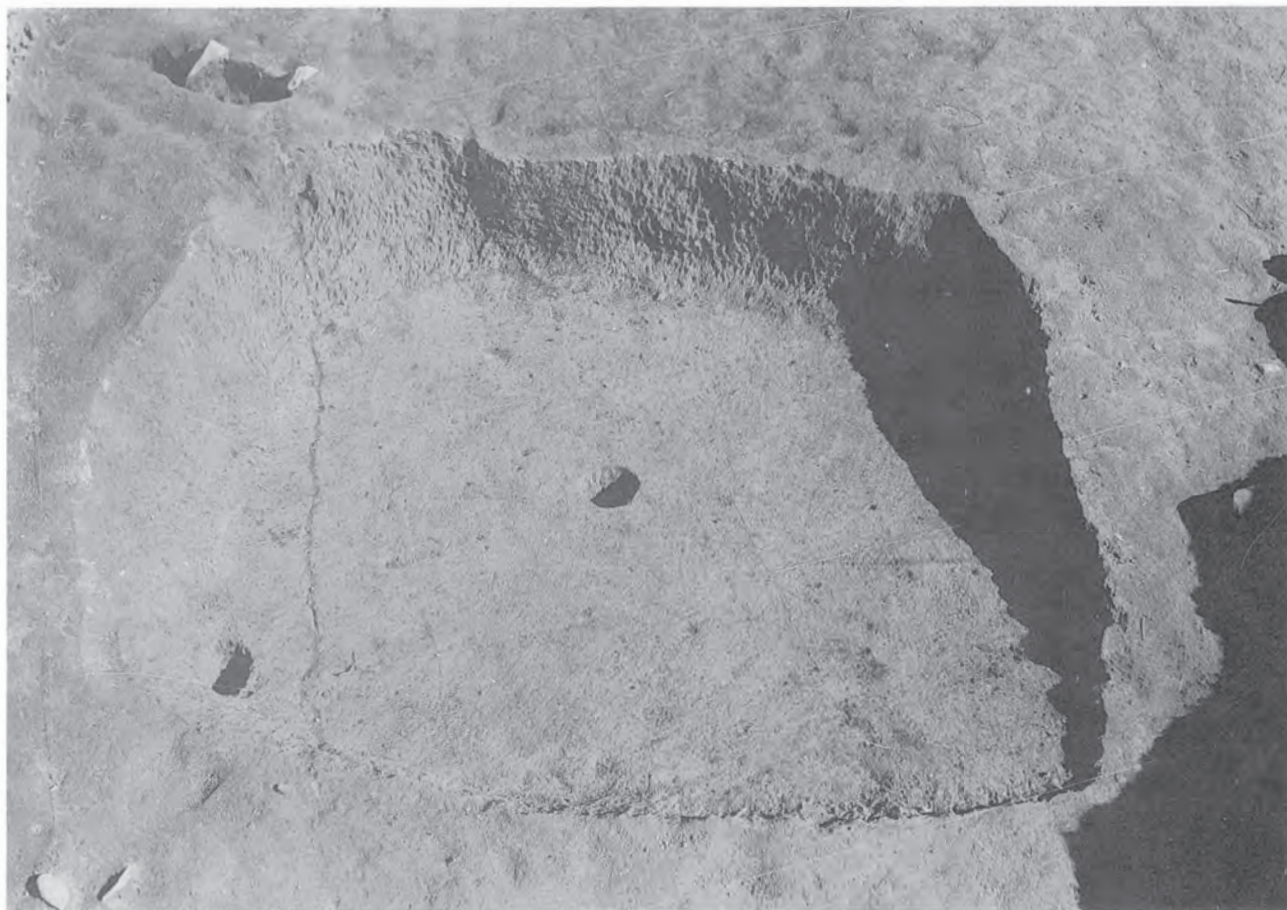


第26号竖穴住居跡堆積状況②

第26図版



第27号竖穴住居跡床面



完掘状況



第27号竖穴住居跡遺物出土状況①



第27号竖穴住居跡遺物出土状況②

第28図版



第27号竖穴住居跡堆積状況



第30号竖穴住居跡完掘状況



第28号、29号竪穴住居跡完掘状況



第31号、33号竪穴住居跡堆積状況

第30図版



第31号～33号竪穴住居跡完掘状況



小ピット群 第31号竪穴住居跡堆積状況



第32号竖穴住居跡堆積状況

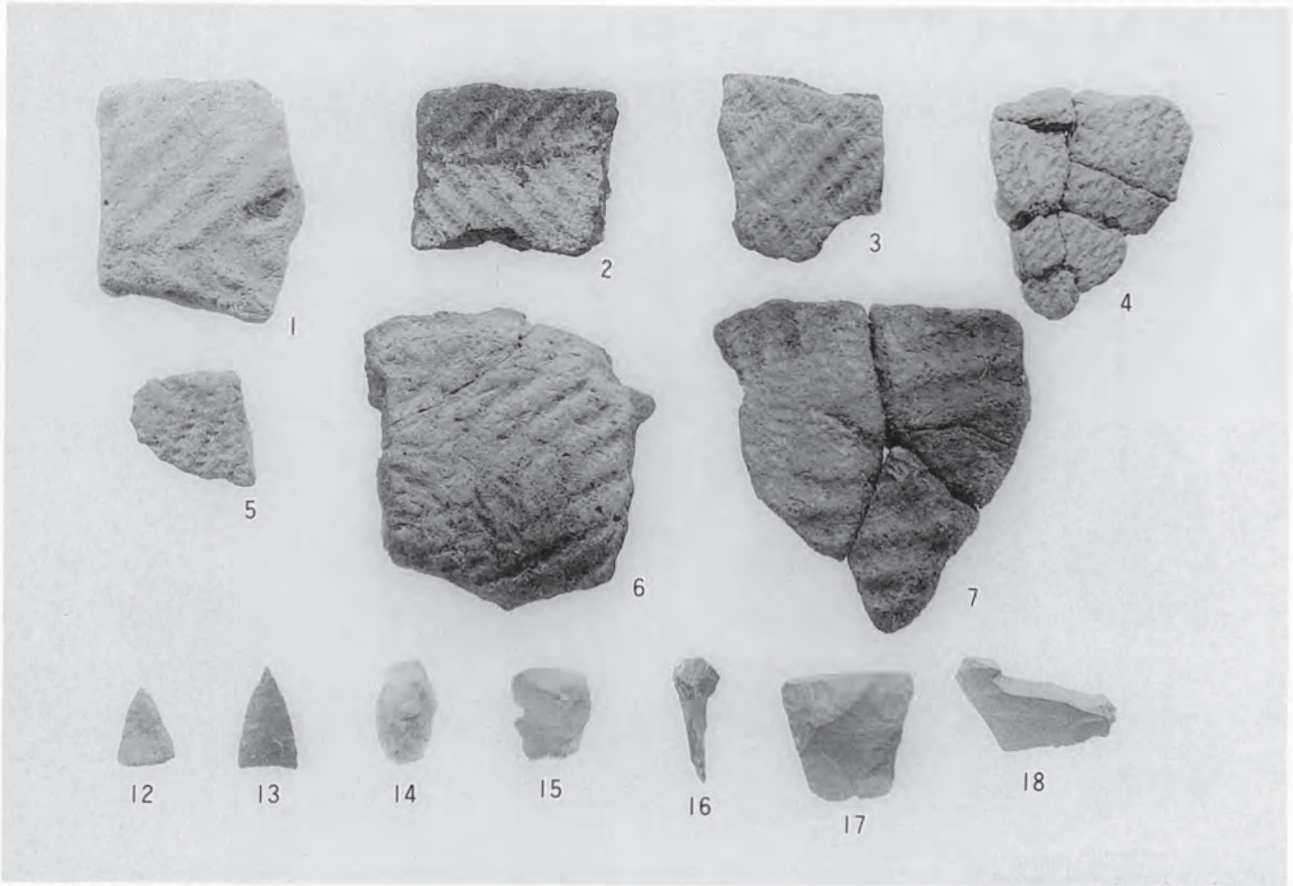
第32図版



第1号竖穴住居跡出土遺物（第9図1～28）



第3号竖穴住居跡出土遺物（第12図1～7）

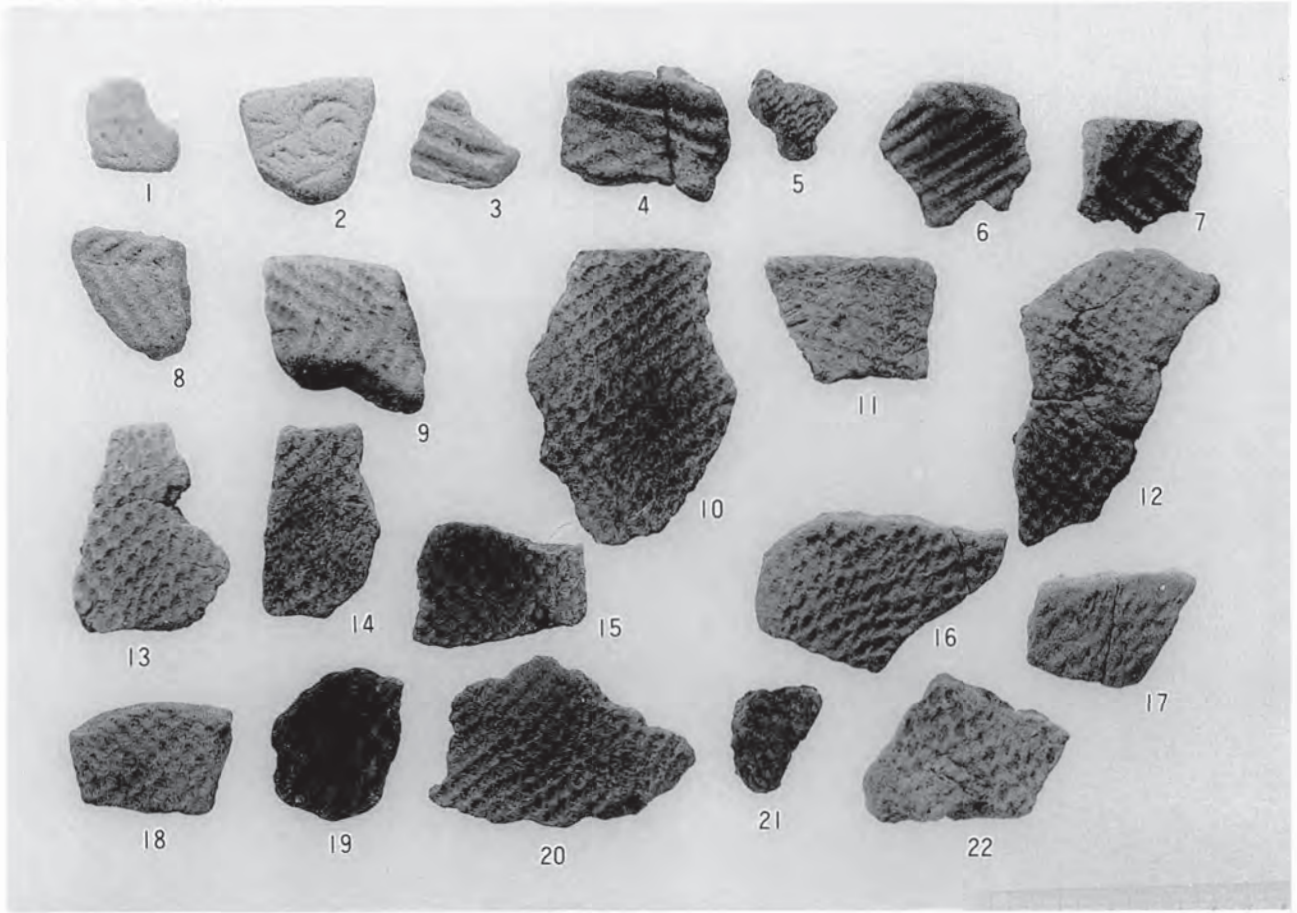


第4号竖穴住居跡出土遺物 (第14図 1~7、12~18)

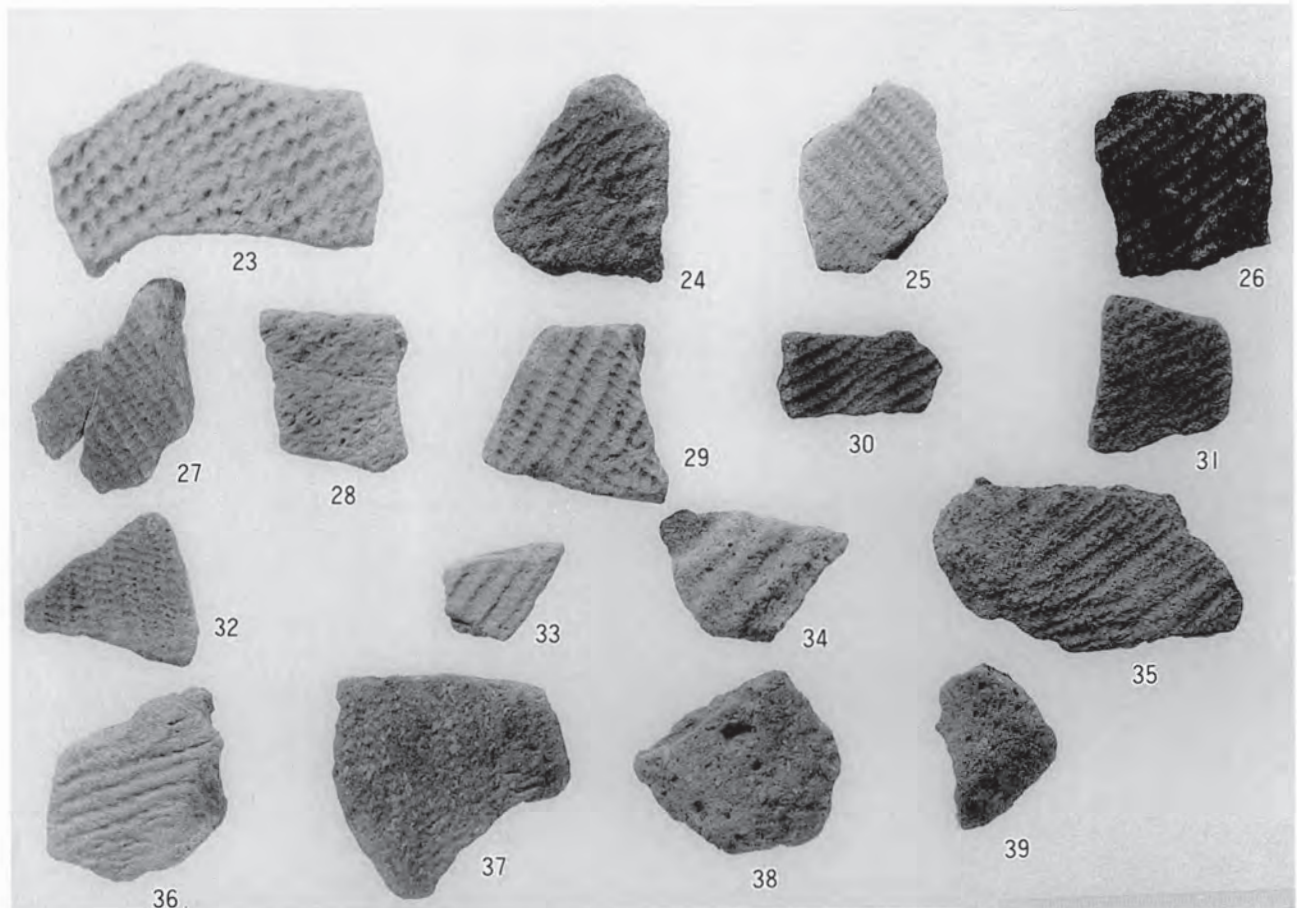


第4号竖穴住居跡出土遺物 (第14図 8~11)

第34図版



第5号竖穴住居跡出土遺物 (第16図1~22)



第5号竖穴住居跡出土遺物 (第16図23~39)

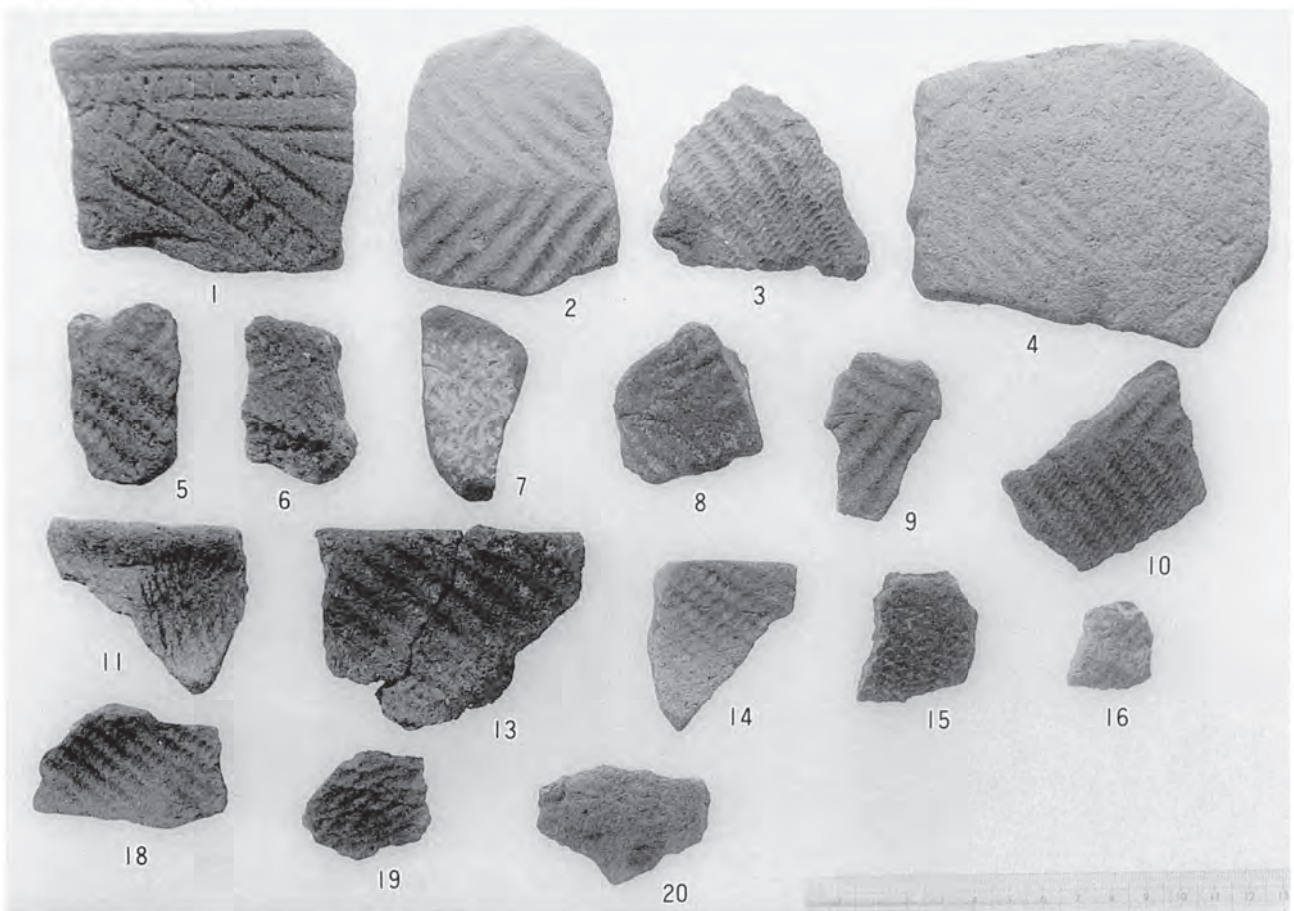


第5号竖穴住居跡出土遺物（第17図45～48）

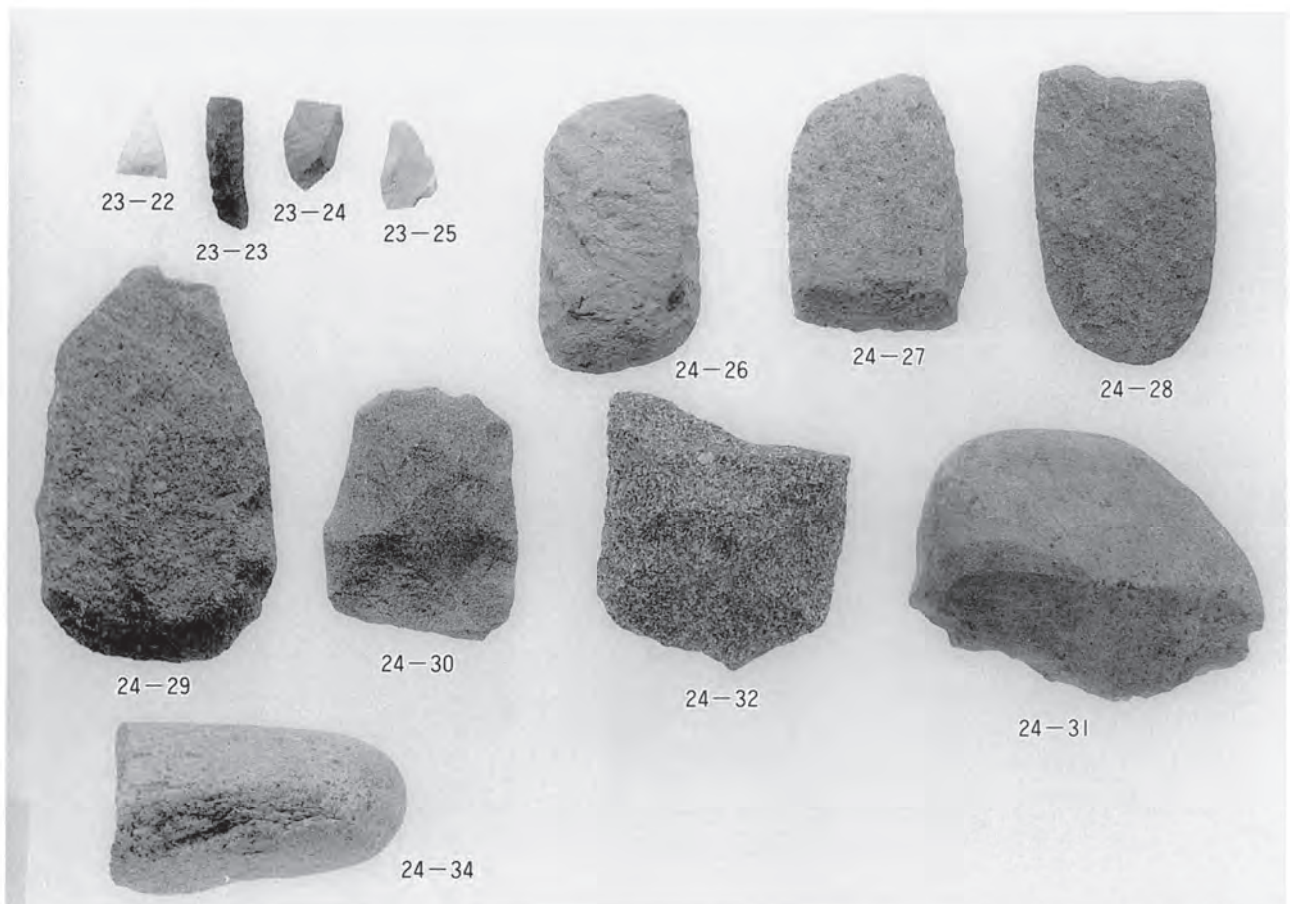


第6号竖穴住居跡出土遺物（第19図1～6）

第36図版



第7号竖穴住居跡出土遺物（第23図1～20）



第7号竖穴住居跡出土遺物（第23、24図）

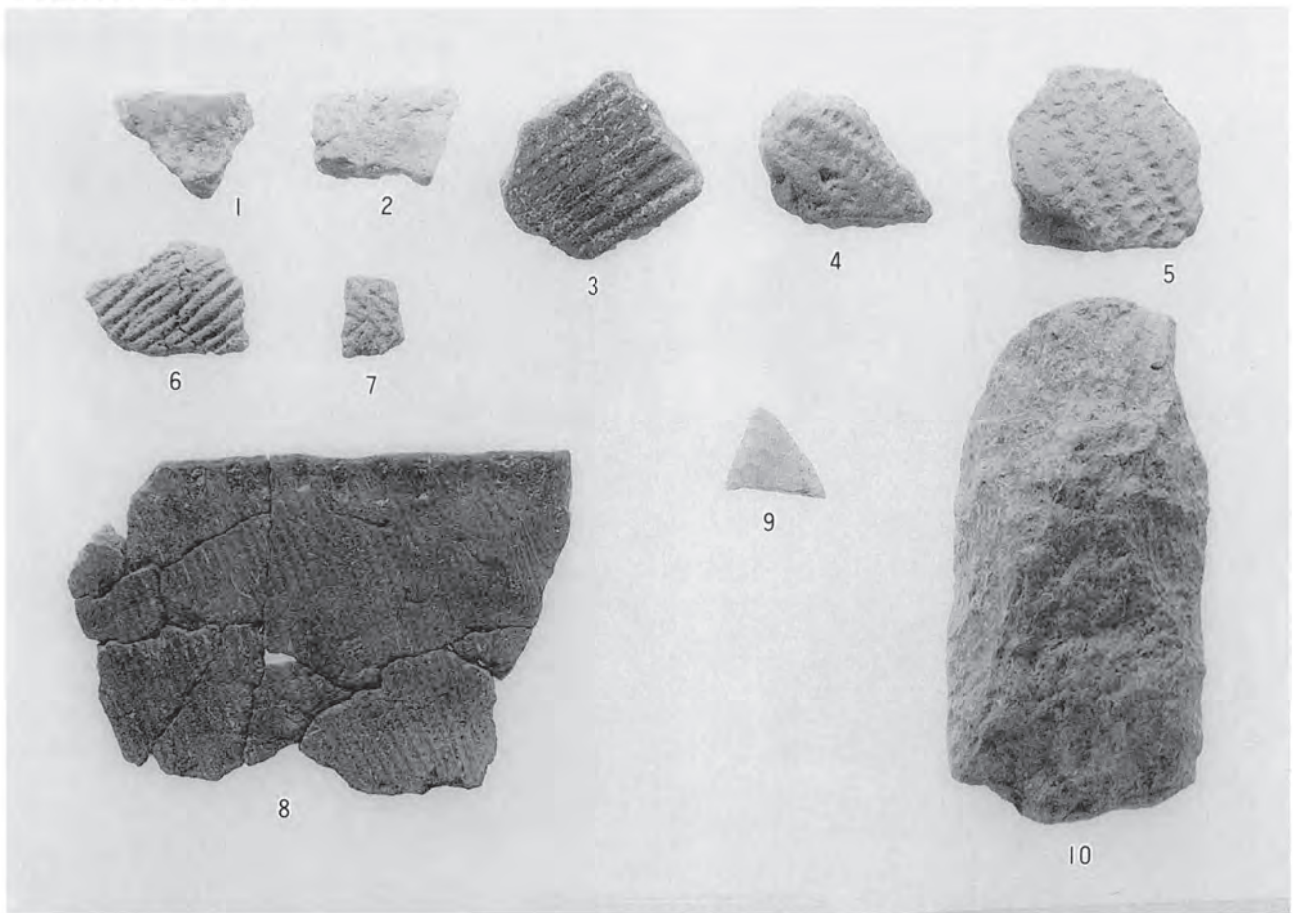


第8号竖穴住居跡出土遺物（第26図1～7）



第15号竖穴住居跡出土遺物（第36図1～6）

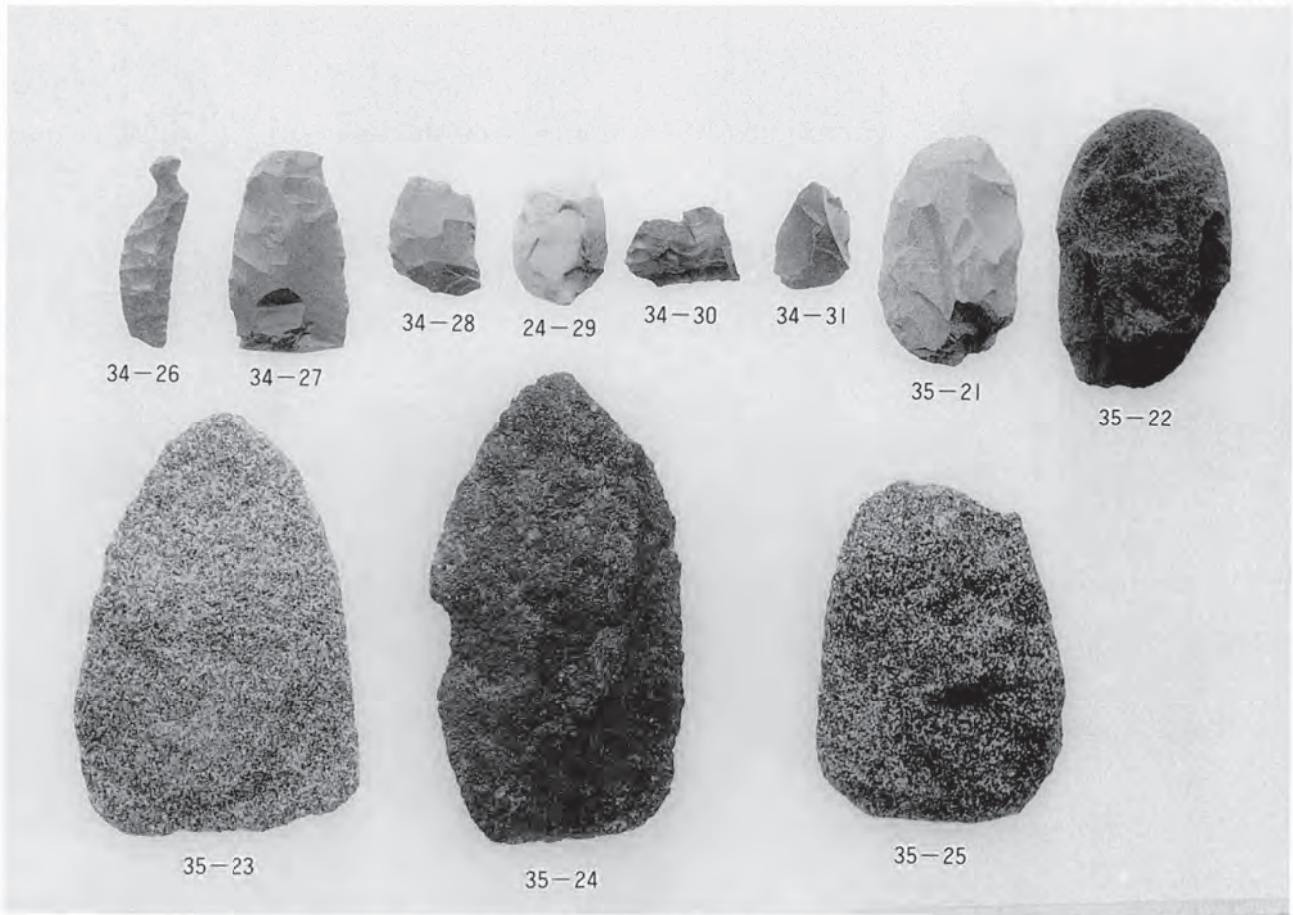
第38図版



第13号竖穴住居跡出土遺物（第33図1～10）



第14号竖穴住居跡出土遺物（第34図1～20）

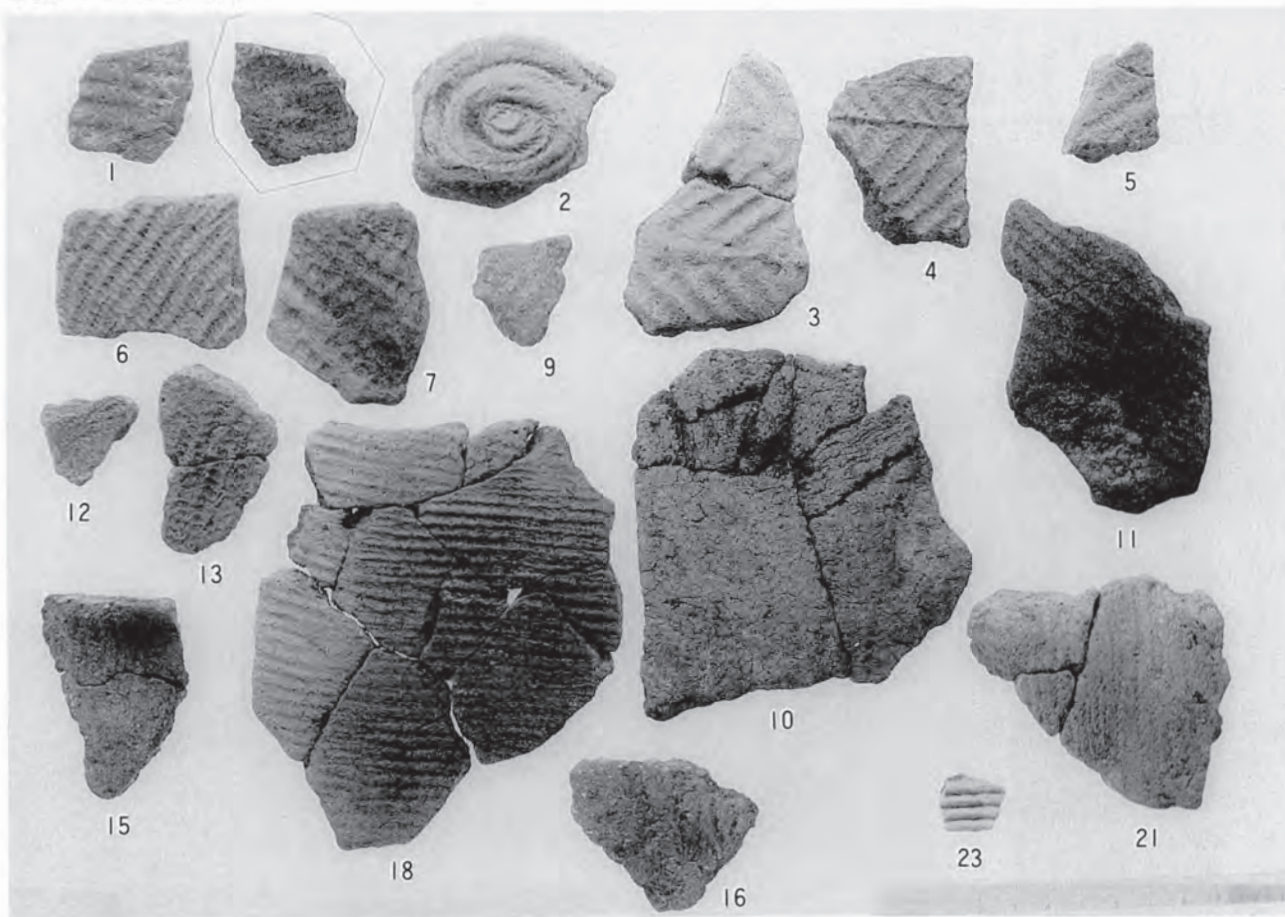


第14号竖穴住居跡出土遺物（第34、35図）

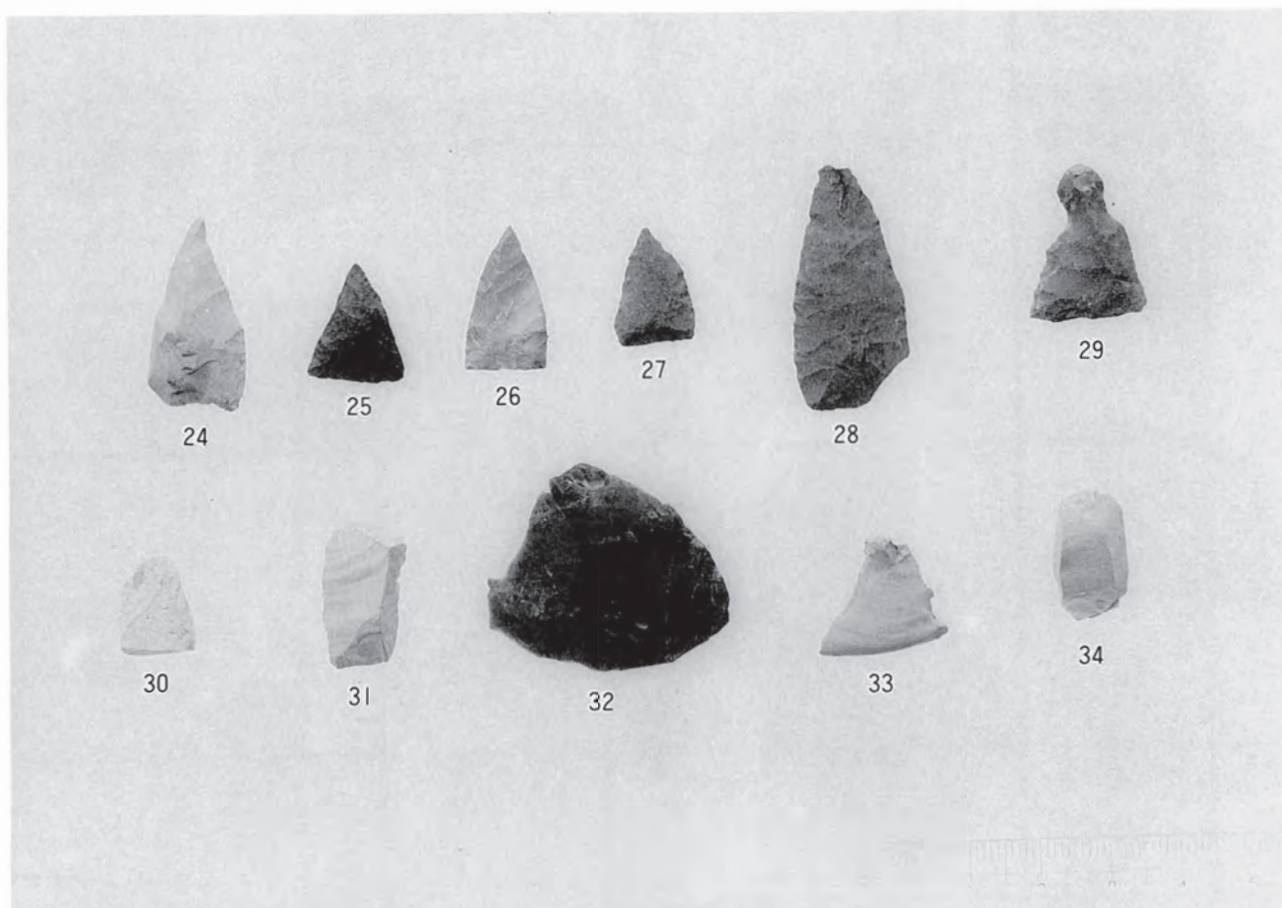


第9号竖穴住居跡出土遺物（第29図1～19）

第40図版



第16号竖穴住居跡出土遺物（第41図1～23）



第16号竖穴住居跡出土遺物（第42図24～34）



第17号竖穴住居跡出土遺物（第47図1）

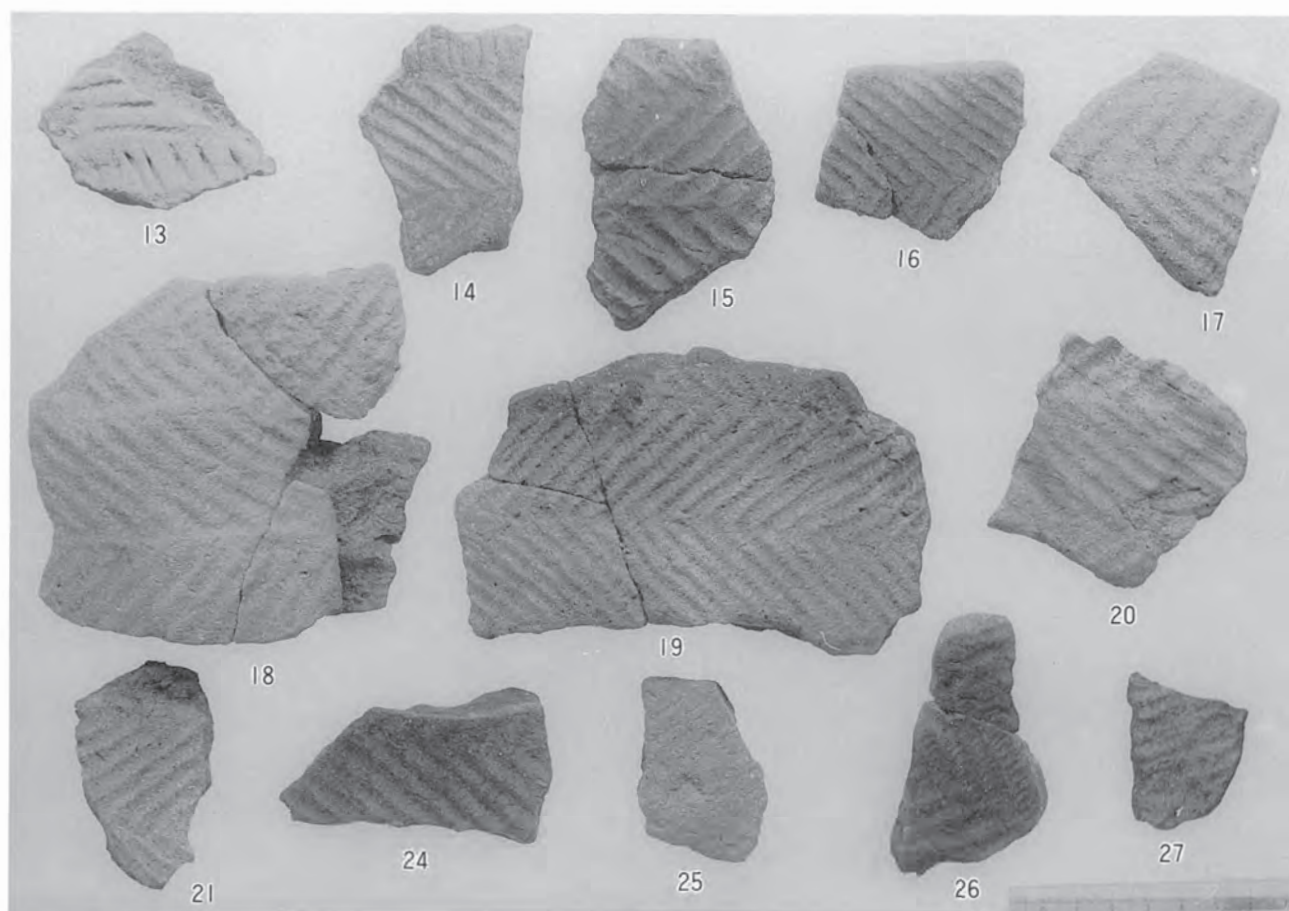


第17号竖穴住居跡出土遺物（第47図2）

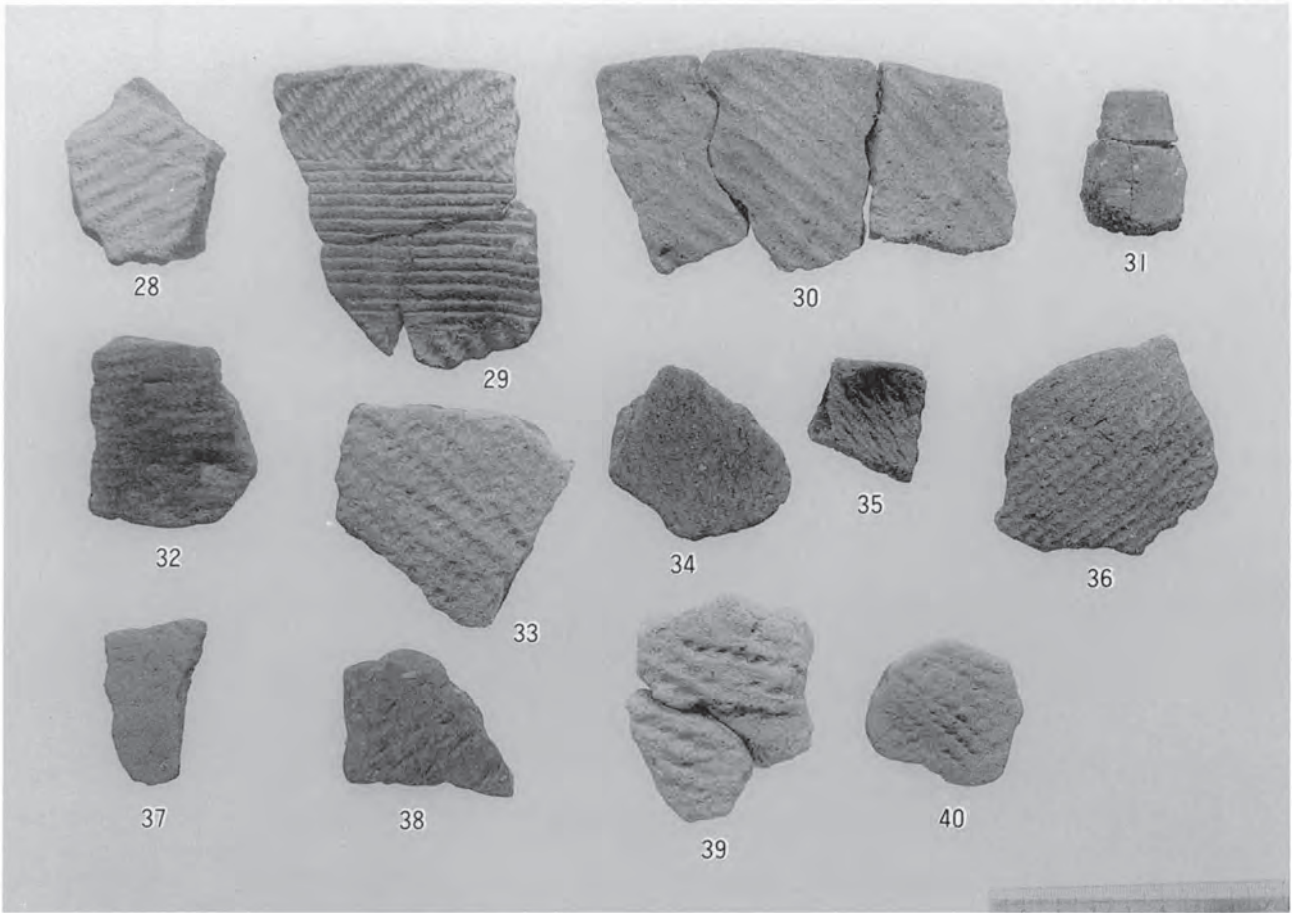
第42図版



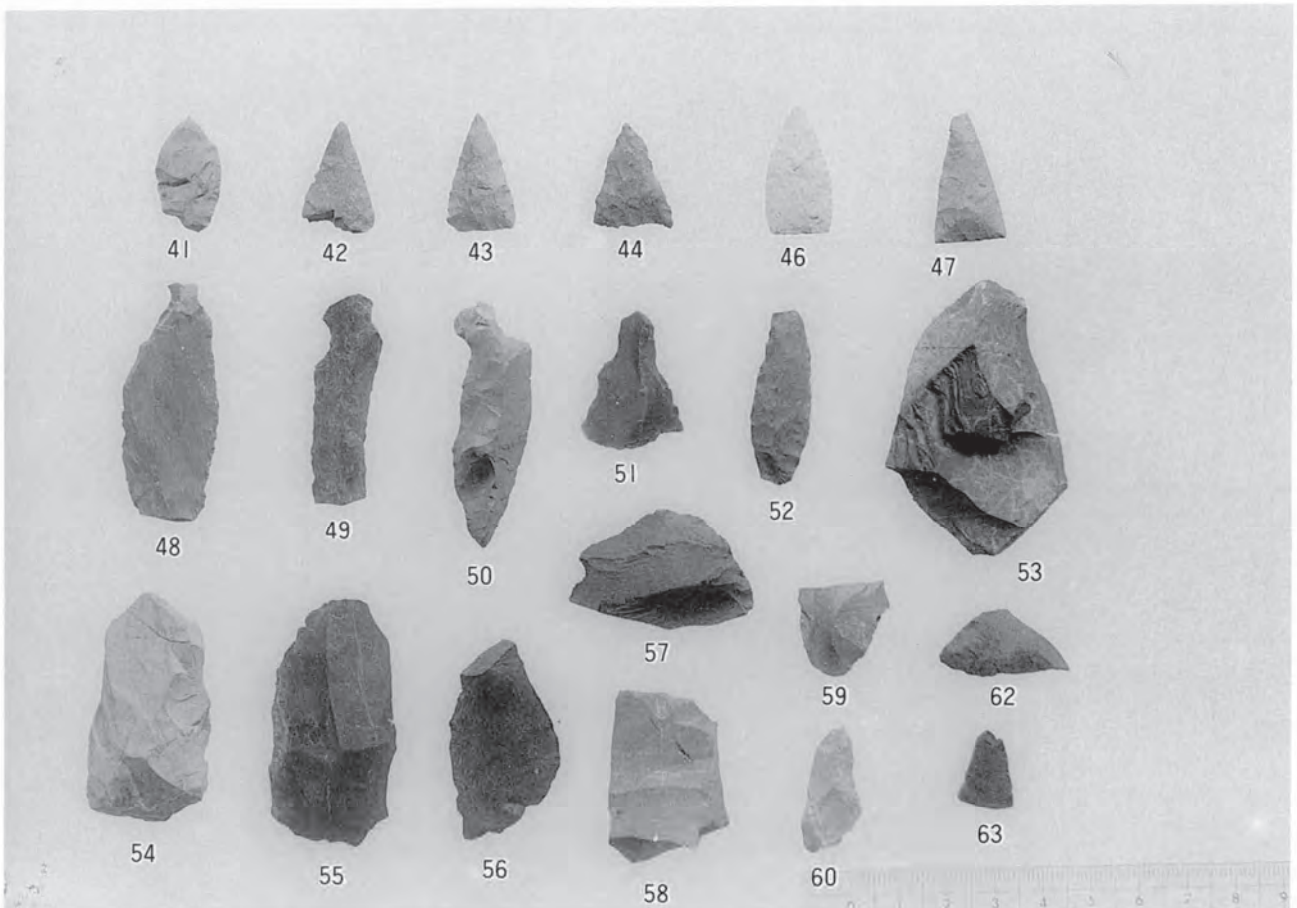
第17号竖穴住居跡出土遺物（第47図3～12）



第17号竖穴住居跡出土遺物（第48図13～27）



第17号竖穴住居跡出土遺物（第48図28～40）

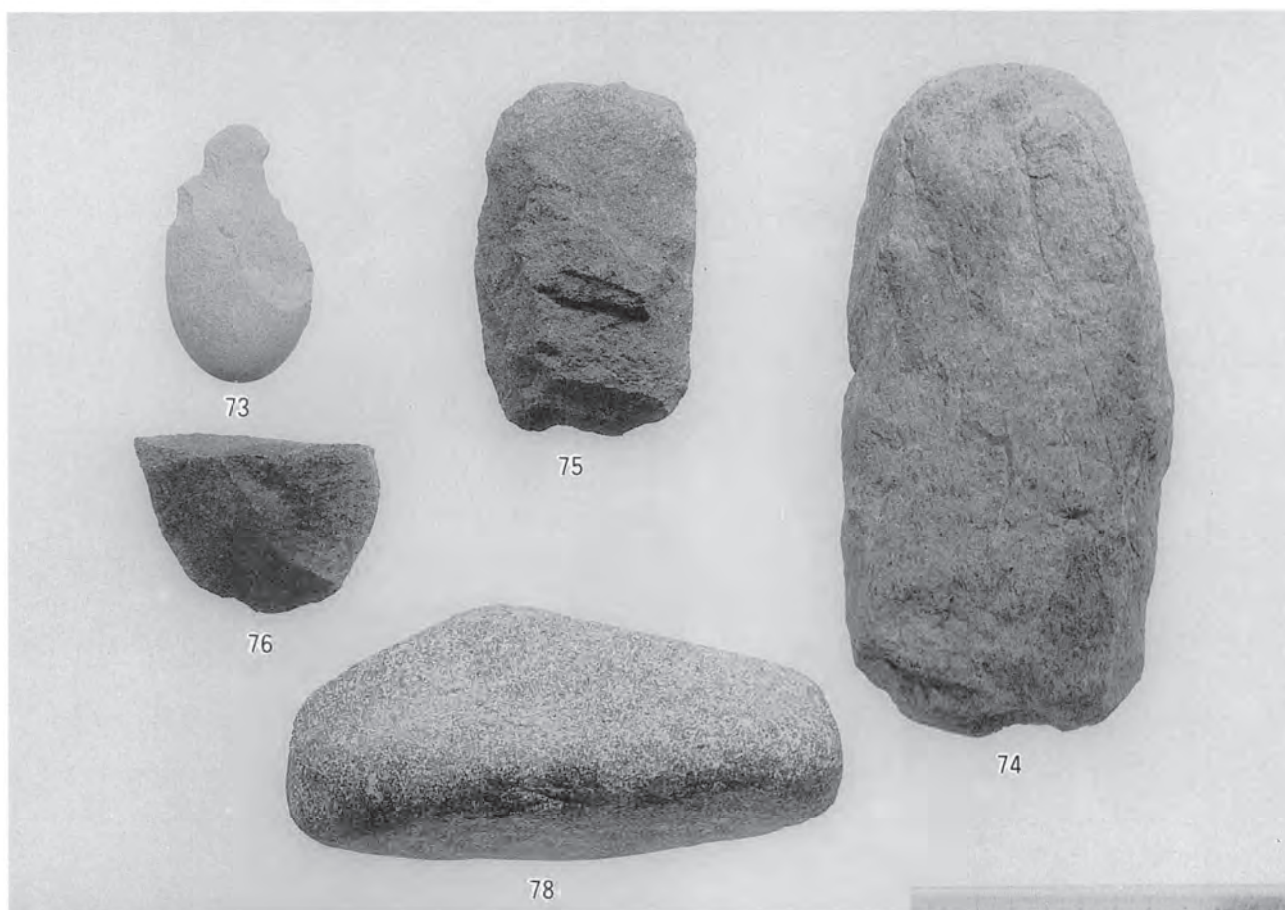


第17号竖穴住居跡出土遺物（第49、50図41～63）

第44図版



第17号竖穴住居跡出土遺物（第51図65～72）



第17号竖穴住居跡出土遺物（第52図73～78）

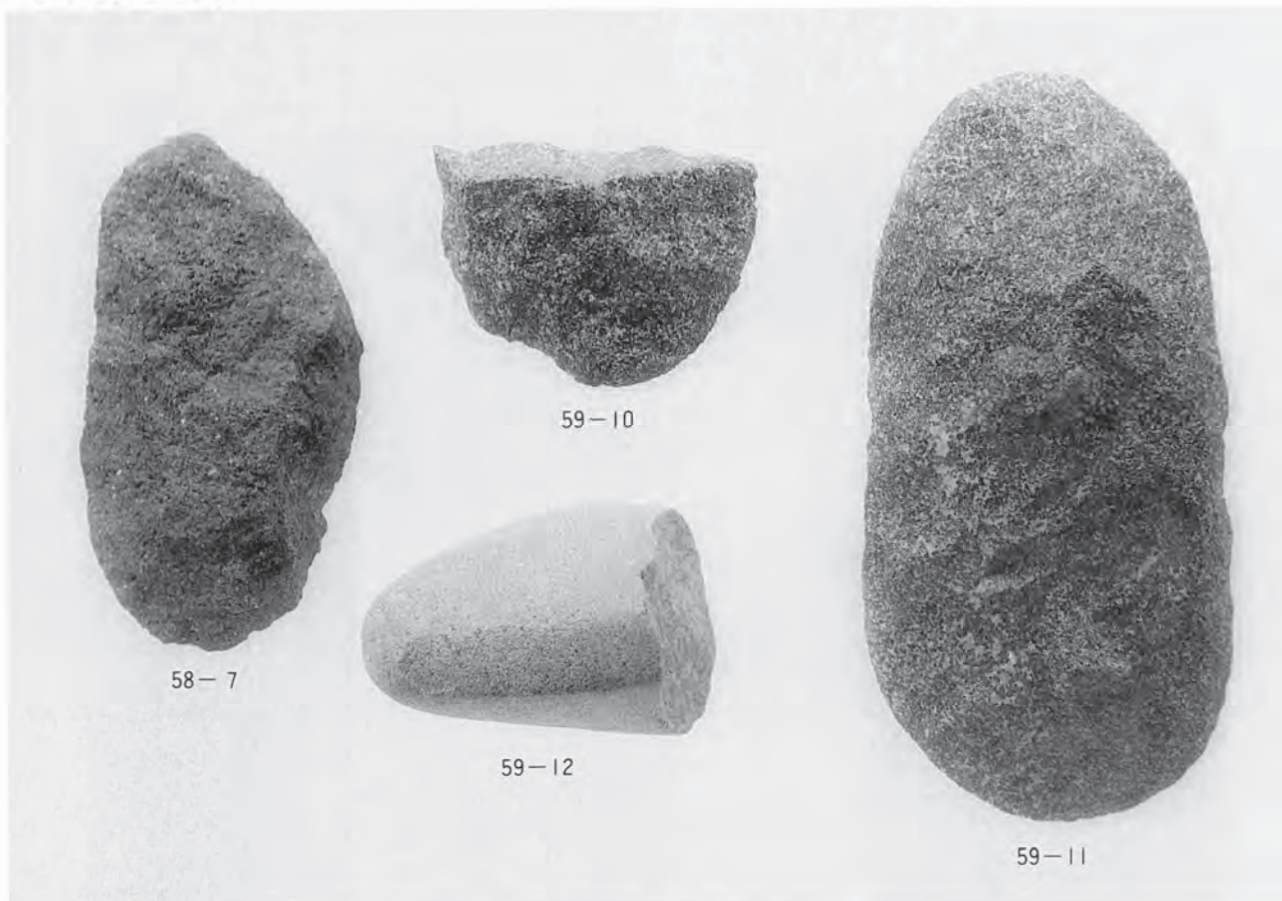


第18号竪穴住居跡出土遺物（第57図1～6）



第18号竪穴住居跡出土遺物（第58、59図）

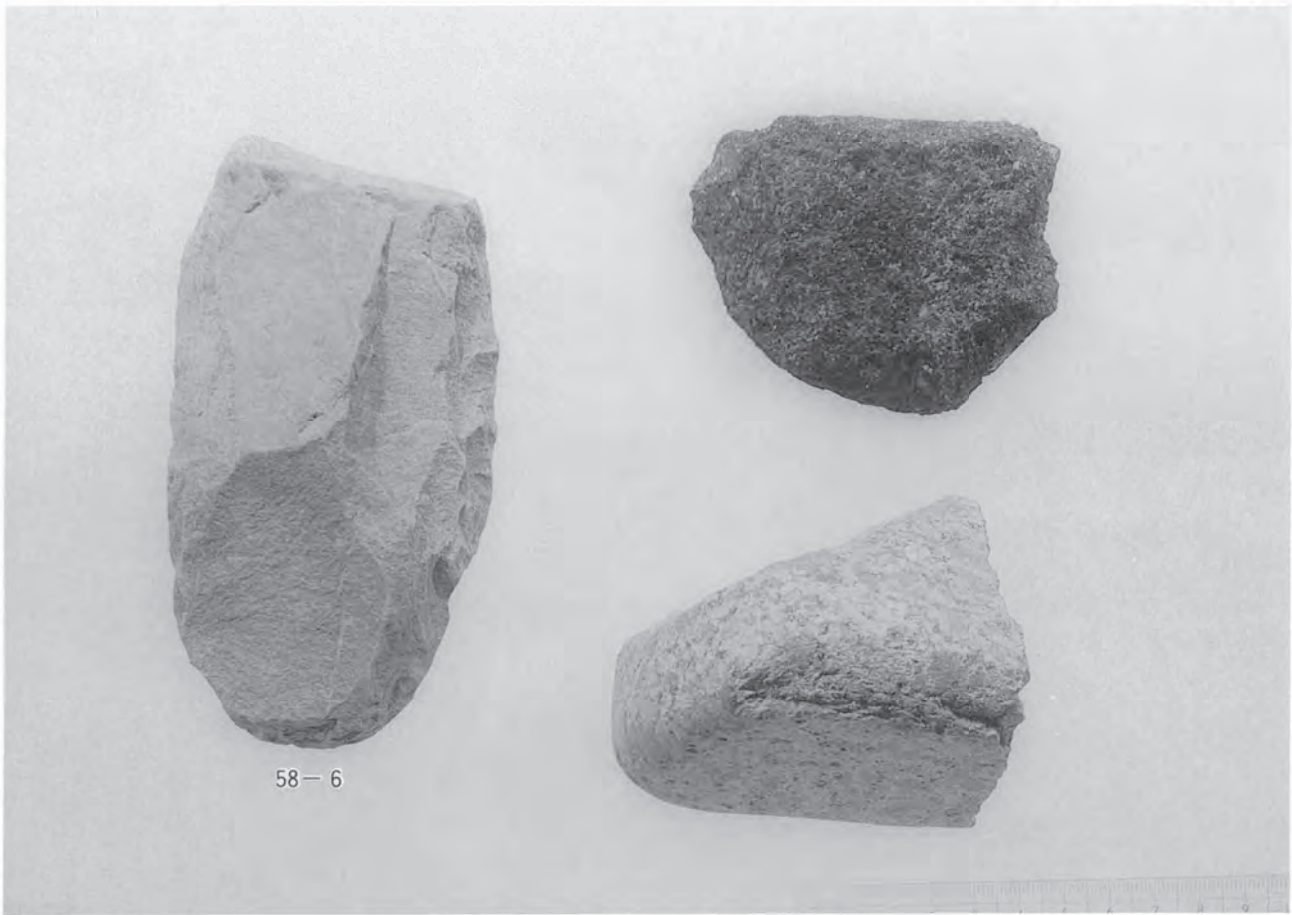
第46図版



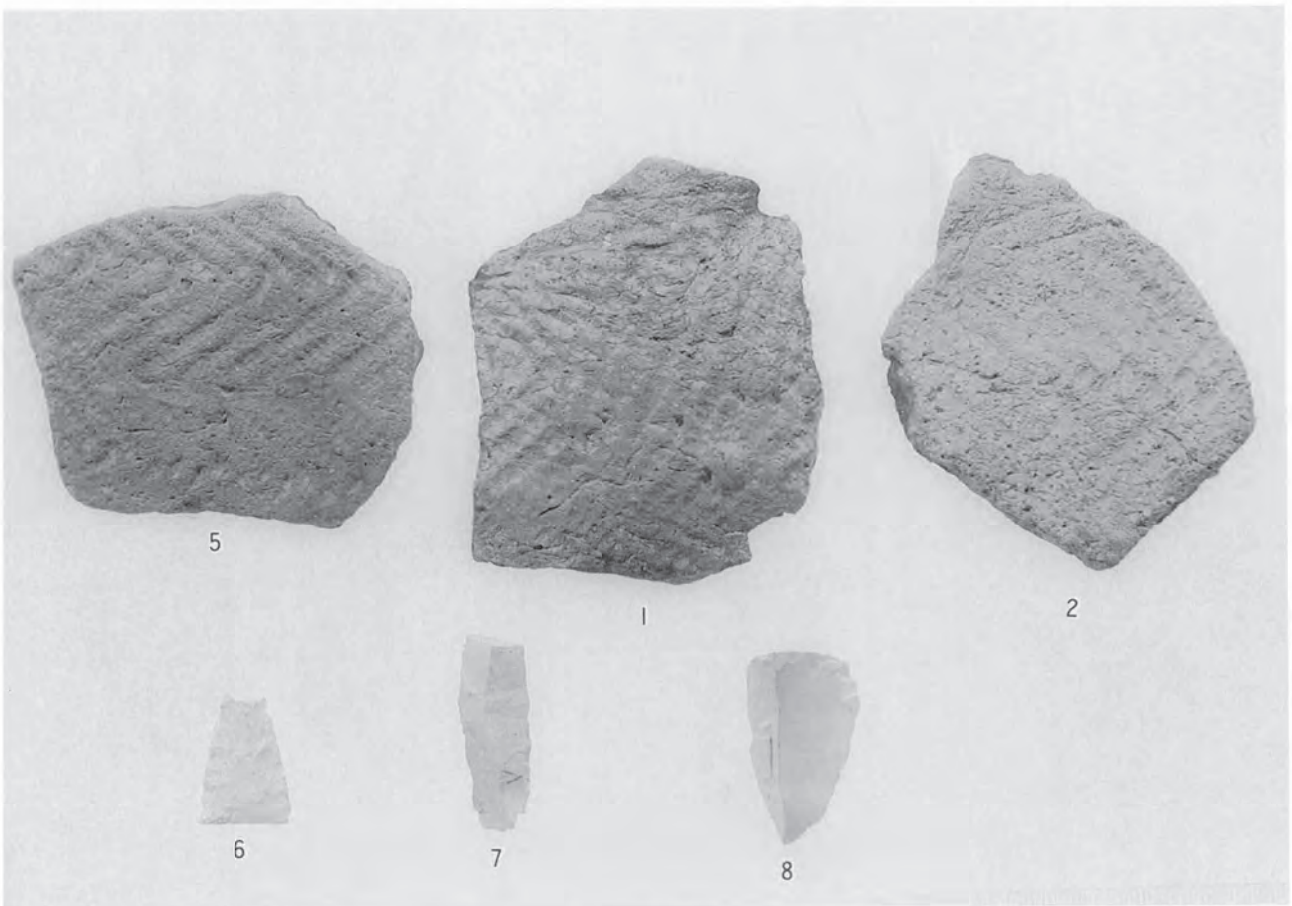
第18号竖穴住居跡出土遺物（第58、59図）



第19号竖穴住居跡出土遺物（第60図）

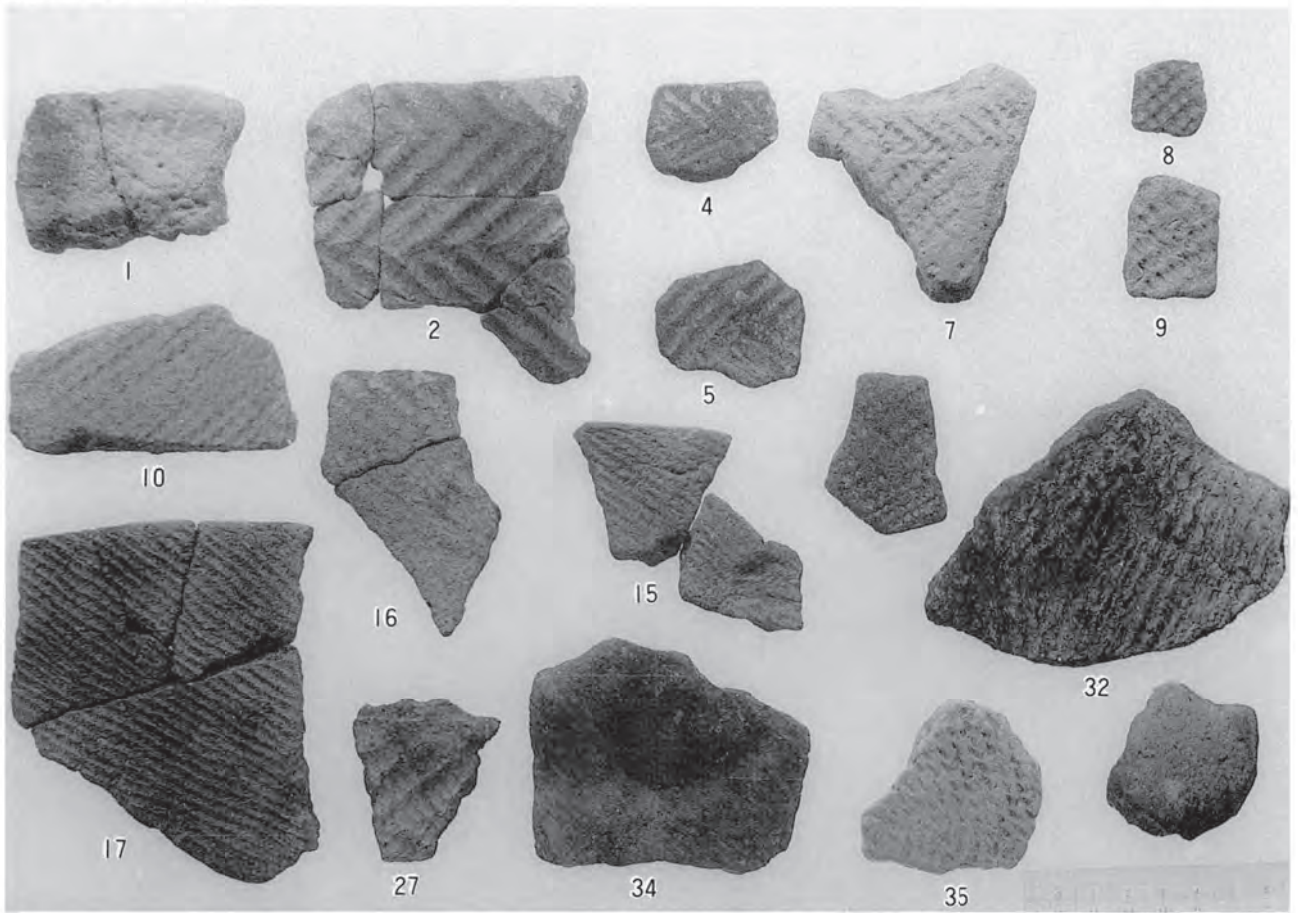


第18号竖穴住居跡出土遺物（第58図）

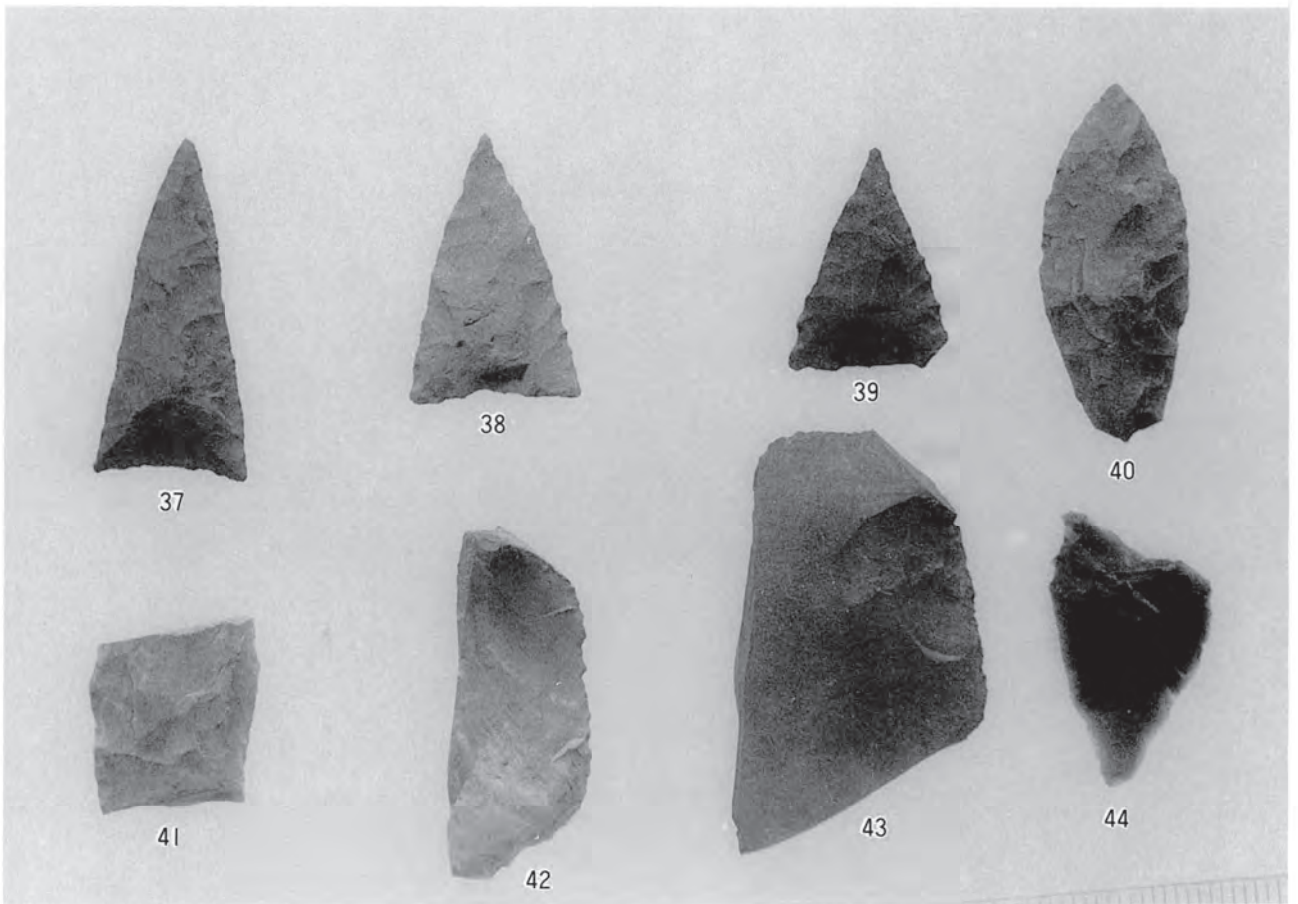


第20、21号竖穴住居跡出土遺物（第62図1～8）

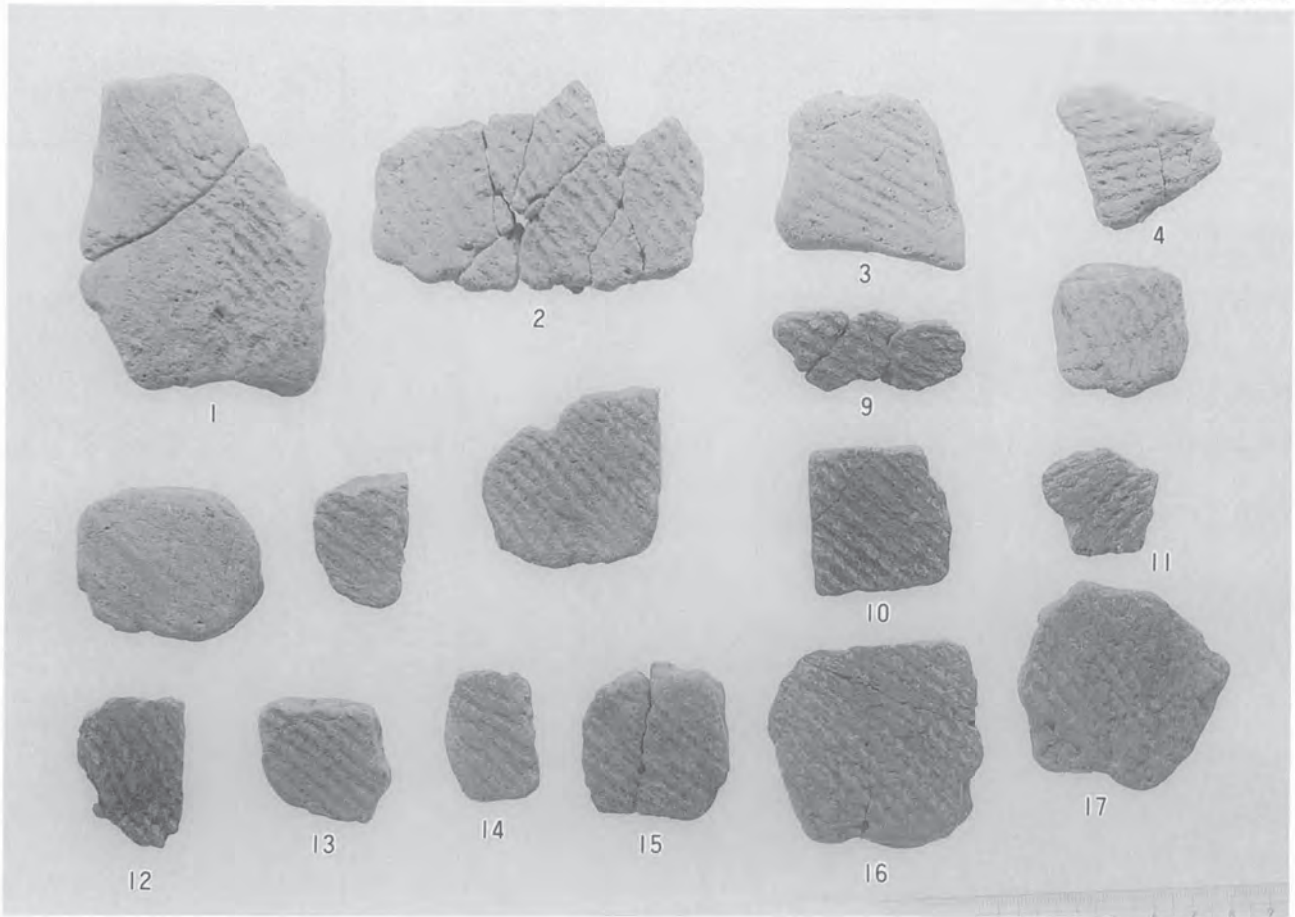
第48図版



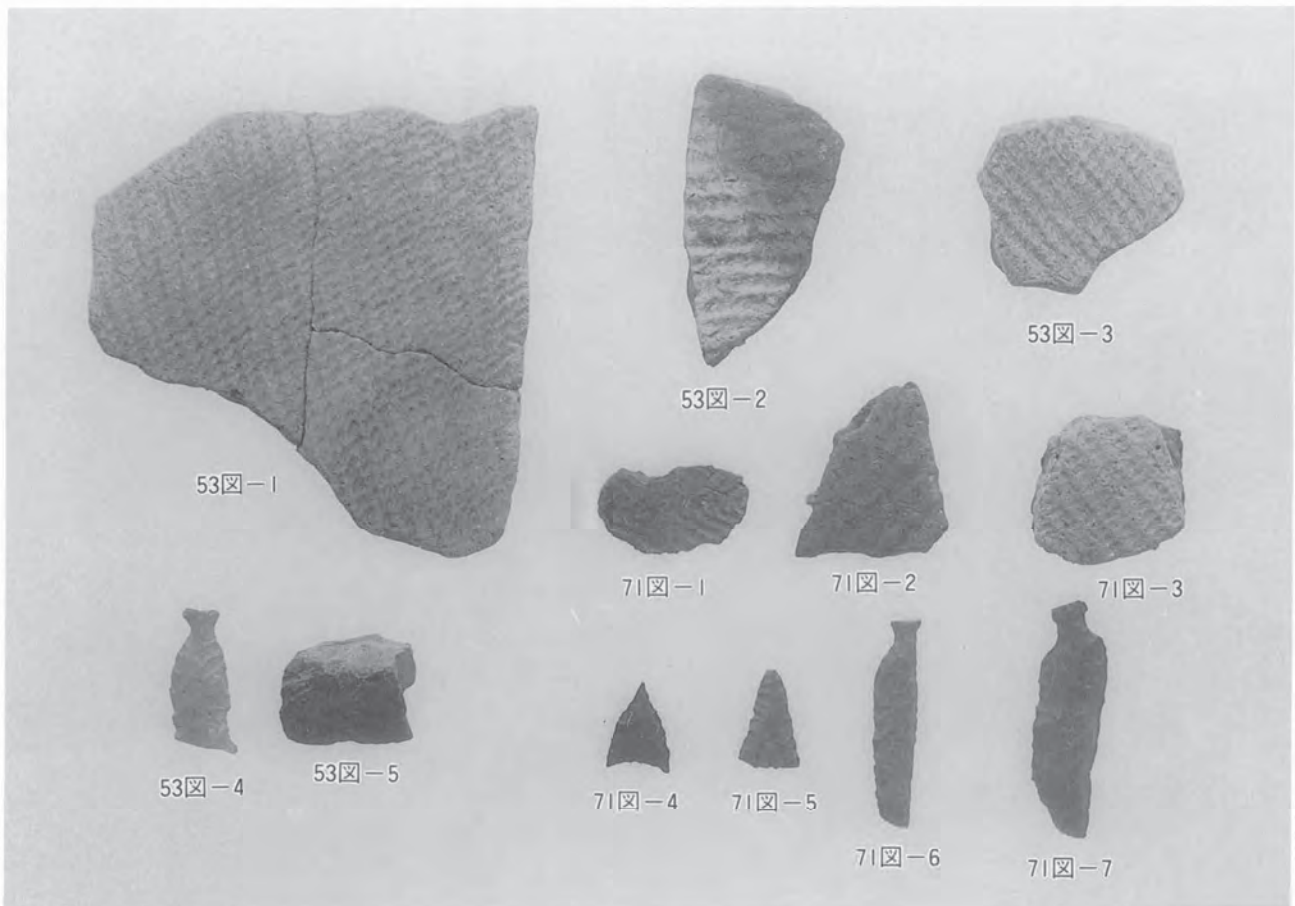
第22号竖穴住居跡出土遺物（第64図1～35）



第22号竖穴住居跡出土遺物（第65図37～44）

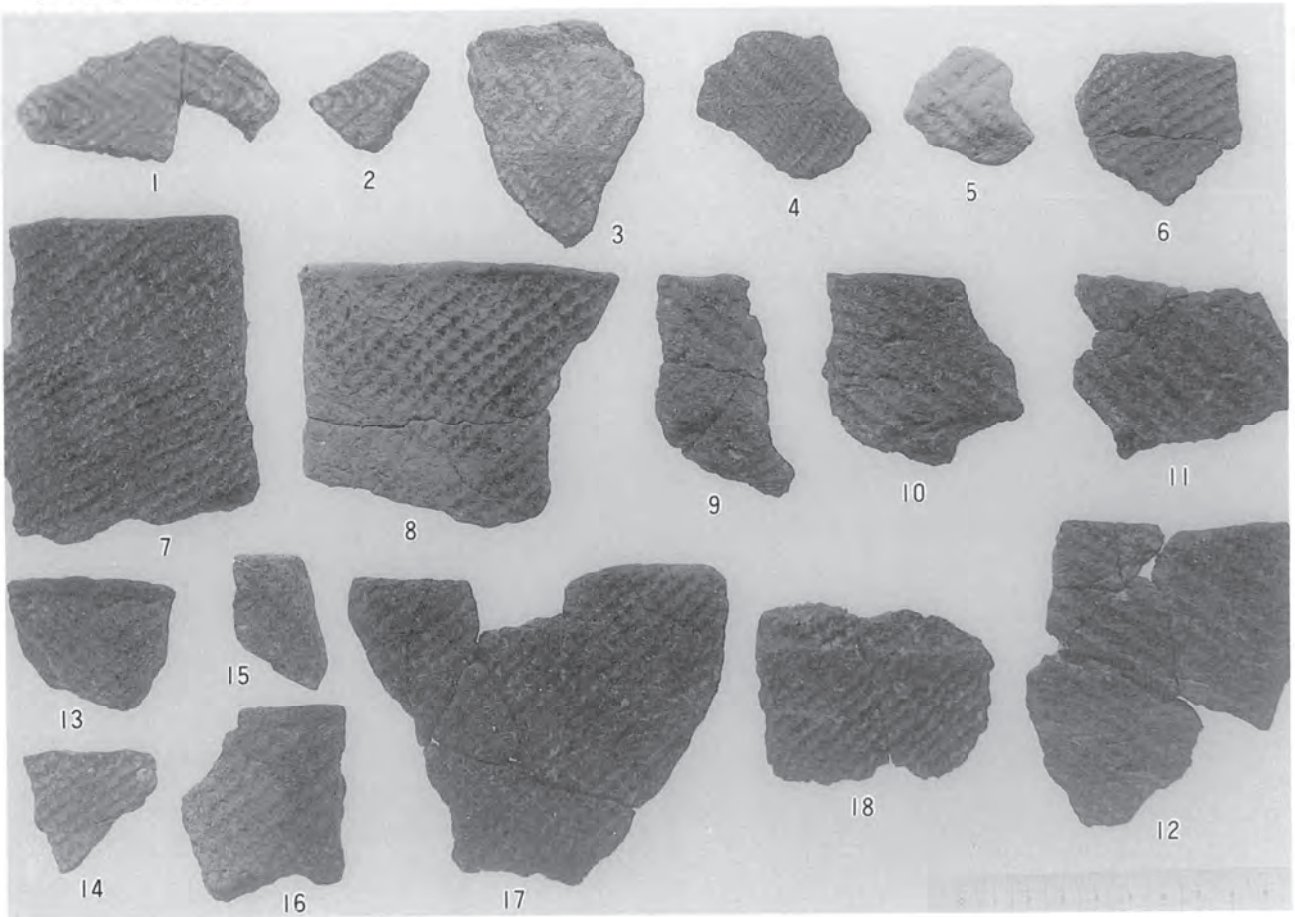


第24号竖穴住居跡出土遺物 (第69図 1 ~ 17)

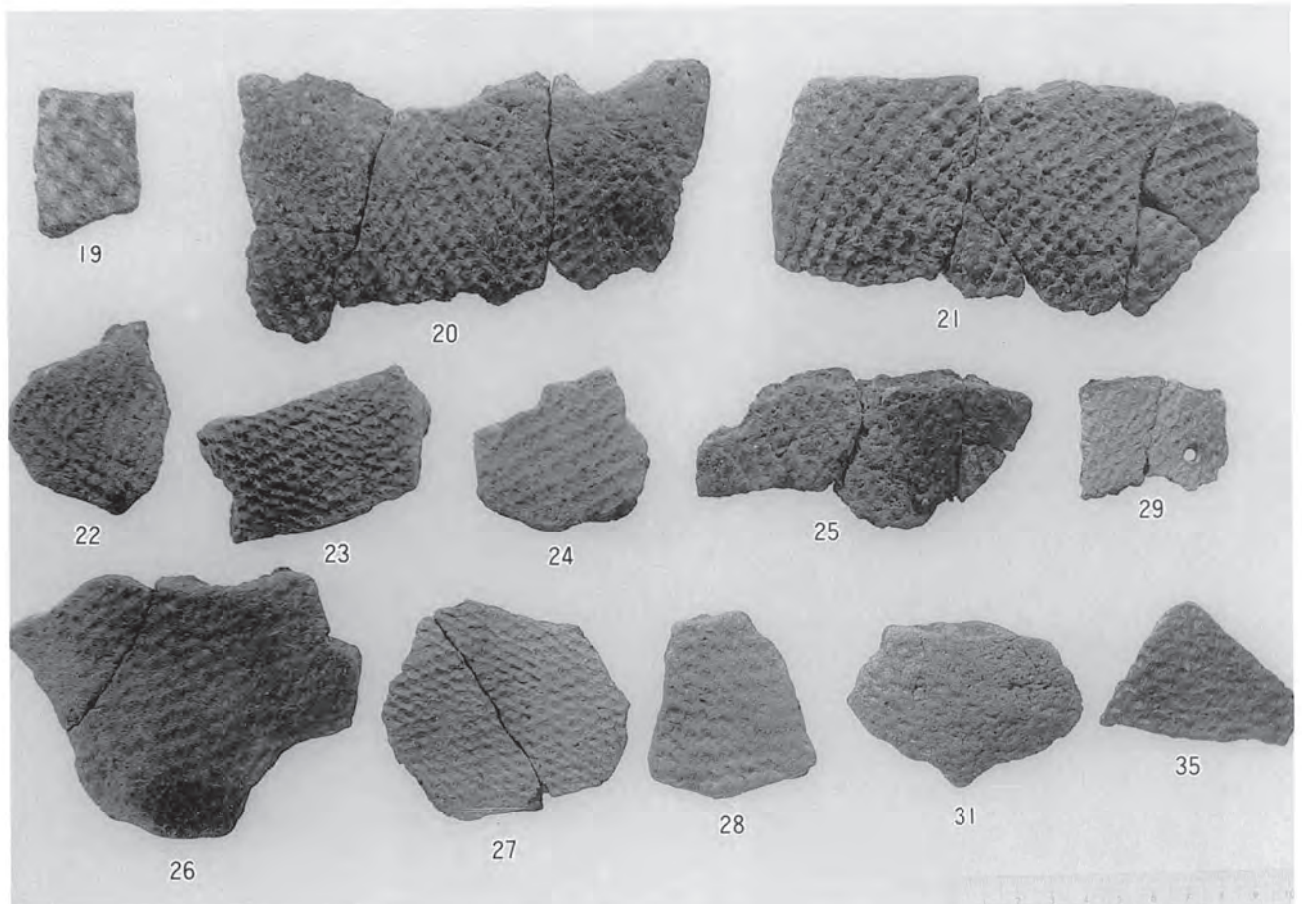


第5号、第7号土坛跡出土遺物 (第53図、71図)

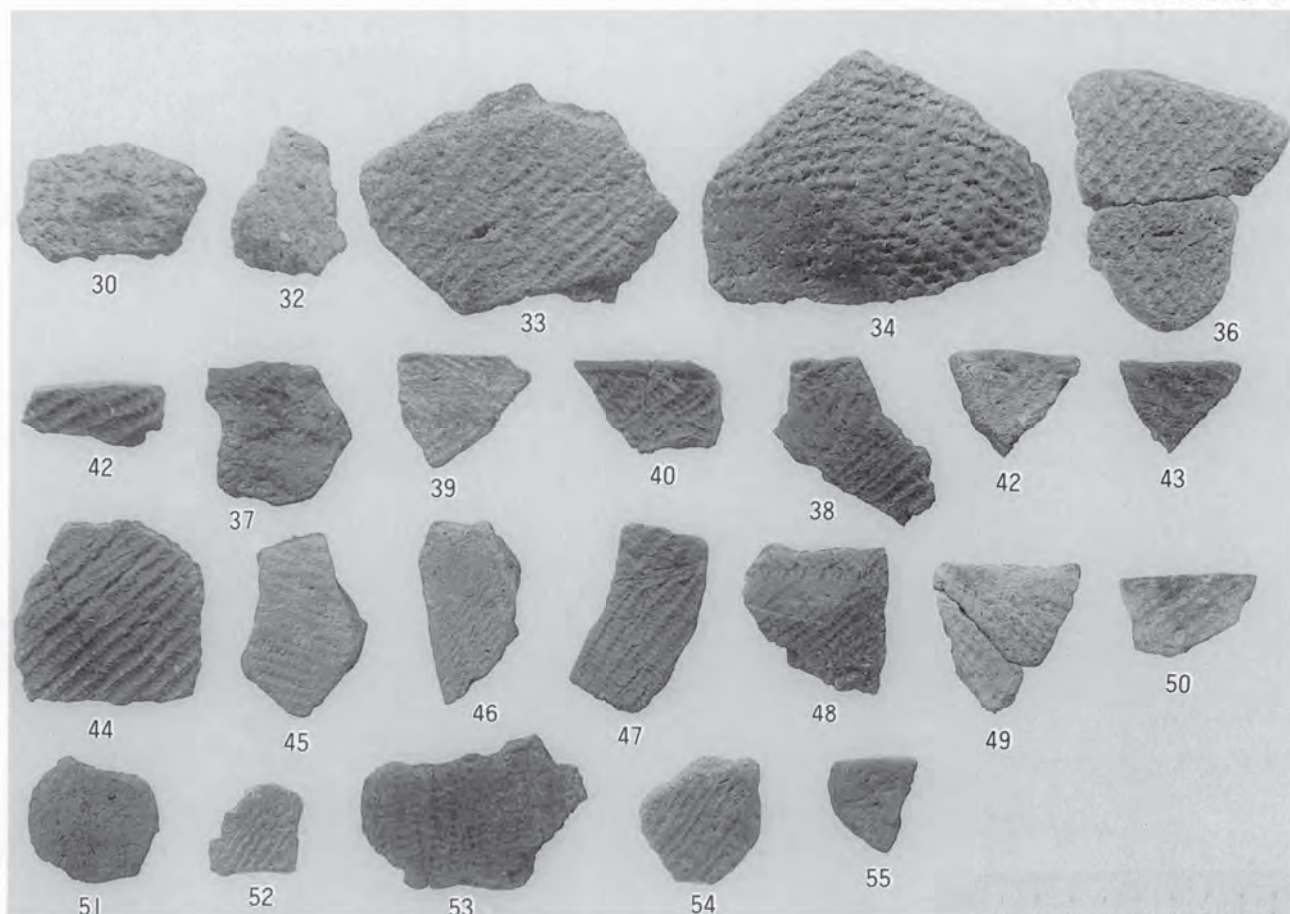
第50図版



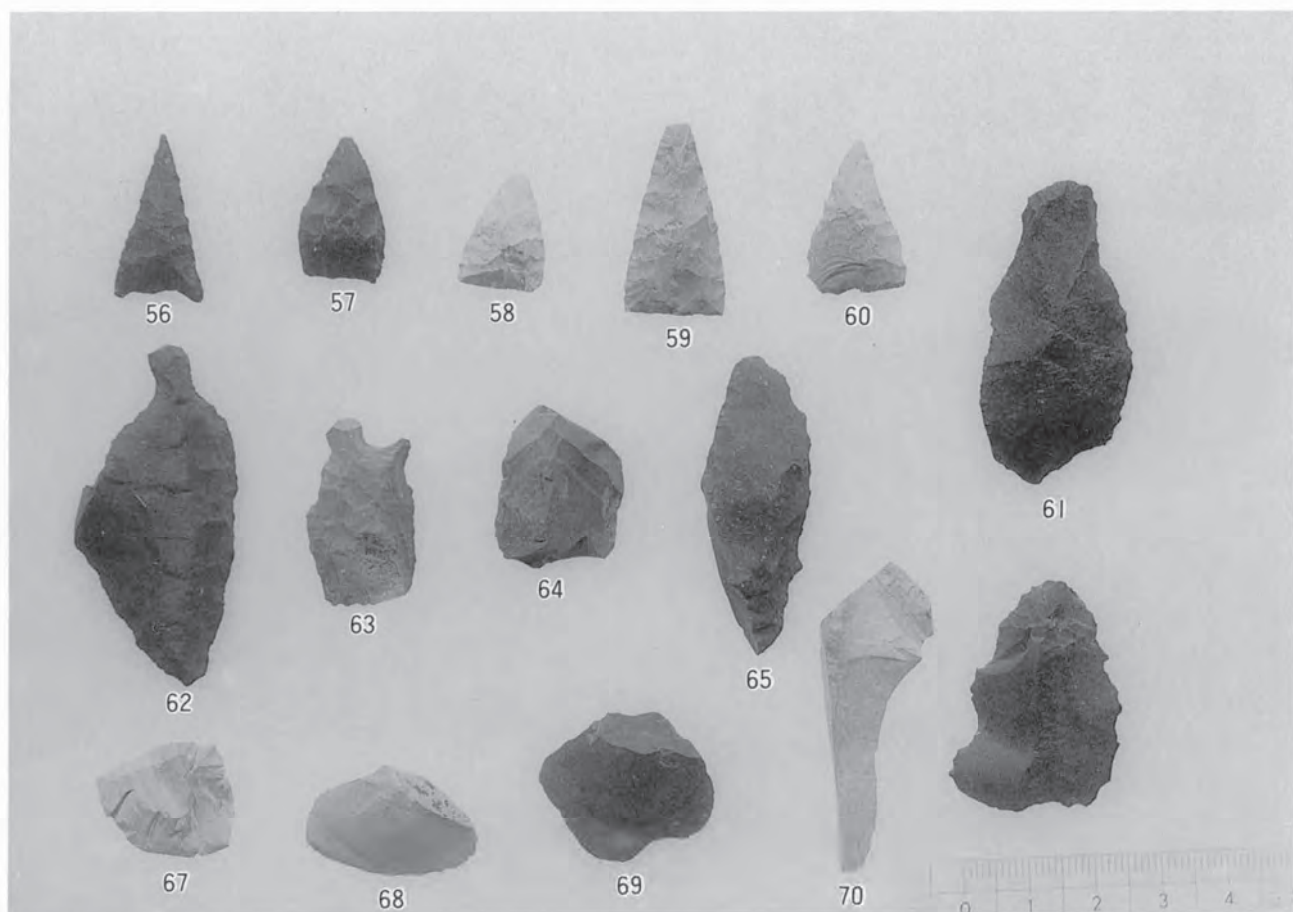
第26号竖穴住居跡出土遺物（第74図1～18）



第26号竖穴住居跡出土遺物（第74図19～35）

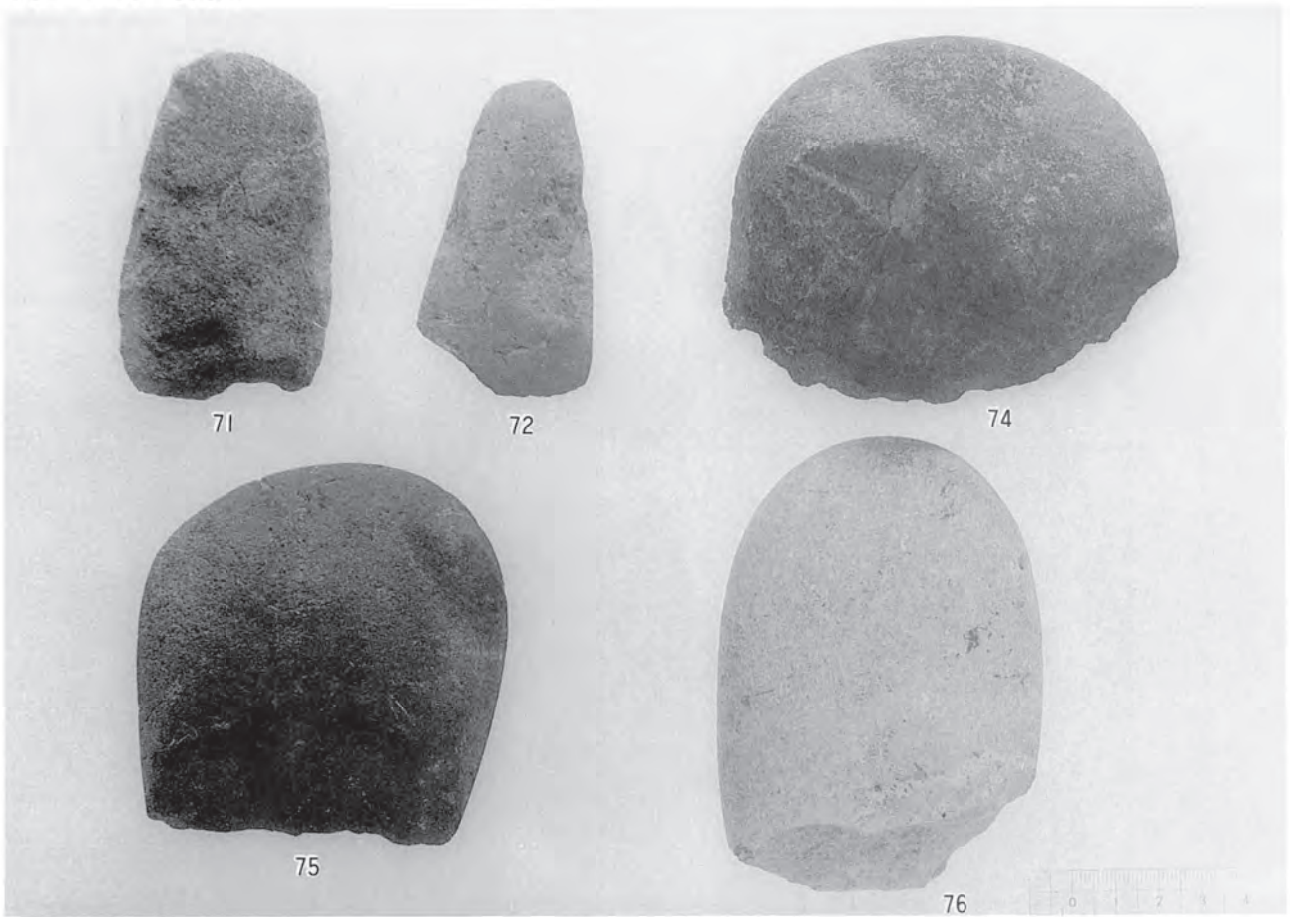


第26号竖穴住居跡出土遺物（第75図30～55）

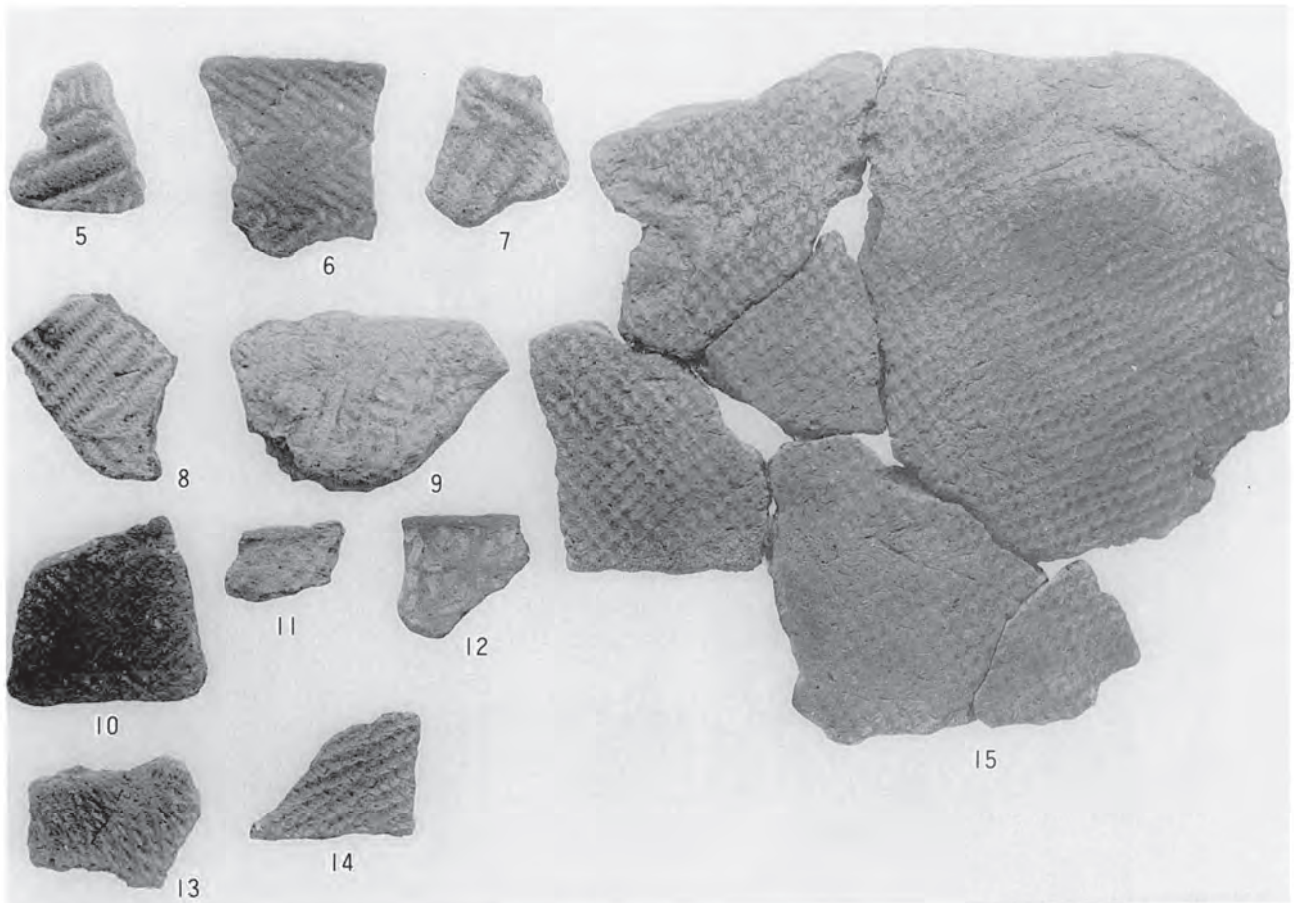


第26号竖穴住居跡出土遺物（第76図56～70）

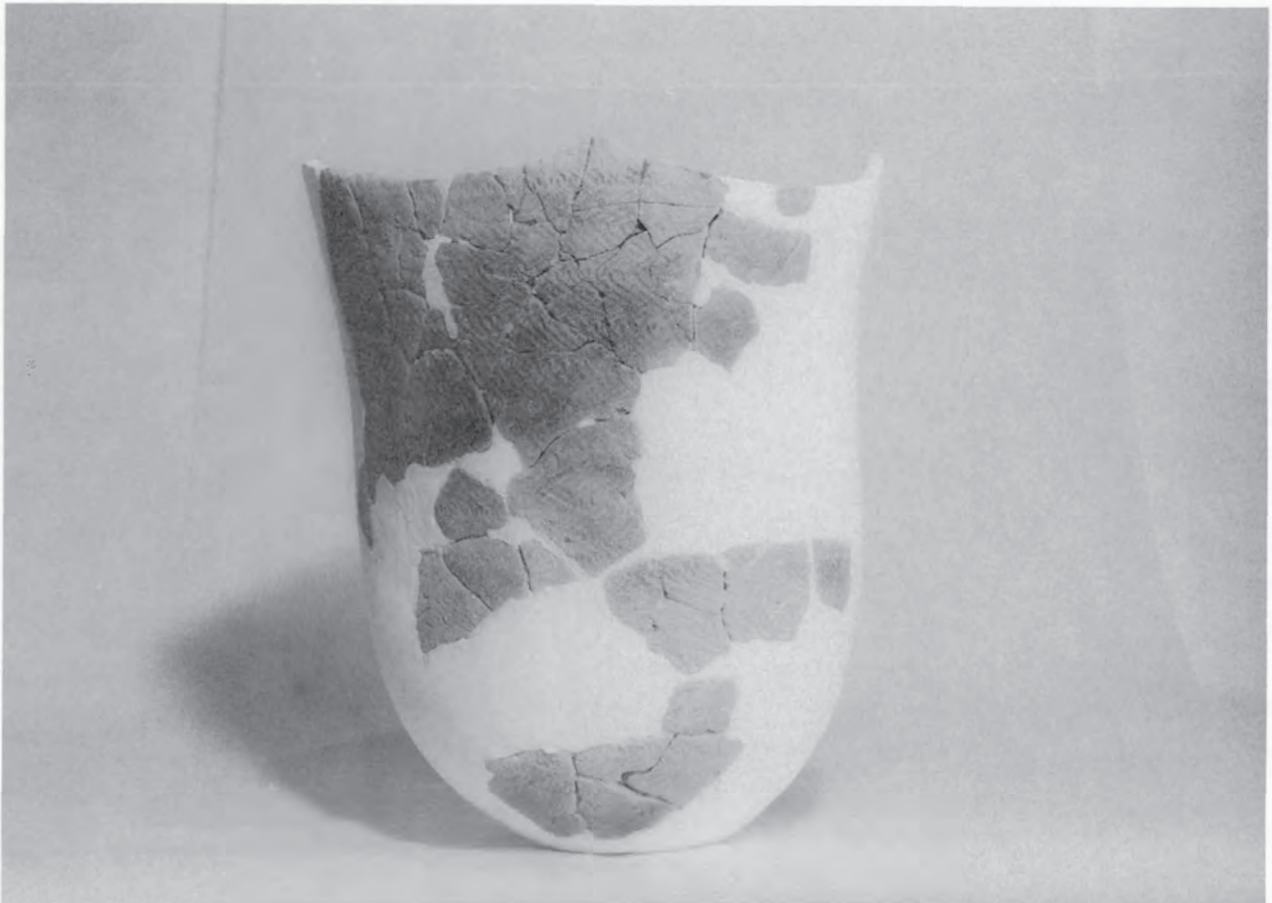
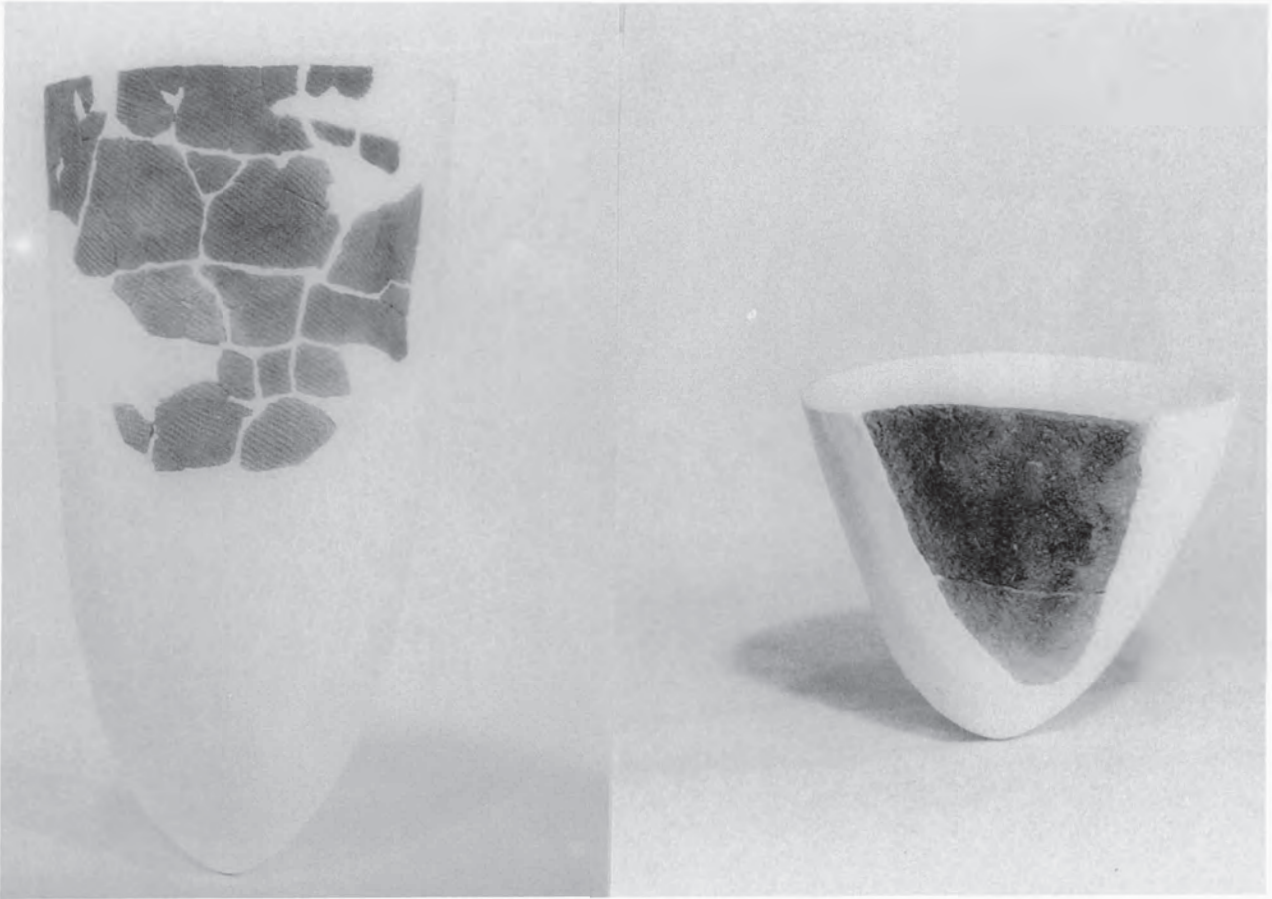
第52図版



第26号竖穴住居跡出土遺物（第77図71～76）

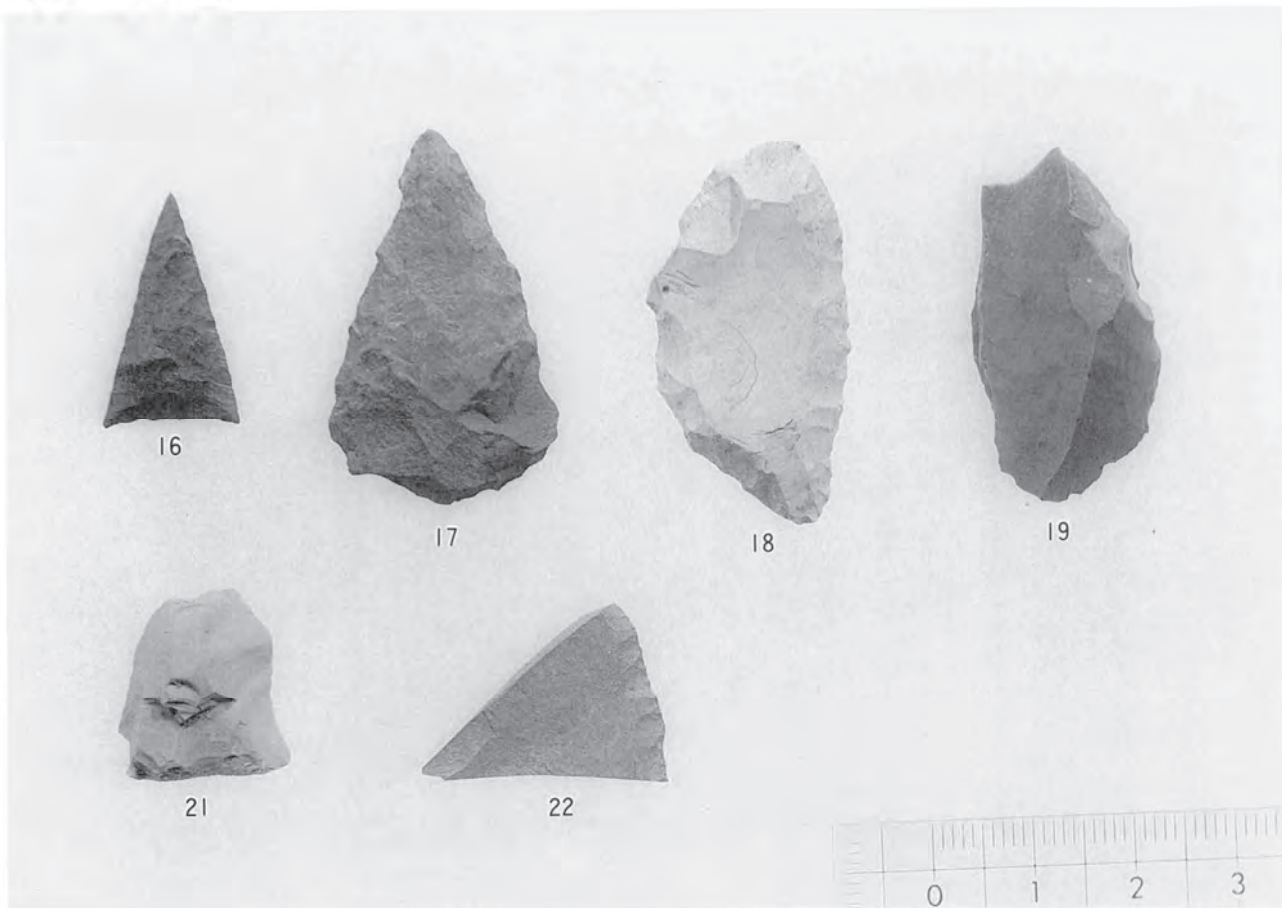


第27号竖穴住居跡出土遺物（第82図5～15）

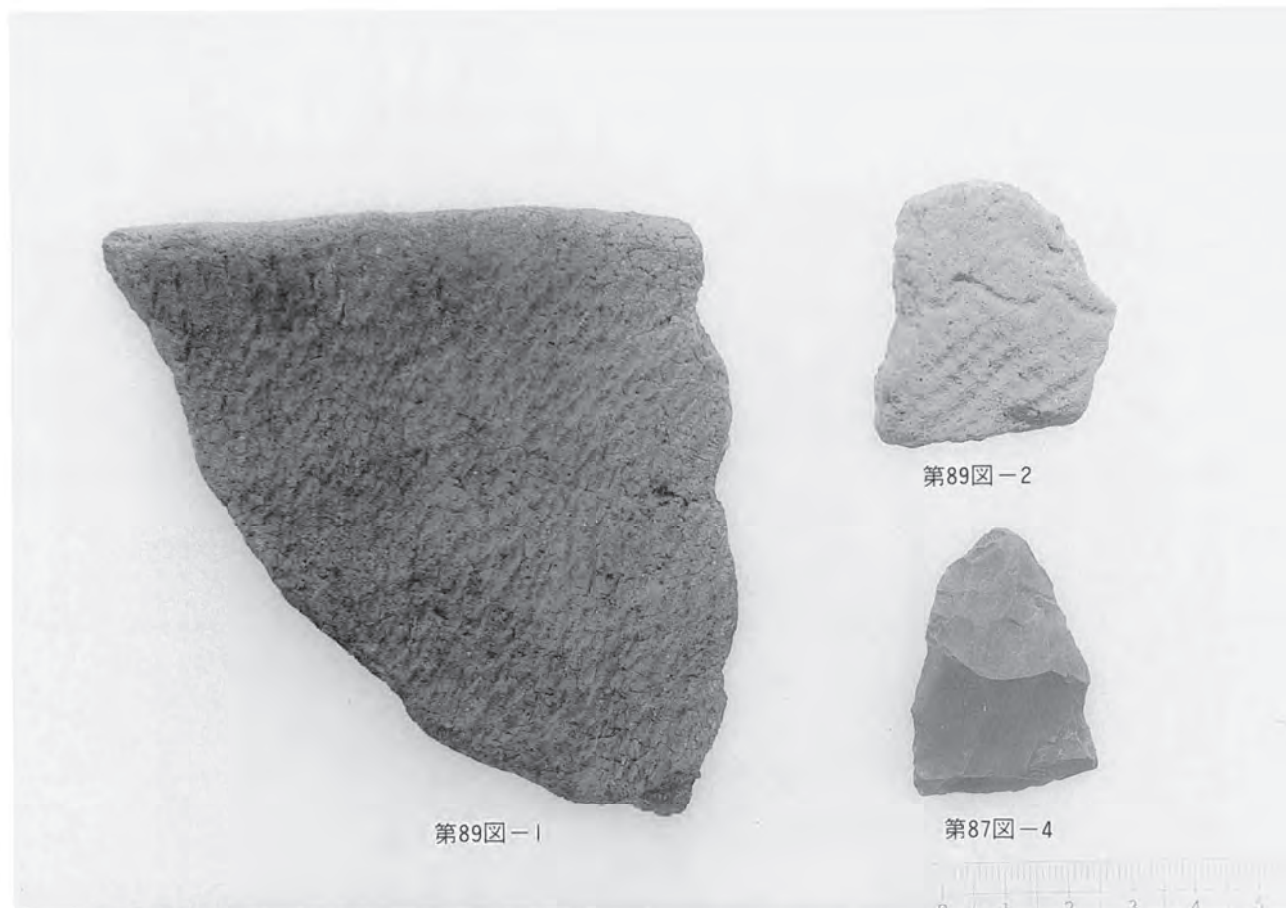


第27号竖穴住居跡出土遺物（第79図、80図、81図）

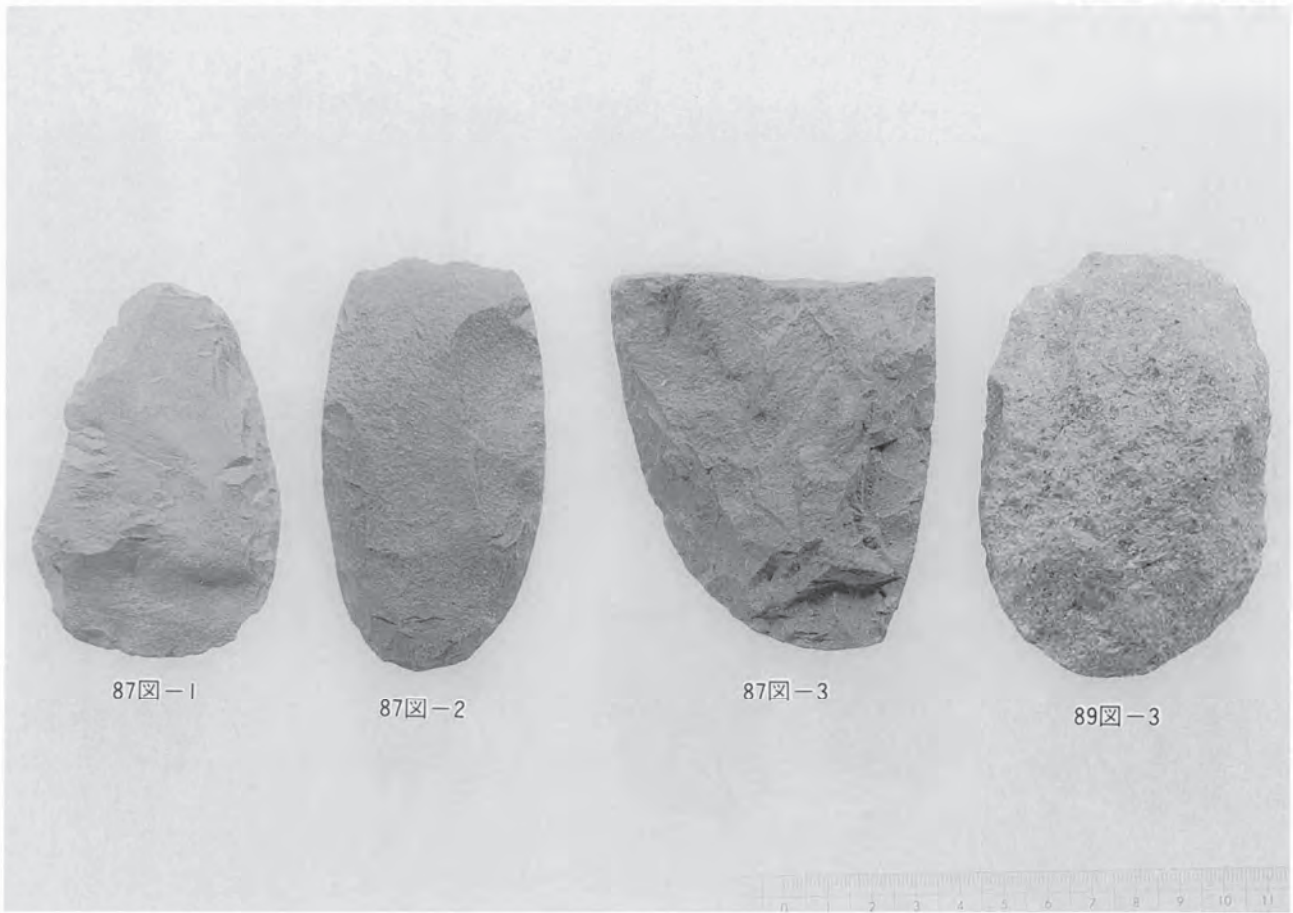
第54図版



第27号竖穴住居跡出土遺物（第83図16～22）

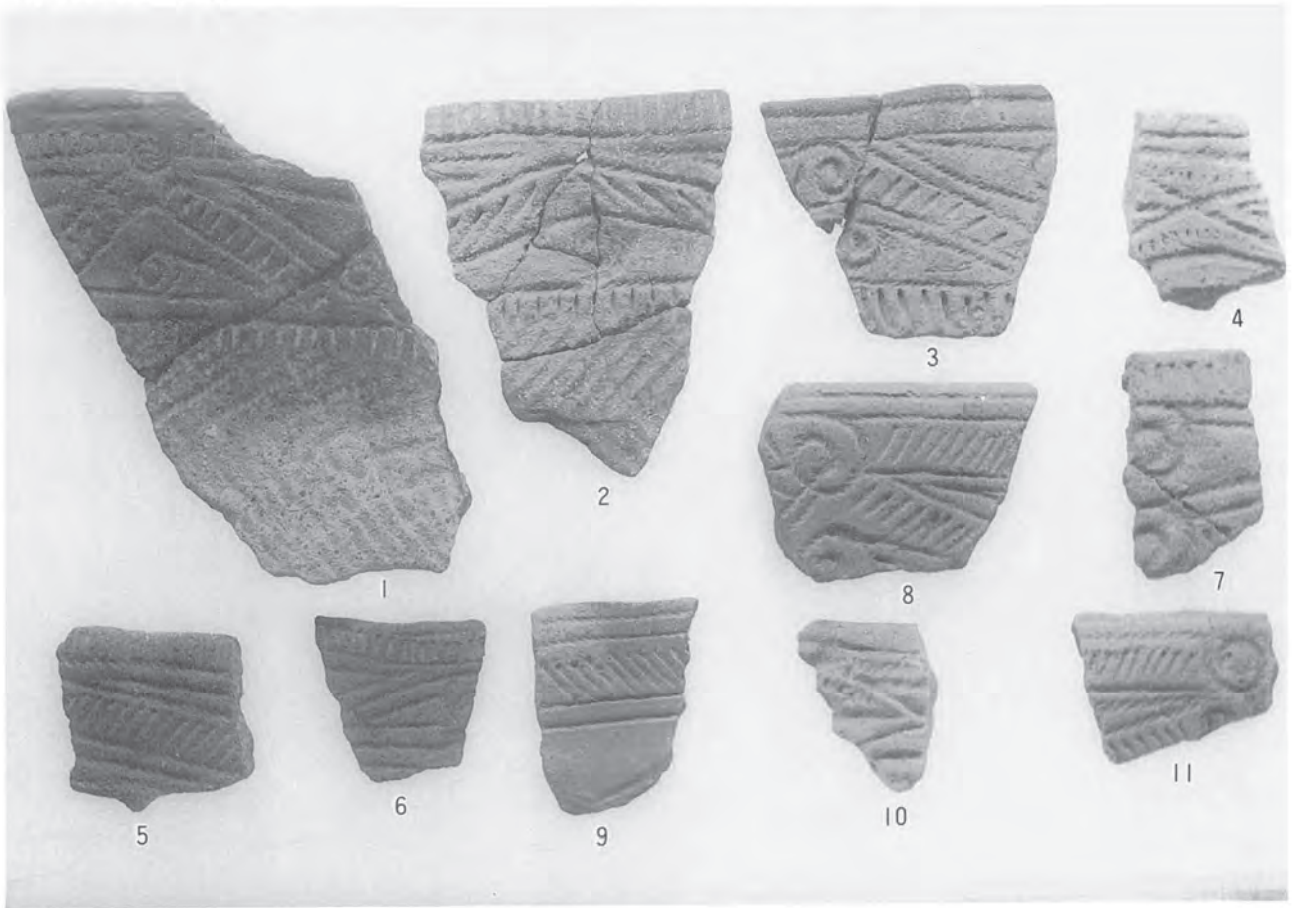


第31号、32号竖穴住居跡出土遺物（第86図、第88図）

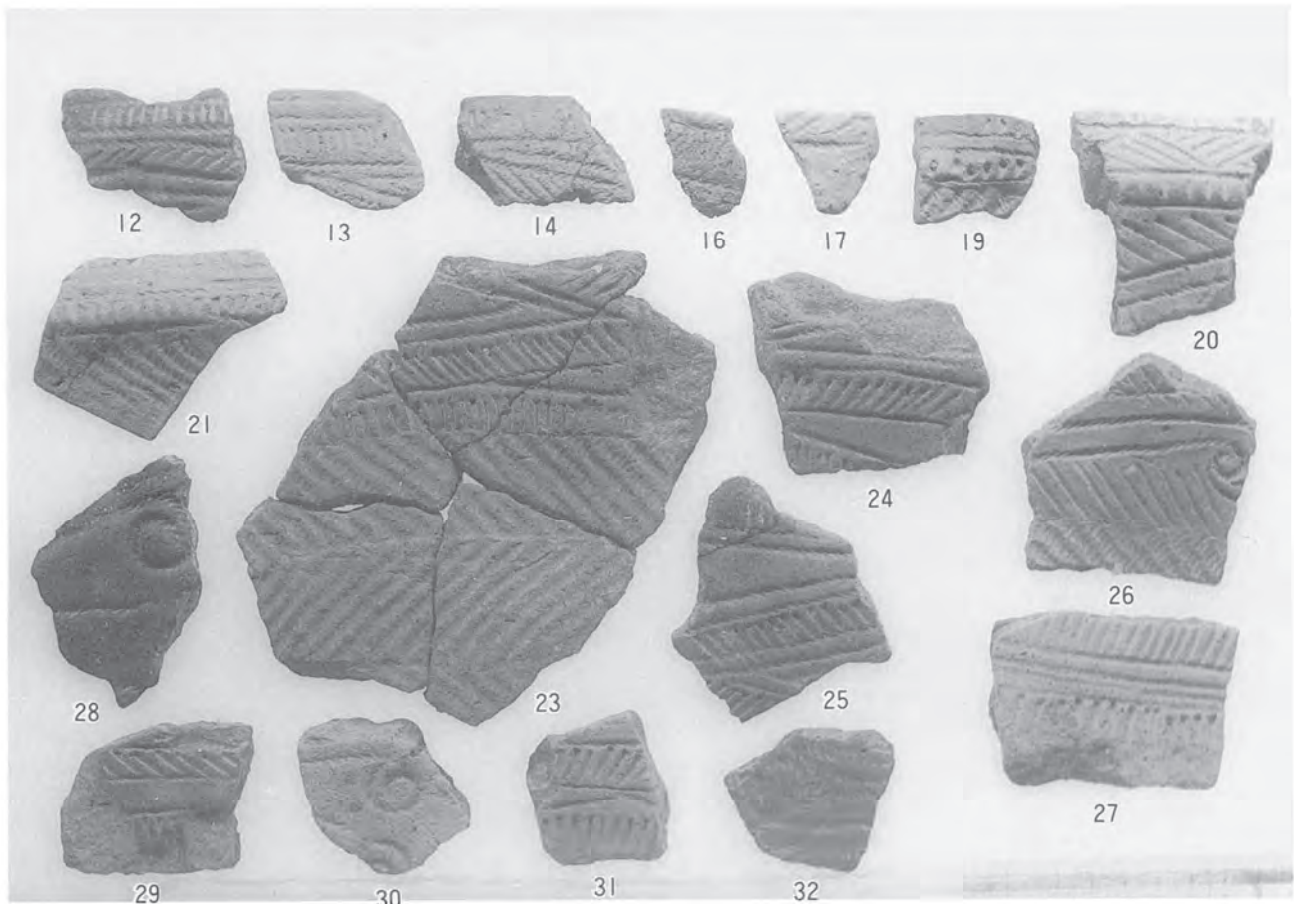


第31号、32号豎穴住居跡出土石器（第87、89図）

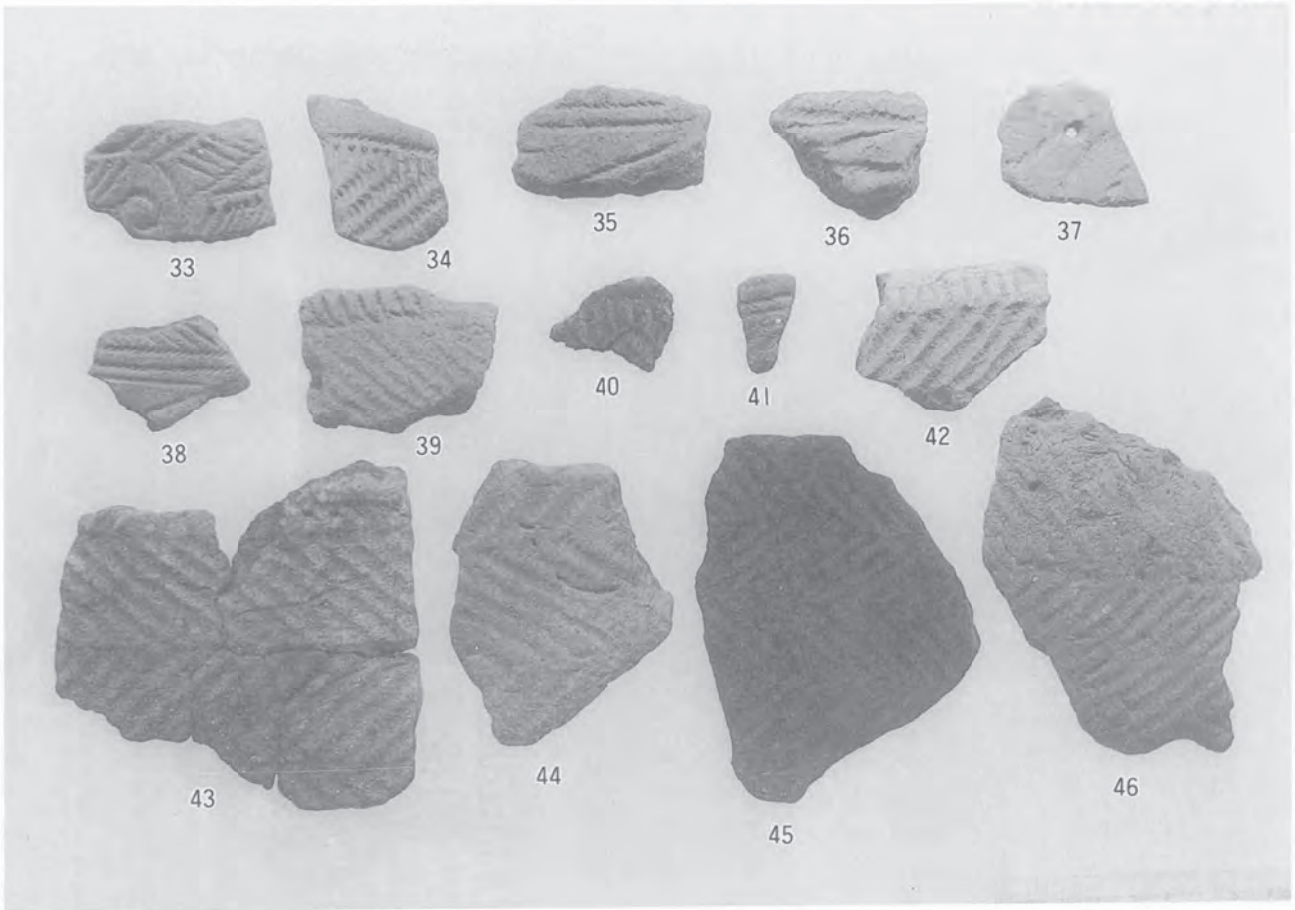
第56図版



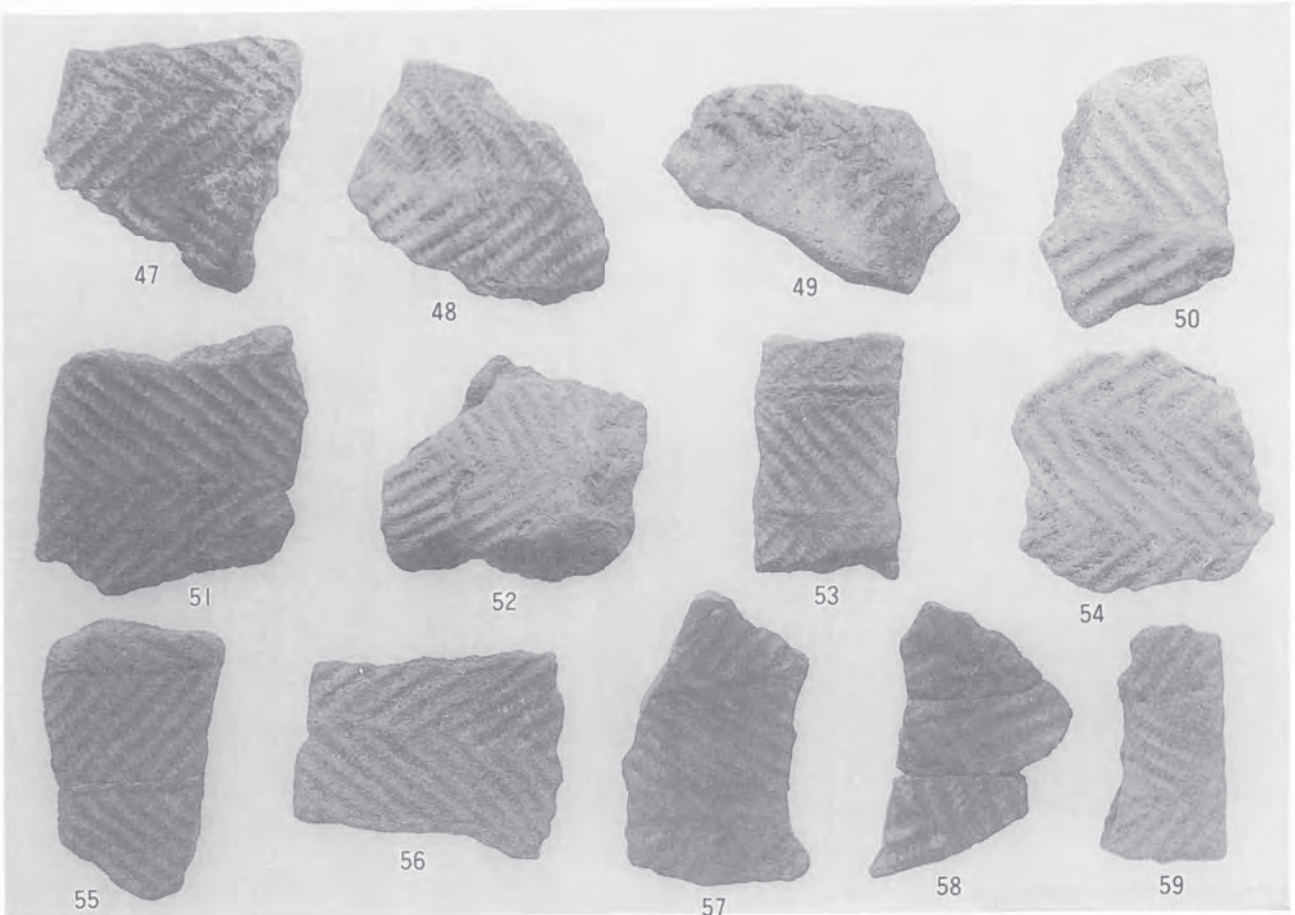
遺構外出土土器 (第93図 1~11)



遺構外出土土器 (第93図 12~32)

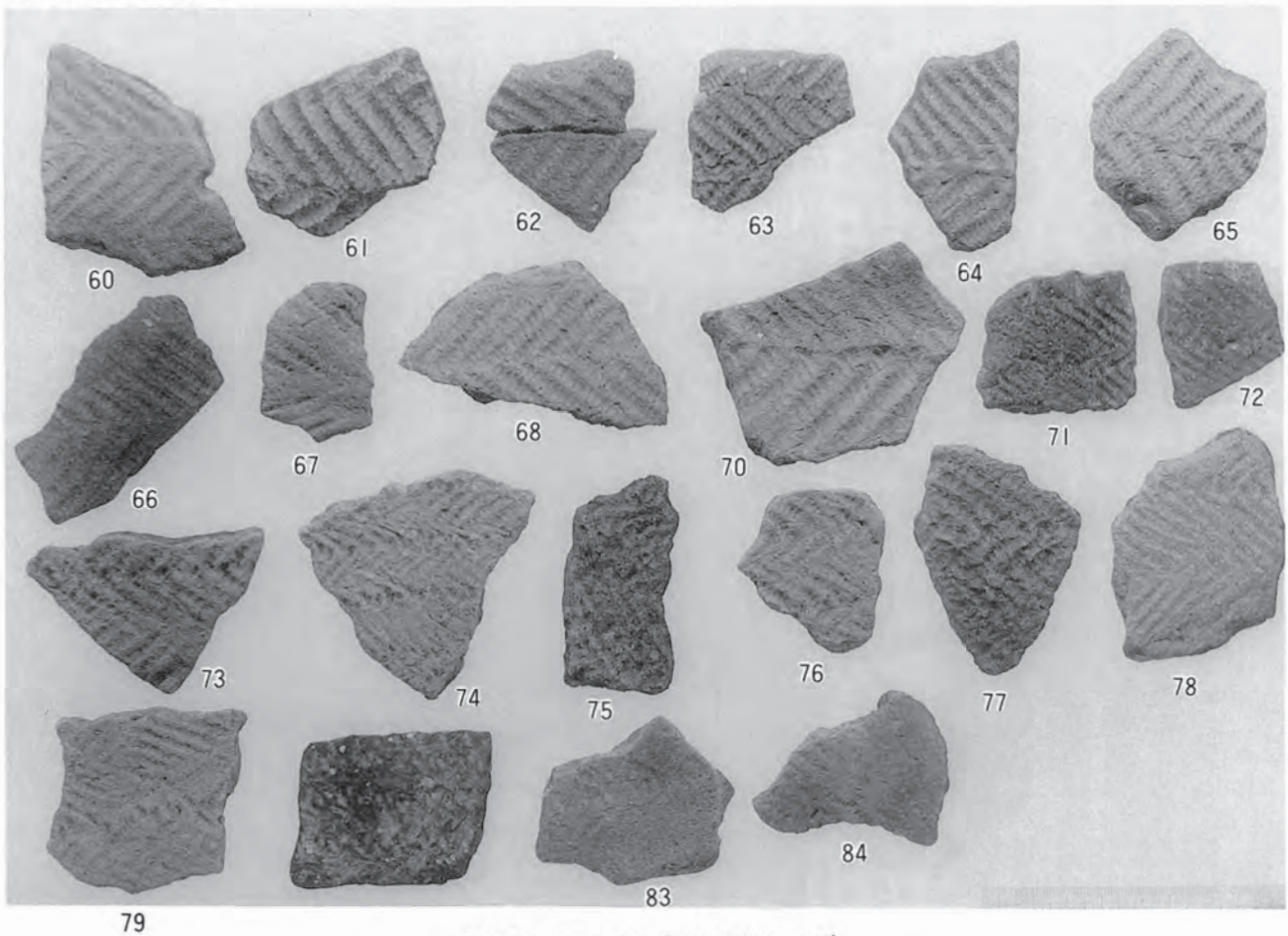


遺構外出土土器 (第93図33~46)

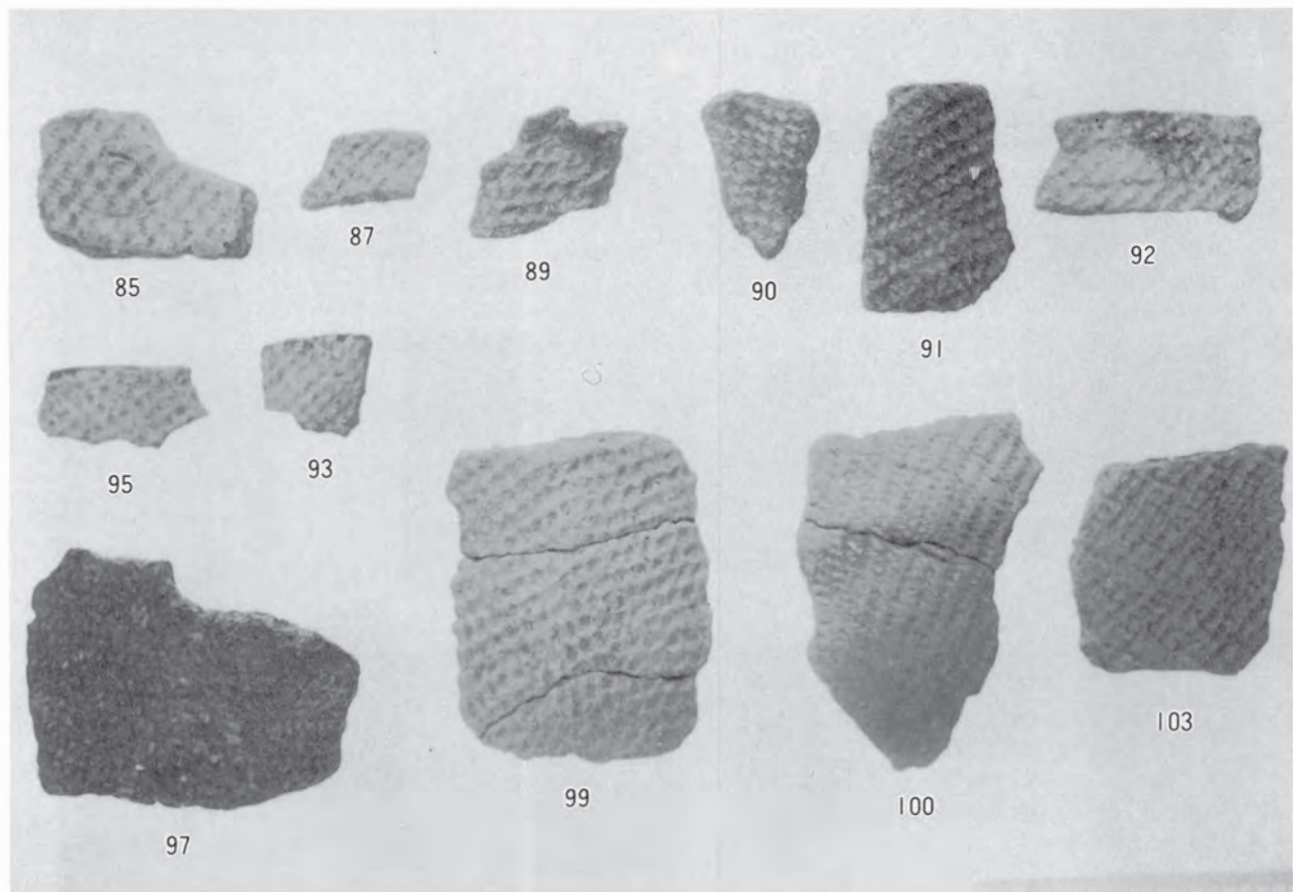


遺構外出土土器 (第94図47~59)

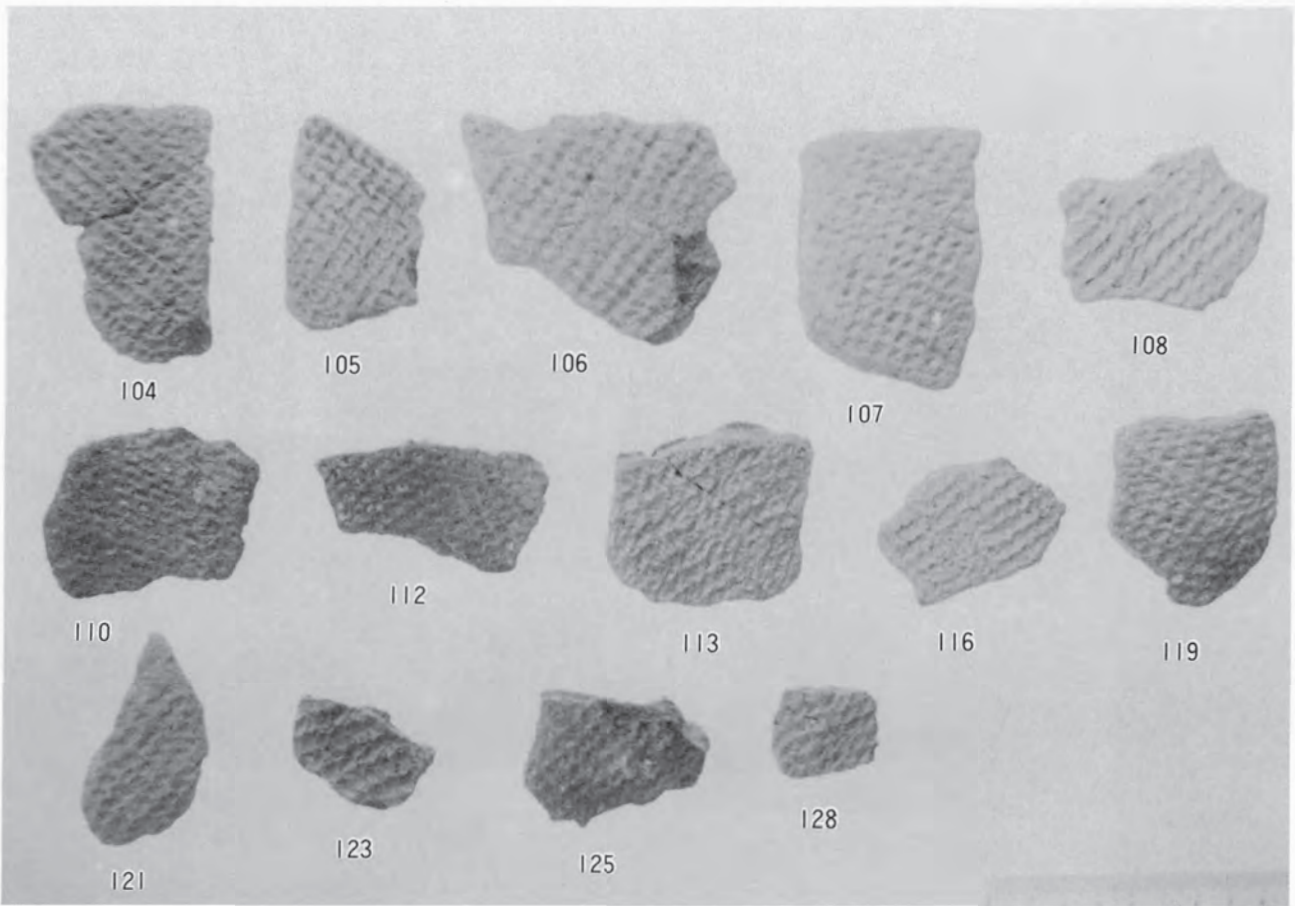
第58図版



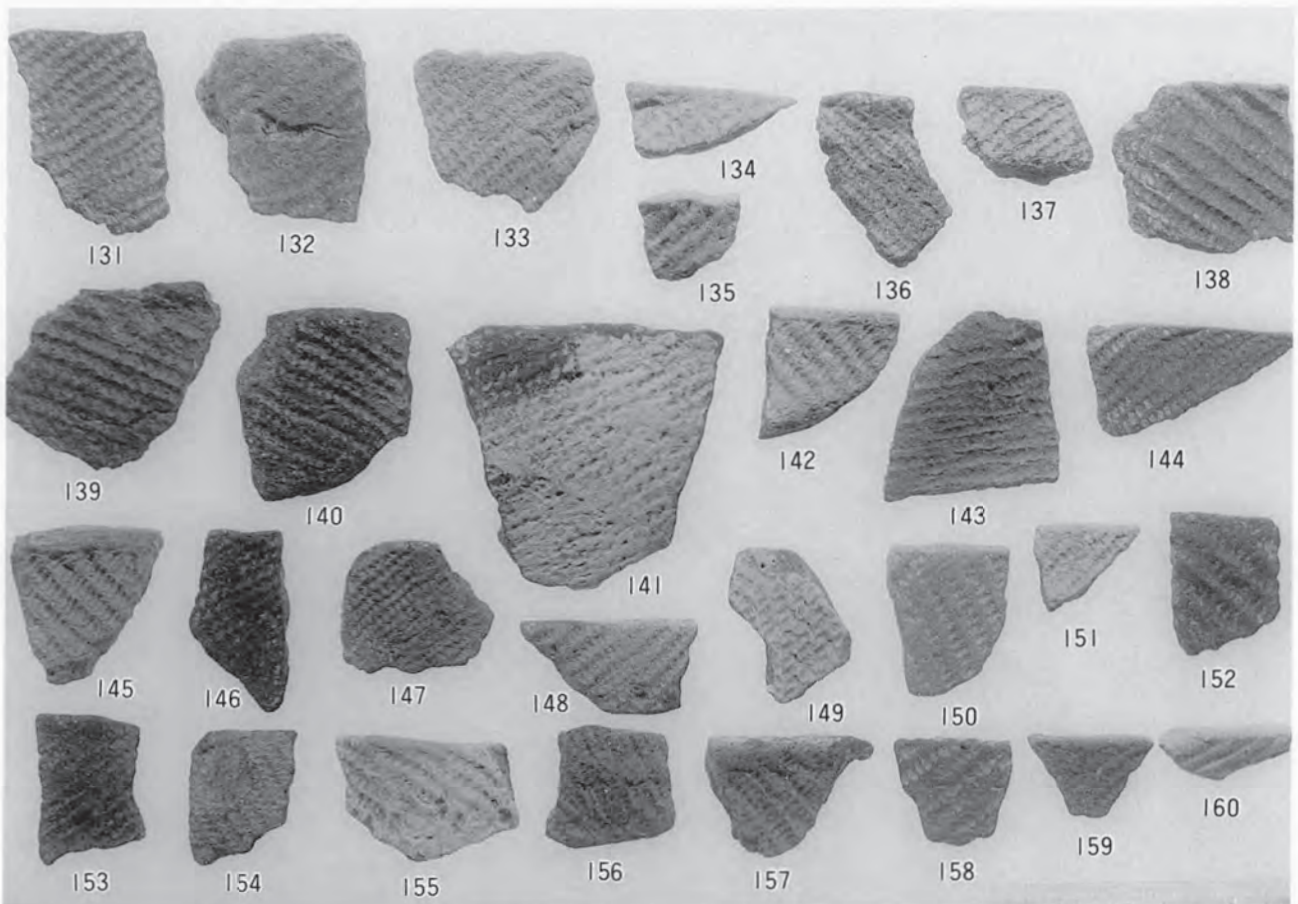
遺構外出土土器 (第94図60~84)



遺構外出土土器 (第95図85~103)

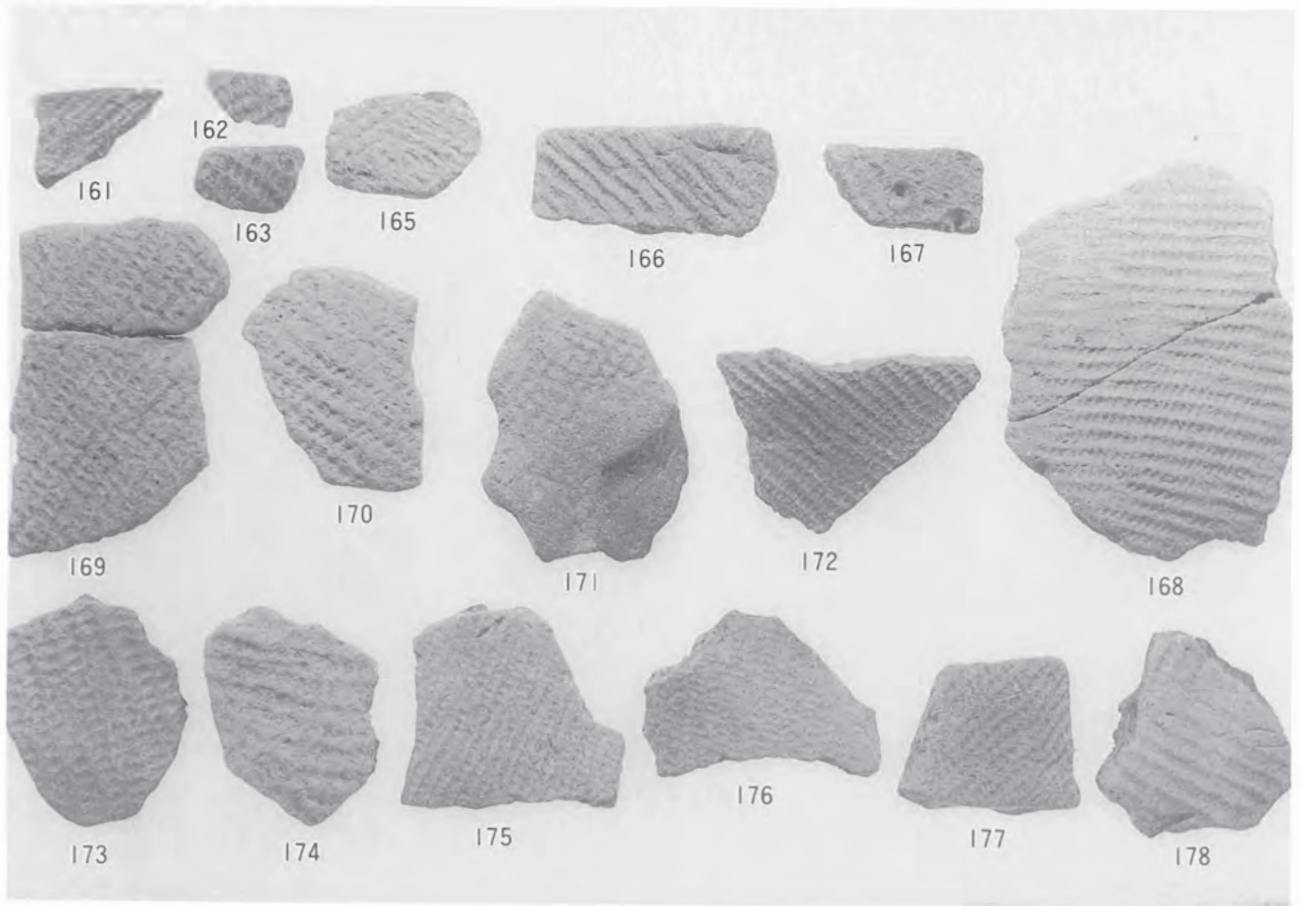


遺構外出土土器 (第95図104~128)

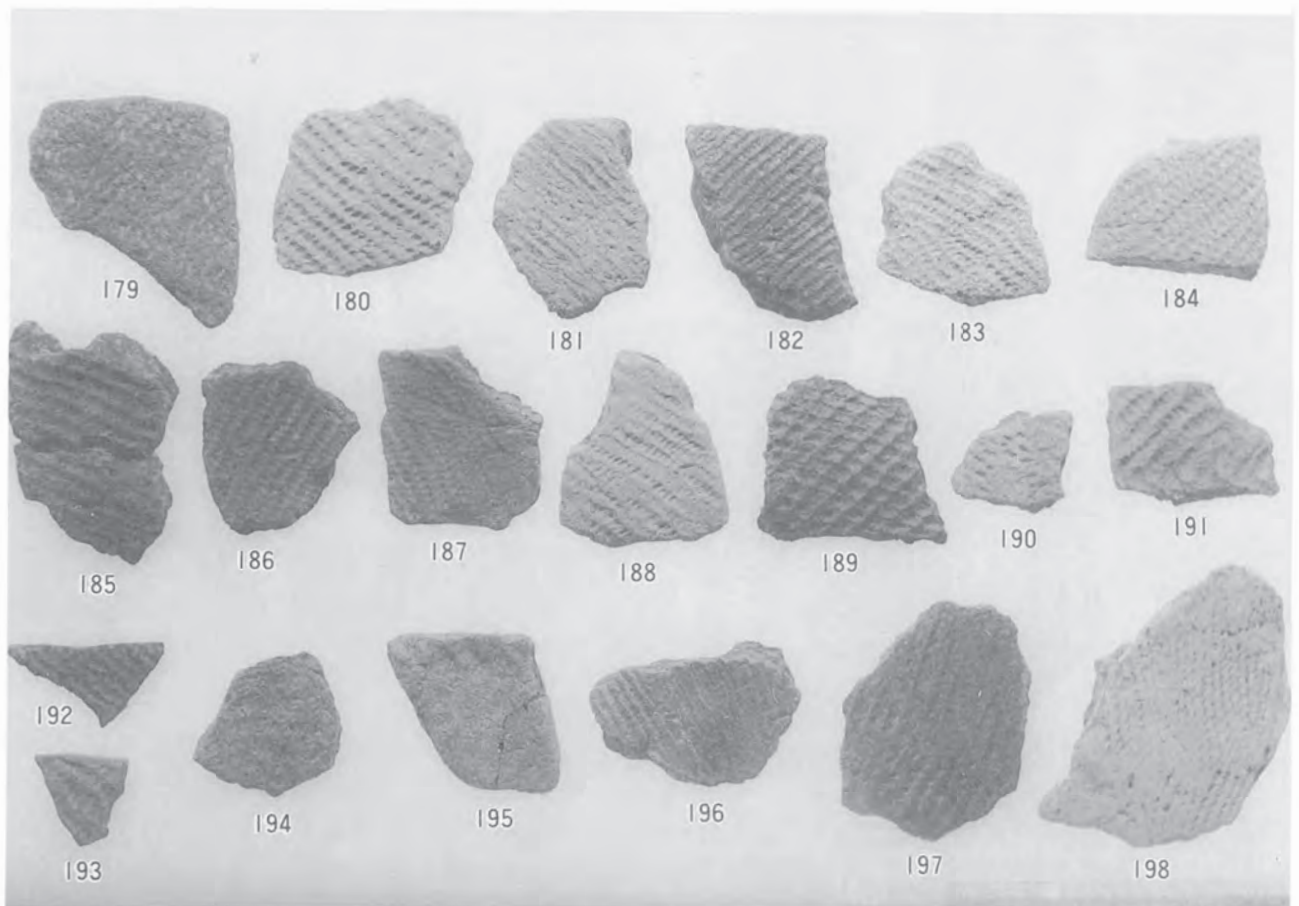


遺構外出土土器 (第96図131~160)

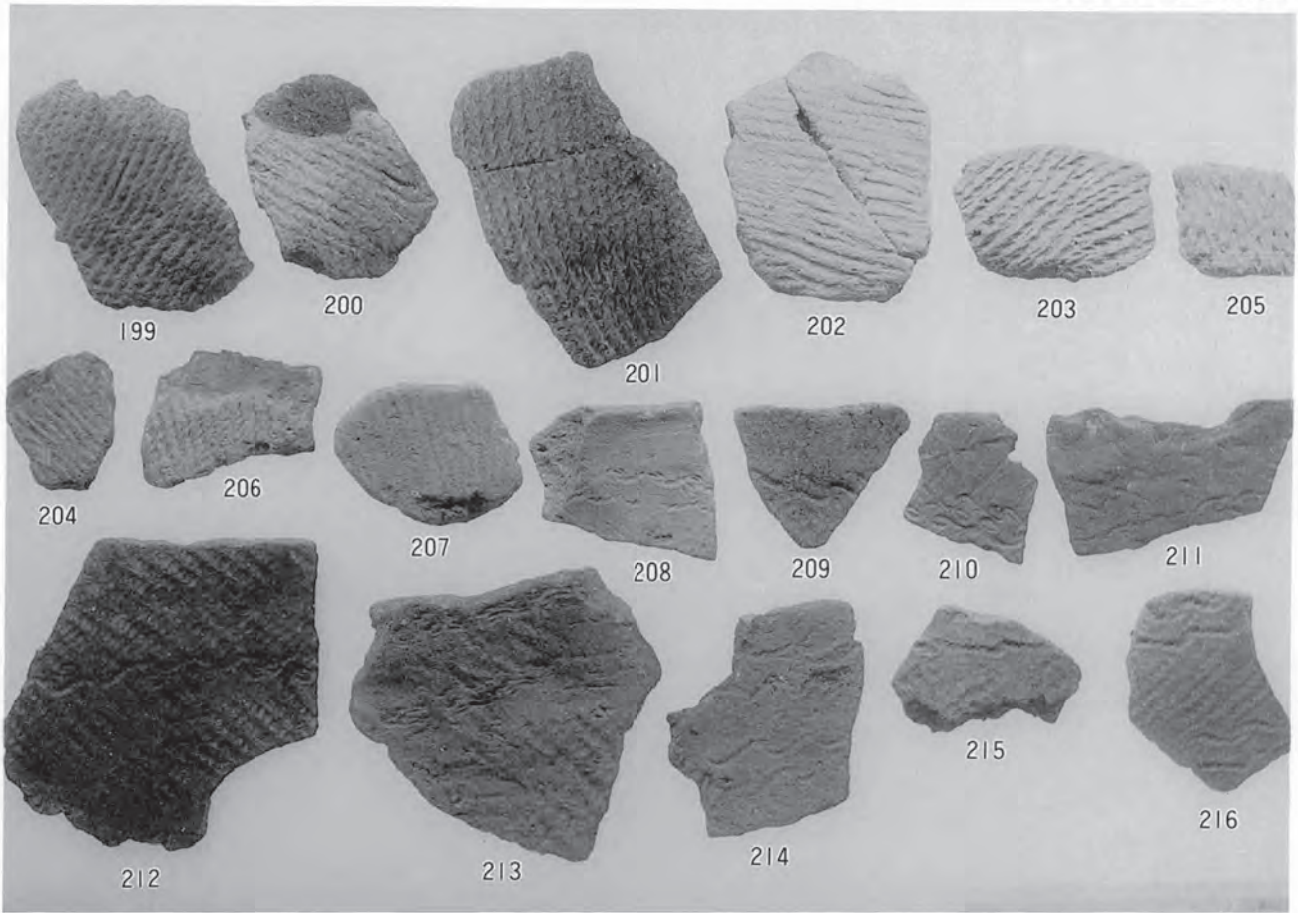
第60図版



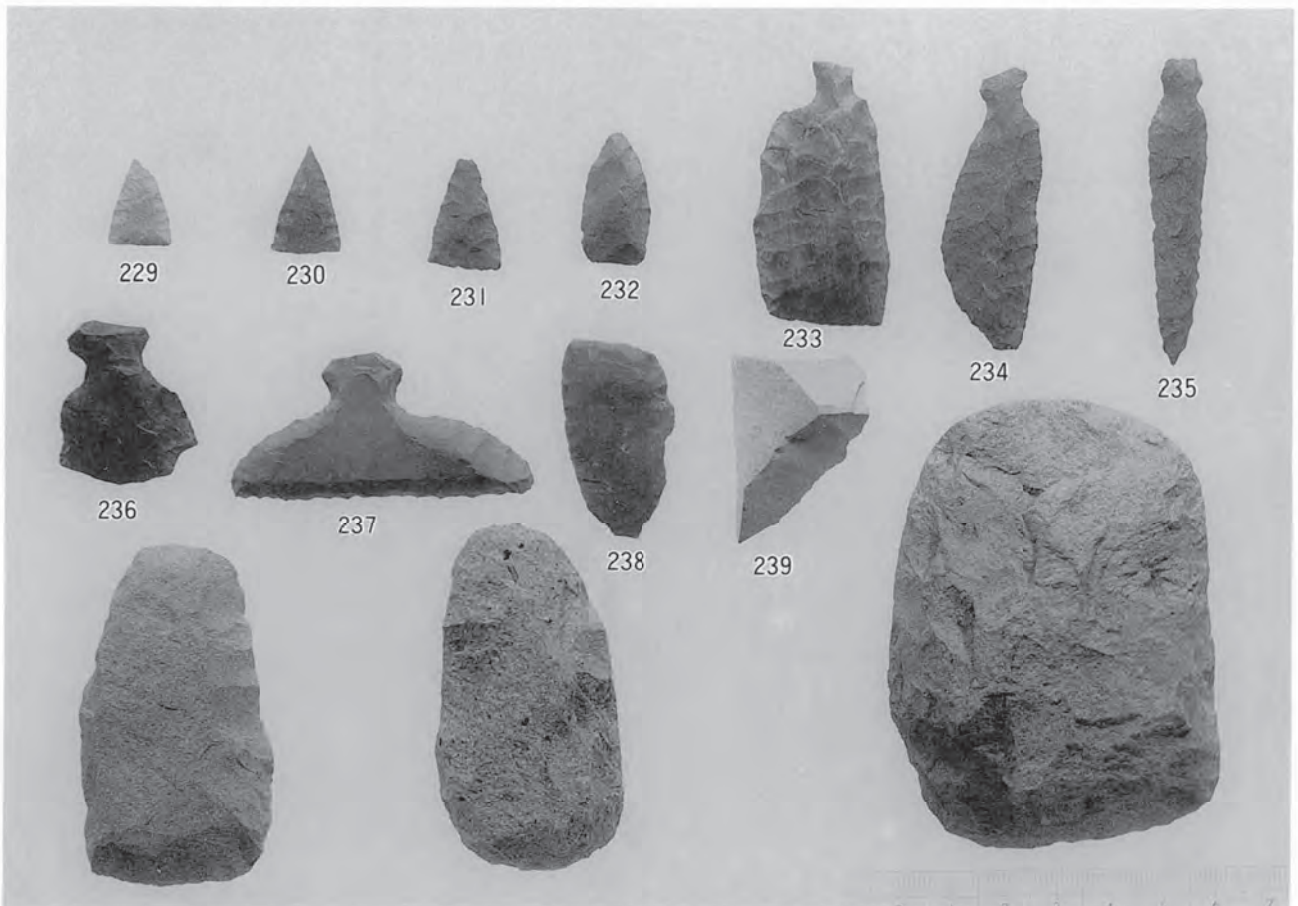
遺構外出土土器（第96図161～178）



遺構外出土土器（第97図179～198）



遺構外出土土器 (第97図199~216)



遺構外出土土器 (第98図229~)

—宮古市埋蔵文化財調査報告書16—

千 鷄 遺 跡

—昭和62年度発掘調査報告書—

1989.3

発 行 岩手県宮古市教育委員会
宮古市新川町2番1号

印 刷 株式会社 文化印刷
岩手県宮古市大通2丁目5の2